三重県埋蔵文化財調査報告123－9

一般国道42号松阪多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅸ

村竹コノ遺跡

―本文編―

2009（平成21）年３月

三重県埋蔵文化財センター

Ａ地区（第２次・Ｂ２区）（北東から）

Ａ地区（第３次・県道西）（北東から）

B地区（第3次）（南西から）

発掘調査区全体写真（真上から）　※第２次～４次調査時の撮影データのデジタルモザイク写真

出土遺物集合写真

序

村竹コノ遺跡は、松阪市街地南東部を流れる金剛川右岸の微高地にあります。遺跡周辺は工場や道路・宅地等が増えてきましたが、それでもまだなお残る水田には、わずかながら過去の風情をしのぶこともできます。

今回報告いたします村竹コノ遺跡の発掘調査では、当遺跡が弥生時代後期から古墳時代初めごろを中心とした遺跡であり、県内でも屈指の規模であることがわかってまいりました。遺跡を取り囲む大きい溝である環濠は、調査区の部分だけでも延長300メートルほどになると推定され、また、中からは土器をはじめとする様々な遺物が大量に出土いたしました。環濠からの出土を含めた今回の出土遺物の総重量は５トンに及びます。これは、遺跡の南東部分における発掘調査によるものであり、遺跡全体では相当な規模と量になると想像されます。また、周辺にはいくつかの同時期の遺跡も存在し、これらとの関連を調べることで、弥生時代から古墳時代へと社会の転換期にさしかかった当地域の様相の一端が明らかになることが期待されます。

本書が、これらの貴重な資料を地域における豊かな文化の情報として全国に発信し、また将来にわたって地域の誇る文化財として活用される一助になることを願ってやみません。末筆ではありますが、現地の発掘調査や報告書の作成に際して多大なご理解とご協力、ご指導をいただきました関係の方々に厚くお礼申し上げます。

2009（平成21）年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　吉　水　康　夫

例　　言

1　本書は、三重県教育委員会が国土交通省中部地方整備局から委託を受けて実施した一般国道42号松阪多気バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査報告書のうち、平成16～20年度に発掘調査及び整理・報告書作成業務を実施した三重県松阪市上川町字村竹・コノ・廿チほかに所在する村竹コノ（むらたけこの）遺跡の発掘調査報告書である。

2　現地調査及び整理・報告書作成にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局の全額負担による。

3　本書に掲載した遺跡の概要については、既に当センター発行の『一般国道42号松阪多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報』９～11で公開しているが、本書をもって正式報告とする。

4　本書に使用した図面は、国土交通省中部地方整備局紀勢国道事務所提供による事業計画図面のほか、国土地理院発行の地形図、松阪市作成の都市計画図である。

5　本報告書の作成業務は調査研究Ⅱ課が担当し、情報普及課・支援研究課がこれを補佐した。
　本書に掲載の写真撮影、遺構・遺物図版等の作成は、調査・報告担当者、臨時技術補助職員、業務補助職員が行なった。なお、写真撮影にあたっては、牛嶋茂氏（奈良文化財研究所）から技術的な指導を得た。また、執筆分担は目次と各文末に明記した。

6　本書に用いた地図および遺構実測図は世界測地系座標を基準としたが、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第Ⅵ系座標も併記している。方位の表示は世界測地系座標による座標北で示している。なお、この地域の磁北は６度50分西偏する（平成元年現在）。

7　遺物実測図・拓影は実物の４分の１を基本とし、資料の性格に応じて変更したものもある。写真図版の遺物番号は実測図番号に対応し、写真図版は特に断らない限り縮尺不同である。

8　本書で使用した遺構番号は調査区ごとに100番単位で番号を付与した。また、番号の頭には遺構の見た目の性格により下記の遺構表示略記号を付与している。
　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＨ：竪穴住居　　ＳＤ：溝・環濠　　ＳＥ：井戸　　ＳＫ：土坑
　ＳＲ：旧河道・自然流路　　ＳＸ：墓・方形周溝墓　　ＳＺ：その他・性格不明　　Pit：小穴・柱穴

9　現地調査及び報告書作成期間中には、下記の方々に専門的なご指導・ご助言を頂いた。記して感謝の意を表したい。（敬称略・五十音順）
　扇崎　由　　蔭山誠一　　小林謙一　　設楽博己　　柴田昌児　　武部真木　　寺澤　薫
　寺澤知子　　中根正喬　　永井宏幸　　橋本輝彦　　早野浩二　　馬場伸一郎　　濱田竜彦
　広瀬和雄　　藤尾慎一郎　　藤田三郎　　山中　章

10　本書における遺構埋土及び出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（1995年版）に拠る。

11　本書で報告した記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで管理・保管している。

本 文 目 次

Ⅰ　前　言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（木野本和之）・・・・ 1
Ⅱ　村竹コノ遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・（木野本和之）・・・・ 12
Ⅲ　遺　構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（松葉和也・西口剛司）・・・・ 23
Ⅳ　遺　物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（石井智大）・・・・ 97
Ⅴ　村竹コノ遺跡における自然科学分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 241
1　土壌分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（株式会社古環境研究所）・・・・ 241
2　出土木製品の樹種同定　・・・・・・・・・・・・（株式会社パレオ・ラボ）・・・・ 255
3　大型植物化石　・・・・・・・・・・・・・・・・・（株式会社パレオ・ラボ）・・・・ 270
4　ＳＥ615出土昆虫化石について　・・・・・・・・・（株式会社パレオ・ラボ）・・・・ 272
5　赤色顔料分析　・・・・・・・（木野本和之・財団法人元興寺文化財研究所）・・・・ 273
Ⅵ　結　語 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 301
1　はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（木野本和之）・・・・ 301
2　遺跡の変遷 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（木野本和之）・・・・ 301
3　遺構について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（木野本和之）・・・・ 302
4　弥生時代後期～終末期土器群の特徴 ・・・・・・・・・・・・・（石井智大）・・・・ 309
5　弥生時代後期～終末期にかけての外来系土器　・・・・・・・・（石井智大）・・・・ 311
6　石杵について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（石井智大）・・・・ 314
7　自然科学分析の成果について　・・・・・・・・・・・・・・・・（松葉和也）・・・・ 315
8　村竹コノ遺跡出現の背景　・・・・・・・・・・・・・・・・・（木野本和之）・・・・ 316
9　総括　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（松葉和也・石井智大）・・・・ 316

挿 図 目 次

第１図　松阪多気バイパス路線遺跡位置図・・・・・・・・・・7
第２図　村竹コノ遺跡とその周辺の遺跡・・・・・・・・・・・13
第３図　遺跡周辺地形図・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第４図　調査区配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第５図　大地区・小地区設定図（1）・・・・・・・・・・・・・19
第６図　大地区・小地区設定図（2）・・・・・・・・・・・・・20
第７図　大地区・小地区設定図（3）・・・・・・・・・・・・・21
第８図　大地区・小地区設定図（4）・・・・・・・・・・・・・22
第９図　調査区平面図（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第10図　調査区平面図（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・26
第11図　調査区平面図（3）・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第12図　調査区平面図（4）・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第13図　調査区平面図（5）・・・・・・・・・・・・・・・・・29
第14図　調査区平面図（6）・・・・・・・・・・・・・・・・・30
第15図　調査区平面図（7）・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第16図　調査区平面図（8）・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第17図　調査区平面図（9）・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第18図　調査区平面図（10）・・・・・・・・・・・・・・・・34
第19図　調査区平面図（11）・・・・・・・・・・・・・・・・35
第20図　調査区平面図（12）・・・・・・・・・・・・・・・・36
第21図　調査区平面図（13）・・・・・・・・・・・・・・・・37
第22図　調査区平面図（14）、A地区東壁・南壁土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
第23図　A地区東壁・南壁土層土色、G地区東壁土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第24図　A地区西壁土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・40
第25図　B地区東壁・西壁・北壁土層断面図・・・・・・・・・41
第26図　C地区北壁・E地区北壁・D地区北壁土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第27図　F地区北壁・東壁・西壁土層断面図・・・・・・・・・43
第28図　SB647・648平面図、断面図・・・・・・・・・・・・44
第29図　SH209・210・215・217・221・725平面図、断面図、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
第30図　SH304・306・324・325・327・328・333・335・377・SD320平面図、断面図・・・・・・・・・・・・・・46
第31図　SH406・424・436・452・467・478平面図、断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
第32図　SH473・516・517・518・622・640平面図、断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
第33図　SH530・531・560・567・572・573・729・730・742・SD733平面図、断面図、土層断面図・・・・・・・49
第34図　SH584・594・610・619・621平面図、断面図、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
第35図　SH701・718平面図、断面図、土層断面図・・・・・51
第36図　SE208遺物出土状況平面図、断面図・・・・・・・・52
第37図　SE216遺物出土状況平面図、土層断面図・・・・・・53
第38図　SE218・220・477・556・565・744平面図、断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第39図　SE496・582・587平面図、断面図、SE615平面図、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
第40図　SK205・206・303・321・540・545・727平面図、断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
第41図　SK212・305・482・557・628遺物出土状況平面図、断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
第42図　SK253・262・274・291・404・410・411平面図、断面図、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・58
第43図　SK307・310・312・313・315・339・358平面図、断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
第44図　SK326・329・360・365・503平面図、断面図、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
第45図　SK430・431・441・464・506平面図、断面図、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
第46図　SK439・451・524遺物出土状況平面図、断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
第47図　SK470・479遺物出土状況平面図、断面図、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
第48図　SK471・521・578・591・635平面図、断面図、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
第49図　SK7遺物出土状況平面図、断面図、SD5・SK6・7平面図、断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
第50図　SK472・522・523・525平面図、断面図、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
第51図　SK483・505・507平面図、土層断面図・・・・・・・67
第52図　SK626平面図、土層断面図、SK631遺物出土状況平面図、断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
第53図　SX251平面図、断面図・・・・・・・・・・・・・・・69
第54図　SX252平面図、断面図・・・・・・・・・・・・・・・70
第55図　SX270平面図、断面図・・・・・・・・・・・・・・・71
第56図　SX256・336平面図、断面図、土層断面図・・・・・72
第57図　SX338・341平面図、断面図、土層断面図・・・・・73
第58図　SX487・510・514・637・646・650平面図、断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
第59図　SD202平面図、土層断面図・・・・・・・・・・・・・75
第60図　SD282平面図、土層断面図・・・・・・・・・・・・・76
第61図　SD301平面図、土層断面図・・・・・・・・・・・・・78
第62図　SD301・302平面図、土層断面図・・・・・・・・・・80
第63図　SD254・265平面図、断面図、土層断面図・・・・・81
第64図　SD355・356・372・SR340平面図、断面図、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
第65図　SD401・403平面図、土層断面図・・・・・・・・・・83
第66図　SD527・528・529平面図、土層断面図、SD735平面図、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
第67図　SD741・745平面図、土層断面図・・・・・・・・・・85
第68図　SD257・261・264・266・267・272・287・288平面図、断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
第69図　掘立柱建物復元案（1）・・・・・・・・・・・・・・・89
第70図　掘立柱建物復元案（2）・・・・・・・・・・・・・・・90
第71図　掘立柱建物復元案（3）・・・・・・・・・・・・・・・91
第72図　掘立柱建物復元案（4）・・・・・・・・・・・・・・・92
第73図　掘立柱建物復元案（5）・・・・・・・・・・・・・・・93
第74図　掘立柱建物復元案（6）・・・・・・・・・・・・・・・94
第75図　掘立柱建物復元案（7）・・・・・・・・・・・・・・・95
第76図　土器の分類（1）（壺）・・・・・・・・・・・・・・・98
第77図　土器の分類（2）（甕）・・・・・・・・・・・・・・・99
第78図　土器の分類（3）（鉢・蓋・高杯・器台・手焙形土器）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100

第 79図　弥生前期出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・103
第 80図　SD202出土遺物実測図（1）・・・・・・・・・・・・121
第 81図　SD202出土遺物実測図（2）・・・・・・・・・・・・122
第 82図　SD202出土遺物実測図（3）・・・・・・・・・・・・123
第 83図　SD202出土遺物実測図（4）・・・・・・・・・・・・124
第 84図　SD202出土遺物実測図（5）・・・・・・・・・・・・125
第 85図　SD301（SD282）出土遺物実測図（1）・・・・・・・126
第 86図　SD301（SD282）出土遺物実測図（2）・・・・・・・127
第 87図　SD301（SD282）出土遺物実測図（3）・・・・・・・128
第 88図　SD301（SD282）（4）・401出土遺物実測図・・・・129
第 89図　SD301（SD282）出土遺物実測図（5）・・・・・・・130
第 90図　SD301（SD282）出土遺物実測図（6）・・・・・・・131
第 91図　SD301（SD282）出土遺物実測図（7）・・・・・・・132
第 92図　SD301（SD282）出土遺物実測図（8）・・・・・・・133
第 93図　SD301（SD282）出土遺物実測図（9）・・・・・・・134
第 94図　SD301（SD282）（10）・SD301（SD741）出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
第 95図　SD301下層出土遺物実測図（1）・・・・・・・・・・136
第 96図　SD301下層出土遺物実測図（2）・・・・・・・・・・137
第 97図　SD301下層出土遺物実測図（3）・・・・・・・・・・138
第 98図　SD301下層出土遺物実測図（4）・・・・・・・・・・139
第 99図　SD301下層出土遺物実測図（5）・・・・・・・・・・140
第100図　SD301下層出土遺物実測図（6）・・・・・・・・・・141
第101図　SD301下層出土遺物実測図（7）・・・・・・・・・・142
第102図　SD301下層（8）、SE615下層（1）出土遺物実測図・・143
第103図　SD301下層出土遺物実測図（9）・・・・・・・・・・144
第104図　SD301下層出土遺物実測図（10）・・・・・・・・・145
第105図　SD301下層出土遺物実測図（11）・・・・・・・・・146
第106図　SD301下層出土遺物実測図（12）・・・・・・・・・147
第107図　SD301下層出土遺物実測図（13）・・・・・・・・・148
第108図　SD301下層出土遺物実測図（14）・・・・・・・・・149
第109図　SD301下層出土遺物実測図（15）・・・・・・・・・150
第110図　SD301下層出土遺物実測図（16）・・・・・・・・・151
第111図　SD301下層出土遺物実測図（17）・・・・・・・・・152
第112図　SD301中層（1）・上層（1）出土遺物実測図・・・153
第113図　SD301中層出土遺物実測図（2）・・・・・・・・・・154
第114図　SD301中層出土遺物実測図（3）・・・・・・・・・・155
第115図　SD301中層出土遺物実測図（4）・・・・・・・・・・156
第116図　SD301中層出土遺物実測図（5）・・・・・・・・・・157
第117図　SD301中層出土遺物実測図（6）・・・・・・・・・・158
第118図　SD301中層出土遺物実測図（7）・・・・・・・・・・159
第119図　SD301中層出土遺物実測図（8）・・・・・・・・・・160
第120図　SD301中層出土遺物実測図（9）・・・・・・・・・・161
第121図　SD301中層出土遺物実測図（10）・・・・・・・・・162
第122図　SD301中層（11）・下層（18）出土遺物実測図・・163
第123図　SD301中層（12）・下層（19）出土遺物実測図・・164
第124図　SD301中層出土遺物実測図（13）・・・・・・・・・165
第125図　SD301中層出土遺物実測図（14）・・・・・・・・・166
第126図　SD301中層出土遺物実測図（15）・・・・・・・・・167
第127図　SD301上層出土遺物実測図（2）・・・・・・・・・・168
第128図　SD301上層出土遺物実測図（3）・・・・・・・・・・169
第129図　SD301上層出土遺物実測図（4）・・・・・・・・・・170
第130図　SD301上層出土遺物実測図（5）・・・・・・・・・・171
第131図　SD301上層出土遺物実測図（6）・・・・・・・・・・172
第132図　SD301上層出土遺物実測図（7）・・・・・・・・・・173
第133図　SD301上層出土遺物実測図（8）・・・・・・・・・・174
第134図　SD301上層（9）・下層（20）出土遺物実測図　・・175
第135図　SD301上層（10）・下層（21）出土遺物実測図・・176
第136図　SD301上層出土遺物実測図（11）・・・・・・・・・177
第137図　SD301上層（12）・下層（22）出土遺物実測図・・178
第138図　SD301上層（13）・下層（23）出土遺物実測図・・179
第139図　SD301上層（14）・下層（24）出土遺物実測図・・180
第140図　SD301上層出土遺物実測図（15）・・・・・・・・・181
第141図　SD301上層出土遺物実測図（16）・・・・・・・・・182
第142図　SD301上層出土遺物実測図（17）・・・・・・・・・183
第143図　SD301上層出土遺物実測図（18）・・・・・・・・・184
第144図　SD301上層（19）、SE615下層（2）出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・185
第145図　SD301上層（20）・中層（16）・下層（25）出土遺物実測・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・186
第146図　SD302（SD745）下層出土遺物実測図（1）・・・・187
第147図　SD302（SD745）下層（2）・中層（1）出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・188
第148図　SD302（SD745）中層（2）・上層（1）出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・189
第149図　SD302（SD745）中層（3）・上層（2）出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・190
第150図　SD302（SD745）上層出土遺物実測図（3）・・・・191
第151図　SD401（1）・493（1）出土遺物実測図　・・・・・192
第152図　SD401出土遺物実測図（2）・・・・・・・・・・・・193
第153図　SD401出土遺物実測図（3）・・・・・・・・・・・・194
第154図　SD401（4）・265出土遺物実測図・・・・・・・・・195
第155図　SK206・212・253・262・291・293・305・307・310・312・313（1）・SD254（1）出土遺物実測図・・・196
第156図　SH215・SK303・SD254（2）・267・278・280・286・372・407（1）・425・432・469・493（2）出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・197
第157図　SD515・551・733・735・738出土遺物実測図・・・198
第158図　SX341・SK6・313（2）・321・329・358・404・410・411・430・439・441・464・471・479出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・199
第159図　SK431・482・505・506・507・508・521・524・545・557・578・591・628出土遺物実測図　・・・・・・200
第160図　SE208出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・201
第161図　SE216出土遺物実測図（1）・・・・・・・・・・・・202
第162図　SE216出土遺物実測図（2）・・・・・・・・・・・・203
第163図　SE216出土遺物実測図（3）・・・・・・・・・・・・204
第164図　SE218出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・205
第165図　SE220出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・206
第166図　SE477・496（1）・556出土遺物実測図　・・・・・207
第167図　SE615下層出土遺物実測図（3）・・・・・・・・・・208
第168図　SE615下層出土遺物実測図（4）・・・・・・・・・・209
第169図　SE615下層出土遺物実測図（5）・・・・・・・・・・210
第170図　SE615下層（6）・上層（1）出土遺物実測図・・・211
第171図　SE615下層（7）・上層（2）出土遺物実測図・・・212
第172図　SZ201・285・292・413・419（1）・422出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・213
第173図　SZ419出土遺物実測図（2）・・・・・・・・・・・・214
第174図　SZ428（1）・SE496（2）出土遺物実測図　・・・・215
第175図　SZ428出土遺物実測図（2）・・・・・・・・・・・・216

第176図　SZ428（3）・511・513・519出土遺物実測図・・・217
第177図　SD301・SH621出土遺物実測図・・・・・・・・・・218
第178図　SH209・215・217・423・424・452・467・640・701・SX251・336・SD407（2）・SR340・Pit出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・219
第179図　Pit・検出中・包含層出土遺物実測図・・・・・・220
第180図　検出中・包含層出土遺物実測図・・・・・・・・・・221
第181図　検出中・包含層出土遺物・土玉実測図・・・・・・222
第182図　SD497・527・SE565・587・SK548・625・Pit・旧河道・包含層出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・223
第183図　SD302・SK3・7・8・Pit・包含層・第１次調査坑出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・224
第184図　SD301（SD282含む）出土石器実測図（1）・・・・229
第185図　SD301（SD282含む）出土石器実測図（2）・・・・230
第186図　SD265・302・401・527・533・593・745・SE216・587・SZ292・419・428・SK503・540・557・635出土石器実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・231
第187図　SE615・Pit・包含層・検出中出土石器実測図・・・232
第188図　SK・SD・包含層・検出中出土石器・軽石実測図・233
第189図　SE615出土木製品実測図（1）・・・・・・・・・・・234
第190図　SE615出土木製品実測図（2）・・・・・・・・・・・235
第191図　SE615出土木製品実測図（3）・・・・・・・・・・・236
第192図　SE615（4）・SZ519出土木製品実測図・・・・・・237
第193図　SH452・SE615（5）・Pit出土木製品実測図・・・238
第194図　SE615出土木製品実測図（6）・・・・・・・・・・・239
第195図　SE587出土木製品実測図・・・・・・・・・・・・・240
第196図　環濠SD301（B3地区o24ライン、B4地区o5ライン）断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・244
第197図　環濠SD301のB3地区o24ラインにおける花粉ダイアグラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・246
第198図　環濠SD301のB4地区o5ラインにおける花粉ダイアグラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・247
第199図　B3地区h21のSE615における花粉ダイアグラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・248
第200図　B3地区h21のSE615における主要珪藻ダイアグラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・253
第201図　ベンガラ（左図）と朱（右図）の可搬型XRFによる分析結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・273
第202図　土器№1の赤色部分における測定結果・・・・・・276
第203図　土器№2の赤色部分における測定結果・・・・・・276
第204図　土器№3の赤色部分における測定結果・・・・・・277
第205図　土器№4の赤色部分における測定結果・・・・・・277
第206図　土器№5の赤色部分（写真の○部分）を採取した綿棒の測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・278
第207図　土器№5の胎土部分（写真の△部分）を採取した綿棒の測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・278
第208図　土器№6の赤色部分における測定結果・・・・・・278
第209図　土器№7の赤色部分（写真の○部分）における測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・279
第210図　土器№7の胎土部分（写真の△部分）における測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・279
第211図　土器№8の赤色部分における測定結果・・・・・・279
第212図　土器№9の赤色部分における測定結果・・・・・・280
第213図　土器№10の赤色部分における測定結果・・・・・・280
第214図　土器№11の赤色部分における測定結果・・・・・・281
第215図　土器№12の赤色部分における測定結果・・・・・・281
第216図　土器№13の赤色部分における測定結果・・・・・・282
第217図　土器№14の赤色部分における測定結果・・・・・・282
第218図　土器№15の赤色部分（写真の○部分）を採取した綿棒の測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・283
第219図　土器№15の胎土部分（写真の△部分）を採取した綿棒の測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・283
第220図　土器№16の赤色部分における測定結果・・・・・・283
第221図　土器№17の赤色部分（写真の○部分）における測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・284
第222図　土器№17の赤色部分（写真の△部分）における測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・284
第223図　土器№18の赤色部分における測定結果・・・・・・284
第224図　土器№19の赤色部分における測定結果・・・・・・285
第225図　土器№20の赤色部分における測定結果・・・・・・285
第226図　土器№21の赤色部分における測定結果・・・・・・286
第227図　土器№22の赤色部分における測定結果・・・・・・286
第228図　土器№23の赤色部分における測定結果・・・・・・287
第229図　土器№24の赤色部分における測定結果・・・・・・287
第230図　土器№25の赤色部分における測定結果・・・・・・288
第231図　土器№26の赤色部分における測定結果・・・・・・288
第232図　土器№27の赤色部分における測定結果・・・・・・289
第233図　土器№28の赤色部分における測定結果・・・・・・289
第234図　土器№29の赤色部分における測定結果・・・・・・290
第235図　土器№30の赤色部分における測定結果・・・・・・290
第236図　土器№31の赤色部分における測定結果・・・・・・291
第237図　土器№32の赤色部分における測定結果・・・・・・291
第238図　土器№33の赤色部分（写真の○部分）における測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・292
第239図　土器№33の赤色部分（写真の△部分）における測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・292
第240図　土器№34の赤色部分における測定結果・・・・・・292
第241図　土器№35の赤色部分における測定結果・・・・・・293
第242図　土器№36の赤色部分における測定結果・・・・・・293
第243図　土器№37の赤色部分における測定結果・・・・・・294
第244図　土器№38の赤色部分における測定結果・・・・・・294
第245図　土器№39の赤色部分（写真の○部分）における測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・295
第246図　土器№39の赤色部分（写真の△部分）における測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・295
第247図　土器№40の赤色部分における測定結果・・・・・・295
第248図　土器№41の赤色部分における測定結果・・・・・・296
第249図　土器№42の赤色部分（写真の○部分）における測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・296
第250図　土器№42の赤色部分（写真の△部分）における測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・296
第251図　土器№43の赤色部分における測定結果・・・・・・297
第252図　土器№44の赤色部分における測定結果・・・・・・297
第253図　土器№45の赤色部分における測定結果・・・・・・298
第254図　石器№46の赤色部分（写真の○部分）における測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・298
第255図　石器№46の本体部分（写真の△部分）における測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・298
第256図　石器№47の赤色部分における測定結果・・・・・・299
第257図　石器№48の赤色部分における測定結果・・・・・・299

第258図　石器№49の赤色部分における測定結果・・・・・・300
第259図　石器№50の赤色部分（写真の○部分）における測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・300
第260図　石器№50の本体部分（写真の△部分）における測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・300
第261図　弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・303
第262図　山中式期までの土器を出土した遺構・・・・・・・・304
第263図　廻間式期の土器を出土した遺構・・・・・・・・・・305
第264図　発掘調査成果から推定できる遺跡及び環濠の範囲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・308
第265図　土器からみた他地域との関係・・・・・・・・・・・312

表　目　次

第 1表　松阪多気バイパス発掘調査遺跡一覧（1）・・・・・5
第 2表　松阪多気バイパス発掘調査遺跡一覧（2）・・・・・6
第 3表　現地説明会開催一覧・・・・・・・・・・・・・・・11
第 4表　SD282土層土色一覧・・・・・・・・・・・・・・・77
第 5表　SD301土層土色一覧・・・・・・・・・・・・・・・79
第 6表　花粉分析結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・245
第 7表　珪藻分析結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・252
第 8表　出土木製品樹種同定結果一覧（1）・・・・・・・・259
第 9表　出土木製品樹種同定結果一覧（2）・・・・・・・・260
第10表　時期・器種ごとの樹種集計・・・・・・・・・・・261
第11表　XRFにより検出された元素一覧・・・・・・・・・274

写　真　図　版　目　次

巻頭写真図版１　A地区（第2次・B2区）
巻頭写真図版２　A地区（第3次・県道西）
巻頭写真図版３　B地区（第3次）
巻頭写真図版４　発掘調査区全体写真
巻頭写真図版５　出土遺物集合写真
写真図版 1　普及公開活動・・・・・・・・・・・・・・・・11
写真図版 2　花粉・寄生虫卵・・・・・・・・・・・・・・・249
写真図版 3　珪藻・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・254
写真図版 4　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（1）・・・262
写真図版５　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（2）・・・263
写真図版６　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（3）・・・264
写真図版７　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（4）・・・265
写真図版８　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（5）・・・266
写真図版９　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（6）・・・267
写真図版10　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（7）・・・268
写真図版11　出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（8）・・・269
写真図版12　出土した大型植物化石・・・・・・・・・・・271
写真図版13　SE615（下層）から出土した昆虫遺体・・・・272

Ⅰ　前　言

１　はじめに

一般国道42号松阪多気バイパス（以下 松阪多気バイパス）は、現在の一般国道42号の松阪市街地における慢性的な渋滞緩和と松阪多気地域の適切な土地利用を図り経済発展に寄与することを目的に計画された。バイパスは多気町仁田から松阪市古井町までの延長11.9kmの区間で計画され、建設計画では多気町仁田から松阪市中万町間の９工区（3.1km）、松阪市中万町から八太町までの10工区（1.4km）、八太町から上川町までの11工区（5.0km）、上川町から古井町までの12工区（2.4km）の４工区に分けられている。

松阪多気バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査は、平成２年度から平成９年度にかけて実施され、平成12年度の堀町遺跡発掘調査報告書の刊行をもって予定の全事業を終了した。その間の経過は別表の通りである。詳細については、既刊報告書に掲載されているので参照されたい。

２　調査体制

松阪多気バイパス建設にかかる埋蔵文化財発掘調査は平成２年度から開始し、現地調査を三重県埋蔵文化財センター、土工部門（現地作業に係る作業員任用、労務管理、各種機材手配等）は社団法人中部建設協会が担当し、国・県・協会の三者間で協定を結ぶことで当該事業を推進する方法で進めた。この体制は、昭和61（1986）年度以降に一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財発掘事業から導入され、平成17（2005）年度まで継続されたが、平成18（2006）年度からは土工部門に民間発掘調査機関を導入する体制に変更された。

現地調査初年度となった平成２年度は、管理指導課内に調査担当が配属されたが、次年度以降は国・公団事業担当課内の係として独立し、当該事業に係る調査に専念することとなった。

平成５年度からは現地調査と並行して報告書作成に着手。報告書作成は基本的に１遺跡につき２年間で整理・報告する体制で、初年度に遺物整理、次年度に報告書の編集・印刷・刊行を行うこととした。

また、平成５年度からは「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」に基づき、松阪市・多気町教育委員会から各１名の職員派遣を受け、調査体制強化・充実をはかった。

現地調査は平成９年度の堀町遺跡（第４次）をもって終了し、平成11年度の堀町遺跡報告書の刊行をもって当初から計画していた事業を完了した。

しかし、平成15年度に村竹コノ遺跡が工事中不時発見されたことを契機に事業は再開された。その経緯については後述する。国土交通省との協議により、再開した事業については平成20年度まで継続することとなり、村竹コノ遺跡及び廿チ遺跡（第２次）の発掘調査報告書の刊行をもち、松阪多気バイパス建設事業に伴う発掘調査は完了した。

以下に平成２年度から20年度の松阪多気バイパス埋蔵文化財発掘調査体制を記す。

（所長・調査担当者のみ表記、課名称等は当時）

【平成２年度】　所長　中林昭一
次長兼調査第二課長　山澤義貴
主査　新田　洋
管理指導課主事　河瀬信幸
主事　小林　秀

【平成３年度】　所長　中林昭一
次長兼管理指導課長　山澤義貴
調査第二課長　新田　洋
主査　田中喜久雄
技師　野原宏司

【平成４年度】　所長　久保富子
次長　山澤義貴
調査第二課長　新田　洋
主査　駒田利治
第二係長　田村陽一
主事　宇河雅之
調査補助員　河角龍典（立命館大学）
瀬野弥知世（皇學館大学）
塚田幸子（皇學館大学）
奥　明子（松阪女子高等学校）
高谷典子（松阪女子高等学校）

【平成５年度】　所長　久保富子

次長　山澤義貴
調査第二課長　伊藤克幸
主査　倉田直純
第二係長　田村陽一
主事　宇河雅之
主事　東　芳樹
主事　西村修久（多気町より派遣）
主事　小濵　学（松阪市より派遣）
調査補助員　瀬野弥知世（皇學館大学）
塚田幸子（皇學館大学）

【平成６年度】　所長　川村政敬
次長　山澤義貴
主幹兼調査第二課長　伊藤克幸
主査兼第二係長　田村陽一
主事　東　良樹
主事　宇河雅之
主事　西村修久（多気町より派遣）
主事　小濵　学（松阪市より派遣）
調査補助員　瀬野弥知世（皇學館大学）
塚田幸子（皇學館大学）

【平成７年度】　所長　川村政敬
次長　山澤義貴
主幹兼調査第二課長　伊藤克幸
主査兼第二係長　田村陽一
主事　下平康弘
主事　松本美先
主事　小林　秀
主事　西村修久（多気町より派遣）
主事　小濵　学（松阪市より派遣）
調査補助員　瀬野弥知世（皇學館大学）
塚田幸子（皇學館大学）
松井理栄子（橘女子大学）

【平成８年度】　所長　奥村敏夫
次長　山澤義貴
主幹兼調査第二課長　山田　猛
主査兼第二係長　森川常厚
主事　松本美先
主事　小濵　学
主事　兼古　慎（松阪市より派遣）
主事　小山憲一（多気町より派遣）
調査補助員　加藤里恵（皇學館大学）
松井理栄子（橘女子大学）

【平成９年度】　所長　奥村敏夫
次長　山澤義貴
主幹兼調査第二課長　山田　猛
主査兼第二係長　森川常厚
主事　小濵　学
主事　兼古　慎（松阪市より派遣）
主事　小山憲一（多気町より派遣）
調査補助員　中島沙恵（佛教大学）

【平成10年度】　所長　大井與生
次長兼資料普及ＧＬ　山澤義貴
主幹兼調査第二課長　吉水康夫
主査兼第二係長　筒井正明
主事　小濵　学
主事　小山憲一

＊GLはグループリーダー

【平成11年度】　所長　大井與生
次長兼資料普及ＧＬ　山澤義貴
主幹兼調査第二課長　吉水康夫
主査兼第二係長　筒井正明
主事　小濵　学
主事　小山憲一

＊平成12～14年度は事業中断期

【平成15年度】　所長　吉水康夫
主幹兼企画調整ＧＬ　河北秀実
主査　竹田憲治
技師　新名　強

【平成16年度】　所長　吉水康夫
主幹兼調査研究ⅡGL　泉　雄二
主幹　五嶋史佳
主事　大村伸一
臨時技術補助員　瀬野弥知世

【平成17年度】　所長　吉水康夫
主幹兼調査研究ⅡGL　河北秀実
主査　木野本和之
臨時技術補助員　瀬野弥知世

【平成18年度】　所長　吉水康夫
調査研究Ⅱ課長　田村陽一
主査　木野本和之
主事　西口剛司

【平成19年度】　所長　吉水康夫

調査研究Ⅱ課長　田村陽一
主幹　木野本和之
主事　西口剛司
【平成20年度】所長　吉水康夫
調査研究Ⅱ課長　田村陽一
主査　松葉和也

なお、上記職員のほか、各種調査記録類の整理や出土遺物の整理・実測など整理所における室内整理業務（平成２年度～平成11年度）に業務補助員として下記の者が携わった。

北川ゆき　白石みよ子　中里輝子　中村敬子
服部美奈子　広瀬則代　谷久保美知代　廣田洋子
山路艶子　山分孝子　脇葉輝美

なお、村竹コノ遺跡に係る各種調査記録類の整理や出土遺物の整理・実測等の室内整理業務（平成15年度～平成20年度）については、担当職員のほか情報普及課・支援研究課職員及び業務補助職員が携わった。

３　調査方法

遺跡範囲が広大であることが予想されたため、地区割については100ｍ方眼で大地区、４ｍ方眼で小地区設定を行った。小地区割は道路中心杭の延長方向に、北から南へアラビア数字、これと直交する方向に西から東へアルファベットを付与し、各地区の北西隅杭を当該地区名とした。また、これとは別に報告書作成段階においては調査区の平面的な７つのまとまりごとにＡ～Ｇ地区と呼称して記述する。

遺構カードは原則として小地区毎に作成し、略測図は遺構検出後掘り下げまでに記入することとし、遺構の重複関係、埋土の色調・状態等を明示した。

遺構番号については、調査が複数年次に亘ること、工事の進捗状況による調査区の移動があったことから、調査区ごとに100単位で番号を付与した。また、ピットは小地区毎に通し番号を付与した。

遺構の検討や遺物整理のために、遺構カードを基にした遺構略測図（100分の１）を作成した。

遺構等の写真撮影は、原則として４×５インチ判（モノクロ・カラーポジ）フィルム、サブとして６×９㎝判（モノクロ・カラーポジ）フィルム・35㎜（モノクロ・カラーポジ）フィルムを使用した。また、メモ写真・報道機関提供写真用としてデジタルカメラも必要に応じ使用した。なお、遺物写真撮影は基本的に６×７㎝判（モノクロ）フィルムを使用している。

使用したカメラはウィスタSP（４×５インチ・６×９㎝）、ニコンFM２（35㎜）、オリンパスμ－30・キャノンEOS kiss（デジタルカメラ）である。

遺構実測は、世界測地系に基づいて行なった。１・２・４次調査については手描き実測（20分の１）、３次調査については現地調査期間短縮のため空中写真測量を実施した。また、遺物出土状況図等の詳細実測図は、別途手描き実測（10分の１）を行った。

４　村竹コノ遺跡発見の経緯

ここで松阪多気バイパス埋蔵文化財発掘調査再開に係る経緯について述べる。

平成15年10月に松阪市上川町地内の松阪多気バイパス工事現場で、文化財パトロール中の三重県文化財保護指導員によって埋蔵文化財（溝及び弥生土器）が存在することが確認され、周辺一帯の埋蔵文化財のひろがりを確認する必要が生じた。該当する埋蔵文化財が発見された11工区内一帯は既にバイパス建設工事が進行中であり、その取り扱いについては早急な対応が必要とされた。そこで、国土交通省中部地方整備局紀勢国道事務所・松阪市都市計画課・松阪市教育委員会・三重県埋蔵文化財センターの四者で該当する埋蔵文化財についての取り扱いについて協議し、遺跡の広がりの確認を目的とする予備調査を早急に実施し、発掘調査が必要な範囲を確定し、発掘調査終了までの間工事を中断あるいは工程を変更することで合意した。

なお、遺跡の名称は遺跡範囲が複数の小字に跨ることから、発掘調査対象部分の大部分を占めるふたつの小字名（「村竹」「コノ」）をとり『村竹コノ』遺跡と呼称することとした。

５　発掘調査の経過

前述の通り、遺跡発見の経緯が「工事中不時発見」であった。従って、本来調査対象とすべきところが道路の完成により調査を断念しなければならず、また、工事と同時進行せざるを得ないなど、非常に厳しい状況下で調査を進めなければならなかった。平成６年度に実施した隣接する廿チ遺跡の１次調査では、直前まで調査を行なっていながら遺跡の存在を

把握することができていなかった。範囲確認調査の限界と難しさを痛感するばかりである。

以下に調査を実施した平成15年度から平成18年度の事業概要を記す。

(1) 平成15年度（第１次調査）

第１次調査は、国土交通省中部地方整備局紀勢国道事務所・三重県埋蔵文化財センター・社団法人 中部建設協会の三者で協議を重ねた後、企画調整グループ職員（竹田憲治・新名 強）を担当者として平成15年11月17日に着手、同年12月３日に終了した。最終的な調査面積は356㎡であった。

調査は南北方向に設定されたバイパス本線部分に23箇所、直交する県道部分に４箇所のテストピットを設定し、地下に存在する遺構の広がりを確認した。その結果、19箇所で遺構・遺物が確認され、調査地一帯に埋蔵文化財が存在することが判明した。また、県道部分では道路側溝設置に伴う工事立会調査を実施し、大量の土器を含む大溝２条のほか、多数の遺構を確認した。

なお、平成15年12月17日には上川町地内のバイパス側道建設予定地内に所在する北上遺跡で、遺跡の広がりを確認するための１次調査（12㎡）を実施したが、遺構・遺物とも確認できなかった。

(2) 平成16年度 （第２次調査）

平成16年４月１日付けで国土交通省中部地方整備局長と三重県知事との間で埋蔵文化財発掘調査にかかる契約を締結した。

調査工程等の詳細については、国土交通省紀勢国道事務所・社団法人 中部建設協会・三重県埋蔵文化財センターの三者で協議を重ね、平成16年７月27日に現地調査に着手した。

平成16年度発掘調査は、県内各地に被害をもたらした集中豪雨など、夏から秋にかけての悪天候や予想を上回る遺構密度や出土遺物量であったことから、当初の予定より終了が遅れたが平成17年２月23日に終了した。最終的な調査面積は2,710㎡であった。

なお、年度途中に国土交通省紀勢国道事務所から上川町地内の廿チ遺跡でバイパスに伴う地下道建設工事計画が提示され、該当部分について遺跡の広がりを確認するための１次調査を行う必要が生じた。平成16年10月下旬に現地調査を実施したところ400㎡を対象とする発掘調査が必要と判断され、国土交通省紀勢国道事務所にその旨報告された。

(3) 平成17年度（第３次調査）

平成17年４月１日付で国土交通省中部地方整備局長と三重県知事との間で埋蔵文化財発掘調査にかかる契約を締結した。

調査工程等の詳細については、国土交通省紀勢国道事務所・社団法人 中部建設協会・三重県埋蔵文化財センターの三者で協議を重ね、平成17年５月９日に現地調査に着手した。

発掘調査は、隣接地で並行して実施していたバイパス建設工事の進度と調整を図る必要があり、調査工程を３分割（県道西調査区前半・県道西調査区後半・県道東調査区）して実施した。

調査の進展に伴い、前年度を大幅に上回る密度の遺構とそれに伴う大量の遺物が確認された。特に弥生時代後期末に掘削された環濠（延長約60m）から大量の土器が出土し、その総重量は約５t（遺物整理箱に換算すると約800箱）に達した。

このような状況下と度重なる台風襲来にもかかわらず調査は順調に進み、平成18年１月31日に終了した。最終的な調査面積は2,900㎡であった。

(4) 平成18年度（第４次調査・室内整理業務）

平成18年４月１日付で国土交通省中部地方整備局長と三重県知事の間で埋蔵文化財発掘調査にかかる契約を締結し、松阪多気バイパス現地調査最終年度がスタートした。調査対象となったのは村竹コノ遺跡（第４次調査）と廿チ遺跡（第２次調査）の２遺跡である。

平成18年度からは、指名競争入札による民間発掘調査機関への発掘調査委託が導入され、東海アナース株式会社が落札し土工部門を担当することになった。

国土交通省紀勢国道事務所と三重県埋蔵文化財センターの二者で事前協議を重ね、平成18年６月12日に現地調査に着手した。

工事工程の関係で、まず廿チ遺跡の発掘調査に着手。調査面積は狭小であったが、古墳時代後期から中世前期にかけての掘立柱建物・溝・土坑等の遺構及びそれらに伴う遺物を確認した。

引き続き着手した村竹コノ遺跡（第４次調査）では、環濠３条と竪穴住居跡などの弥生時代後期末か

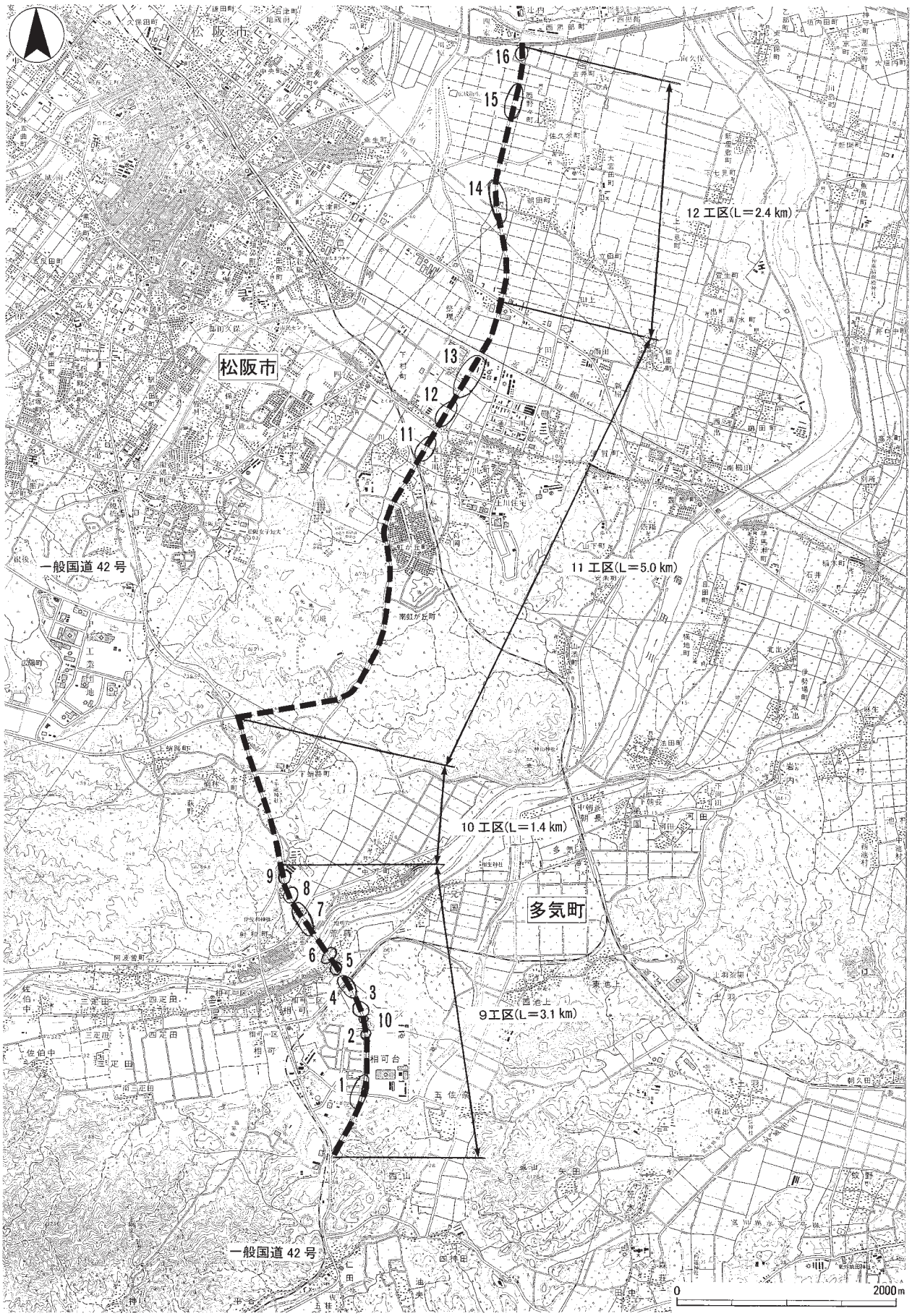
工区	No.	遺跡名	確認面積(㎡)	調査対象面積(㎡) H5. 4. 1協定	調査対象面積(㎡) H17. 3. 31現在		調査面積(㎡) H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H15	H16	H17	H18	H19	H20	備考	
9	1	明気窯跡群	2,000	2,900	2,900	1			530		報Ⅰ													
						本			1,500	1,400														
	2	明気古墳群	900	―	―	1																	平成4年度 多気町教育委員会調査	
						本																		
	3	甘糟遺跡	2,650	―	―	1		144			報Ⅰ												1次調査の結果、本調査の必要なし	
						本																		
	4	巣護遺跡	7,500	2,300	2,300	1		908			報Ⅰ												多気郡条里遺構を名称変更	
						本				2,300														
	5	上ノ垣外遺跡	6,000	5,000	5,000	1	68		96			報Ⅱ												
						本				1,950	3,050													
						下				112	64													
		栂ノ世古遺跡			50	1						48	報Ⅲ										上ノ垣外遺跡第3次を名称変更	
						本							50											
	6	新徳寺遺跡	2,400	(2,400)	1,600	1				96		48	報Ⅲ											
						本					1,100		500											
						下					333		114											
	7	鴻ノ木遺跡	11,200	13,800	12,560	1	272								報Ⅳ								遺構・遺物多数のため、整理期間4ヶ年	
						本	1,500	460	3,500	5,800	1,300													
						下	850		2,321	2,200														
	8	朱中遺跡	5,200	5,200	6,100	1	184					報Ⅴ												
						本		4,800			400													
						下		900																
	9	朱中古墳	400	1,000	1,000	1	98					報Ⅴ												
						本				1,000														
	10	大日山古墳群	600	―	600	1						報Ⅰ											平成5年度 工事中に発見、本調査	
						本					600													
11	11	中野前遺跡	4,200	4,200	―	1					176		報Ⅵ										石津遺跡を名称変更、本調査の必要なし	
						本																		
	12	北上遺跡	3,700	3,700	1,939						1次56		報Ⅵ				1次12				報Ⅷ		トレンチ調査	
		廿チ遺跡									1次144	1,544						1次150		339			東牛込遺跡を名称変更	
	13	村竹コノ遺跡	9,890	―	6,759	1																報Ⅸ	平成15年度 工事中に発見、本調査	
						本											356	2,710	2,900	793			遺構・遺物多数のため、整理期間3ヶ年	
12	14	堀町遺跡	9,200	9,200	14,300	1				356			270			報Ⅶ							遺構・遺物多数のため、整理期間3ヶ年	
						本					3,000	3,100	4,700	3,500										
	15	御堂山遺跡	8,100	―	―	1			224				報Ⅵ										1次調査の結果、本調査の必要なし	
						本																		
	16	山ノ花遺跡	4,100	4,100	1,300	1					176		報Ⅵ											
						本						1,300												
		松阪多気バイパス総計	78,040	49,000	56,408																			
面積				1次調査			622	1,052	850	452	496	96	270	―	―	―	12	150	―	―	―	―	4,000	1次調査実施総面積
				本調査			1,500	5,260	5,000	12,450	9,450	6,000	5,250	3,500	―	―	356	2,710	2,900	1,132	―	―	55,508	本調査実施総面積
				下層調査			850	900	2,321	2,312	397	―	114	―	―	―	―	―	―	―	―	―	6,894	下層調査実施総面積
				年度別合計			2,972	7,212	8,171	15,214	10,343	6,096	5,634	3,500	―	―	368	2,860	2,900	1,132	―	―	66,402	松阪多気バイパス総計

第１表　松阪多気バイパス発掘調査遺跡一覧（1）

番号		遺跡名	所在地	調査期間	調査面積(㎡)	担　当　者
1		みょうげかまあとぐん 明気窯跡群	多気町相可字明気	平成4(1992)年8月28日～9月30日(1次調査) 平成4(1992)年10月18日～平成5(1993)年2月28日 平成5(1993)年4月19日～10月29日 ＊平成4年6月17日～6月25日予備調査(磁気探査)	530 1,500 1,400 計 3,430	田村陽一・宇河雅之 田村陽一・宇河雅之 宇河雅之・西村修久
2		みょうげ 明気古墳群	多気町相可字明気			多気町教育委員会
3	9	あまかす 甘糟遺跡	多気町荒蒔字甘糟	平成3(1991)年8月26日～10月11日(1次調査)	144 計 144	田中喜久雄・野原宏司
4		す　ご 巣護遺跡	多気町荒蒔字巣護	平成3(1991)年8月26日～10月11日(1次調査) 平成5(1993)年8月23日～平成6(1994)年1月27日 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【多気郡条里遺構】	908 2,300 計 3,208	田中喜久雄・野原宏司 西村修久・東　良樹
5		うえのがいと 上ノ垣外遺跡	多気町荒蒔字上ノ垣外ほか	平成2(1990)年7月23日～9月12日(1次調査) 平成5(1993)年1月28日～2月1日(1次調査) 平成5(1993)年8月23日～平成6(1994)年1月27日 平成6(1994)年4月18日～8月31日	68 96 1,950 ＊ 112 3,050 ＊ 64 計 5,164 ＊ 176	河瀬信幸 田村陽一・宇河雅之 西村修久 東　良樹・下平康弘
		とがのせこ 栂ノ世古遺跡 【旧：上ノ垣外遺跡第3次】	多気町相可字栂ノ世古	平成8(1996)年2月6日(1次調査) 平成8(1996)年4月11日～5月10日	48 50 計 98	田村陽一・松本美先 松本美先・小山憲一
6	工	しんとくじ 新徳寺遺跡	多気町相可字新徳寺	平成5(1993)年7月9日～7月12日(1次調査) 平成6(1994)年5月23日～8月24日 平成8(1996)年2月6日(1次調査) 平成8(1996)年4月11日～6月27日	96 1,100 ＊ 333 48 500 ＊ 114 計 1,744 ＊ 447	宇河雅之 小濵　学・西村修久 田村陽一・松本美先 松本美先・小山憲一
7		こうのき 鴻ノ木遺跡	松阪市射和町字鴻ノ木・水引場 ・久保田　ほか	平成2(1990)年7月23日～9月12日(1次調査) 平成2(1990)年10月11日～平成3(1991)年3月19日 平成3(1991)年4月23日～5月31日 平成4(1992)年5月11日～8月31日 平成5(1993)年4月19日～8月29日 平成5(1993)年8月23日～平成6(1994)年3月31日 平成6(1994)年8月23日～平成7(1995)年1月25日	272 1,500 ＊ 850 460 3,500 ＊ 2,321 3,600 ＊ 400 2,200 ＊ 1,800 1,300 計 12,832 ＊ 5,371	河瀬信幸 河瀬信幸・小林　秀 田中喜久雄・野原宏司 宇河雅之・田村陽一 東　良樹・小濵　学 小濵　学・田村陽一 下平康弘
8	区	しゅなか 朱中遺跡	松阪市射和町字朱中	平成2(1990)年7月23日～9月12日(1次調査) 平成3(1991)年6月1日～8月24日 平成3(1991)年10月14日～平成4(1992)年3月13日 平成6(1994)年9月5日～9月22日	184 2,300 2,500 ＊ 900 400 計 5,384 ＊ 900	河瀬信幸 田中喜久雄・野原宏司 田中喜久雄・野原宏司 東　良樹
9		しゅなか 朱中古墳	松阪市射和町字朱中	平成2(1990)年7月23日～9月12日(1次調査) 平成5(1993)年6月25日～8月20日	98 1,000 計 1,098	河瀬信幸 西村修久
10		だいにちやま 大日山古墳群	多気町荒蒔字大日山	平成6(1994)年4月7日～6月11日	600 計 600	西村修久・小濵　学
11		なかのまえ 中野前遺跡 【旧：石津遺跡】	松阪市上川町字中野前・八王子	平成6(1994)年9月26日～10月5日(1次調査)	176 計 176	東　良樹
12	11	はたち 廿チ遺跡 【旧：東牛込遺跡】	松阪市上川町字廿チ ほか	平成6(1994)年10月6日～10月14日(1次調査) 平成7(1995)年6月7日～7月19日 平成16(2004)年10月18日～10月26日(1次調査) 平成18(2006)年6月12日～6月29日	144 1,544 150 339 計 2,177	東　良樹 下平康弘・小林　秀 五嶋史佳 西口剛司・木野本和之
	工	きたかみ 北上遺跡	松阪市上川町字北上	平成6(1994)年10月6日～10月15日(トレンチ調査) 平成15(2003)年12月17日(1次調査)	56 12 計 68	東　良樹
13	区	むらたけこの 村竹コノ遺跡	松阪市上川町字村竹・コノ・廿チほか	平成15(2003)年11月17日～12月3日(1次調査・第1次調査) 平成16(2004)年7月27日～平成17(2005)年3月10日 平成17(2005)年5月9日～平成18(2006)年1月31日 平成18(2006)年6月27日～8月21日	356 2,710 2,900 793 計 6,759	竹田憲治・新名　強 五嶋史佳・大村伸一 木野本和之 西口剛司・木野本和之
14	12	ほりまち 堀町遺跡	松阪市朝田町字堀町・斎宮 ほか	平成5(1993)年7月19日～7月23日(1次調査) 平成6(1994)年8月26日～平成7(1995)年2月20日 平成7(1995)年8月7日～平成8(1996)年1月24日 平成8(1996)年7月15日・8月19日～21日(1次調査) 平成8(1996)年7月15日～平成9(1997)年1月31日 平成9(1997)年5月6日～12月10日	356 3,000 3,100 270 4,700 3,500 計 14,926	宇河雅之 小濵　学 小濵　学・松本美先 小濵　学・兼古　慎 小濵　学・兼古　慎 小濵　学・兼古　慎
15	工	みどうやま 御堂山遺跡	松阪市西野々町字御堂山	平成5(1993)年1月26日～1月27日(1次調査)	224 計 224	宇河雅之
16	区	やまのはな 山ノ花遺跡	松阪市古井町字山ノ花	平成6(1994)年10月17日～10月20日(1次調査) 平成7(1995)年5月10日～5月26日	176 1,300 計 1,476	東　良樹 松本美先・西村修久

＊=下層調査面積

第２表　松阪多気バイパス発掘調査遺跡一覧 (2)



第１図　松阪多気バイパス路線遺跡位置図（1：50,000）　（国土地理院『松阪』、『国東山』 1：25,000から）

ら古墳時代前期初頭にかけての遺構を確認し、集落の南限を確定するという成果をあげることができた。今回は、水稲耕作の時期に重なったため湧水等の対策に苦慮したものの調査はおおむね順調に進み、８月21日に終了した。最終的な調査面積は、廿チ遺跡339㎡、村竹コノ遺跡793㎡の計1,132㎡であった。

以上、４次にわたった村竹コノ遺跡現地発掘調査面積は、最終的に約6,800㎡となった。

現地調査終了後、出土した遺物に係る整理作業に本格的に着手。発掘調査と同時進行で報告書掲載遺物の選別を行い、約3,000点の遺物について実測・図化した。また、遺構埋土・木製品・植物遺体・昆虫遺体・赤色顔料については抽出サンプルの自然科学分析を、特に重要と判断した木製品については保存処理を実施した。なお、出土遺物量が膨大であるため、仮収蔵庫の一角を実測済遺物保管・整理作業用スペースとして確保し、整理・報告書作成業務の拠点とした。

(5) 平成19年度（報告書作成業務）

報告書作成業務のみ実施した。

(6) 平成20年度（報告書作成業務・刊行）

引き続き報告書作成業務を実施し、刊行した。

《調査日誌抄》

第１次調査（省略）

第２次調査

2004年

7/27　Ｆ地区北端部の表土掘削開始。

8/ 3　人力掘削開始。

8/ 4　台風の影響で作業中止。

8/ 6　調査区西端でＳＤ202確認。

8/ 9　ＳＤ202掘削開始。

8/24　検出の結果、竪穴住居跡確認。検出段階で貼床確認。

8/25　ＳＥ208遺物出土状況図作成。
廿チ遺跡範囲内で新たに地下道建設計画。協議が必要となる。

8/26　県立宇治山田高校教諭・生徒が体験発掘。

8/31　ＳＥ202から大量の土器出土。

9/ 6　前夜の地震（松阪市 震度５弱）による被害もなく、作業は順調に進む。

9/13　ＳＥ208・220から土器大量に出土。

9/21　掘削終了後の写真撮影（～9/22）。

9/24　台風の影響で調査できず（～9/30）。

10/ 1　既調査区の遺構実測（～10/4）。

10/ 8　Ａ地区北端部、遺構検出開始。竪穴住居と思われる遺構確認。

10/18　廿チ遺跡１次調査。

10/19　台風の影響で作業中止（～10/21）。

10/27　大溝ＳＤ265確認。

10/29　Ａ地区北端部はＣ・Ｄ・Ｅ地区の調査を優先するため、一旦中断する。

11/ 1　Ｃ・Ｄ・Ｅ地区の表土掘削（～11/ 9）。

11/10　Ｃ地区ＳＤ301は先行トレンチで深さ・断面を確認。埋土中に大量の土器含む。

11/17　相可高校生徒40名現場見学。Ｆ地区は現地説明会準備開始。

11/18　松阪市役所にて資料提供。午前、久居農林高校生徒が現場見学。

11/23　現地説明会開催。参加者約100名。

11/24　ＳＤ301掘削完了。

11/26　ＳＤ302掘削開始。上層でミニチュア土器出土。

11/30　ＳＤ302掘削終了。掘削終了範囲の遺構実測。

12/10　ラジコンヘリによる既調査区の空中写真撮影実施。午後、遺構実測。

12/16　Ｄ・Ｅ地区表土掘削開始。

12/21　遺構検出進む。方形周溝墓・流路等を確認。

12/24　2004年の調査本日で終了。

2005年

1/11　調査再開。

1/12　Ｃ・Ｄ・Ｅ地区、写真撮影。午後から降雪のため作業中止。

1/13　Ｃ・Ｄ・Ｅ地区、遺構実測。並行してＡ地区北端の調査再開。

1/19　Ａ地区の調査進む。ＳＤ282は環濠の可能性が高まる。

1/24　Ｃ・Ｄ・Ｅ地区、ラジコンヘリによる空中写真撮影。ＳＤ282上層から大量の土器が出土。

1/26　ＳＤ282掘削完了。出土遺物は上・中・下に分層して取り上げる。

2/ 1　Ａ地区北端の遺構実測（～ 2/3）。

2/ 7　ラジコンヘリによるＡ地区空中写真撮影。

2/14　Ａ地区の一部で下層確認調査。

2/22　調査終了。作業員対象に調査成果説明。

第３次調査

2005年

5/ 9　調査前写真撮影後、まず盛土除去作業に着手。

5/16　旧表土の除去開始。約20cmで検出面。ＳＤ282延長部分を確認。

5/17　ＳＤ282を境に東西の状況が異なる。東側に遺物を多く含む部分が広がる。

5/20　表土掘削進む。竪穴住居複数確認する。

5/24　南に向かうほど遺構が集中する状況。

5/25　表土掘削終了。引き続きベルコン等機材設置作業。

5/26　地区杭打設。

5/30　遺構検出開始。ＳＤ282と直交する溝確認。ＳＤ401とする。古墳前期の遺物を多く含む。

6/ 1　ＳＤ401より分銅形土製品出土。

6/ 6　ＳＤ282の掘削開始。完形の土器も出土する。溝東肩は検出困難。

6/ 9　ＳＤ401完掘。ＳＤ282の検出続く。昨年調査したＳＤ301の延長部分の可能性高い。

6/21　Ｂ３ラインまで検出。竪穴住居が集中する。ＳＤ282は相変わらず遺物が多く出土する。

6/24　不定形な掘形のＳＺ419の掘削開始。埋土の状況は異質。整地または盛土の可能性高い。

6/28　気温37.5℃の酷暑。ＳＺ428からは古墳初頭の遺物がまとまって見つかる。

7/ 5　現場視察のため生涯学習分野総括室長来訪。現場について説明。竪穴住居は複数棟が向きを揃える。

7/12　竪穴住居ＳＨ452主柱穴で柱根の残存を確認。南東隅には貯蔵穴状の土坑。

7/18　土坑ＳＫ470の底部で弥生前期の壺・甕各１個体を確認。

7/20　土坑ＳＫ482の底から小型の手焙形土器出土。類例を知らず。

7/29　ピット密集。重複激しく検出に苦労する。午後、松阪市教育研究会社会科部会が現場見学。

8/ 4　精査の結果、竪穴住居６棟を確定。削平著しく、確認作業も困難を極めた。

8/ 5　県教育委員の現場視察。調査状況・出土遺物等の説明。

8/ 9　猛暑!!ＳＺ群掘削の目途付く。粘土層まで掘り下げ、不定形な掘形であることから粘土採掘跡の可能性が高い。

8/12　ＳＺ519掘削中、ＳＫ524を確認。ほぼ完形の壺４個体出土。埋納遺構か？出土状況写真撮影及び図面作成。

8/24　台風襲来。現場水没、壁崩落するなど被害。

8/29　Ｂ地区表土掘削開始。調査区中央を環濠ＳＤ282の延長部が縦断することを確認。

8/31　ラジコンヘリによる空中写真撮影。

9/ 8　松阪市役所にて資料提供。午後はマスコミからの質問対応。

9/11　現地説明会開催。約100名参加。

9/15　環濠ＳＤ301の掘削開始。遺物出土量が多い。午後、三重大学山中教授来訪。

9/16　ＳＤ301、１日で８箱分の遺物出土。午後、愛知県埋蔵文化財センター職員が現場見学。

9/20　ＳＤ527より奈良時代の遺物出土。ＳＤ301に先行トレンチ掘削。幅2.5m・深さ1.2m。

9/21　ＳＤ301の上層は古墳初頭、下層は弥生後期末の遺物を含む。中層は地山ブロックを多く含む。

10/ 4　ＳＤ301は南に向かうほど浅くなる模様。中層で赤彩壺・ミニチュア土器確認。

10/ 7　出土遺物量があまりに多く、整理箱不足する。本日だけで32箱分取り上げる。

10/13　ＳＤ301下層で完形の壺５個体出土。中層は大型壺が多い。

10/28　午後、国土交通省工事課長と工事請負業者10名来訪。

11/ 8　掘削作業終了後、Ｂ地区全景写真撮影。

11/16　Ａ地区南半部の遺構検出開始。大き目のピットが多い。

11/18　午後、橿原考古学研究所寺澤氏ほか３名来訪。環濠、大型掘立柱建物等についてご教示いただく。

11/30　田原本町教育委員会藤田氏来訪。出土した焼土塊等についてご教示いただく。

12/12　調査区西壁際で検出した大土坑は井戸ＳＥ615であることが判明。上層埋土中にはＳ字甕Ｃ・Ｄ類の破片が混じる。ＳＫ631から弥生前

期の壺上半部がほぼ完形で出土。

12/15　ＳＥ615下層で大量の木製品・廃材を確認。投棄された状況。土器、石器等も出土。

12/19　ＳＥ615下層からは古墳前期の土器が良好な状態で出土。

12/20　独立棟持柱建物ＳＢ647・648の写真撮影。

12/22　降雪の影響により現場作業１時間遅れで開始。ＳＥ615は完掘。

12/26　朝から強風。高所作業車で調査区全景写真撮影する。年内の作業は本日まで。

2006年

1/ 6　ＳＥ615崩落の恐れあり。土層断面略測図を大急ぎで作成。

1/11　松阪市役所にて今年度２回目の資料提供。

1/12　ラジコンヘリによる空中写真撮影。作業員の一部は本日で仕事終了。

1/15　午後、現地説明会開催。見学者150名。テレビ局の取材もあり盛況。松阪市教委との共催。

1/18　ＳＤ301土壌分析用サンプル採取。畔外しだけでまとまった量の土器が出土。

1/20　現地調査全て終了。

第４次調査

2006年

6/ 5　調査着手前写真撮影。

6/27　表土掘削開始。第２次調査で確認した竪穴住居が見える。

6/30　地区杭設定。包含層掘削を進める。

7/ 4　環濠ＳＤ202延長部分の掘削。遺物多数出土。

7/10　竪穴住居ＳＨ701掘削。貯蔵穴、主柱穴等の施設確認。大小２棟が重複する。

7/14　調査区北半部掘削完了。既調査範囲の写真撮影。個別遺構も同時撮影する。

7/18　農道交差点手前で環濠ＳＤ741を確認。Ｇ地区表土掘削開始。

7/25　竪穴住居３棟確認。２棟の南辺中央付近に貯蔵穴あり。Ｇ地区では、弥生前期の遺物が出土。３次調査と同様の傾向。

7/27　Ｇ地区調査終了。

7/28　ＳＤ741完掘。予想外に浅く出土遺物も少量。ＳＤ735からは異形の土器出土。鳥形か？Ｇ地区遺構実測完了し、事業者に引き渡す。

7/31　Ｆ地区中央部完掘。既調査範囲の写真撮影。

8/ 1　２条目の環濠ＳＤ745確認。ＳＤ745以南は遺構数が激減。さらに南側では幅約20mの旧河道を確認。

8/ 2　ＳＤ745掘削開始。断面形はＶ字状で、遺物は比較的多い。Ｇ地区の遺構実測開始。

8/10　旧河道は道路本体への影響を考慮し、重機によるトレンチ掘削で対応。

8/11　遺構実測完了。旧河道トレンチ埋め戻しの際、重機がスタックし隣接するバイパス本線に若干の被害。国交省に事故報告し指示を仰ぐ。

8/14　ラジコンヘリによる空中写真撮影。これをもって現地調査はすべて終了。

8/17　調査区埋め戻し開始。

(7) 文化財保護法等による諸通知

第２次調査

・文化財保護法第58条の２第１項にかかる発掘調査報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）

平成16年７月29日付　教埋第145号

・遺失物法にかかる埋蔵文化財の発見・認定通知（松阪警察署長宛県教育長通知）

平成17年３月14日付　教委第12－４－32号

第３次調査

・文化財保護法第99条第１項にかかる発掘調査報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）

平成17年５月10日付　教埋第39号

・遺失物法にかかる埋蔵文化財の発見・認定通知（松阪警察署長宛県教育長通知）

平成18年５月15日付　教委第12－４－１号

第４次調査

・文化財保護法第99条第１項にかかる発掘調査報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）

平成18年７月３日付　教埋第165号

・遺失物法にかかる埋蔵文化財の発見・認定通知（松阪警察署長宛県教育長通知）

平成18年９月11日付　教委第12－４－８号

６　普及公開活動

発掘調査以外にも普及公開活動として、現地説明会、調査速報・ニュース・概報の発行、速報展示等を行った。以下にその概略を記す。

(1) 現地説明会

遺　　跡　　名	所　　在　　地	開催年月日	参加者数
鴻ノ木遺跡　第1次	松阪市射和町	平成3年3月16日	60
朱中遺跡	松阪市射和町	平成4年2月1日	100
明気1・2号窯	多気郡多気町相可	平成5年2月13日	150
明気3～5号窯	多気郡多気町相可	平成5年7月31日	150
鴻ノ木遺跡　第4次	松阪市射和町		
鴻ノ木遺跡　第5次	松阪市中万町	平成5年12月4日	140
上ノ垣外遺跡　第1次	多気郡多気町荒蒔		
巣護遺跡	多気郡多気町荒蒔		
上ノ垣外遺跡　第2次	多気郡多気町荒蒔	平成6年7月30日	120
新徳寺遺跡　第1次	多気郡多気町相可		
堀町遺跡　第1次	松阪市朝田町	平成7年2月4日	100
堀町遺跡　第2次	松阪市朝田町	平成8年1月20日	120
新徳寺遺跡　第2次	多気郡多気町相可	平成8年6月1日	100
堀町遺跡　第3次	松阪市朝田町	平成8年12月21日	130
堀町遺跡　第4次	松阪市朝田町	平成9年11月1日	80
村竹コノ遺跡　第2次	松阪市上川町	平成16年11月23日	100
村竹コノ遺跡　第3次-1	松阪市上川町	平成17年9月11日	100
村竹コノ遺跡　第3次-2	松阪市上川町	平成18年1月10日	150

第３表　現地説明会開催一覧

第３次調査現地説明会（平成18年１月10日　松阪市教育委員会と共催）

学校教員の現場見学

松阪市文化財センター「はにわ館」での展示

写真図版１　普及公開活動

現地調査がほぼ終了する段階で可能な限り県民対象の現地説明会を開催している。松阪多気バイパス事業全体では、これまでに延べ1,000名以上の参加を得た。村竹コノ遺跡については平成16年度に１回、平成17年度に２回の計３回実施し、延べ350名が現地を訪れた。当日は参加者に説明会資料を配布し、それに基づき調査担当者が遺構・遺物に係る解説を行なった。特に平成17年度２回目の説明会は、松阪市文化財センター主催行事である特別展示『環濠のある遺跡』の関連行事として、松阪市教育委員会の協力を得た。

(2) 発掘調査速報

現地調査の状況を即時に公開する目的で『発掘調査速報』を随時発行し、地元・関係機関等に配布するとともに当センターホームページにも随時掲載してより広範囲への情報提供を試みた。速報は平成17年度調査から開始し、最終的に28号を発行した。

(3) 調査ニュース

『現地説明会資料』や年度毎に刊行する『発掘調査概報９～11』とは別に、一般向けの遺跡紹介パンフレットとして『国道42号バイパス松阪多気発掘調査だより18～20』を刊行した。

(4) 速報展示

発掘調査成果をいち早く県民に公開し、埋蔵文化財保護への関心を高揚することを目的に出土遺物速報展示を行った。第１回目は平成18年２月28日から３月５日にかけて斎宮歴史博物館エントランスホールで「ちいさな土器の展覧会」と題しミニチュア土器20点をお雛様に見立て展示。第２回目は松阪市文化財センター平成18年度速報展示「こんなの出ました！」に第２次調査出土遺物を貸出し、地元市民に出土遺物の一部を紹介。また、平成19年５月19日から６月10日にかけて当センターが開催した速報展「発掘三重みえ」に第３次調査出土遺物の一部を展示した。

(5) 現場公開

国土交通省紀勢国道事務所、県教育委員会等の関係機関、学校教育関係者、研究者の要請による現場公開を随時実施するとともに、地元住民等一般の見学希望者への対応を随時行なった。

（木野本和之）

Ⅱ　村竹コノ遺跡の位置と歴史的環境

村竹コノ遺跡（1）の所在する松阪市上川町は、松阪市中心部南端を流れ伊勢湾に注ぐ金剛川右岸の下位段丘面に立地する。この地域は、古い地域区分では「神戸」地区と呼称された。承平年間成立とされる『和名類聚抄』の飯高郡神戸の記述に由来するものと考えられる。飯高郡神戸は６郷で構成され、上川はそのひとつに比定されている[1]。

この章では、遺跡の立地する松阪市上川町及びその周辺の地理的・歴史的環境について述べる。

1　地理的環境

松阪市は、南北に細長い三重県の中央部に位置する。平成16年１月１日に実施された１市４町（旧松阪市、一志郡嬉野町・三雲町、飯南郡飯南町・飯高町）の合併により、北は津市、南は多気郡多気町・大台町、東は多気郡明和町、西は奈良県に接する広大な市域を有する。

松阪市内には、伊勢湾に注ぐ複数の河川が存在する。これらの河川は、市域西部に位置する丘陵あるいは紀伊山地をその源流とし、大小の蛇行を繰り返しながら東流し伊勢湾に注ぐ。ほとんどの河川の河口は松ヶ島町から松名瀬町にかけての一帯に集中し、現在も海岸部が溺れ谷状に湾入する部分や、小規模な潟状の地形が見られる。これは、この一帯の海岸線付近を軸とする増傾斜運動が行われ、陸地部で隆起地形、海岸部で沈降地形が形成された結果であると考えられる[2]。

これらの河川の中でも、総延長約84kmの櫛田川は、宮川と共に南伊勢地方を代表する河川であり、村竹コノ遺跡周辺の地理的環境を理解する上で極めて重要な要素である。櫛田川は三重・奈良県境を画する台高山脈の高見山（標高1,248m）一帯の山塊に源を発し、上流部は中央構造線に沿いながら大小の蛇行を繰り返し、深い河谷を刻みながら東流する。中流部では河岸段丘を形成し、多気町付近から次第にそ

【弥生時代～古墳時代の主な遺跡】

1 村竹コノ遺跡　2 中ノ庄遺跡　3 金剛坂遺跡　4 小谷赤坂遺跡　5 筋違遺跡　6 川井町遺跡　7 鍋屋分遺跡　8 城垣内遺跡　9 田高田遺跡
10 湧早崎遺跡　11 阿形遺跡　12 草山遺跡　13 杉垣内遺跡　14 堀町遺跡　15 天王山遺跡　16 川原表B遺跡　17 廿チ遺跡　18 琵琶垣内遺跡
19 古曽通りB遺跡　20 丸野遺跡　21 四ツ野遺跡　22 木造赤坂遺跡　23 雲出島貫遺跡　24 貝蔵遺跡　25 下之庄東方遺跡　26 西肥留遺跡　27 粥鍋遺跡
28 内五曲遺跡　29 松坂城跡　30 蛸遺跡　31 御殿山遺跡　32 上出遺跡　33 分れ谷遺跡　34 鴻ノ木遺跡　35 寺垣内遺跡　36 金剛坂里中遺跡
37 織糸遺跡　38 城堀遺跡　39 コドノB遺跡　40 神前山古墳群墳麓遺跡　41 古里遺跡・中垣内遺跡　42 北野遺跡

【主な墳墓・古墳】

A 瀬干遺跡墳墓群　B 久保古墳　C 高田2号墳　D 坊山1号墳　E 茶臼山古墳　F 深長古墳　G 宝塚1号墳　H 宝塚2号墳　I 八重田古墳群
J 天王山古墳群　K 佐久米古墳群　L 常光坊谷古墳群　M 前田町屋墳墓群

【古代寺院】

a 大雷寺廃寺　b 貴田寺廃寺

第２図　村竹コノ遺跡とその周辺の遺跡（1：100,000）　（国土地理院『松阪』、『二本木』 1：50,000から）

の流れを北に転じ中央構造線から離れる。そして、JR参宮線と交差する付近で北に大きく屈曲するあたりから下流に広大な沖積平野を形成し伊勢湾に注ぐ。この屈曲部で分流する祓川が、かつての櫛田川本流と考えられている。祓川は大規模な河川改修が行われておらず、現在も自然の状態を色濃く残す貴重な河川である。圃場整備事業実施以前の祓川流域の地形図・航空写真には、過去に繰り返された乱流の痕跡が明瞭に確認できる。また祓川は、古代には飯野・多気２郡を画し、斎宮に入る斎王が禊ぎを行うなど、歴史的に重要な意義を持つ。

現在、松阪市東部から明和町にかけての一帯には、櫛田川と祓川によって形成された広大な沖積平野が広がっている。この沖積平野は、「櫛田川低地」と呼称されるが、これまでの地質調査結果等から櫛田川右岸から祓川にかけては両河川の沖積作用によって形成された氾濫平野、櫛田川左岸から金剛川流域にかけては伊勢湾の沿岸流によって形成された砂堆・後背湿地で構成される海岸平野に大別される。この海岸平野には『雅實公記』[3]等の文献記述、現在の市街地縁辺部に残る地名、一帯の遺跡分布状況等から、比較的新しい段階まで潟湖が発達していたと考えられる[4]。このような状況から、村竹コノ遺跡の西方の金剛川下流域も、現在の松阪市大津町付近まで潟湖あるいは後背湿地が入り込んでいた可能性もある。

櫛田川低地には、南方にひろがる丘陵地帯から北方に派生する半島状の地形が何箇所か認められ、村竹コノ遺跡もこれの先端部付近に位置している。遺跡の大部分は、かつて工場用地として盛土されているため旧状を留めない[5]。しかし、この盛土が西方に位置する金剛川に向かってその厚みを増すこと、地形図に表示された周辺水田面の標高値、米軍機による遺跡周辺の垂直写真からも旧地形が西方に向かって緩やかに傾斜していたことがわかる。また、東側には小規模な谷地形の痕跡が認められる。このことからも、遺跡は地形的に安定した丘陵が櫛田川低地に接する部分に立地する遺跡であるといえる。

２　歴史的環境

本項では、村竹コノ遺跡の最盛期である弥生時代及びそれ以降の周辺の状況について概観する。

弥生時代　櫛田川低地を含む広大な沖積平野及びその背後に広がる丘陵地帯には、弥生時代の遺跡が数多く存在する。村竹コノ遺跡の北西約８㎞の砂堆上に立地する中ノ庄遺跡[6]（2）、南東約５㎞の櫛田川（祓川）右岸段丘上に立地する金剛坂遺跡[7]（3）では、遠賀川系土器の良好な資料が確認されている。この２遺跡の中間に位置する村竹コノ遺跡でも、今回の調査により遠賀川系土器が確認された。また、旧嬉野町の小谷赤坂遺跡[8]（4）では、住居跡・土坑と前期新段階の土器、筋違遺跡[9]（5）では前期の水田・畑と考えられる遺構が確認されるなど、この一帯が県内でも早い時期に弥生文化が波及した地域であることを示しているものの、旧松阪市域の前期遺跡については、沖積地に張り出す台地・丘陵上に立地する小規模なものが少数知られているだけで、その実態は不明な点が多い[10]。

中期についても、確認されている遺跡はそれほど多くない。中小河川流域でいくつかの遺跡が確認されている。中村川流域では下之庄東方遺跡（25）、阪内川・三渡川流域では川井町遺跡（6）・鍋屋分遺跡（7）・城垣内遺跡（8）・田高田遺跡（9）など沖積地の微高地・河岸段丘低位面に営まれるものがあげられる。金剛川流域では、発掘調査で銅鐸形土製品が確認された湧早崎遺跡[11]（10）が知られるのみで、実態は不明な点が多い。

後期に入ると遺跡数は一気に増加し、主要河川流域で周囲に環濠を巡らす集落の存在が確認されるようになる。中村川流域の小谷赤坂遺跡、阪内川流域の阿形遺跡[12]（11）、金剛川流域の草山遺跡[13]（12）・杉垣内遺跡[14]（13）・村竹コノ遺跡・堀町遺跡[15]（14）、櫛田川流域の天王山遺跡[16]（15）では、環濠の一部が調査されている。また、遺跡立地も沖積地に立地するものや沖積地を見下ろす丘陵上に立地するものなど広がりが見られるようになる[17]。特に弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての金剛川流域では、草山遺跡・村竹コノ遺跡のふたつの大規模集落がほぼ同時期に営まれる状況があり、その関係が注目される。

最後に櫛田川（祓川）右岸域の状況について述べる。この一帯には、前述の金剛坂遺跡のほか国史跡斎宮跡範囲内に含まれる古里遺跡・中垣内遺跡[18]

(41) で、中期の竪穴住居・方形周溝墓等の遺構が確認されている。また、やや上流の段丘縁辺部の金剛坂里中遺跡[19] (36) ・織糸遺跡[20] (37) ・城堀遺跡[21] (38) ・コドノB遺跡[22] (39)、祓川自然堤防上の寺垣内遺跡[23] (35) では弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居・方形周溝墓等の遺構が確認されており、この一帯に弥生時代を通じ大規模な遺跡群が形成されていたものと考えられる。

古墳時代　丘陵部を中心に多数の古墳が造営され、堀坂川・阪内川・金剛川・櫛田川の流域に集中する傾向が見られる。

出現期のものとしては、櫛田川下流域左岸に立地する瀬干遺跡[24] (A) で確認された「前方後方型墳丘墓」と呼称される墳墓群がある。

前期は、旧嬉野町域で複数の前方後方墳が存在すること、中村川右岸の沖積地で当時の大規模土木工事に係る遺構群が確認されることなど、この時期の旧嬉野町域に有力集団が存在したことを示す遺跡が多数存在する。

一方、旧松阪市域においては、4世紀後半頃から金剛川流域で久保古墳 (B) ・高田2号墳 (C) ・坊山1号墳 (D) ・茶臼山古墳 (E) などが築造される[25]。そのうち、久保古墳・茶臼山古墳は直径50m以上の規模をもつ大型円墳である[26]。また、村竹コノ遺跡の南西約1.5kmに位置する高田2号墳からは、この地域最古段階の円筒埴輪が出土している。さらに、堀坂川流域の深長古墳[27] (F) では底部穿孔の二重口縁壺形土器多数が墳丘の周囲に並べられた状態で確認されている。

中期に入ると、5世紀前半に阪内川と金剛川の間の丘陵上に伊勢湾西岸域最大規模の前方後円墳である宝塚1号墳 (G)、隣接する帆立貝式前方後円墳である宝塚2号墳 (H) が相次いで築造され[28]、5世紀後半には、堀坂川流域の八重田[29] (I)、櫛田川流域の天王山[30] (J)、金剛川下流域の沖積地に佐久米[31] (K) などの古墳群が築造される。佐久米古墳群の佐久米大塚山古墳からは金銅製冑が出土しており注目される。このことは、前期とは異なる有力集団が旧松阪市域に登場したことを窺わせる。

後期には、沖積地を見下ろす丘陵部に群集墳が築造されるようになる。阪内川流域の丘陵地帯では開発に伴い常光坊谷古墳群[32] (L) など複数の古墳群の調査が行なわれ、形象埴輪など貴重な遺物が多数確認されている。また、前述の天王山古墳群でも引き続き古墳が築造され、蛇行剣など貴重な遺物が確認されている。

その他、旧松阪市域における古墳時代の集落遺跡等の状況も不明な点が多い。弥生時代から継続するものとして村竹コノ遺跡・草山遺跡などがあげられるが、両遺跡共に前期中頃までには廃絶する。それ以外には、廿チ遺跡[33] (17) ・琵琶垣内遺跡[34] (18) ・古轡通りB遺跡[35] (19) などで当該時期の遺構が確認されている程度である。

古代　神宮の存在が顕著となり、律令期には村竹コノ遺跡の東方約5kmに斎宮が成立し、神宮・斎宮と都とを結ぶ官道が整備された。現在、村竹コノ遺跡南方の丘陵裾を東西にはしる旧参宮街道が当時のルートをほぼ踏襲していると考えられている[36]。近年このルート沿いで実施された発掘調査でも、丸野遺跡[37] (20) ・天王山遺跡・廿チ遺跡・草山遺跡などで当該時期の掘立柱建物等の遺構が確認されているほか、大雷寺廃寺 (a) ・貴田寺廃寺 (b) など古代寺院の存在も比定されるなど[38]、この一帯は神宮・斎宮成立後の南伊勢地方の状況を研究する上で重要な遺跡が集中するエリアである。

なお、村竹コノ遺跡周辺一帯は条里制に伴う地割が近年まで良好な状態で残されてきた。この地割の成立時期を確定する明確な根拠はないものの、前述した官道のルートが飯野郡条里方向に沿うことから、古代条里制に伴う地割の可能性が高い[39]。

中世・近世　中世になると、村竹コノ遺跡では古墳時代以降途絶していた集落が再び営まれはじめる。しかし、近世には集落は南方の参宮街道沿いに移動し、それ以降は水田等の耕地として利用され今日に至ったものと考えられる。　(木野本和之)

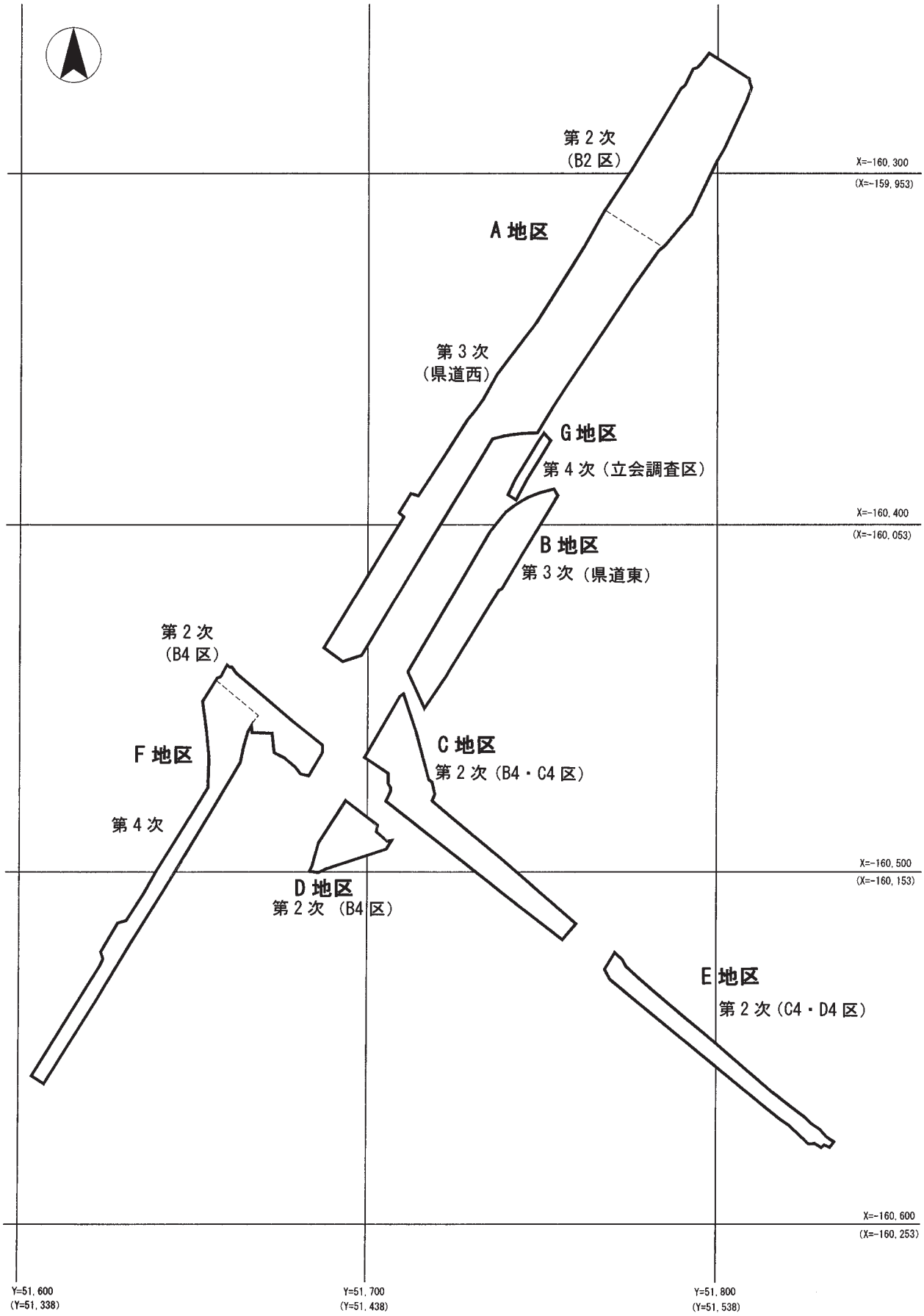
[註]

(1) 西山克・久松倫生・下村登良雄「松阪市」『日本歴史地名大系24　三重の地名』平凡社　1983

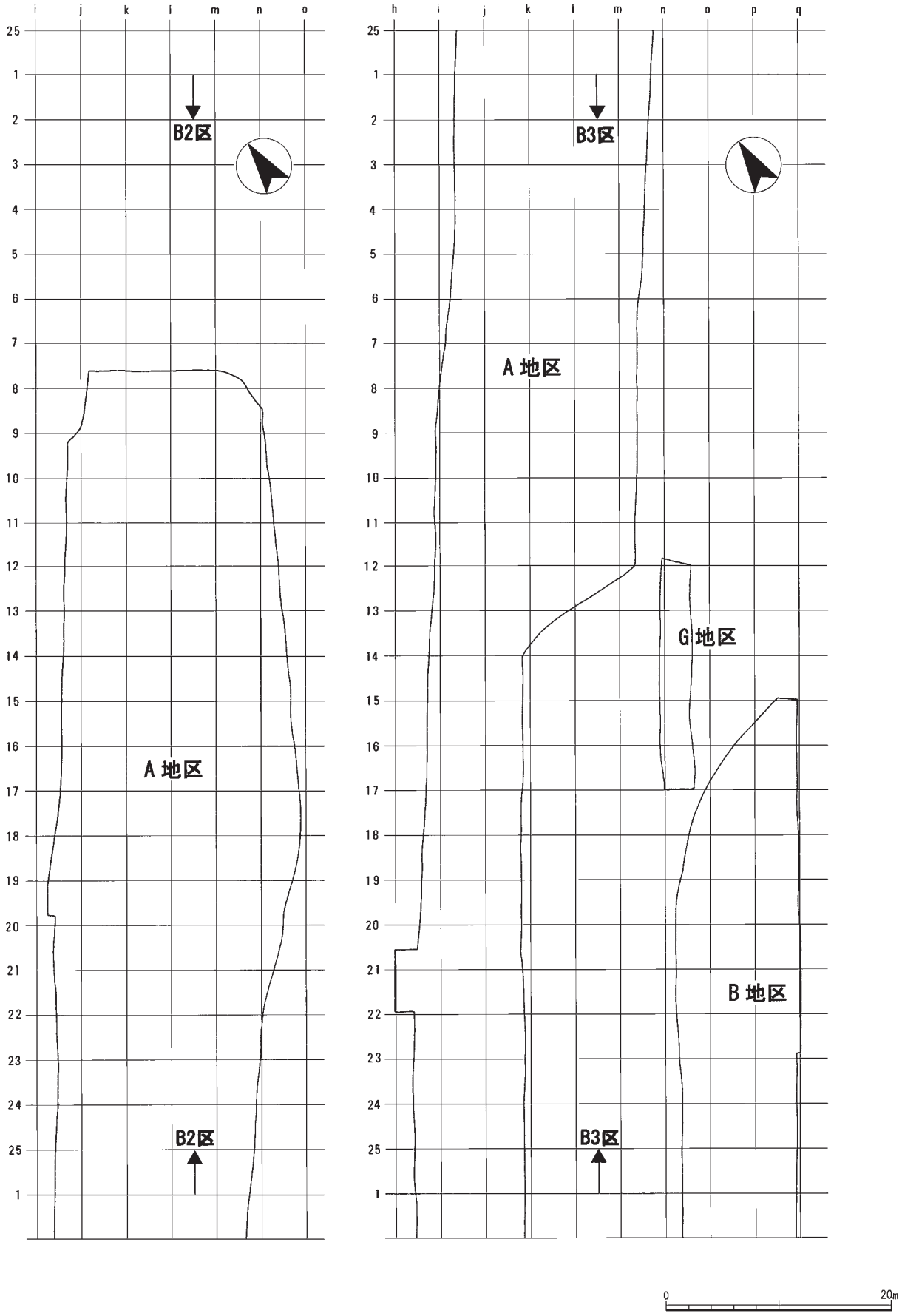
(2) 井関弘太郎「2　櫛田川沖積平野」『河谷の歴史地理』蘭書房　1958

(3) 田阪 仁氏のご教示による。「雅實公記」『新訂増補 史籍集覧 第三刷 公家部日記編』臨川書店　1967
(4) 穂積裕昌「伊勢湾西岸における古墳時代港津の成立」『考古学に学ぶⅡ』同志社大学考古学氏リーズⅧ　2003、石黒立人「伊勢湾周辺地域における弥生時代の平地地形について」『研究紀要第７号』愛知県埋蔵文化財センター　2006
(5) 本遺跡は不時発見された「新発見」の遺跡である。従って、かつての工場用地造成の際に発掘調査等は実施されていない。調査時に得た知見では、盛土は厚く、建物基礎以外には工事の影響は及んでいないと考えられる。
(6) 三重県教育委員会『中ノ庄遺跡発掘調査報告』1972
(7) 明和町教育委員会『金剛坂遺跡発掘調査報告』1971、三重県教育委員会「金剛坂遺跡」『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1985、三重県埋蔵文化財センター『金剛坂遺跡（第４次）・辰ノ口古墳群（第２次）発掘調査報告』1999、三重県埋蔵文化財センター『金剛坂遺跡（第５次）・辰ノ口古墳群（第３次）発掘調査報告』2001
(8) 三重県埋蔵文化財センター『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅶ』2005
(9) 三重県埋蔵文化財センター「Ⅲ 筋違遺跡（第３次）」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報18』2007
(10) 松阪市『松阪市史 第２巻 史料編 考古』1978
(11) 松阪市教育委員会『湧早崎遺跡発掘調査報告書』1992
(12) 三重県埋蔵文化財センター「Ⅳ 松阪市阿形町 阿形遺跡」『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』1992
(13) 松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報№１～№10（増刷合本）―三重県松阪市下村町・久保町―』2006、松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査報告書―三重県松阪市下村町・久保町―』1986
(14) 註（10）文献参照
(15) 三重県埋蔵文化財センター『堀町遺跡』2003
(16) 三重県埋蔵文化財センター『天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告』2006
(17) 小谷赤坂遺跡や川原表Ｂ遺跡など。川原表Ｂ遺跡については、松阪市教育委員会「Ｂ 川原表Ｂ遺跡」『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』1990
(18) 三重県教育委員会『古里遺跡発掘調査報告―Ｃ地区―』1990、斎宮歴史博物館・明和町教育委員会『史跡 斎宮跡 平成２年現状変更緊急発掘調査報告書』1991などの文献の他、斎宮跡調査事務所・斎宮歴史博物館発行の発掘調査概報を参照されたい。
(19) 三重県埋蔵文化財センター『金剛坂里中遺跡発掘調査報告』2004
(20) 三重県埋蔵文化財センター『織糸遺跡―明和町金剛坂を中心とする方形周溝墓群の調査―』2006
(21) 三重県埋蔵文化財センター『城堀遺跡発掘調査報告』2003
(22) 三重県埋蔵文化財センター『コドノＡ遺跡・コドノＢ遺跡（第１次）発掘調査報告』1998、三重県埋蔵文化財センター『コドノＢ遺跡（第２次・第３次）発掘調査報告』2000
(23) 明和町「第２章第２節２寺垣内遺跡」『明和町史 史料編 第１巻 自然・考古』2006
(24) 三重県埋蔵文化財センター『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・大蓮寺遺跡・柳辻遺跡・北ノ垣内遺跡』1996、三重県埋蔵文化財センター『瀬干遺跡（第２次）発掘調査報告』2000
(25) 註（10）文献参照
(26) 註（10）文献参照。久保古墳は、直径52.5m・高さ６mの規模を有する松阪市内最大級の円墳である。また、茶臼山古墳は消滅墳であるが、明治初期作成の地籍図から直径約55mの円墳と推定される。
(27) 三重県教育委員会「Ⅴ 深長古墳」『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』1989
(28) 松阪市教育委員会『史跡 宝塚古墳 保存整備に伴う宝塚１号墳・宝塚２号墳調査報告』2005
(29) 註（10）文献参照
(30) 註（16）文献参照
(31) 註（10）文献参照
(32) 松阪市教育委員会「Ｅ　常光坊谷古墳群」『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』1990
(33) 三重県埋蔵文化財センター『廿チ遺跡（第２次）発掘調査報告』2008
(34) 三重県埋蔵文化財センター『琵琶垣内遺跡（第２次）発掘調査報告』1999、三重県埋蔵文化財センター『琵琶垣内遺跡（第１・４次）発掘調査報告』2006、三重県埋蔵文化財センター『琵琶垣内遺跡（第３次）発掘調査報告』2007
(35) 三重県埋蔵文化財センター『古轡通りＢ遺跡・古轡通り古墳群発掘調査報告』2000
(36) 足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」『探訪 古代の道 第１巻』法蔵館　1988
(37) 三重県埋蔵文化財センター『丸野・中谷遺跡発掘調査報告』2003
(38) 註（10）文献参照
(39) 弥永貞三・谷岡武雄編『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版　1979

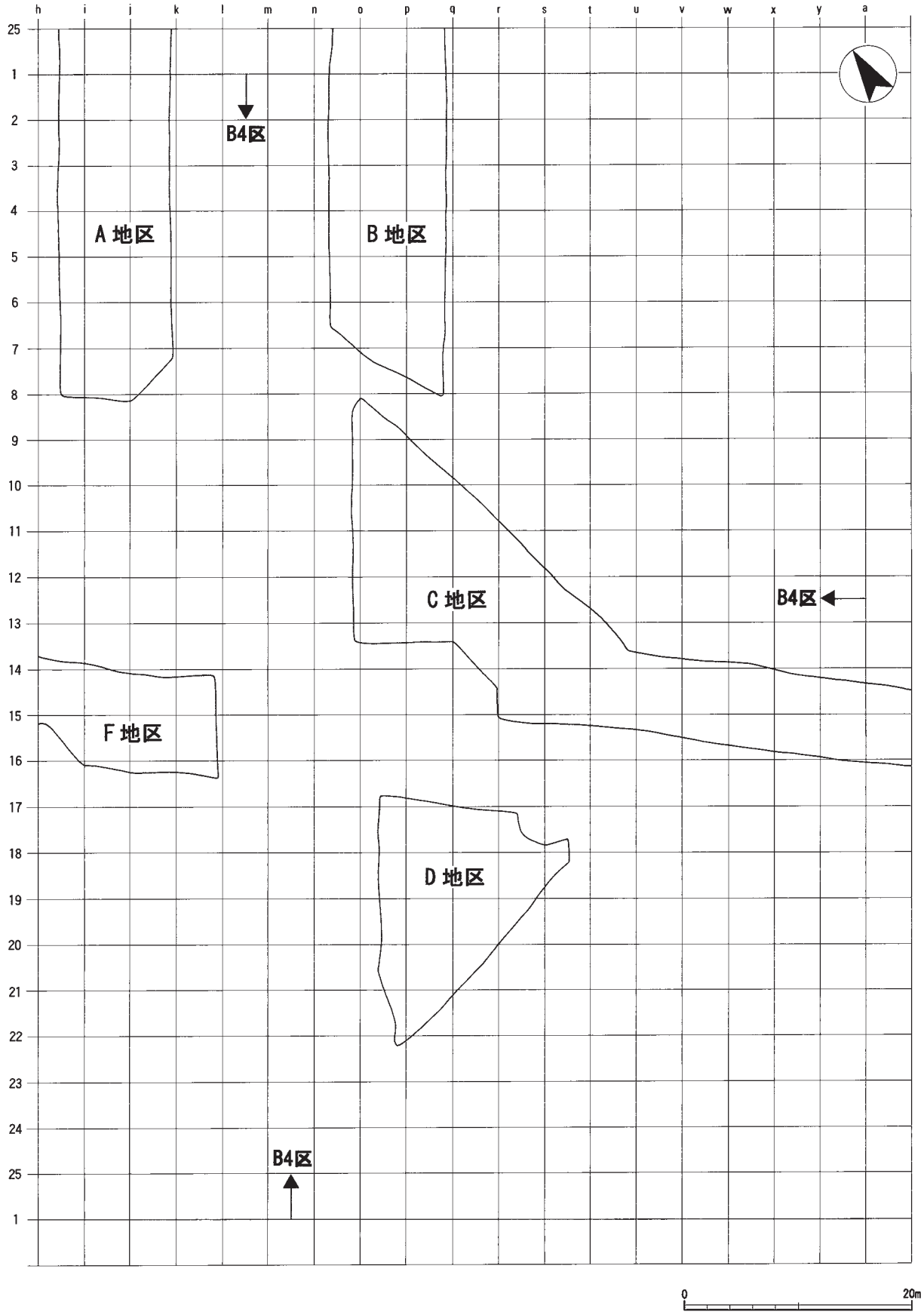
第３図　遺跡周辺地形図（1：5,000）



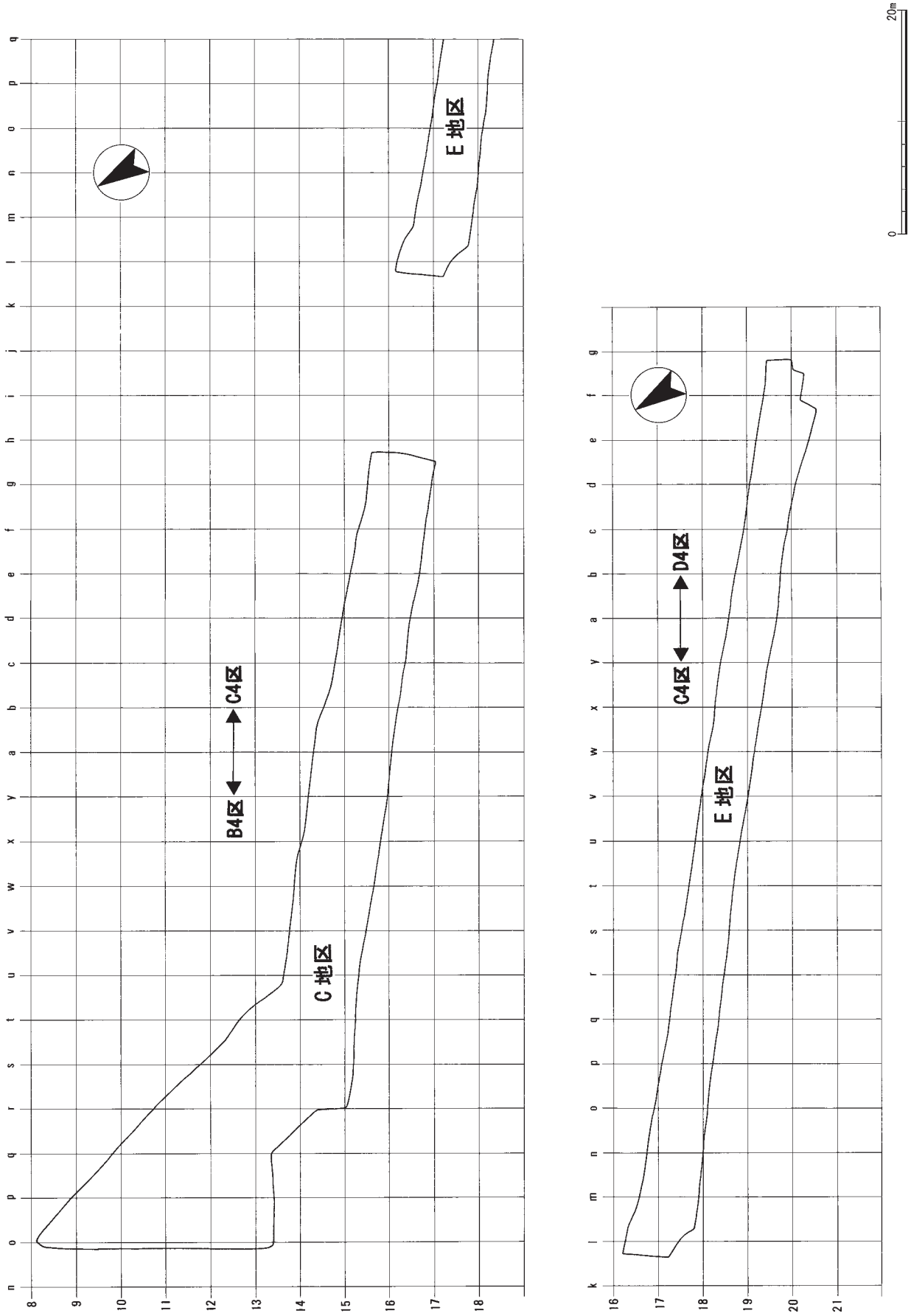
第４図　調査区配置図（1：1,600）　※小さく表記した地区名は調査時のもの



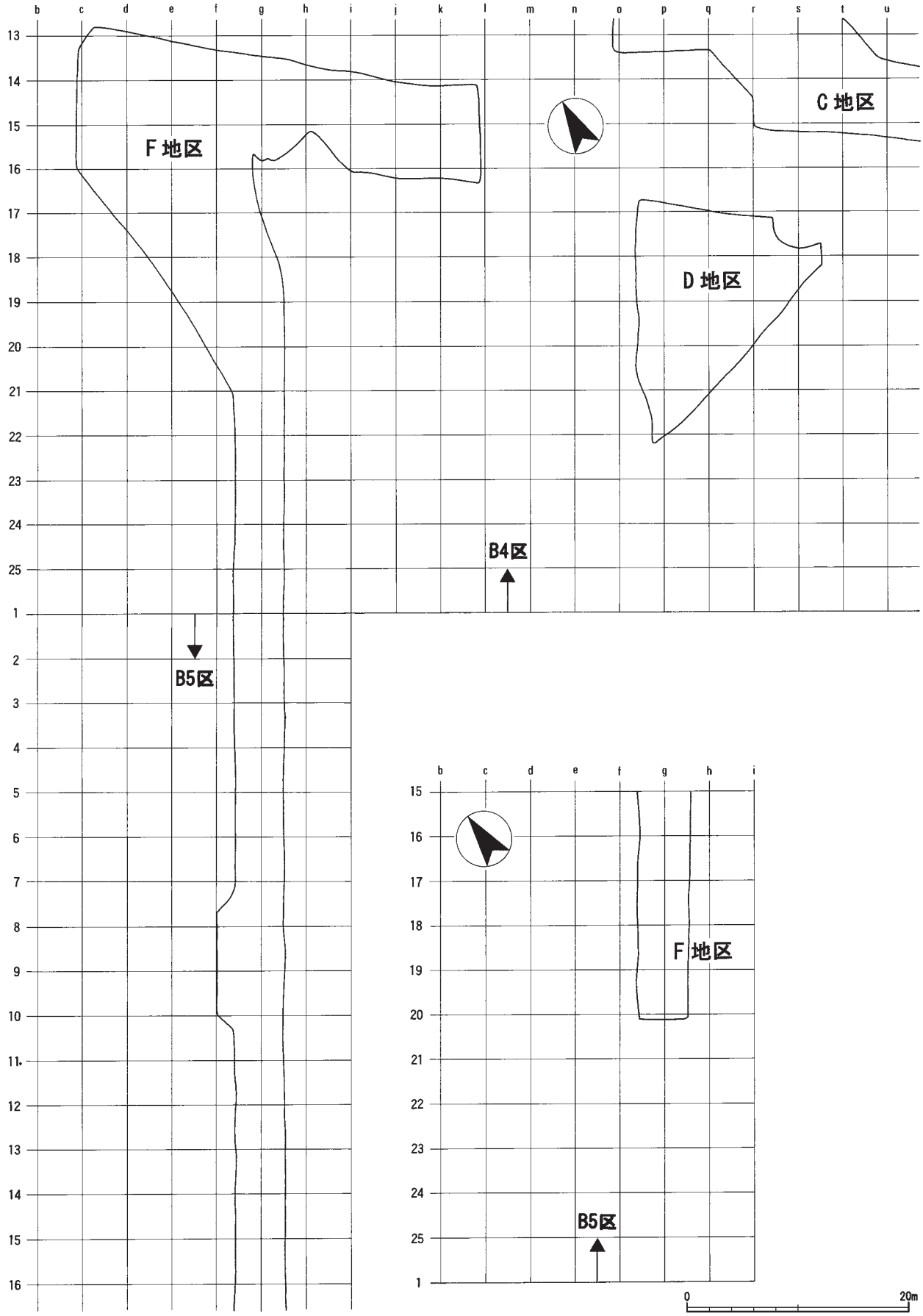
第５図　大地区・小地区設定図（1）（1:500）



第６図　大地区・小地区設定図（2）（1：500）



第７図　大地区・小地区設定図（3）（1:500）



第８図　大地区・小地区設定図（4）（1：500）

Ⅲ　遺　構

Ａ～Ｇ地区の順に記述する。ここでは主な遺構について簡潔に記述するにとどめたため、記述の無い遺構も含め、位置や計測データ等については遺構一覧を参照されたい。また、複数の調査区に跨って検出した環濠については基本的には初出の調査区で記述する。

１　Ａ地区

第２次調査の「Ｂ２区」と第３次調査の「県道西」に相当する。

(1) 基本層序

第１層が隣接する工場敷地および道路敷設造成時の盛土、第２層が黒褐色粘質土（旧耕作土）、第３層が黄褐色粘質土（基盤層）である。遺構検出は第３層上面でおこなった。

(2) 検出遺構

① 弥生時代前期

この時期の遺構には10基の土坑がある。これらの土坑は内部に多数の小穴をもつものが多い。

土坑

ＳＫ470（第47図）

平面形は不定形である。底のほぼ中央で甕（１）と壺（２）が出土している。

ＳＫ483（第51図）

平面形は略楕円形である。床面から壁面へは緩く立ち上がり、多数の小穴をもつ。

ＳＫ503（第44図）

平面形は方形である。床面から壁面にかけて多数の小穴をもつ。

ＳＫ505・ＳＫ507（第51図）

精査の結果、平面形が長楕円形の一連の遺構と捉えた。床面から壁面にかけて多数の小穴をもつ。

ＳＫ522（第50図）

平面形は不定形である。遺構内部に多数の小穴をもつことから同時期のものと考えられる。

ＳＫ626（第52図）

平面形は楕円形である。遺構内部に多数の小穴をもつことから当該時期のものと考えられる。

ＳＫ631（第52図）

平面形は方形である。壺（８）が出土した。内部に小穴をもたないことから、上記の前期土坑とは性格を異にする。

② 弥生時代後期から古墳時代初頭

この時期の遺構には掘立柱建物２棟、竪穴住居18棟、環濠３条、溝51条、井戸３基、土坑43基、方形周溝墓４基、木棺墓６基、落ち込み・不明遺構17基がある。

掘立柱建物

Ａ地区中央部と南端部で小穴が集中しており、いくつかの掘立柱建物や柱列などが想定できる。他地区を含めた想定案を第69～75図に示し、別項にて後述する。ここでは南端部で確認された２棟に限定して記述する。

ＳＢ647（第28図）

独立棟持柱をもつ南北棟の建物である。桁行は６間で約5.3m、梁行は約3.8mである。梁から棟持柱までの距離は南妻側で約２ｍを測る。確認された柱痕跡から直径0.3mの柱と推定される。

ＳＢ648（第28図）

独立棟持柱をもつ南北棟の建物である。南側が調査区外にあるため規模は不明であるが、桁行は４間以上で4.5m以上、梁行は約3.5mである。梁から棟持柱までの距離は北妻側で約1.5mを測る。

竪穴住居

ＳＨ406（第31図）

平面形は隅丸方形である。南東側が調査区外で不明である。ＳＤ301（ＳＤ282・ＳＤ741）の東側（外側）に位置する。

ＳＨ424（第31図）

平面形は隅丸方形である。主柱穴を３箇所確認した。その配置からは、４箇所並ぶものと思われる。

ＳＨ436（第31図）

ＳＨ424の南側に位置し、方向を一にする。平面形は隅丸方形である。主柱穴のうち、北側のものには柱痕跡が認められた。中央西寄りには地床炉と思われる焼土が確認された。

ＳＨ452（第31図）

大部分は調査区外にあるが、平面形は隅丸方形と思われる。南隅の主柱穴では柱根が残存していた。また、南東隅では貯蔵穴が確認された。

ＳＨ467（第31図）

平面形は隅丸方形である。床面中央には炉石を伴う炉跡が確認されている。南東辺では貯蔵穴、東隅以外の主柱穴が確認された。また、貼床が良好に残存していた。

ＳＨ473（第32図）

平面形は隅丸方形である。中央北寄りには炉跡と思われる焼土が確認された。

ＳＨ478（第31図）

平面形は隅丸方形である。南西に隣接するＳＨ473と方向が揃う。

ＳＨ516・ＳＨ517（第32図）

平面形はともに隅丸方形と思われる。方向を若干違えて重なっており、一回り小さい規模のＳＨ517が先行する遺構である。炉跡と思われる焼土が確認されたが、いずれに伴うものか判断できない。

ＳＨ518（第32図）

平面形は隅丸方形である。ＳＨ473やＳＨ478と方向が揃う。東隅の主柱穴では柱根が残存し、その下からミニチュアの台付甕が出土した。北側には炉跡と思われる焼土が確認された。

ＳＨ584（第34図）

平面形は隅丸方形と思われる。大部分が調査区外にあるが、主柱穴１箇所が確認された。

ＳＨ594（第34図）

平面形は隅丸方形である。主柱穴は４箇所確認された。

ＳＨ610（第34図）

平面形は隅丸方形である。中央では炉跡が、南辺中央では貯蔵穴が確認された。

ＳＨ619（第34図）

平面形は隅丸方形である。ＳＨ610の北側に位置する。

ＳＨ621（第34図）

平面形は隅丸方形である。ＳＨ619の内側に確認された。ＳＨ619に先行する遺構で、方向は若干異なる。南辺中央で貯蔵穴が確認された。

ＳＨ622（第32図）

平面形は隅丸方形で、比較的規模が大きい。ＳＨ619の東に位置し、方向をおおむね揃える。南西辺中央で貯蔵穴が、床面中央では炉跡が確認された。

ＳＨ640（第32図）

平面形は隅丸方形と思われる。大部分が調査区外にあるが、南東辺中央で貯蔵穴が確認された。

環濠

ＳＤ265（第63図）

調査区をほぼ東西に横断する。断面は凹レンズ状である。出土遺物は多様で、土器には他地域からの搬入品もみられる。

ＳＤ282（ＳＤ301・ＳＤ741）（第60～62図、第67図）

Ａ地区ではＳＤ282として検出した。ほぼ南北に伸び、Ｂ地区、Ｃ地区でも検出することができた。また、Ｆ地区でＳＤ741として検出した環濠につながると判断される。実際に検出した延長は断続的に合計130ｍになり、未検出部分をあわせると少なくとも延長300ｍに及ぶと想定される。今回の発掘調査で確認された環濠のうちでは検出延長は最も長い。断面は基本的に逆台形であるが、Ｃ地区では緩やかなＵ字形になる。埋土の下層部には砂層の堆積がみられ、一時期には流水のあったことが想定される。また、堆積状況をみると、地山に近い黄褐色土が西側から流れ込む状況がみられることから、環濠の西側に土塁の存在を推定することができる。

ＳＤ401（第65図）

調査区をほぼ東西に横断し、ＳＤ265と並行する。断面は逆台形である。ＳＤ282（ＳＤ301・ＳＤ741）を切る環濠である。

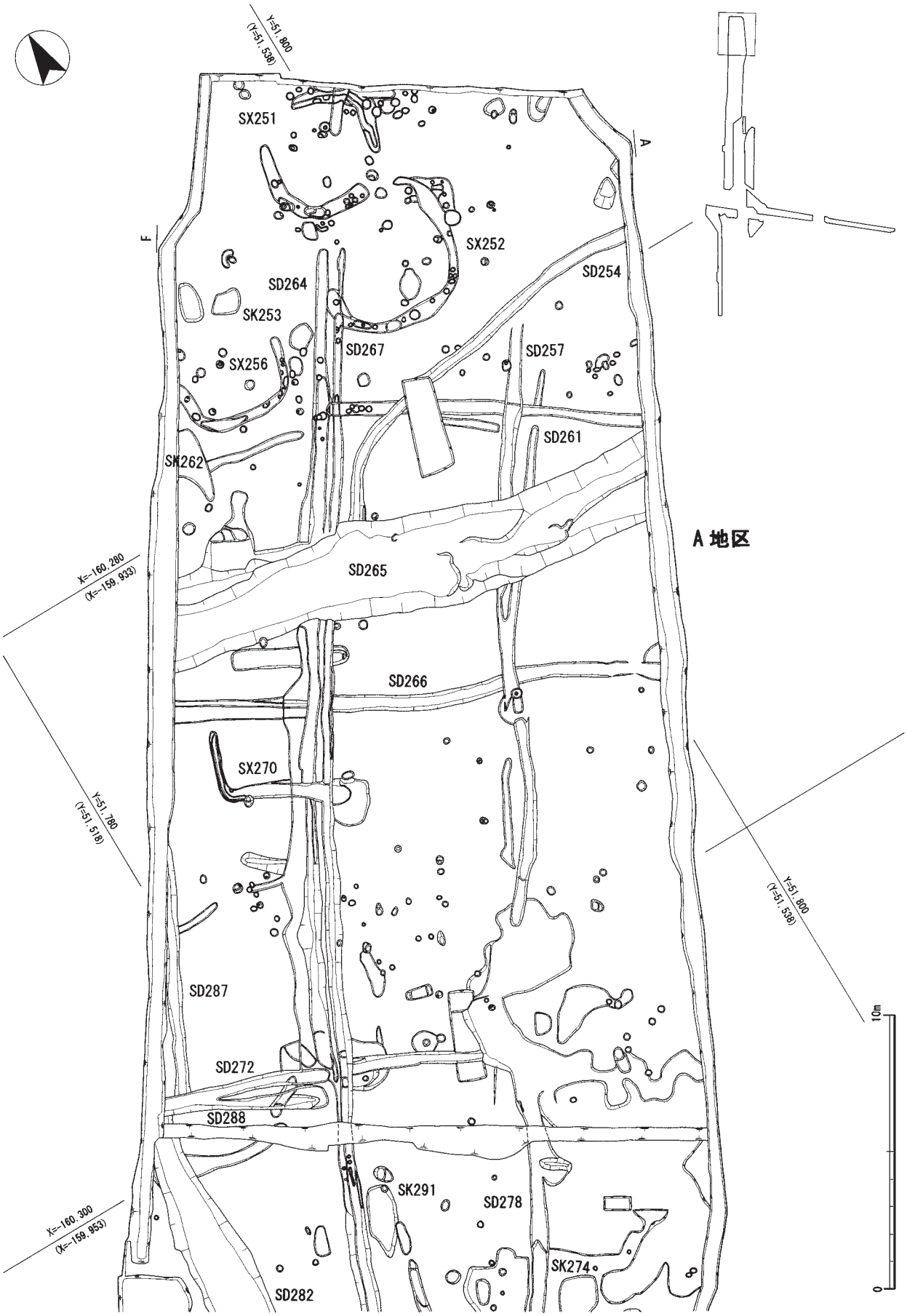
井戸

ＳＥ496（第39図）

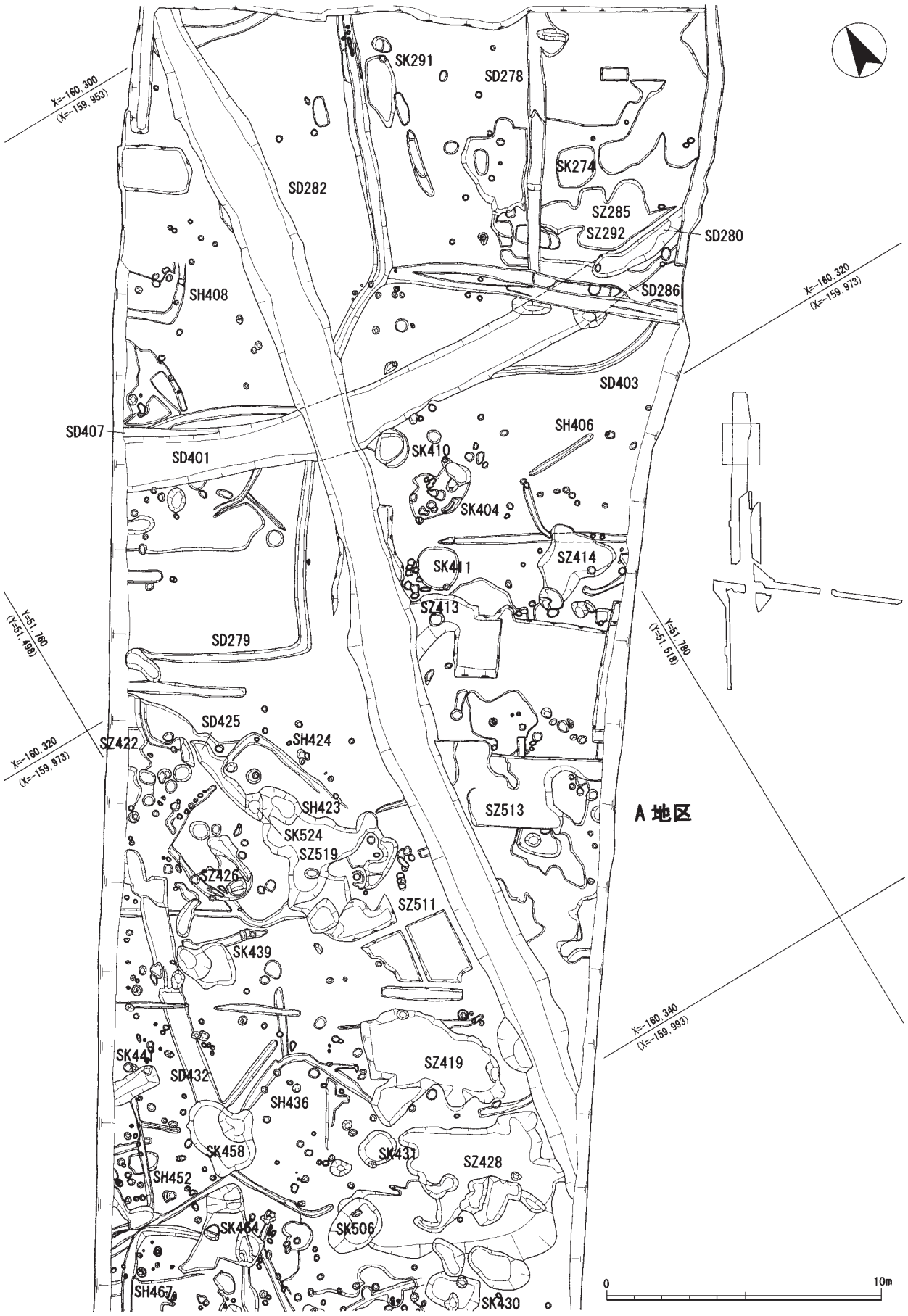
平面形は楕円形である。最下層は硬く締まった砂層で湧水があった。

ＳＥ615（第39図）

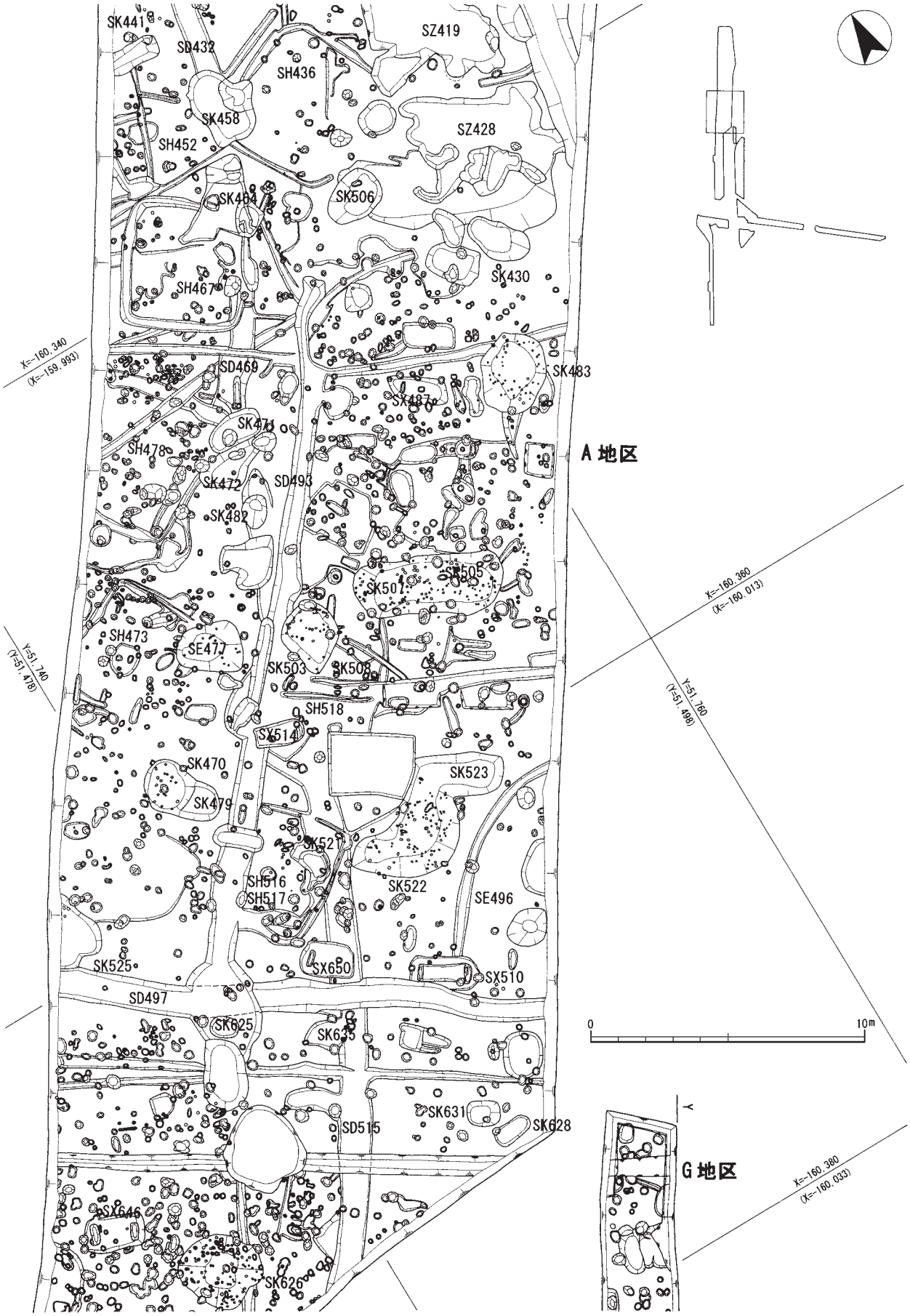
一部が調査区外へ出るものの、平面形はおおよそ楕円形と思われる。井戸の上半はすり鉢状に開き、下半はほぼ垂直に掘削されている。下半の一部は崩落によってえぐられた状態であった。検出面から1.2ｍほど掘削した部分で完形の土器がまとまって出土し、その下層には建築部材、木製品、植物遺体が多量に出土した。建築部材は焦痕のあるものが多く、



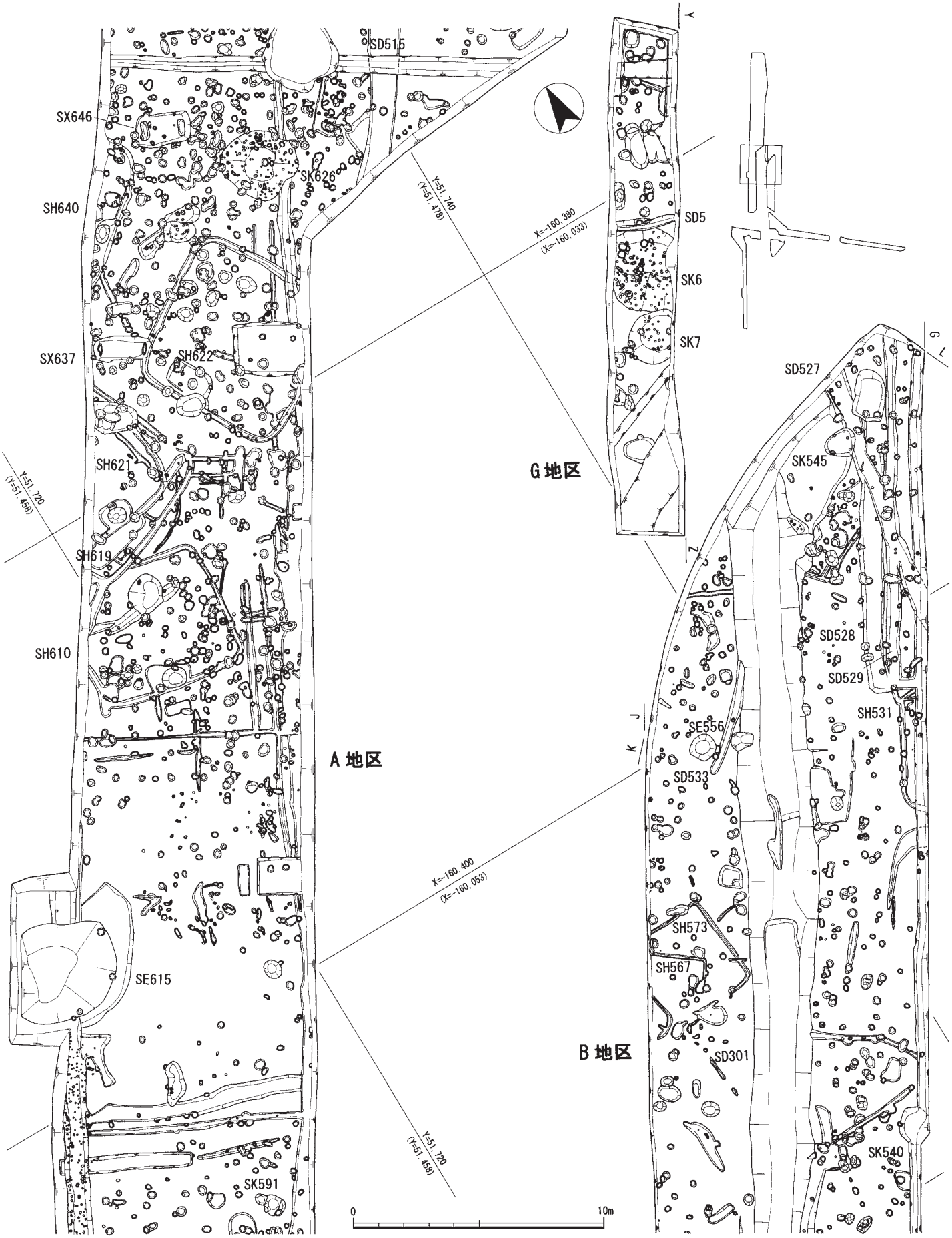
第９図　調査区平面図（1）（1：200）



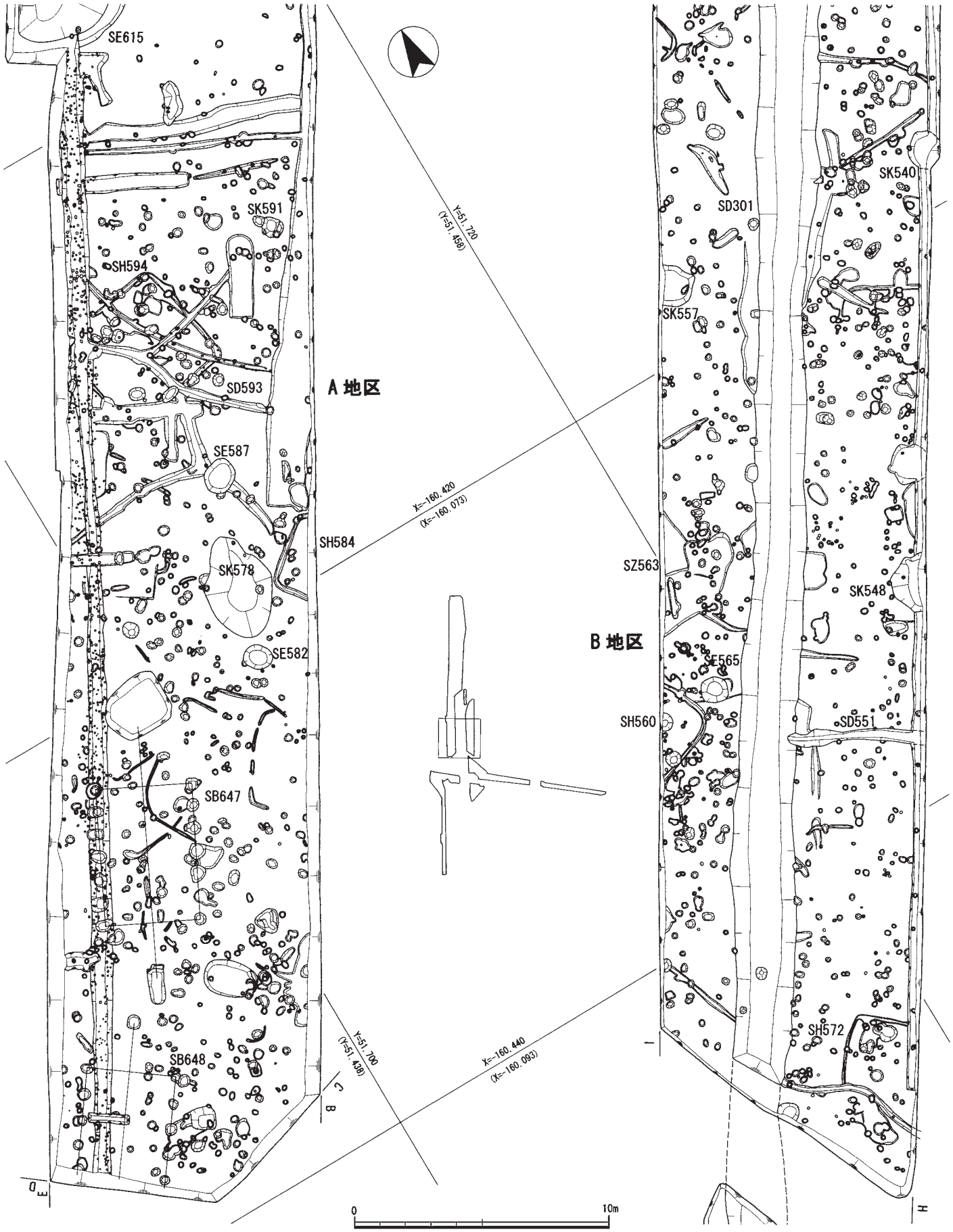
第10図　調査区平面図（2）（1：200）



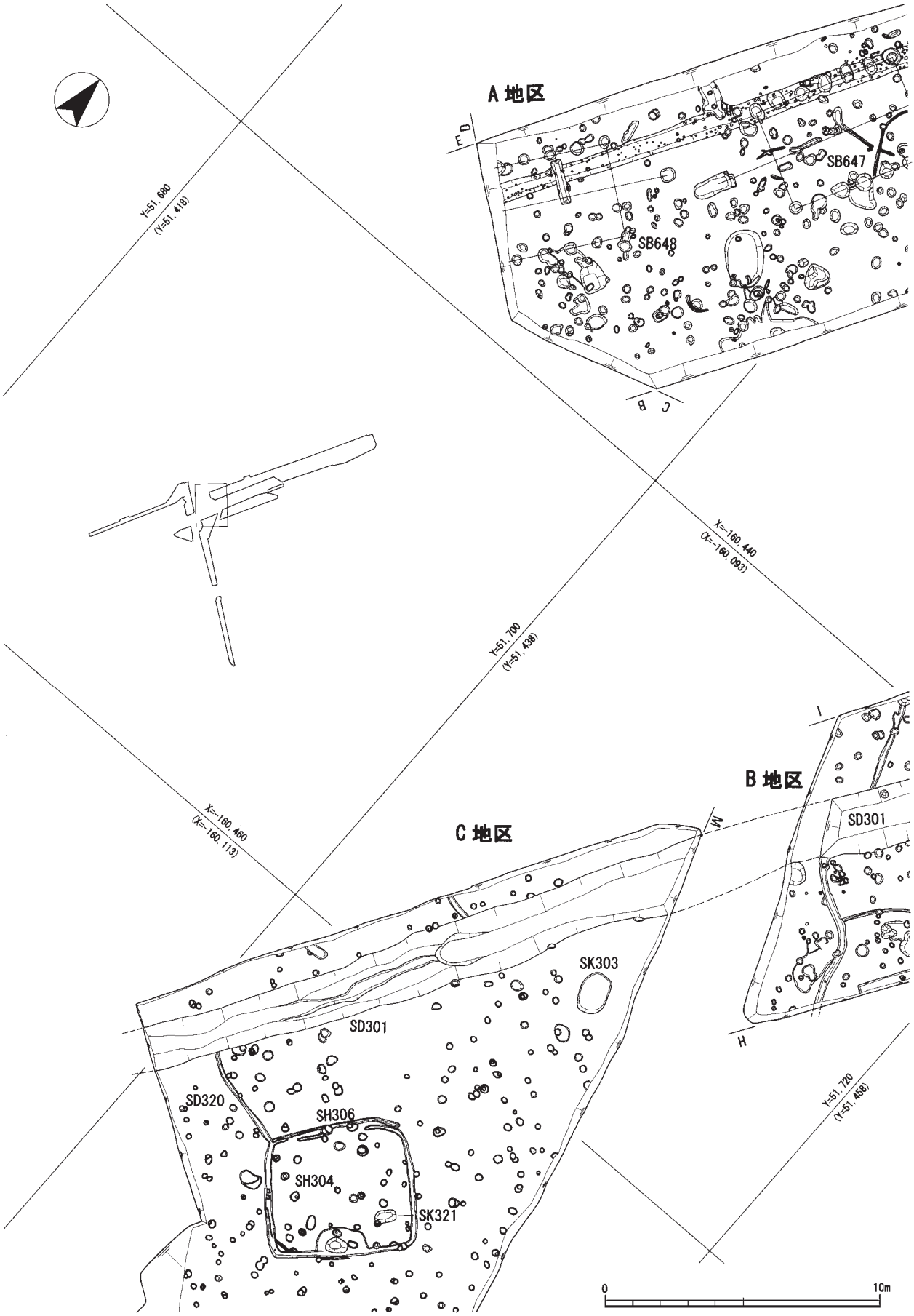
第11図　調査区平面図（3）（1：200）



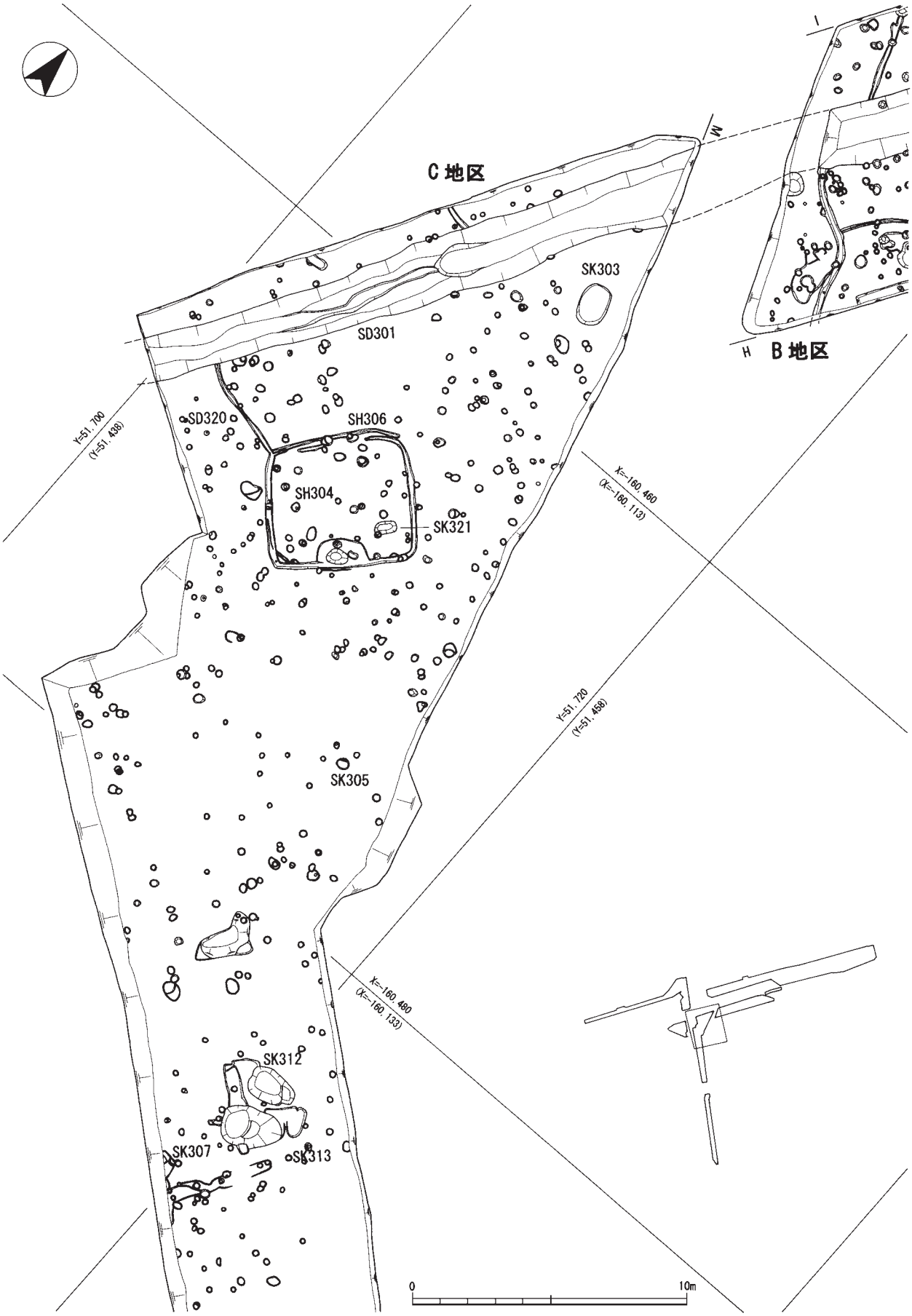
第12図　調査区平面図（4）（1：200）



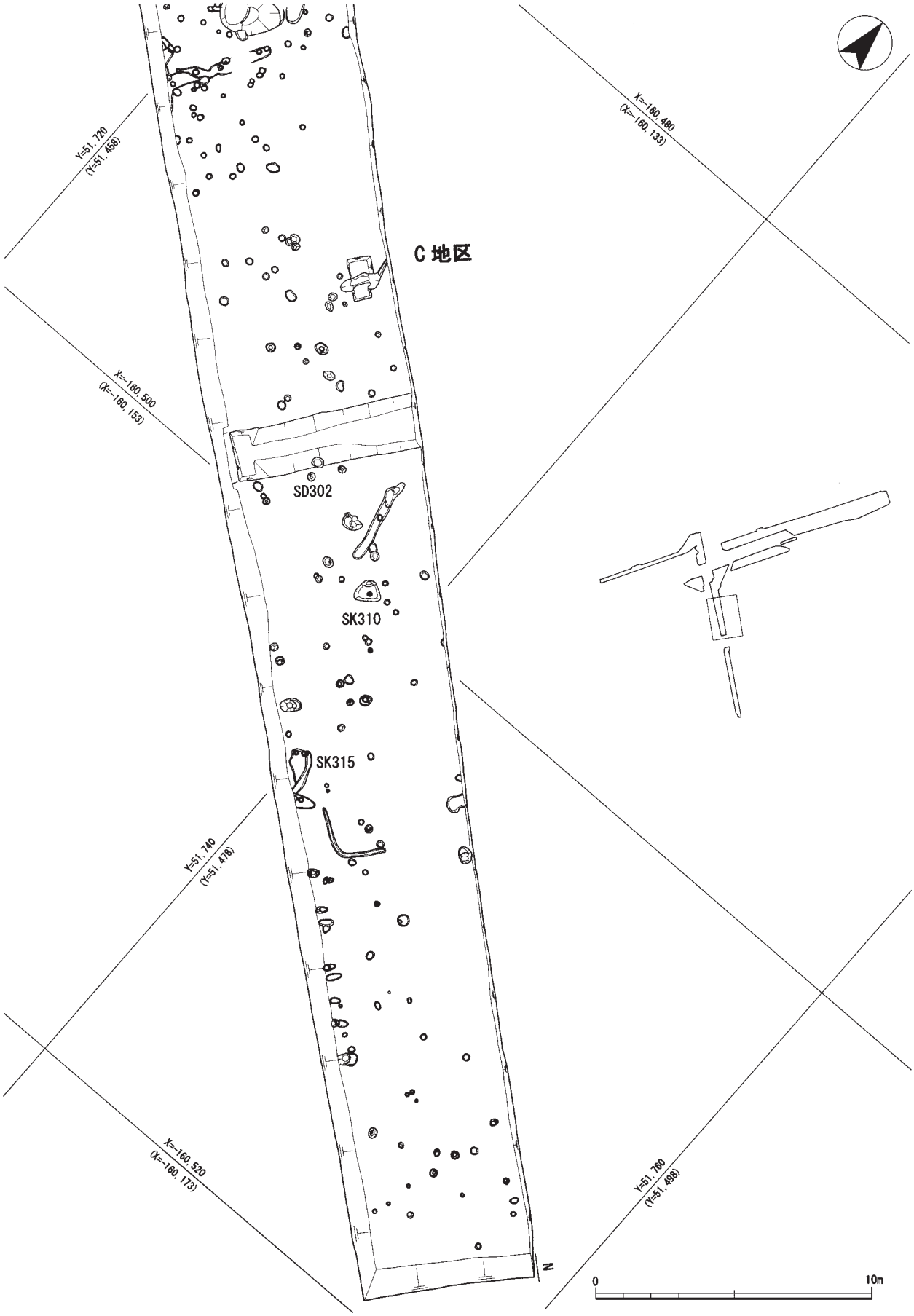
第13図　調査区平面図（5）（1：200）



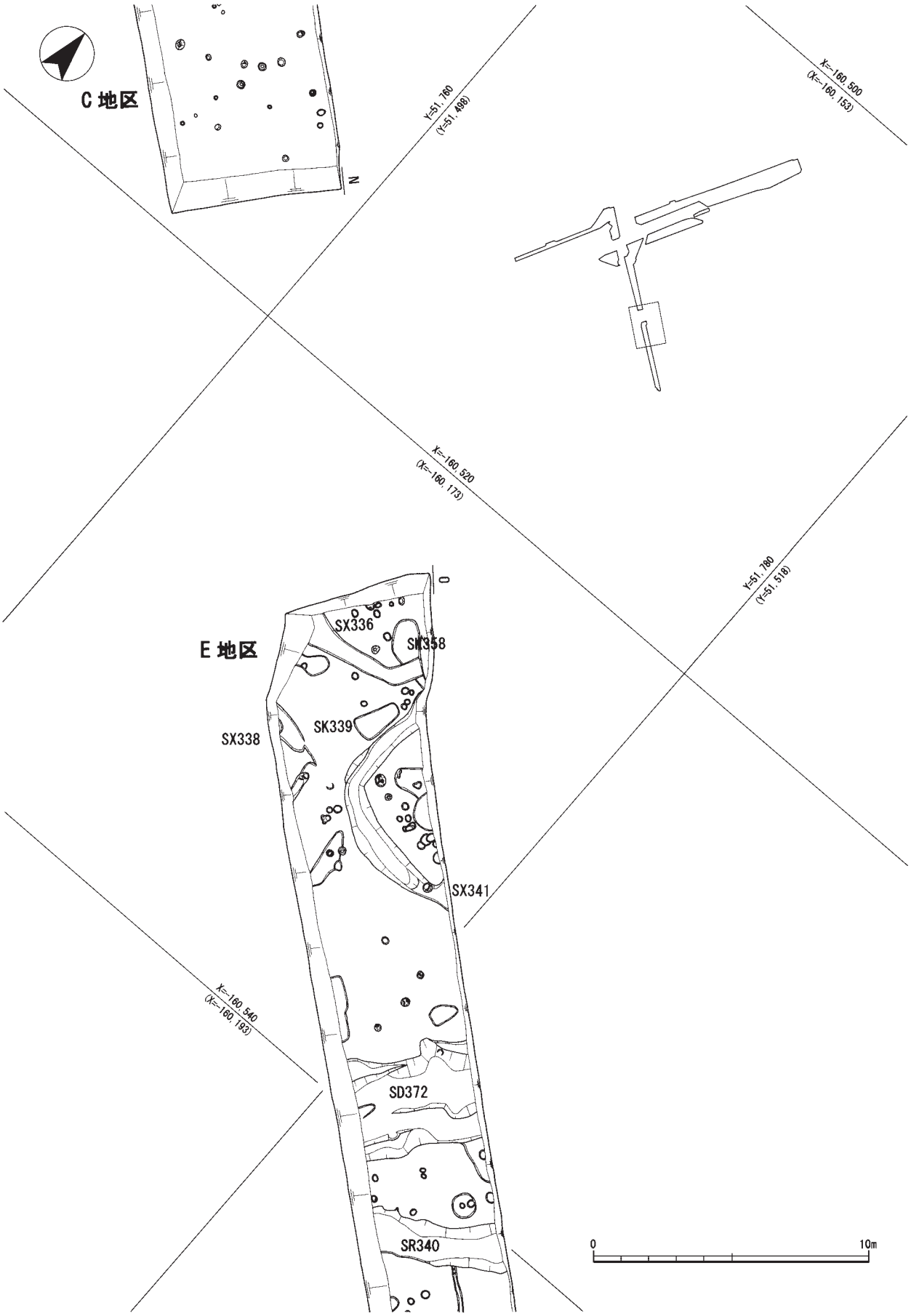
第14図　調査区平面図（6）（1：200）



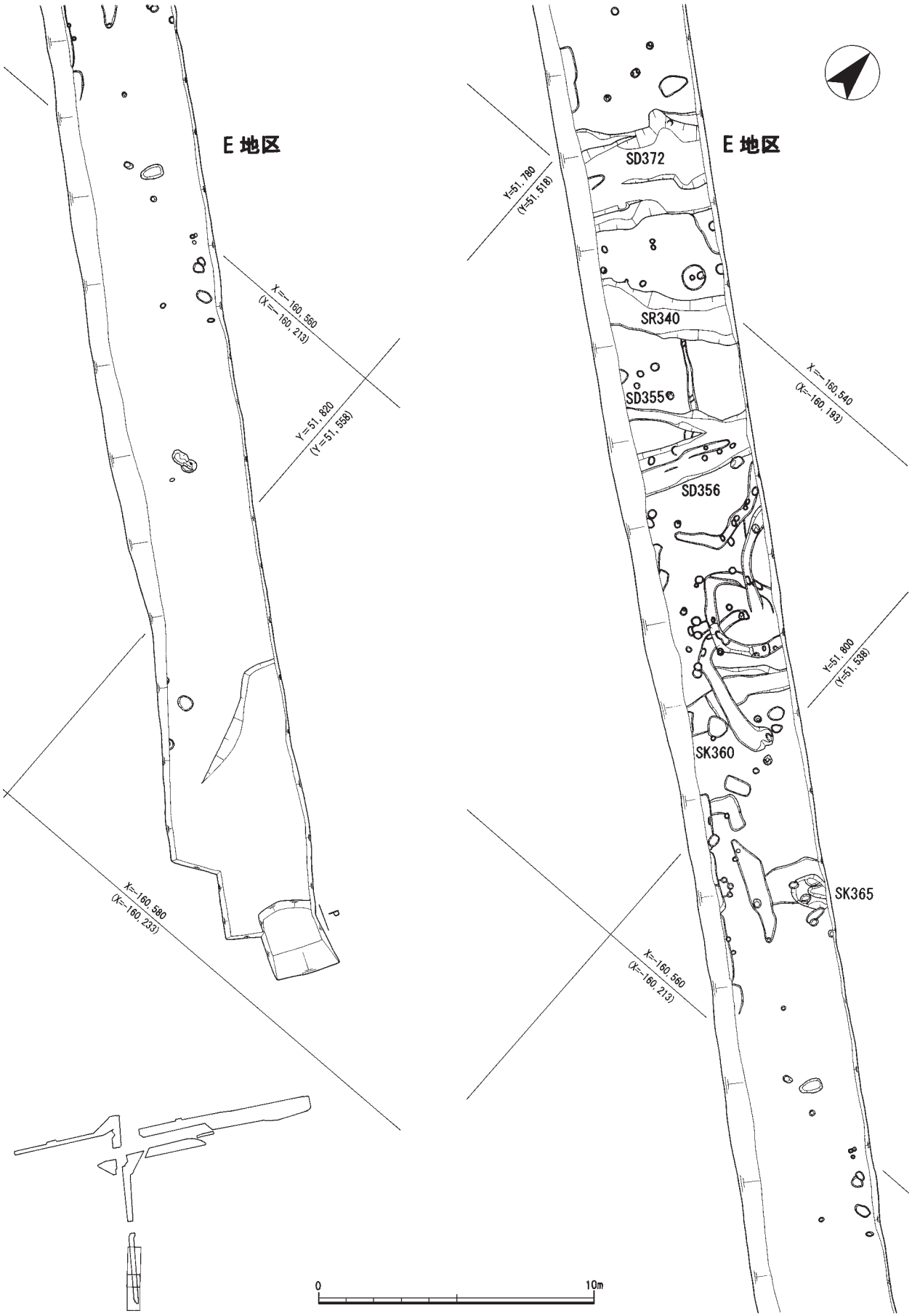
第15図　調査区平面図（7）（1：200）



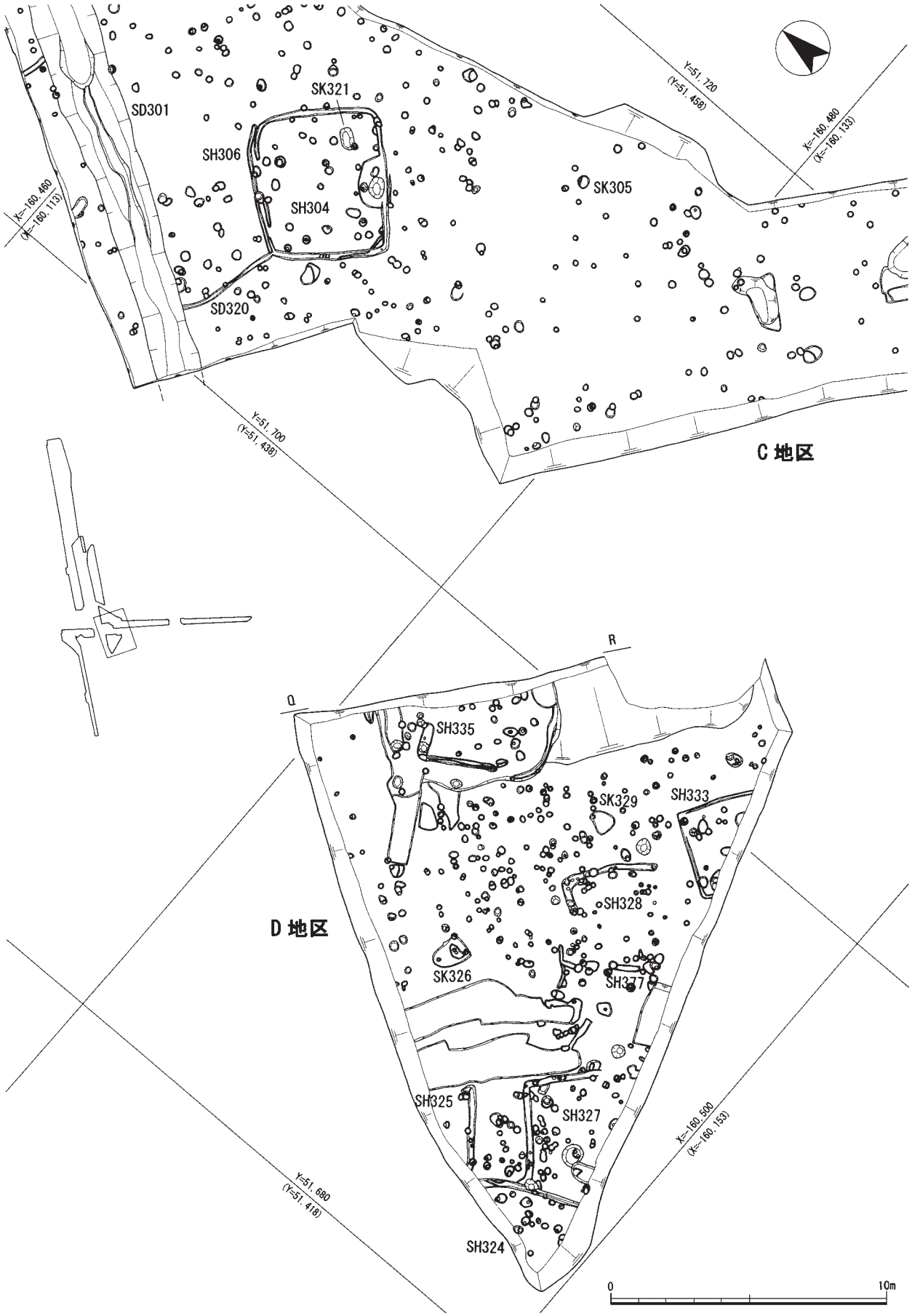
第16図　調査区平面図（8）（1：200）



第17図　調査区平面図（9）（1：200）

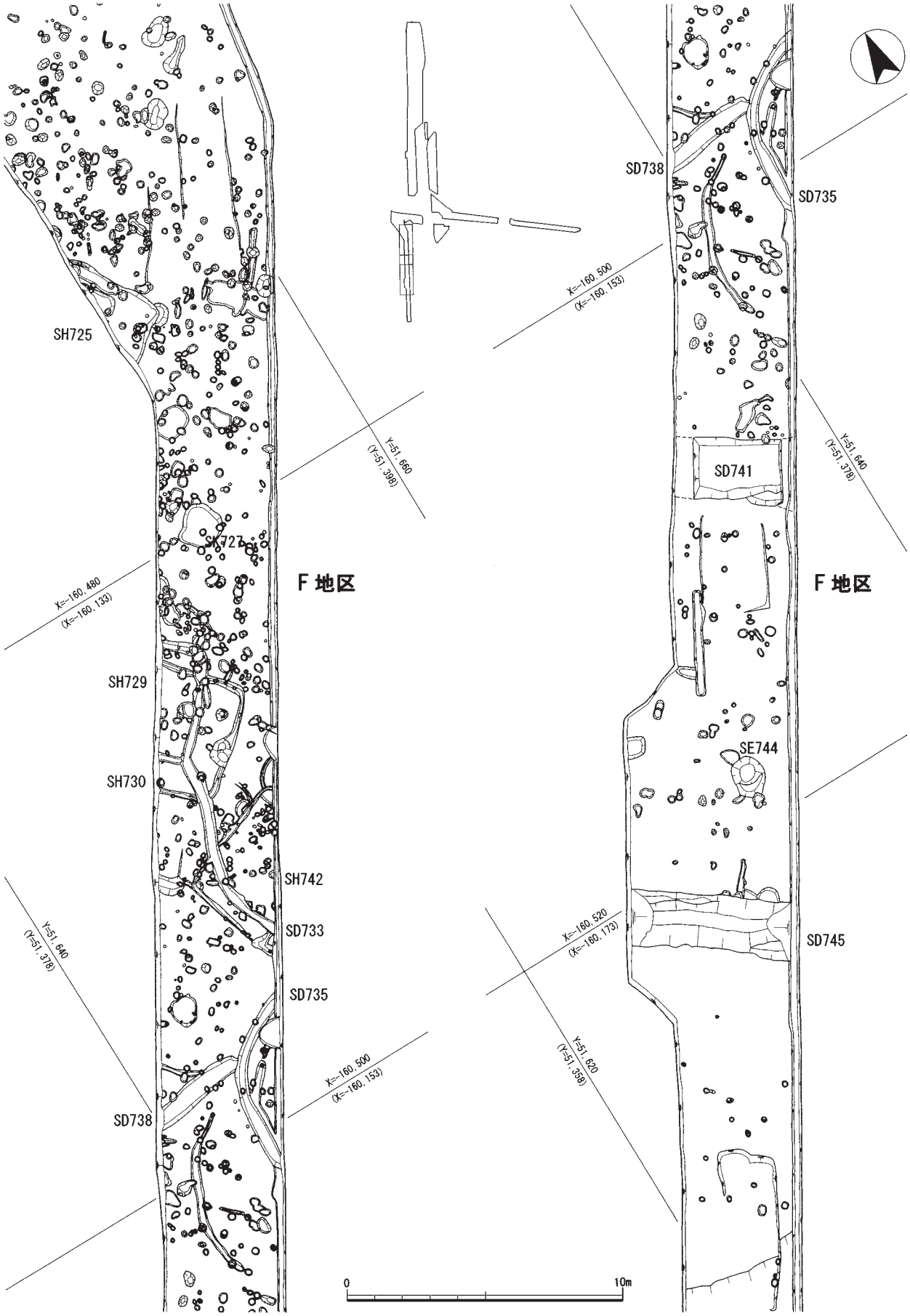


第18図　調査区平面図（10）（1：200）

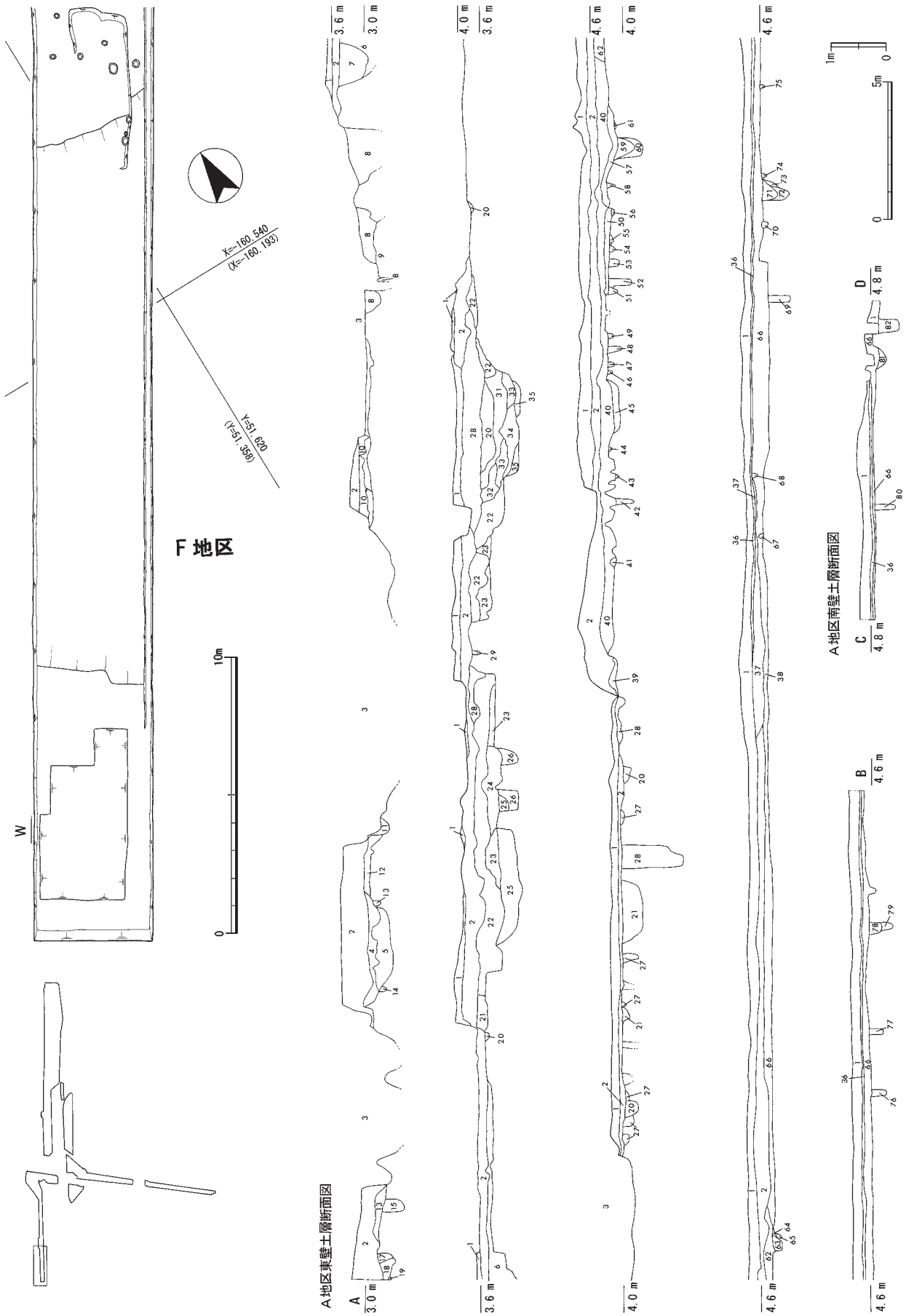


第19図　調査区平面図（11）（1：200）

第20図　調査区平面図（12）（1：200）



第21図　調査区平面図（13）（1：200）

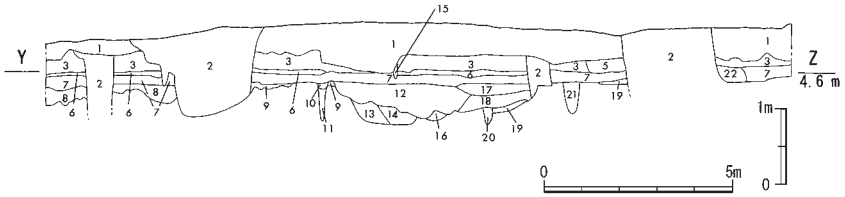


第22図　調査区平面図（14）（1：200）、A地区東壁・南壁土層断面図（縦1：100、横1：200）

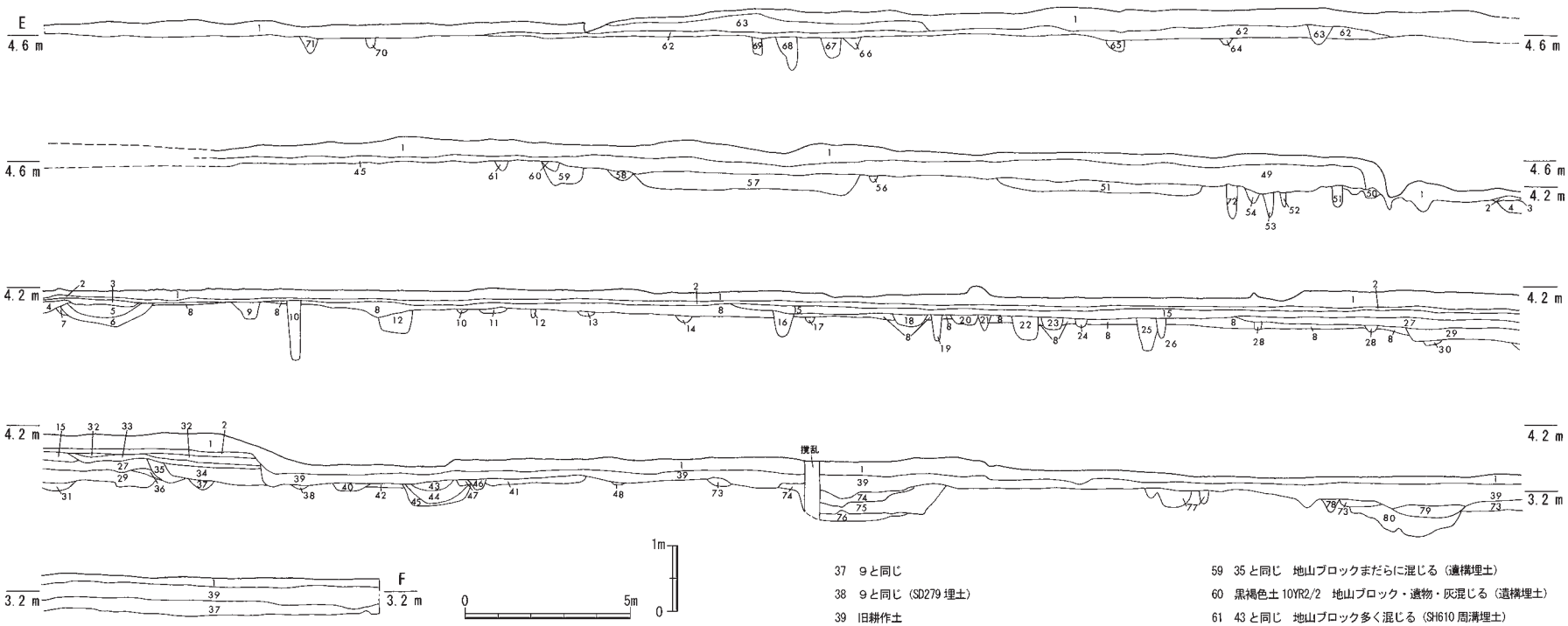
1　旧耕作土
2　旧床土
3　撹乱
4　明赤褐色土 5YR3/2（SD265 埋土）
5　黒褐色粘質土 5YR2/1（SD265 埋土）
6　褐灰色土 10YR4/1　地山混じる
7　褐灰色土 7.5YR4/1　明赤褐色土 5YR5/8 まばらに混じる（SD286 埋土）
8　褐灰色土 7.5YR5/1　明赤褐色土 5YR5/8 まばらに混じる（SD280 埋土）
9　地山に明緑灰色砂質土 10GY8/1 混じる
10　黒褐色粘質土 7.5YR3/1　明赤褐色土 5YR5/8 まばらに混じる
11　褐灰色砂質土 10YR5/1
12　6と同じ　明赤褐色土 5YR5/8 まばらに混じる
13　褐灰色粘質土 10YR5/1　明赤褐色土 5YR5/8 まばらに混じる
14　褐灰色粘質土 10YR4/1　地山混じる
15　黒色粘質土 10YR2/1　明赤褐色土 5YR5/8 まばらに混じる（SD254 埋土）
16　黒褐色粘質土 10YR3/1　明赤褐色土 5YR5/8 まばらに混じる
17　褐灰色粘質土 7.5YR4/1　明赤褐色土 5YR5/8 まばらに混じる
18　10 と同じ　明赤褐色土 5YR5/8 まばらに混じる
19　7と同じ
20　褐灰色シルト 10YR4/1（SD405・438・488・497 埋土）
21　黒褐色シルト 10YR3/1（SZ414・SD490・SK495 埋土）
22　明黄褐色シルト 10YR7/6　褐灰色粘土 7.5YR4/1 まだらに混じる　遺物混じる
23　22 と同じ　黄灰色粘土 2.5Y5/1 ブロック・黒色粘土 N2/0 ブロック混じる
24　灰黄褐色シルト 10YR4/2　22 がブロック状に混じる
25　黒色粘土 N2/0　22 がブロック状に混じる　礫混じる　遺物混じる（SZ513 埋土）
26　22 と同じ　黒色粘質土 N2/0・灰白粘土 2.5Y8/2 まだらに混じる
27　明青灰色粘土 10BG7/1 上面に細砂混じる
28　黒褐色シルト 7.5YR3/1　遺物混じる（SE496 埋土）
29　22 と同じ　14 混じる（Pit 埋土）
30　21 と同じ　遺物混じる（SD282 埋土）
31　21 と同じ　にぶい黄褐色シルト 10YR5/4 ブロック・遺物多く混じる（SD282 埋土）
32　黒褐色シルト 10YR3/2（SD282 埋土）
33　25 と同じ（SD282 埋土）
34　25 と同じ　褐灰色砂 10YR6/1・遺物混じる（SD282 埋土）
35　25 と同じ　灰色粘土 N6/0 混じる（SD282 埋土）
36　黄褐色土 2.5Y5/4
37　暗灰黄色土 2.5Y5/2
38　明黄褐色土 2.5Y6/6
39　黒褐色土 2.5Y3/1　地山ブロック混じる
40　黒褐色土 10YR3/1　地山ブロック少し混じる
41　灰黄褐色土 10YR4/2　黒色土少し混じる
42　黒色土 10YR2/1　地山ブロック混じる（Pit 埋土）
43　明黄褐色土 10YR7/6　黒色土多く混じる
44　にぶい黄橙色土 10YR6/3　黒色土まだらに混じる
45　黒褐色土 10YR2/2　遺物・灰混じる（SD515 埋土）
46　褐色土 10YR4/6　黒色土ブロック混じる（Pit 埋土）
47　黄褐色土 10YR5/6　黒色土ブロックまだらに混じる（Pit 埋土）
48　にぶい黄褐色土 10YR5/4　黒色土ブロック少し混じる（Pit 埋土）
49　明黄褐色土 10YR6/6　黒色土ブロック多く混じる（Pit 埋土）
50　黒褐色土 10YR3/2　地山ブロック少し混じる
51　45 と同じ　地山ブロック・遺物混じる（Pit 埋土）
52　42 と同じ　地山ブロック・灰少し混じる（Pit 埋土）
53　黒色土 7.5YR2/1　地山ブロック少し混じる（Pit 埋土）
54　40 と同じ　地山ブロックまだらに混じる（SH622 周溝埋土）
55　42 と同じ　地山ブロック・遺物まだらに混じる
56　45 と同じ　地山ブロック混じる（Pit 埋土）
57　50 と同じ　地山ブロックまだらに混じる
58　42 と同じ　地山ブロック・遺物・灰混じる
59　45 と同じ　黄砂まだらに混じる（Pit 埋土）
60　42 と同じ　地山ブロックまだらに混じる（Pit 埋土）
61　黒褐色土 10YR2/3　地山ブロックまだらに混じる（SH622 周溝埋土）
62　50 と同じ　地山ブロック・遺物混じる
63　黒褐色土 7.5YR2/2　地山ブロック混じる（Pit 埋土）
64　53 と同じ　地山ブロック混じる（Pit 埋土）
65　40 と同じ　地山ブロック多く混じる（Pit 埋土）
66　6と同じ　地山ブロックまだらに混じる
67　50 と同じ　地山ブロックまだらに混じる
68　暗灰黄色土 2.5YR4/2
69　45 と同じ　地山ブロックまだらに混じる（Pit 埋土）
70　黒色土 7.5YR2/2　地山ブロックまだらに混じる（Pit 埋土）
71　53 と同じ　黄砂まだらに混じる（Pit 埋土）
72　63 と同じ　地山ブロックまだらに混じる（Pit 埋土）
73　47 と同じ　黒色土少し混じる（Pit 埋土）
74　50 と同じ　地山ブロック少し混じる（SH584 周溝埋土）
75　60 と同じ（SH584 周溝埋土）
76　42 と同じ　地山ブロック多く混じる
77　42 と同じ　地山ブロック少し混じる
78　42 と同じ　灰混じる
79　42 と同じ　地山ブロック混じる
80　黒褐色土 7.5YR3/2　黄砂混じる（Pit 埋土）
81　にぶい黄褐色土 10YR4/3（SD585 埋土）
82　80 と同じ（SB648 柱穴埋土）

第23図　A地区東壁・南壁土層土色、G地区東壁土層断面図（縦 1：100、横 1：200）

G地区東壁土層断面図



1　盛土
2　撹乱
3　旧耕作土
4　旧床土
5　3と同じ
6　オリーブ黒色粘質土 5Y3/1　遺物多く混じる
7　黒褐色粘質土 2.5Y3/2　鉄分混じる
8　褐色土 10YR4/4　粗砂混じる
9　5と同じ　砂混じる
10　黒色粘質土 7.5YR2/1　遺物多く混じる
11　7と同じ　遺物・鉄分混じる
12　10 と同じ　地山ブロック・遺物混じる
13　オリーブ黒色砂質土 7.5Y3/1
14　暗褐色粘質土 10YR3/3
15　黒色土 2.5Y2/1　遺物混じる
16　黒色粘質土 2.5Y2/1　遺物混じる
17　暗灰黄色土 2.5Y4/2
18　6と同じ
19　6と同じ　地山粒状に混じる
20　黒色粘質土 5Y2/1　砂混じる
21　オリーブ黒色粘質土 5Y3/1
　粒状に黄褐色土 2.5Y5/4 混じる
22　黒色粘質土 5Y2/1　砂混じる

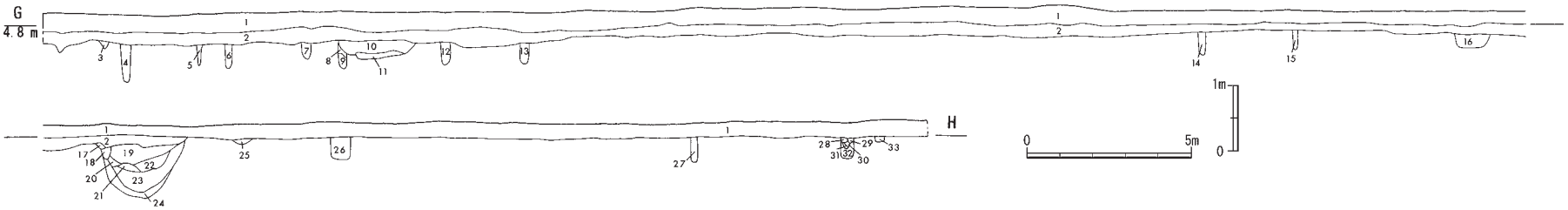


1　旧耕作土
2　旧床土
3　旧耕作土
4　灰黄褐色土 10YR4/2　やや粘性あり　地山ブロック混じる
5　黒色土 7.5YR2/1　しまりなし（SK525 埋土）
6　黒色土 10YR1.7/1（SK525 埋土）
7　６と同じ　黄褐色粘質土 2.5Y5/3 ブロック混じる
8　黒褐色土 7.5YR2/2　地山ブロック多く混じる
9　黒色土 10YR2/1（遺構埋土）
10　９と同じ（SH473 周溝埋土）
11　９と同じ（遺構埋土）
12　９と同じ（Pit 埋土）
13　９と同じ（遺構埋土）
14　９と同じ（SD462 埋土）
15　旧耕作土
16　９と同じ（SD465 埋土）
17　９と同じ（SD454 埋土）
18　９と同じ（SD460 埋土）
19　９と同じ（Pit 埋土）
20　９と同じ（遺構埋土）
21　９と同じ（遺構埋土）
22　９と同じ（SD466 埋土）
23　９と同じ（SD466 埋土）
24　９と同じ（SD446 埋土）
25　黒色土 10YR2/1　やや粘性あり　地山ブロック混じる（SK441・Pit 埋土）
26　９と同じ
27　黒褐色土　10YR2/3　砂礫混じる
28　９と同じ（SD435 埋土）
29　褐灰色土 5YR5/1（SD433 埋土）
30　黄褐色粘質土 2.5Y5/3　褐灰色土 5YR5/1 混じる
31　９と同じ（SK440 埋土）
32　９と同じ（SK442 埋土）
33　旧耕作土
34　旧床土
35　黒褐色土 10YR3/1
36　褐灰色土 10YR4/1
37　９と同じ
38　９と同じ（SD279 埋土）
39　旧耕作土
40　９と同じ（SK415 埋土）
41　９と同じ（遺構埋土）
42　30 と同じ
43　黒褐色土 10YR3/2　遺物多く混じる（SD401 埋土）
44　35 と同じ（SD401 埋土）
45　35 と同じ　地山ブロック多く混じる（SD401 埋土）
46　黒褐色土 2.5Y3/2（SD402 埋土）
47　黒褐色土 2.5Y3/1（SD407 埋土）
48　SH408 周溝埋土
49　35 と同じ　遺物・鉄分多く混じる
50　黒褐色土 10YR2/2　地山ブロック多く混じる
51　５と同じ（Pit 埋土）
52　９と同じ　地山ブロック多く混じる（Pit 埋土）
53　５と同じ　地山ブロック混じる（Pit 埋土）
54　黒褐色土 7.5YR3/1　地山ブロック混じる（Pit 埋土）
55　50 と同じ　遺物・地山ブロック多く混じる（SH640 貼床土）
56　43 と同じ（SH619 周溝埋土）
57　５と同じ　地山まだらに混じる（SH619 貼床土）
58　暗褐色土 10YR3/3　地山ブロックまだらに混じる（SH619 周溝埋土）
59　35 と同じ　地山ブロックまだらに混じる（遺構埋土）
60　黒褐色土 10YR2/2　地山ブロック・遺物・灰混じる（遺構埋土）
61　43 と同じ　地山ブロック多く混じる（SH610 周溝埋土）
62　灰黄褐色砂質土 10YR4/2
63　36 と同じ　地山ブロック混じる（SD595 埋土）
64　43 と同じ　地山ブロック少し混じる（SD597 埋土）
65　５と同じ　地山ブロック少し混じる（SD614 周溝埋土）
66　54 と同じ　地山ブロックまだらに混じる（SD583 埋土）
67　43 と同じ　地山ブロック少し混じる（SK588 埋土）
68　にぶい黄褐色土 10YR4/3　地山ブロックまだらに混じる（Pit 埋土）
69　35 と同じ　地山ブロック多く混じる（Pit 埋土）
70　27 と同じ　地山ブロック多く混じる（Pit 埋土）
71　黒褐色土 10YR3/4（SD592 埋土）
72　５と同じ（Pit 埋土）
73　暗赤褐色土 2.5YR3/2（包含層）
74　暗赤褐色土 5YR3/2　やや粘性あり　炭化物混じる（SD282 埋土？）
75　にぶい赤褐色粘質土 5YR4/3（SD282 埋土？）
76　極暗赤褐色粘質土 5YR2/3（SD282 埋土？）
77　黒褐色土 5YR2/2（SD287 埋土）
78　暗褐色土 7.5YR3/3（SD266 埋土）
79　暗赤褐色土 5YR3/2（SD265 埋土）
80　黒褐色粘質土 5YR2/1（SD265 埋土）

第24図　A地区西壁土層断面図（縦 1：100、横 1：200）

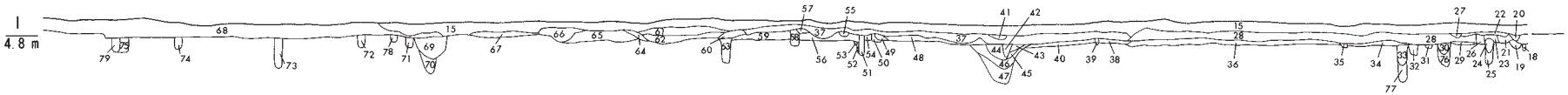
第25図　B地区東壁・西壁・北壁土層断面図（縦1：100、横1：200）

B地区東壁土層断面図

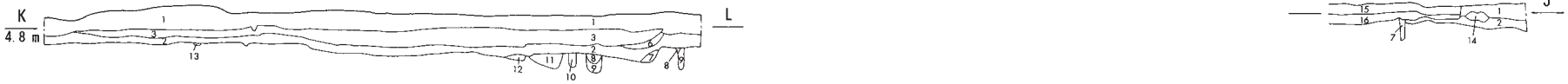


1　耕作土
2　床土
3　黒褐色土 10YR2/2　遺物多く混じる
4　橙色土 7.5YR6/6（Pit 埋土）
5　明褐色粘質土 7.5YR5/6（Pit 埋土）
6　黄褐色粘質土 10YR5/6（Pit 埋土）
7　明黄褐色土 10YR6/6（Pit 埋土）
8　黒褐色土 7.5YR3/2（Pit 埋土）
9　黒褐色土 7.5YR2/2（Pit 埋土）
10　暗褐色砂質土 10YR3/4（SD527 埋土）
11　褐灰色土 7.5YR5/1　遺物多く混じる（SD527 埋土）
12　褐色土 10YR4/4（SD532 埋土）
13　暗褐色土 10YR3/3（Pit 埋土）
14　黒褐色粘質土 10YR2/3（Pit 埋土）
15　14 と同じ（Pit 埋土）
16　黒褐色砂質土 10YR2/2（SK541 埋土）
17　にぶい黄褐色砂質土 10YR5/3（SE548 埋土）
18　暗褐色砂質土 7.5YR3/3（SE548 埋土）
19　暗褐色砂質土 10YR3/3（SE548 埋土）
20　黒褐色土 5YR3/1　黄砂混じる（SE548 埋土）
21　黒褐色粘質土 7.5YR3/2（SE548 埋土）
22　19 と同じ　遺物少し混じる（SE548 埋土）
23　14 と同じ（SE548 埋土）
24　16 と同じ（SE548 埋土）
25　黒褐色砂質土 5YR3/1　遺物混じる
26　褐色土 7.5YR4/4　（SD551 埋土）
27　13 と同じ（Pit 埋土）
28　明褐色土 7.5YR5/6　黄砂まばらに混じる（SD553 埋土）
29　暗褐色土 10YR3/4　黄砂少し混じる（SD553 埋土）
30　暗褐色粘質土 7.5YR3/3
31　褐灰色土 5YR4/1　黄砂多く混じる（SD553 埋土）
32　14 と同じ
33　黒褐色粘質土 5YR2/2

B地区西壁土層断面図

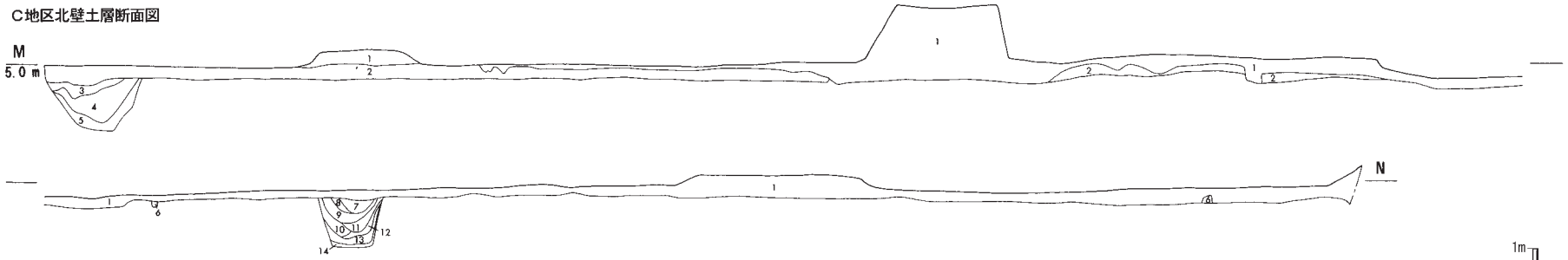


B地区北壁土層断面図



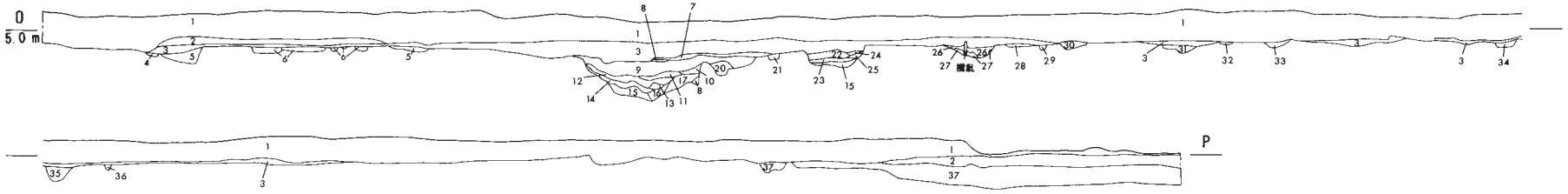
1　耕作土
2　床土
3　にぶい橙色土 7.5YR7/4　礫多く混じる
4　灰褐色粘質土 7.5YR4/2　黄砂少し混じる
5　灰黄褐色土 10YR4/2
6　にぶい黄褐色土 10YR4/3　礫混じる
7　暗褐色土 10YR3/3（SD529 埋土）
8　暗褐色粘質土 10YR3/3（Pit 埋土）
9　黄褐色土 10YR5/6　黄砂多く混じる（Pit 埋土）
10　暗褐色粘質土 7.5YR3/4（Pit 埋土）
11　黒褐色土 10YR3/2　遺物混じる（SD527 埋土）
12　褐色土 7.5YR4/3
13　褐色土 10YR4/4（SD554 埋土）
14　５と同じ
15　６と同じ　礫混じる
16　にぶい黄褐色土 10YR5/4　黄砂多く混じる
17　12 と同じ（Pit 埋土）
18　黄褐色粘質土 10YR5/6（Pit 埋土）
19　暗褐色土 10YR3/4　黄砂多く混じる（Pit 埋土）
20　にぶい黄橙色砂質土 10YR7/2　黄砂まばらに混じる
21　６と同じ
22　灰黄褐色土 10YR5/2　小石混じる
23　５と同じ
24　９と同じ　黄砂多く混じる（Pit 埋土）
25　黒褐色粘質土 7.5YR3/2（Pit 埋土）
26　５と同じ　黄砂混じる
27　16 と同じ　黄砂多く混じる
28　床土
29　黒褐色土 7.5YR3/2
30　８と同じ（Pit 埋土）
31　明黄褐色粘質土 10YR6/6（SH573 周溝埋土）
32　13 と同じ　黄砂まばらに混じる（Pit 埋土）
33　褐色土 10YR3/3（Pit 埋土）　黄砂少し混じる
34　11 と同じ
35　にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4　黄砂混じる
36　５と同じ
37　床土
38　６と同じ
39　35 と同じ（Pit 埋土）
40　６と同じ
41　褐色砂質土 10YR4/4
42　７と同じ　黄砂混じる（SK557 埋土）
43　黒褐色土 10YR2/3（SK557 埋土）
44　５と同じ　遺物・黄砂混じる（SK557 埋土）
45　７と同じ　遺物混じる
46　黒褐色粘質土 10YR2/2　遺物多く混じる
47　黒褐色粘質土 10YR3/1　黄砂多く混じる
48　灰黄褐色砂質土 10YR5/2
49　16 と同じ　黄砂混じる
50　にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3　黄砂少し混じる（Pit 埋土）
51　29 と同じ（Pit 埋土）
52　18 と同じ　黄砂多く混じる（Pit 埋土）
53　51 と同じ　黄砂混じる（Pit 埋土）
54　６と同じ
55　明黄褐色土 10YR6/6　黄砂多く混じる
56　７と同じ
57　９と同じ　黄砂混じる
58　16 と同じ（遺構埋土）
59　６と同じ
60　９と同じ
61　床土
62　６と同じ（SZ563 埋土？）
63　８と同じ　黄砂少し混じる（Pit 埋土）
64　７と同じ　礫混じる（SZ563 埋土？）
65　５と同じ（SZ563 埋土？）
66　48 と同じ（SZ563 埋土？）
67　６と同じ
68　16 と同じ
69　黒褐色粘質土 10YR3/2　黄砂少し混じる（Pit 埋土）
70　31 と同じ　黄砂多く混じる（Pit 埋土）
71　７と同じ（Pit 埋土）
72　５と同じ（SH560 周溝埋土）
73　灰黄褐色粘質土 10YR4/2（Pit 埋土）
74　６と同じ（遺構埋土）
75　５と同じ　黄砂多く混じる（Pit 埋土）
76　31 と同じ　黄砂多く混じる（Pit 埋土）
77　にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3　黄砂多く混じる（Pit 埋土）
78　77 と同じ　黄砂混じる
79　69 と同じ（Pit 埋土）

C地区北壁土層断面図



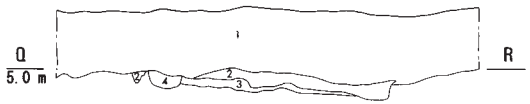
1　盛土
2　旧耕作土
3　黒色粘質土 10YR2/1（SD301 埋土）
4　黄褐色粘質土 10YR5/6　5多く混じる（SD301 埋土）
5　黒褐色粘質土 7.5YR3/1　地山混じる（SD301 埋土）
6　Pit 埋土
7　5と同じ（SD302 埋土）
8　明黄褐色粘質土 10YR7/6　9少し混じる（SD302 埋土）
9　黒褐色粘質土 7.5YR2/2（SD302 埋土）
10　黄橙色粘質土 10YR7/8　11 混じる（SD302 埋土）
11　黒褐色粘質土 10YR3/2（SD302 埋土）
12　10 と同じ（SD302 埋土）
13　黒褐色粘質土 10YR2/3（SD302 埋土）
14　10 と同じ　13 混じる（SD302 埋土）

E地区北壁土層断面図



1　盛土
2　旧耕作土
3　黒色粘質土 7.5YR2/1
4　黒褐色粘質土 10YR3/1（SD336 埋土）
5　黒褐色粘質土 7.5YR2/1　黄橙色粘質土 7.5YR7/8 混じる（SX341 周溝埋土）
6　黒褐色粘質土 7.5YR3/1　橙色粘質土 7.5Y6/6 混じる（SK342・343・Pit 埋土）
7　オリーブ黒色土 5Y3/1　砂質土混じる（SD372 埋土）
8　褐灰色土 7.5YR4/1　砂質土混じる（SD372 埋土）
9　6と同じ（SD372 埋土）
10　灰褐色粘質土 7.5YR4/2（SD372 埋土）
11　褐灰色粘質土 7.5YR4/1　小石混じる（SD372 埋土）
12　4と同じ（SD372 埋土）
13　黒色粘質土 2.5Y2/1（SD372 埋土）
14　オリーブ黒色粘質土 5Y3/1（SD372 埋土）
15　灰黄褐色砂質土 10YR5/2　礫大量に混じる（SR340・SD372 埋土）
16　黄灰色砂質土 2.5Y4/1（SD372 埋土）
17　黒褐色砂質土 2.5Y3/2　礫混じる（SD372 埋土）
18　11 と同じ（SD372 埋土）
19　橙色粘質土 7.5YR6/6（地山）
20　黒褐色粘質土 7.5YR2/2（Pit 埋土）
21　11 と同じ（Pit 埋土）
22　黒褐色土 10YR3/2（SR340 埋土）
23　黒褐色砂質土 10YR3/2（SR340 埋土）
24　灰黄褐色砂質土 10YR4/2　礫少し混じる（SR340 埋土）
25　黒褐色砂質土 10YR3/1（SR340 埋土）
26　褐灰色粘質土 10YR4/1（SD356 埋土）
27　黒褐色土 10YR3/1　明黄褐色粘質土 10YR6/6 混じる（SD356 埋土）
28　8と同じ　礫少し混じる（SD361 埋土）
29　26 と同じ　礫少し混じる（Pit 埋土）
30　4と同じ（SD364 埋土）
31　黒褐色土 2.5Y3/1（SD366 埋土）
32　黄灰色土 2.5Y4/1　礫混じる（SD366 埋土）
33　黒褐色土 2.5Y3/2　礫混じる（SD367 埋土）
34　31 と同じ　にぶい黄色土 2.5Y6/4 混じる（SK371 埋土）
35　黒色粘質土 10YR2/1（SK365 埋土）
36　4と同じ（Pit 埋土）
37　黒褐色粘質土 2.5Y3/1　明黄褐色粘質土 10YR7/6 混じる（落ち込み又は沼地埋土）

D地区北壁土層断面図

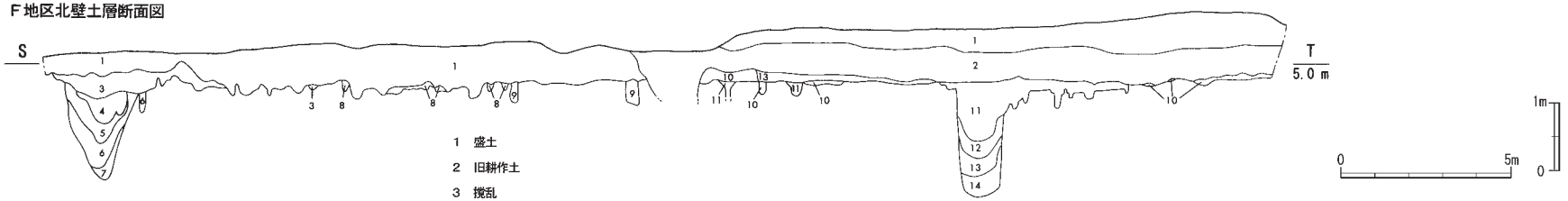


1　盛土
2　黒褐色粘質土 10YR3/1（SK331・Pit 埋土）
3　2と同じ　明黄褐色粘質土 10YR7/6 混じる（SH335 貼床土）
4　2と同じ（SH335 周溝埋土）

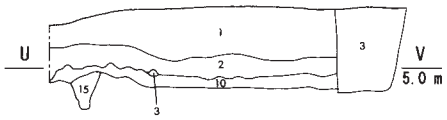
第26図　C地区北壁・E地区北壁・D地区北壁土層断面図（縦 1：100、横 1：200）

第27図　F地区北壁・東壁・西壁土層断面図（縦1：100、横1：200）

F地区北壁土層断面図

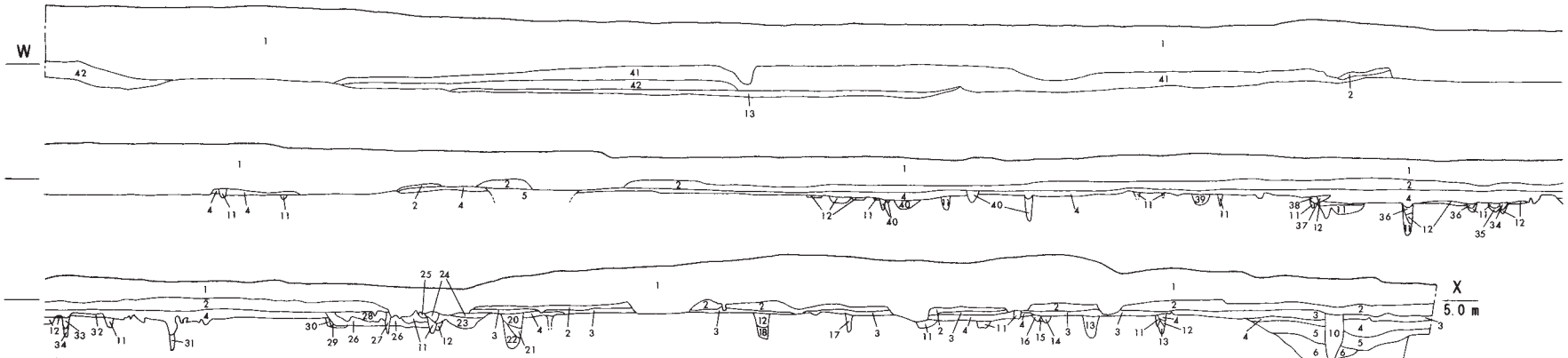


F地区東壁土層断面図

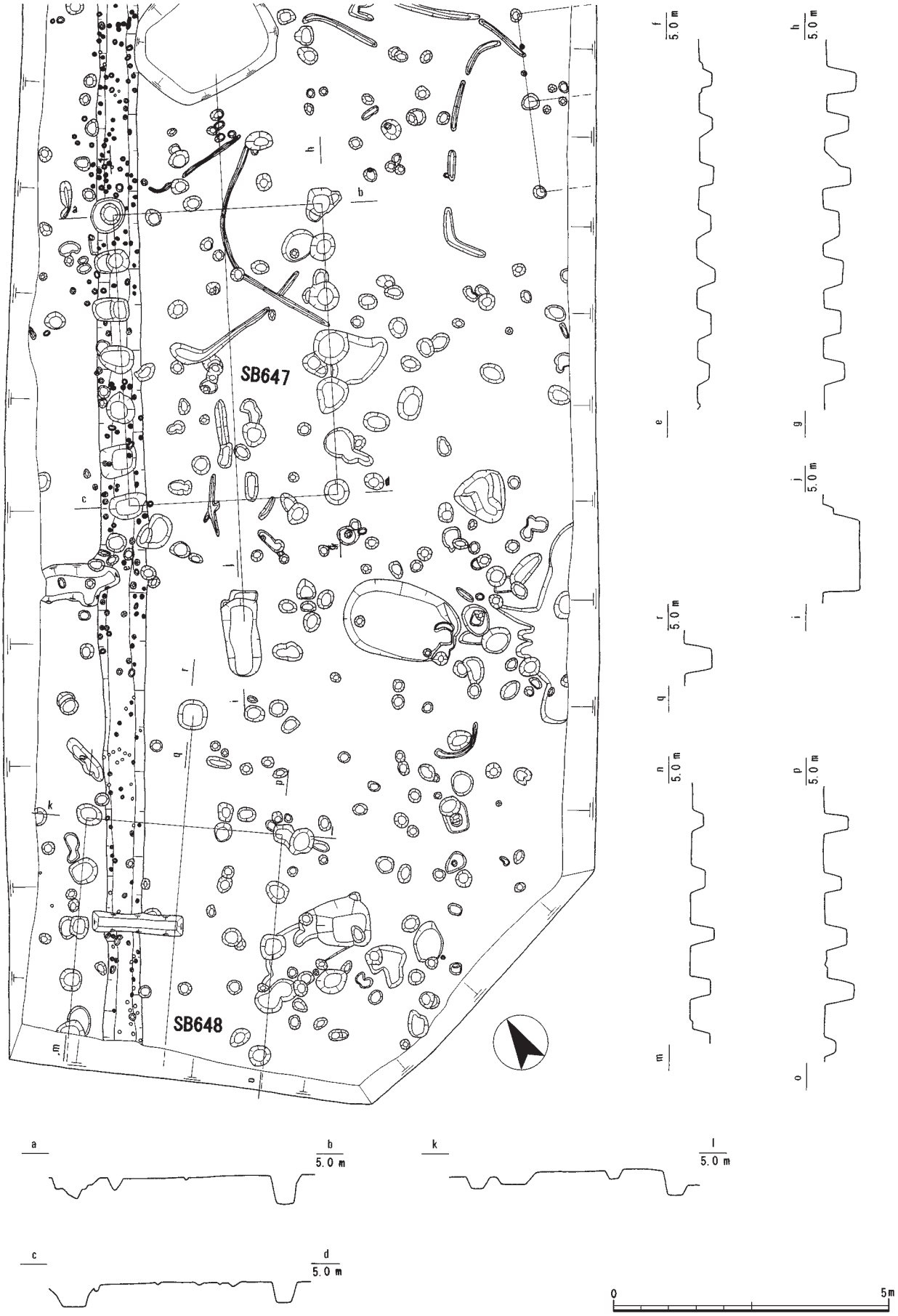


1　盛土
2　旧耕作土
3　撹乱
4　褐灰色粘質土7.5YR4/1　褐灰色粘質土10YR5/1・地山混じる（SD202埋土）
5　黒色粘質土10YR2/1　明褐色粘質土7.5YR5/6混じる（SD202埋土）
6　灰色粘質土5Y5/1　地山混じる（SD202埋土）
7　６と同じ　明緑灰色砂質土7.5GY7/1混じる（SD202埋土）
8　黒褐色粘質土7.5YR2/1　明赤褐色粘質土5YR5/8混じる（遺構埋土）
9　黒褐色粘質土7.5YR3/1　地山混じる（Pit埋土）
10　黒褐色粘質土10YR3/2（包含層）
11　黒色粘質土7.5YR2/1　遺物混じる（SH217・SZ201・SE220・Pit埋土）
12　11と同じ　地山混じる（SE220埋土）
13　褐灰色粘質土10YR4/1　地山混じる（SE220埋土）
14　13と同じ　明緑灰色砂質土10GY7/1混じる（SE220埋土）
15　５と同じ　遺物混じる（Pit埋土）

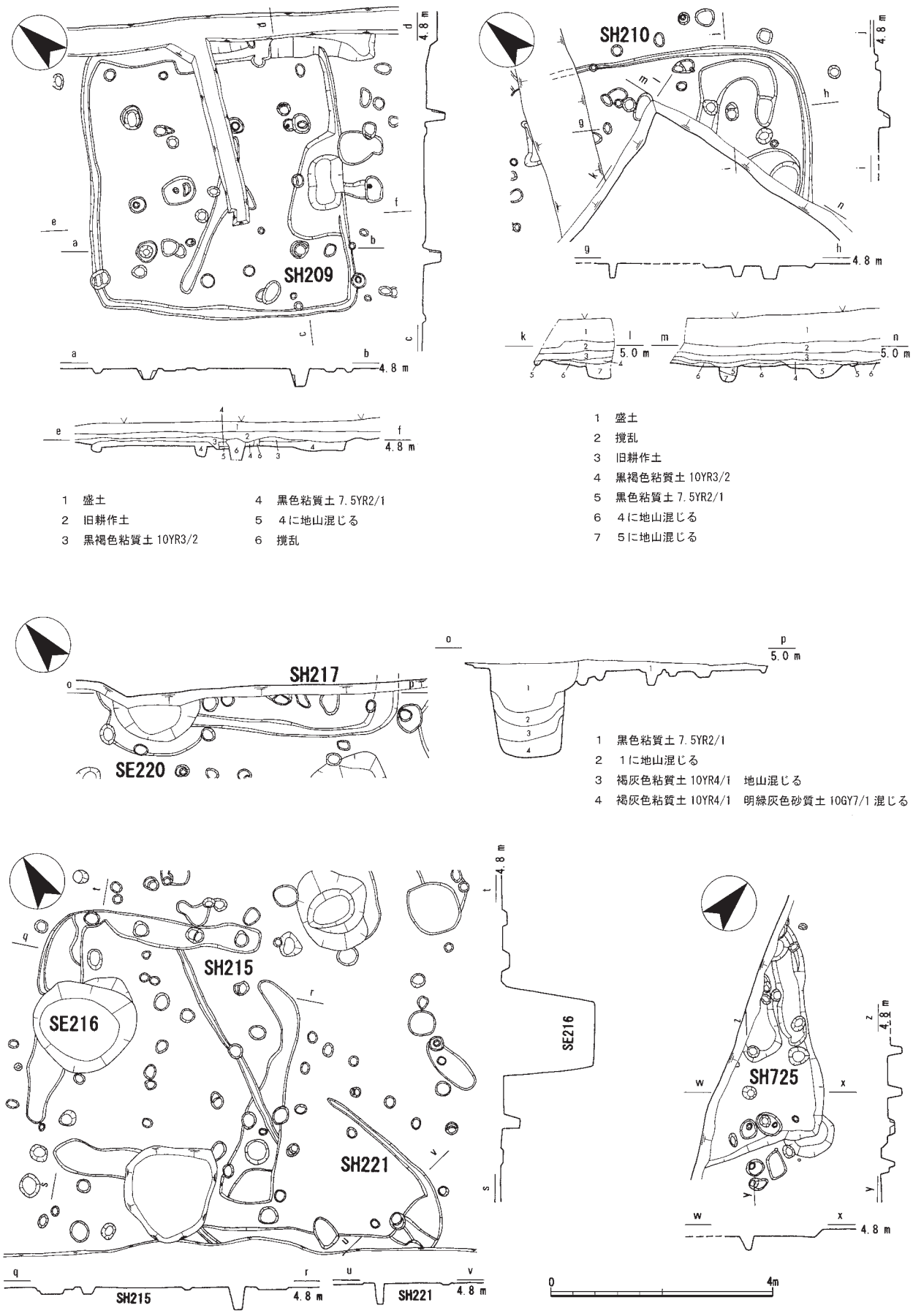
F地区西壁土層断面図



1　盛土
2　旧耕作土
3　黒褐色粘質土7.5YR3/2　砂礫・遺物混じる（包含層）
4　黒褐色粘質土7.5YR2/2　遺物混じる（SD202埋土）
5　暗褐色粘質土10YR3/3　遺物多く混じる（SD202・SD741埋土）
6　暗褐色粘質土10YR3/4　遺物少し混じる（SD202埋土）
7　黒色粘質土10YR2/1（SD202埋土）
8　にぶい黄褐色粘質土10YR6/4　黒色粘質土10YR2/1・地山混じる（SD202埋土）
9　７と同じ（SD202埋土）
10　撹乱
11　４と同じ　地山まばらに混じる（SH729・730周溝・Pit埋土）
12　地山に４混じる（Pit埋土）
13　黒褐色粘質土10YR2/3　遺物少し混じる（Pit埋土）
14　３と同じ　地山多く混じる（Pit埋土）
15　暗褐色粘質土7.5YR3/3
16　黒褐色粘質土10YR2/2　遺物少し混じる（SH701周溝埋土）
17　４と同じ　地山・炭化物少し混じる（Pit埋土）
18　地山に４・遺物多く混じる（Pit埋土）
19　６と同じ（Pit埋土）
20　16と同じ　遺物・炭化物多く混じる（Pit埋土）
21　16と同じ　地山・遺物・炭化物多く混じる（Pit埋土）
22　13と同じ　地山まばらに混じる（Pit埋土）
23　黒褐色粘質土7.5YR3/1（SH725埋土）
24　４と同じ　地山ブロックまばらに混じる
25　４と同じ　地山少し混じる
26　黒褐色粘質土10YR3/2　地山・遺物・炭化物少し混じる（SH725埋土）
27　７と同じ（Pit埋土）
28　４と同じ　地山ブロック混じる
29　黒褐色粘質土2.5Y3/1（Pit埋土）
30　黒色粘質土2.5Y2/1（Pit埋土）
31　灰黄褐色粘質土10YR4/2（Pit埋土）
32　４と同じ　鉄分粒状に混じる
33　４と同じ　地山・鉄分粒状に混じる（Pit埋土）
34　地山に淡黄色粘質土2.5Y8/4ブロック混じる（Pit埋土）
35　地山に４少し混じる（SH729周溝埋土）
36　灰白粘質土10YR8/2　４少し混じる（SH730周溝埋土）
37　黒褐色土10YR2/2　明赤褐色土5YR5/8・炭化物少し混じる
38　黒褐色粘質土7.5YR2/1　淡黄色粘質土2.5Y8/3ブロック・遺物混じる
39　７と同じ　遺物混じる
40　26と同じ　地山ブロック・遺物混じる（SD738・Pit埋土）
41　13と同じ　遺物少し混じる
42　暗褐色土7.5YR3/3　褐色土7.5YR4/4まばらに混じる



第28図　SB647・648平面図、断面図（1：100）

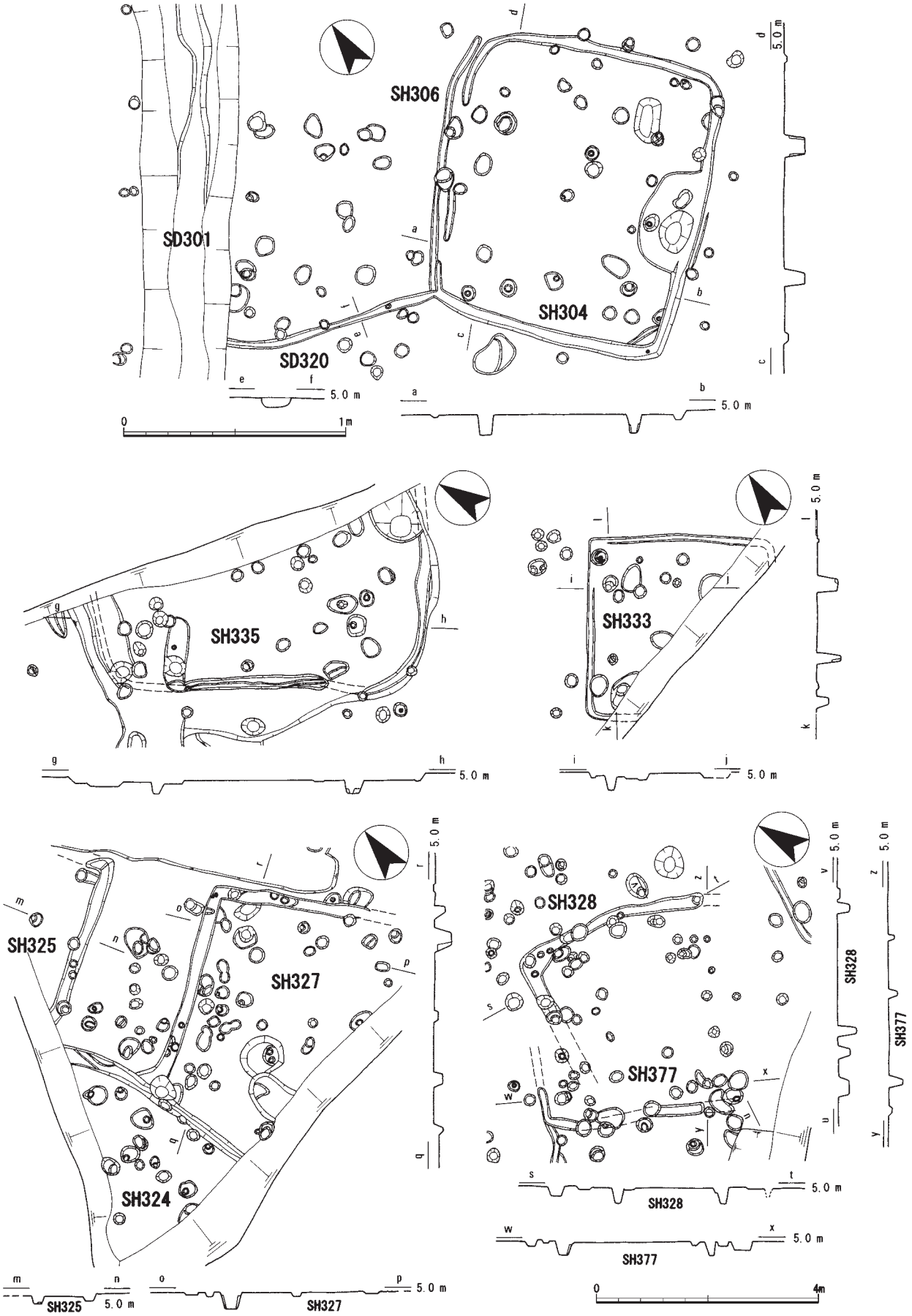


1　盛土
2　旧耕作土
3　黒褐色粘質土 10YR3/2
4　黒色粘質土 7.5YR2/1
5　４に地山混じる
6　撹乱

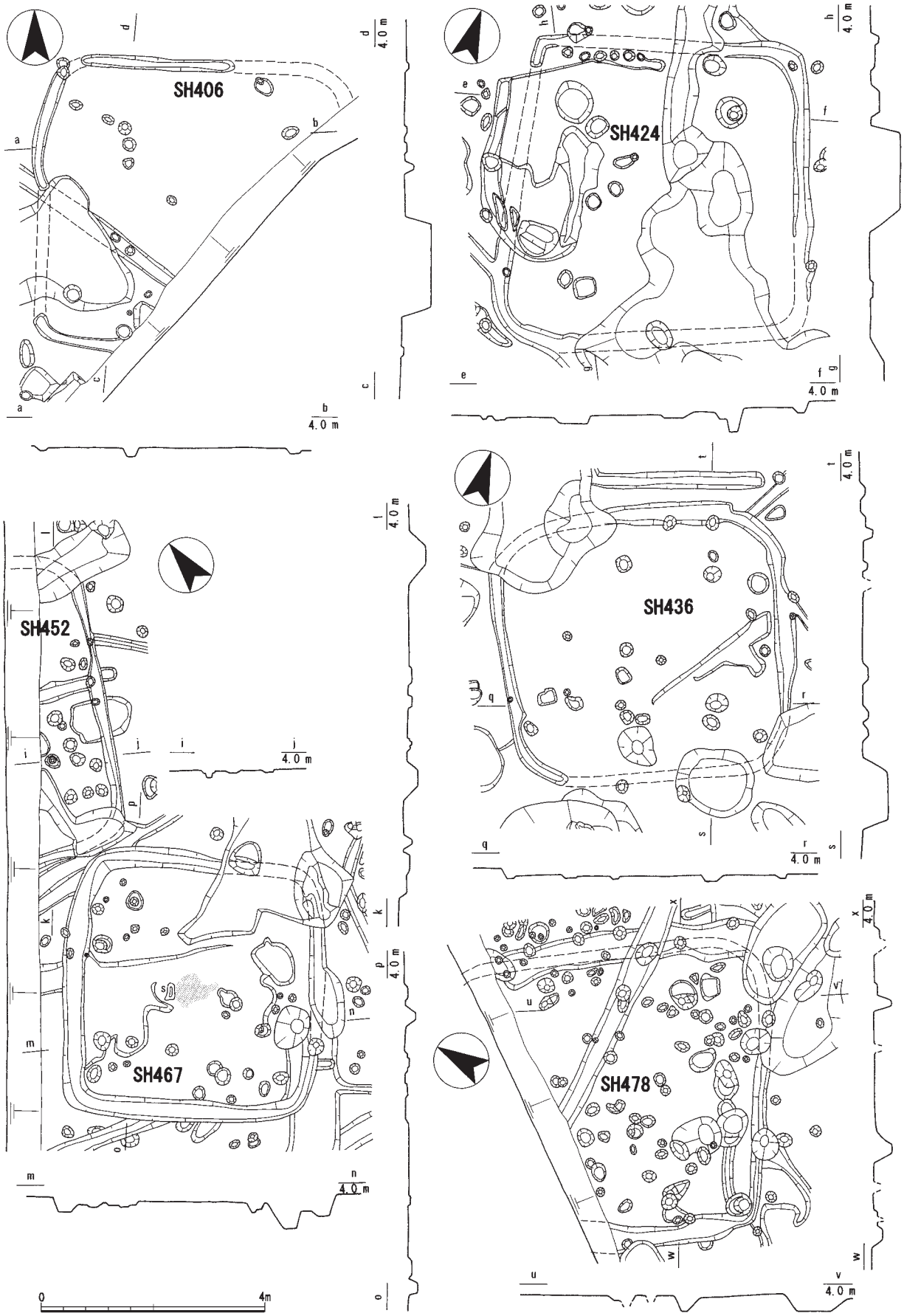
1　盛土
2　撹乱
3　旧耕作土
4　黒褐色粘質土 10YR3/2
5　黒色粘質土 7.5YR2/1
6　４に地山混じる
7　５に地山混じる

1　黒色粘質土 7.5YR2/1
2　１に地山混じる
3　褐灰色粘質土 10YR4/1　地山混じる
4　褐灰色粘質土 10YR4/1　明緑灰色砂質土 10GY7/1 混じる

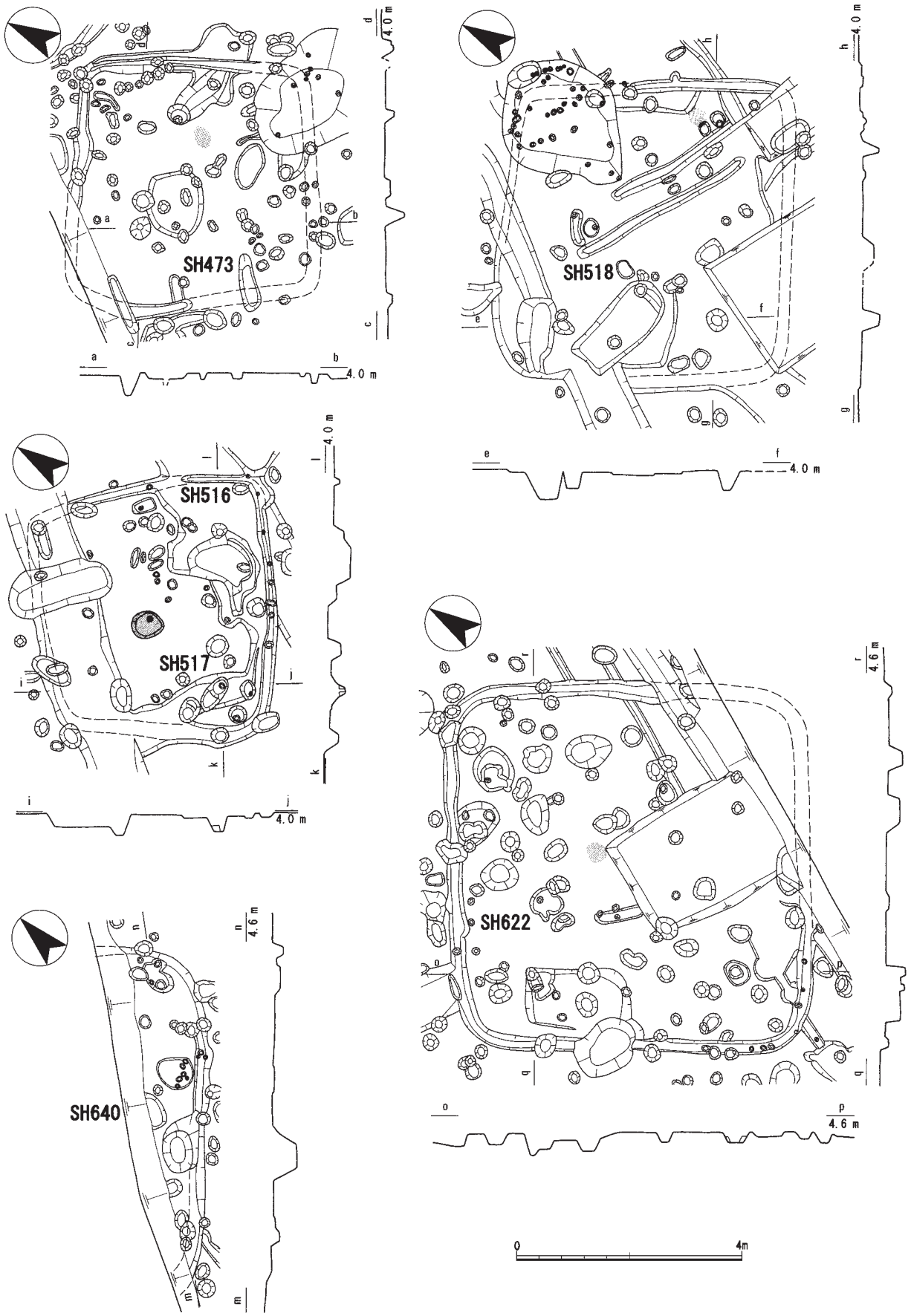
第29図　SH209・210・215・217・221・725平面図、断面図、土層断面図（1:100）



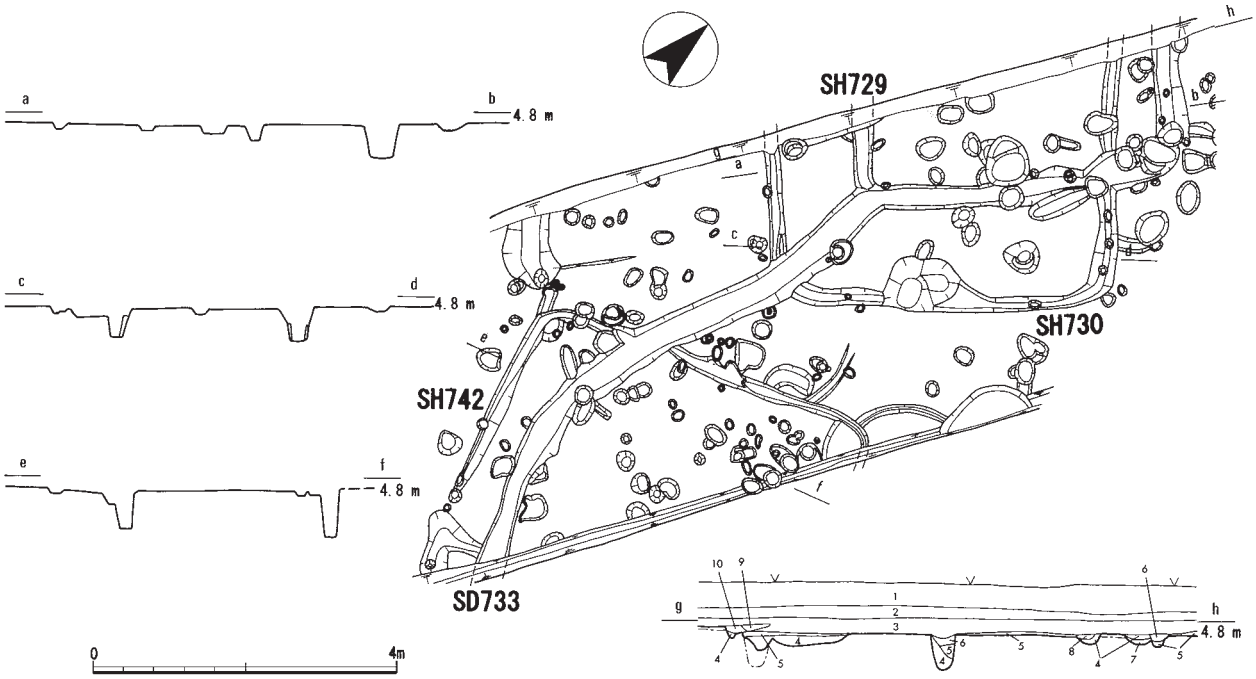
第30図　SH304・306・324・325・327・328・333・335・377・SD320平面図、断面図（1:100）※但し、SD320断面図は（1:25）



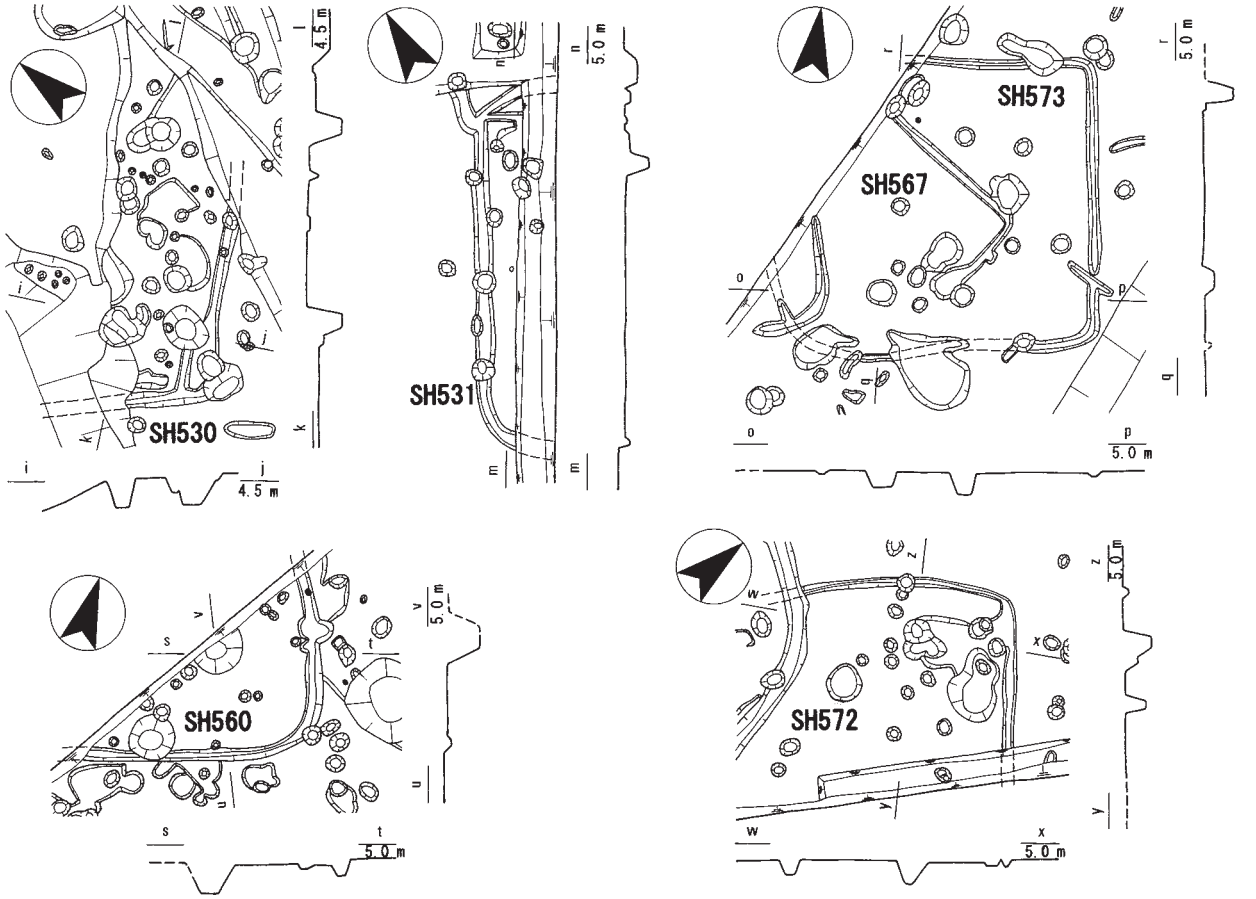
第31図　SH406・424・436・452・467・478平面図、断面図（1：100）　※アミがけは焼土



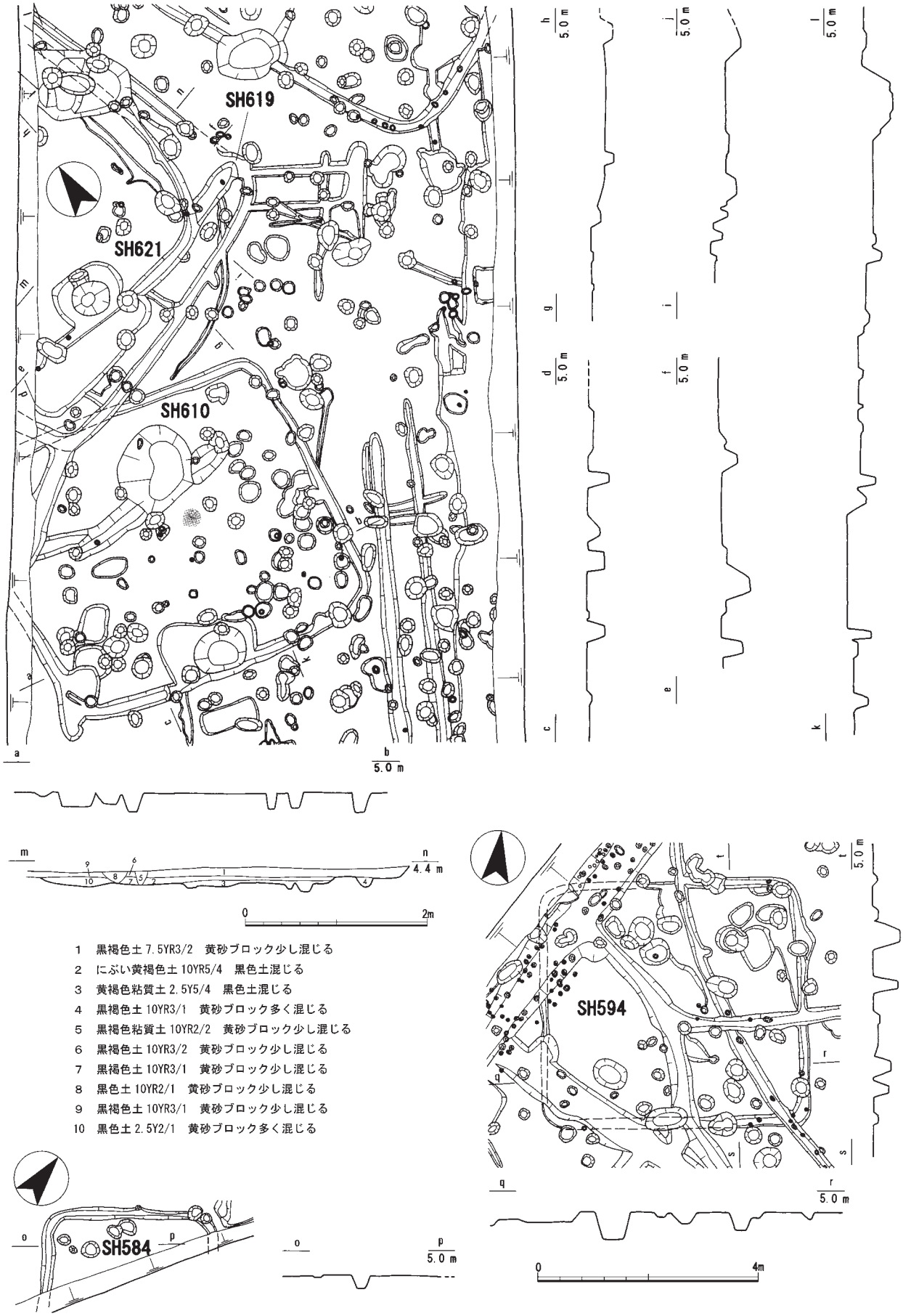
第32図　SH473・516・517・518・622・640平面図、断面図（1：100）　※アミがけは焼土



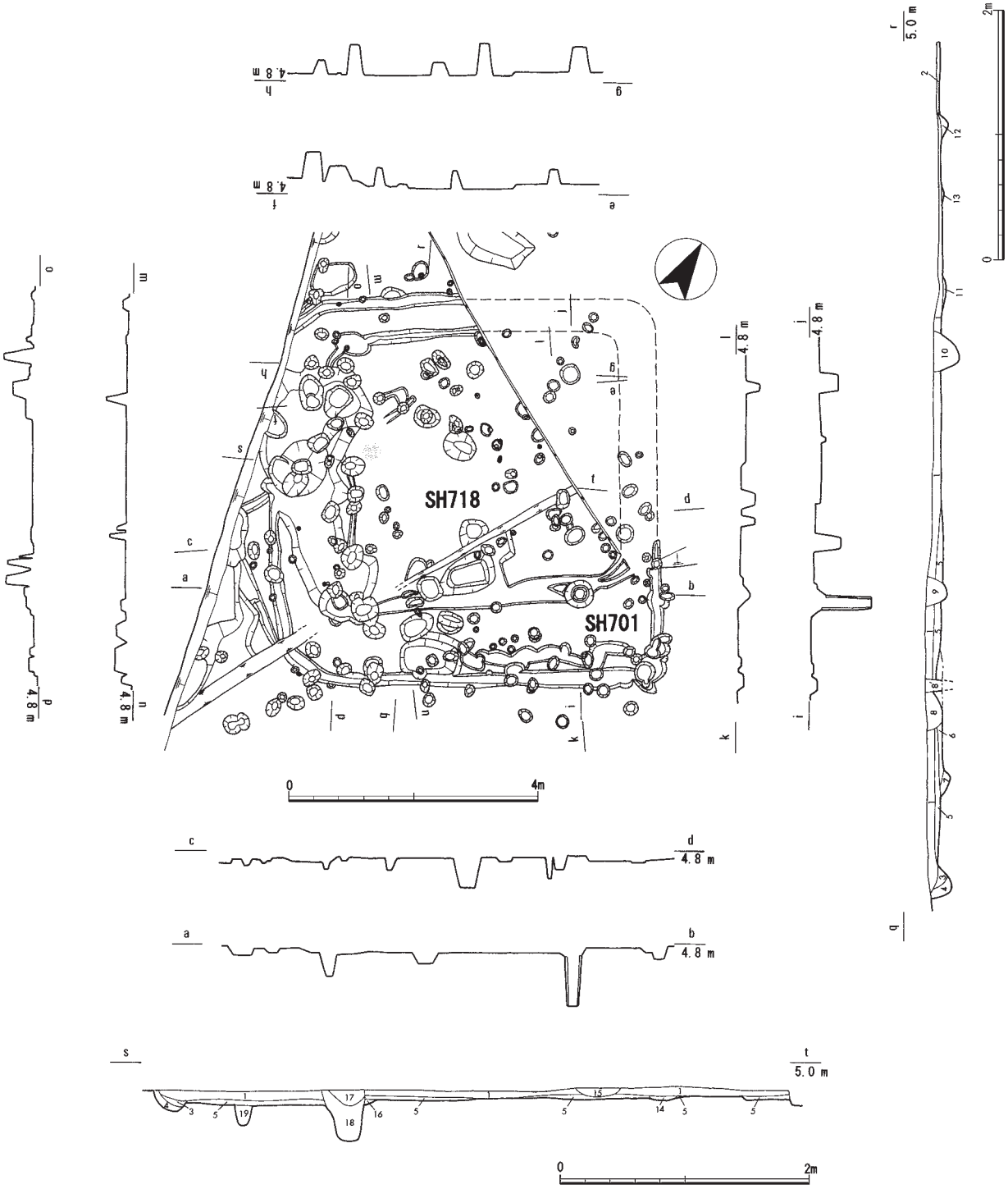
1　盛土
2　旧耕作土
3　黒褐色粘質土 7.5YR2/2　遺物片混じる（包含層）
4　黒褐色粘質土 7.5YR2/2　地山ブロック少し混じる（SH729・SH730 壁周溝埋土）
5　地山に黒褐色粘質土 7.5YR2/2 混じる
6　黒褐色粘質土 7.5YR2/2　地山ブロック・鉄分少し混じる
7　地山に淡黄色土 2.5Y8/4 ブロック混じる（SH729 壁周溝埋土）
8　地山に黒褐色粘質土 7.5YR2/2 少し混じる（SH730 壁周溝埋土）
9　灰白色土 10YR8/2　黒褐色粘質土 7.5YR2/2 少し混じる
10　黒褐色土 10YR2/2　明赤褐色土 5YR5/8・炭少し混じる



第33図　SH530・531・560・567・572・573・729・730・742・SD733平面図、断面図、土層断面図（1:100）　※アミがけは焼土

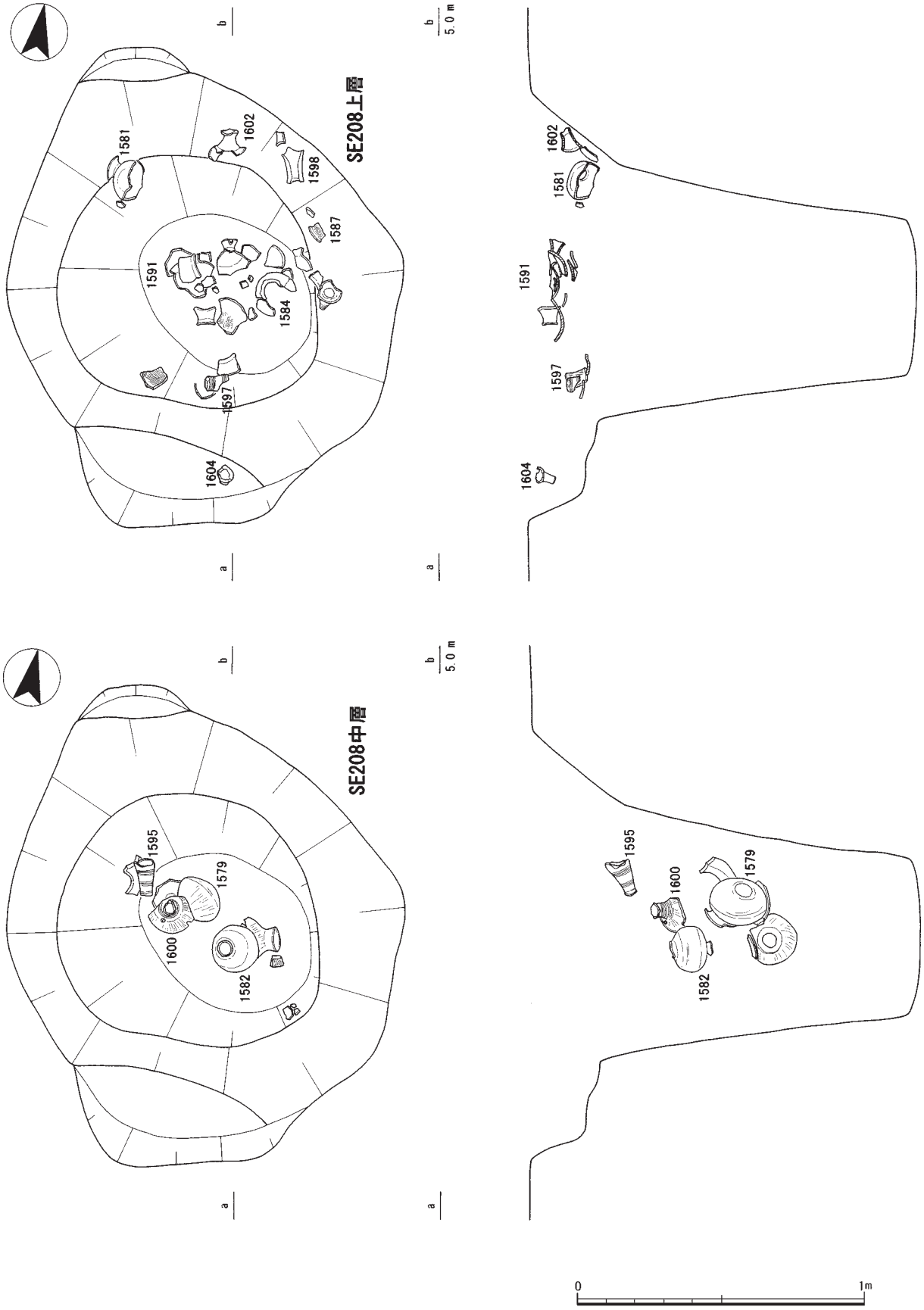


第34図　SH584・594・610・619・621平面図、断面図（1:100）、土層断面図（1:60）　※アミがけは焼土

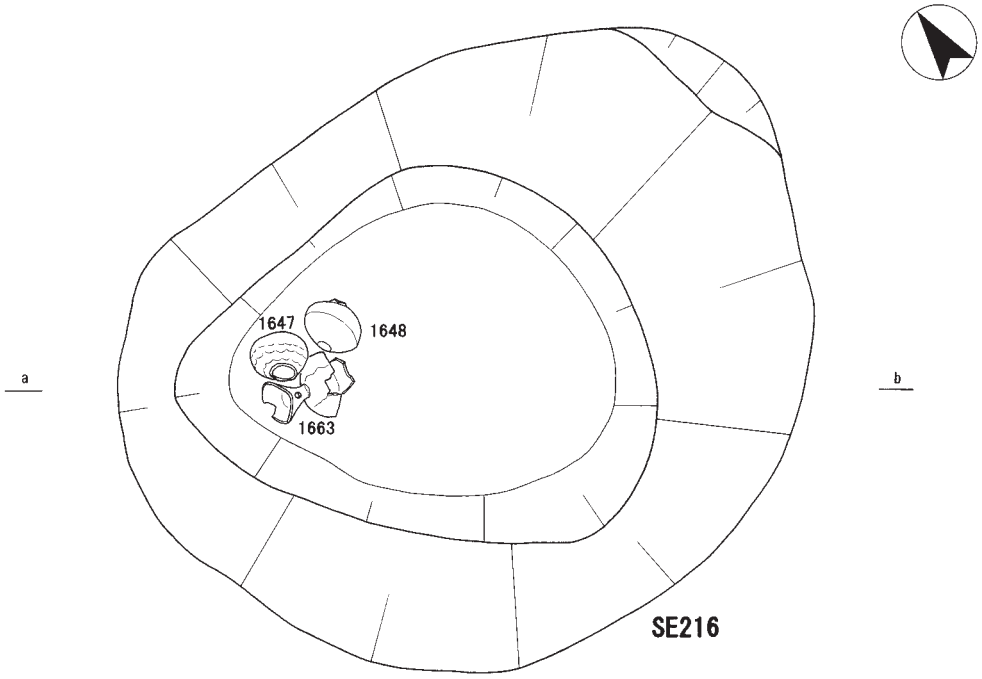


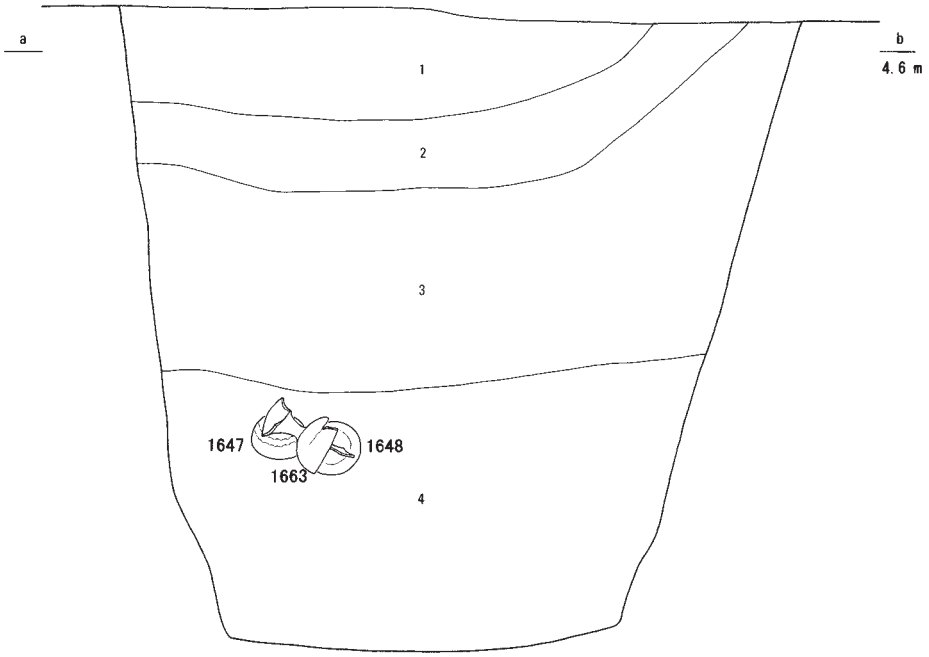
1　黒褐色土 10YR3/2　遺物片混じる（SH701 埋土）
2　黒褐色粘質土 10YR2/2（包含層）
3　黒褐色粘質土 10YR3/2　地山ブロック多く混じる（SH701 壁周溝埋土）
4　黒褐色粘質土 10YR3/2　地山ブロック混じる（SH701 壁周溝埋土）
5　黒褐色粘質土 7.5YR3/2　地山ブロック多く混じる（SH701 貼床）
6　黒褐色粘質土 7.5YR3/2　細かい地山ブロック混じる（SH718 埋土）
7　黒褐色粘質土 10YR2/2　地山ブロック混じる（SH718 壁周溝埋土）
8　黒褐色土 10YR2/3　地山ブロック混じる（pit 埋土）
8　排水パイプ埋設による撹乱
9　黒褐色土 10YR2/3　地山ブロック多く混じる
10　黒褐色粘質土 10YR2/2（pit 埋土）
11　黒色土 7.5YR2/1
12　黒褐色土 7.5YR3/2　地山ブロック多く混じる（SH701 壁周溝埋土）
13　黒褐色土 7.5YR2/2（SH718 壁周溝埋土）
14　黒褐色土 10YR2/2（pit 埋土）
15　黒褐色土 10YR2/2（pit 埋土）
16　焼土層（SH701 か SH718 の炉跡？）
17　黒褐色土 10YR2/3
18　黒褐色土 10YR2/3　地山ブロック多く混じる（pit 埋土）
19　黒褐色土 10YR2/2（pit 埋土）

第35図　SH701・718平面図、断面図（1:100）、土層断面図（1:50）　※アミがけは焼土

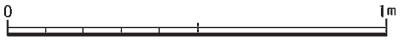


第36図　SE208遺物出土状況平面図、断面図（1：20）

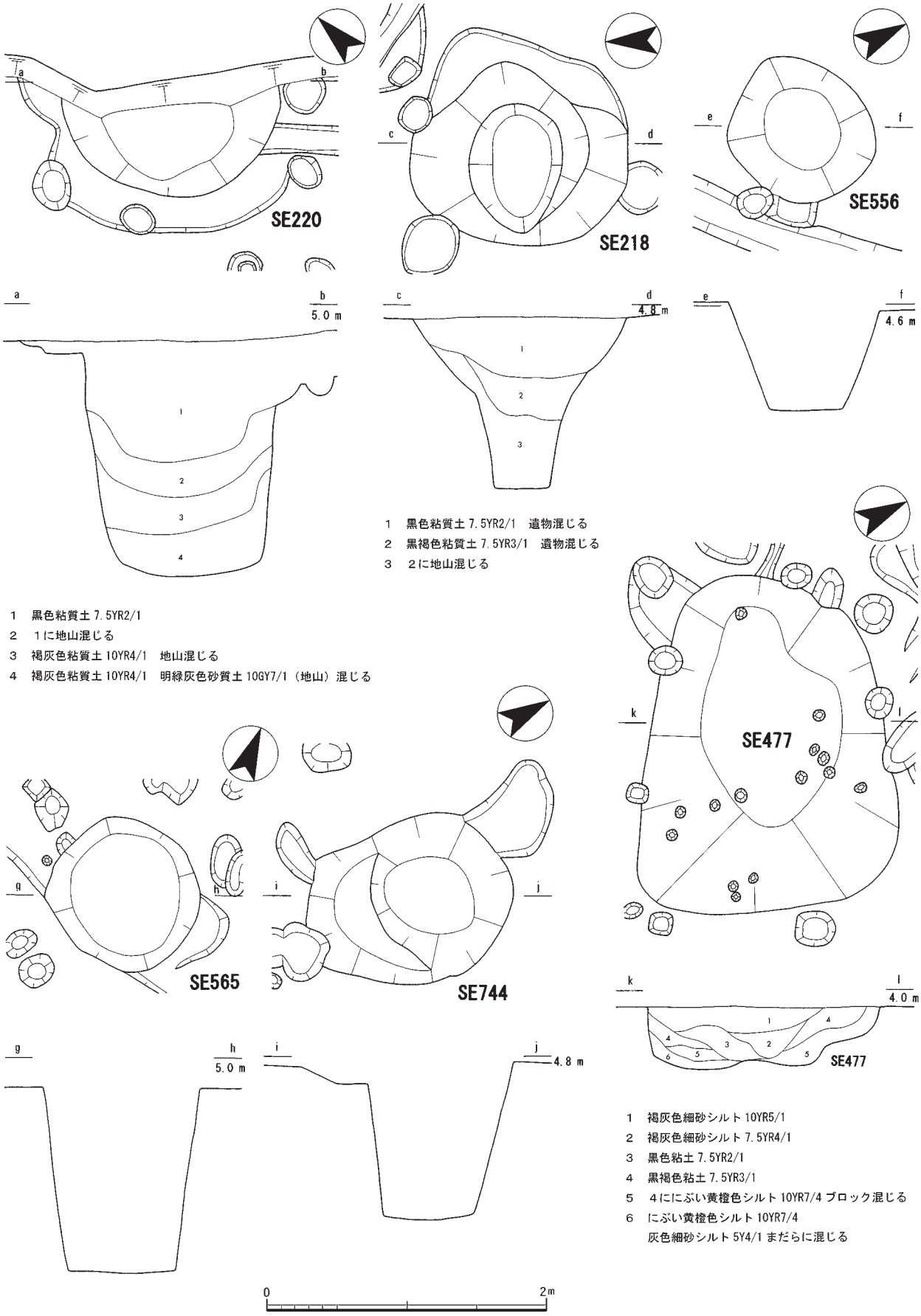




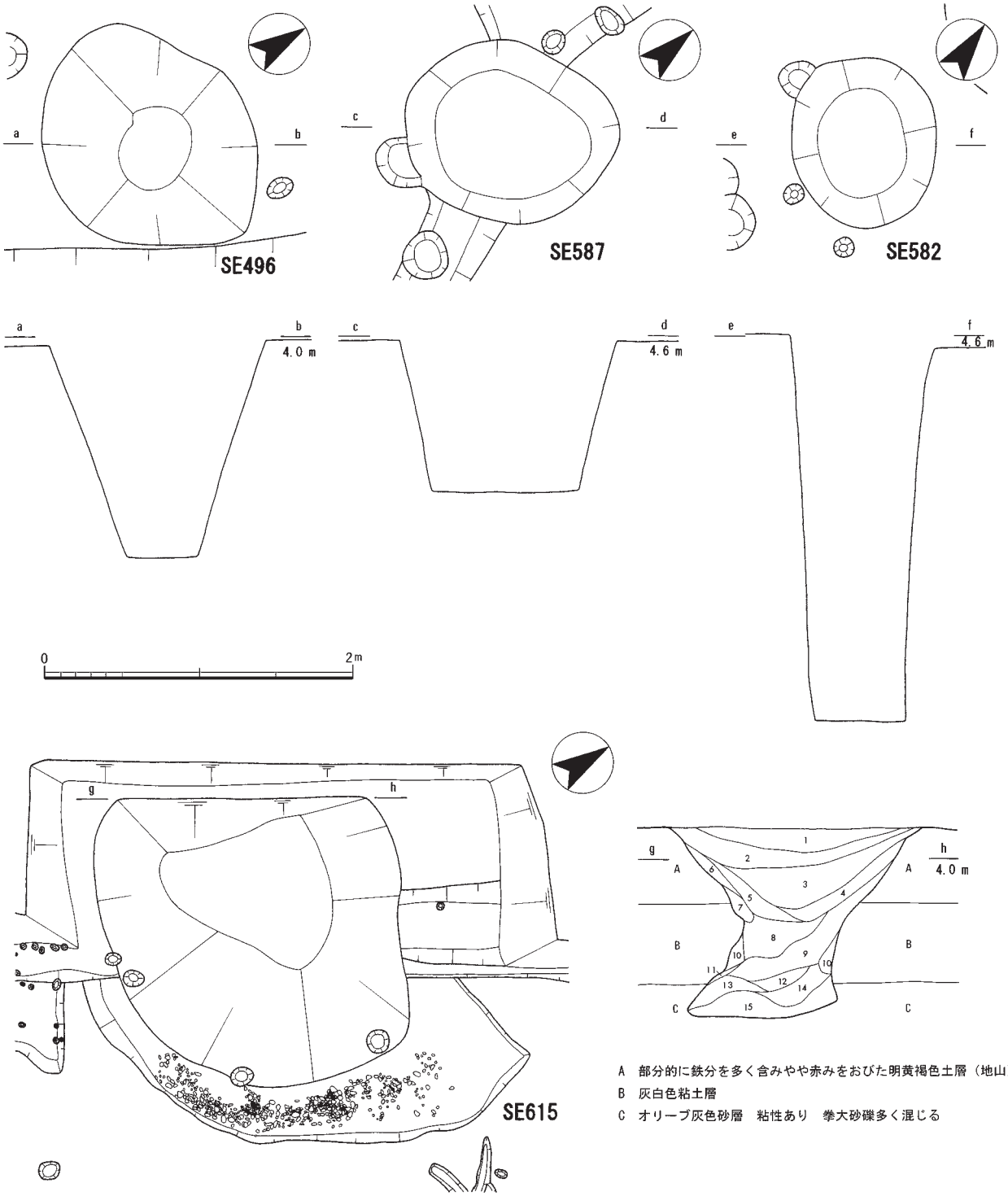
1　黒褐色粘質土 7.5YR2/1
2　黒褐色粘質土 10YR3/1　赤色土混じる
3　黒色粘質土 10YR2/1　地山・遺物細片混じる
4　黒色粘質土 5Y2/1　遺物片混じる



第37図　SE216遺物出土状況平面図、土層断面図（1:20）



第38図　SE218・220・477・556・565・744平面図、断面図（1:40）

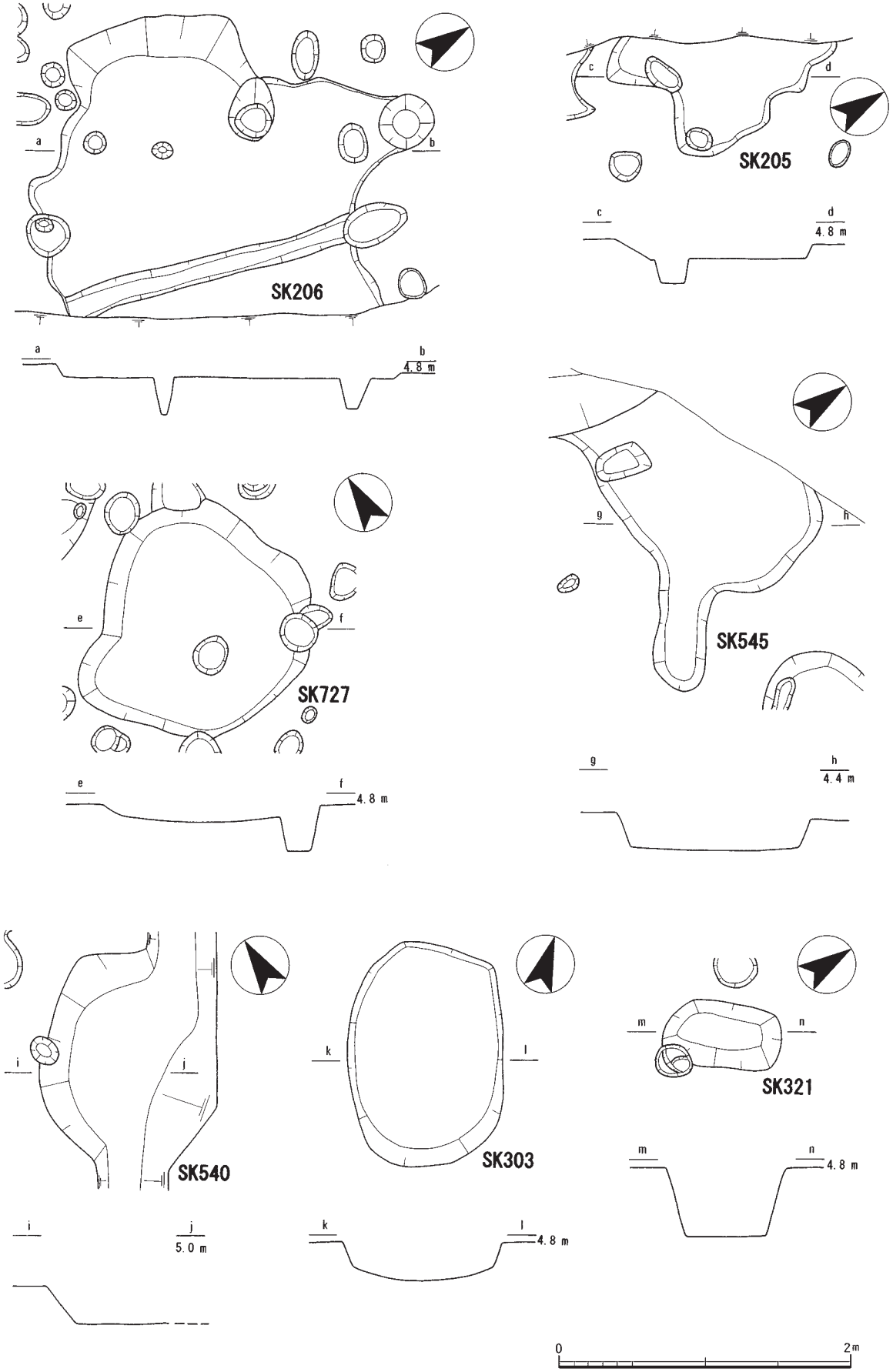


A　部分的に鉄分を多く含みやや赤みをおびた明黄褐色土層（地山）
B　灰白色粘土層
C　オリーブ灰色砂層　粘性あり　拳大砂礫多く混じる

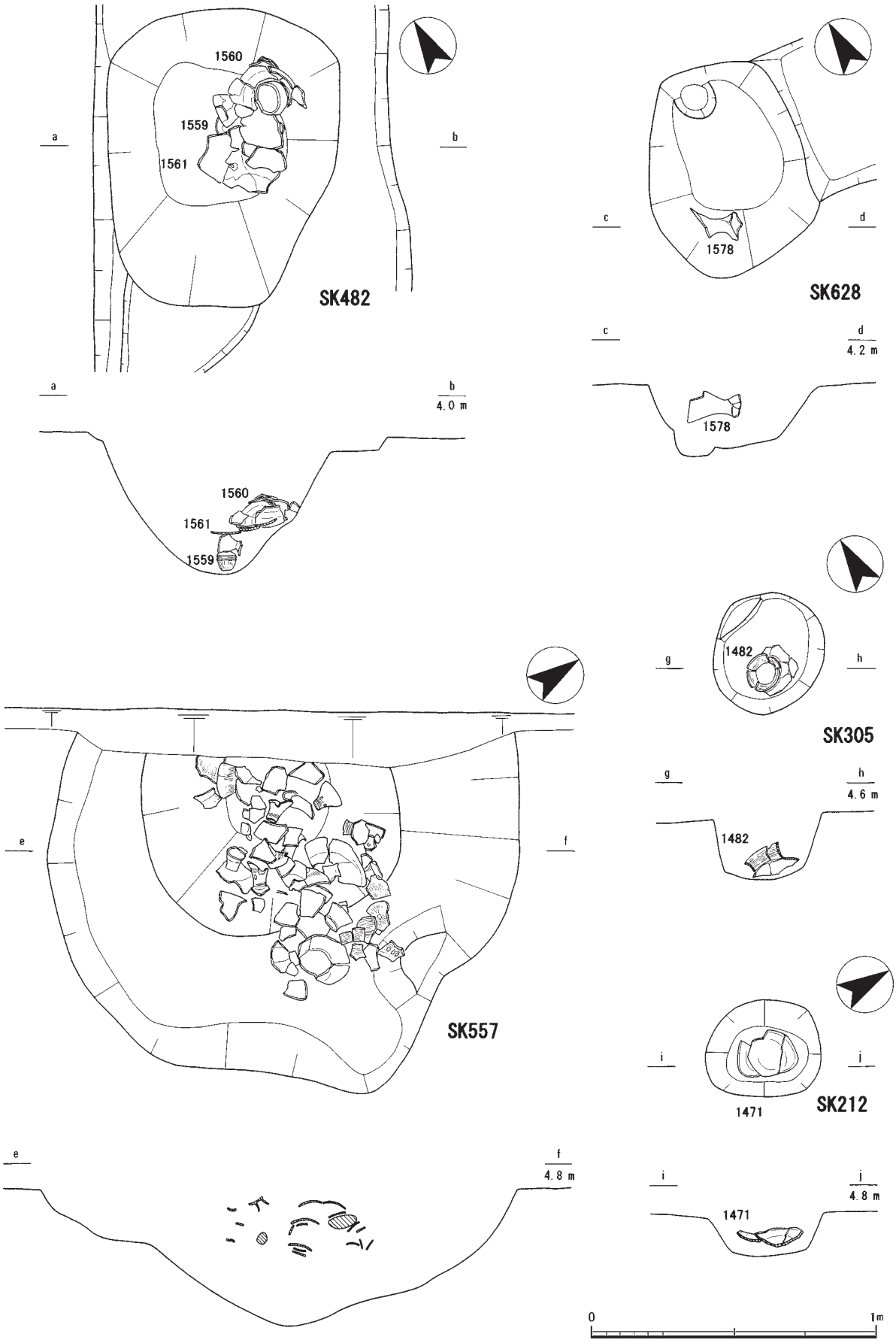
1　褐灰色土　古墳時代前期の遺物片多く混じる
2　褐色土　古墳時代前期の遺物片多く混じる
3　暗褐色土　古墳時代前期の遺物片大量に混じる
4　暗褐色土　明黄褐色土粒・古墳時代前期の遺物片混じる
5　褐灰色土　明黄褐色土粒多く混じる
6　褐灰色土　明黄褐色土粒・ブロック大量に混じる
7　オリーブ灰色粘土　灰褐色粘質土ブロック・遺物片混じる
8　暗灰褐色粘質土　粘性強い　遺物片混じる
9　オリーブ灰色粘土と暗灰褐色土が混在する粘質土　粘性非常に強い　建築部材・農耕具等の木製品大量に混じる
10　暗灰褐色粘質土　灰白色粘土ブロック混じる
11　暗灰色粘質土　木製品混じる
12　やや暗いオリーブ灰色粘土　木製品混じる
13　暗灰白色粘質土　灰白色粘土ブロック混じる
14　12よりやや黄色味をおびる　建築部材等大量に混じる
15　暗灰色粘質土　粘性強い　植物遺体大量に混じる

0　4m

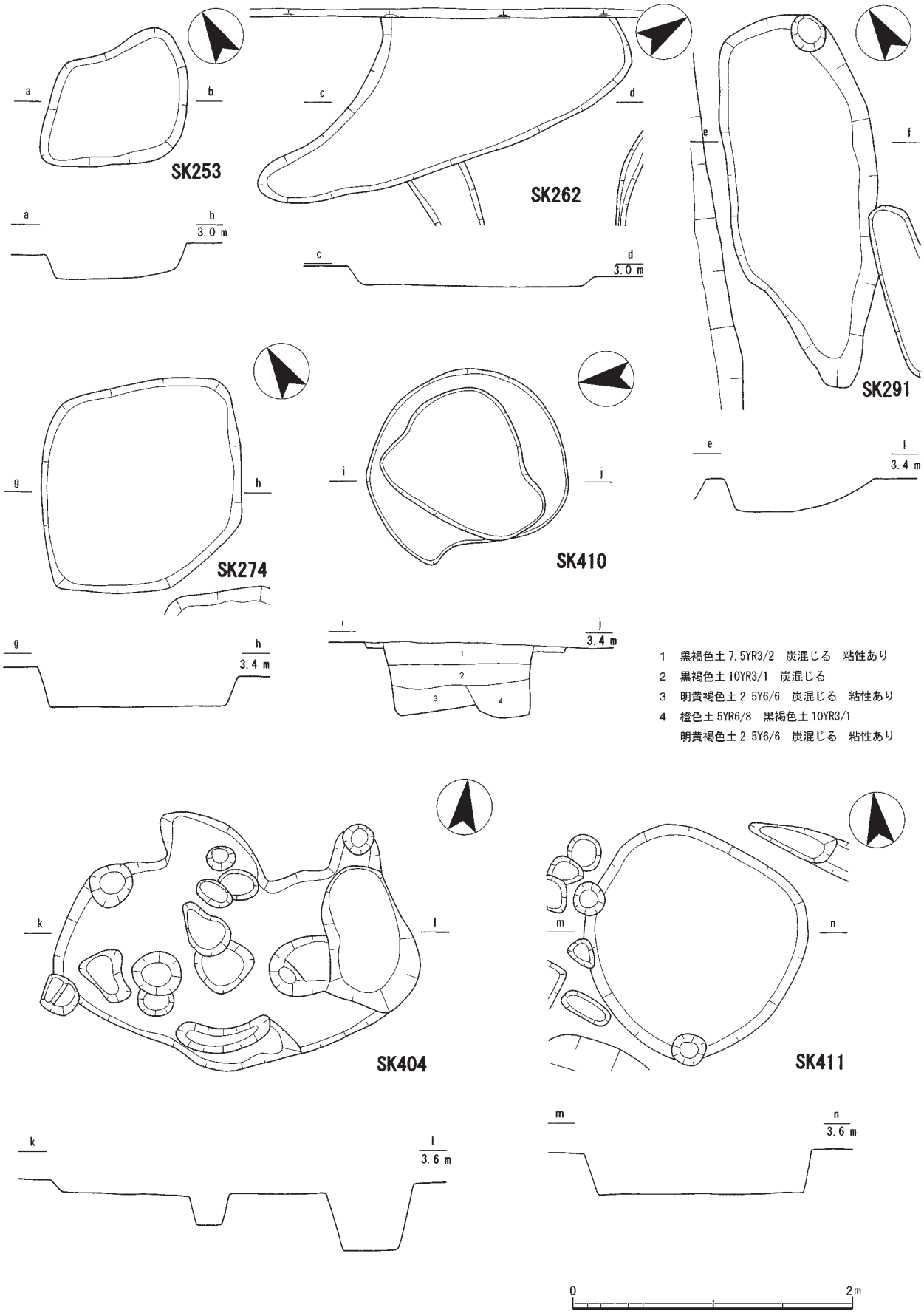
第39図　SE496・582・587平面図、断面図（1:40）、SE615平面図、土層断面図（1:80）



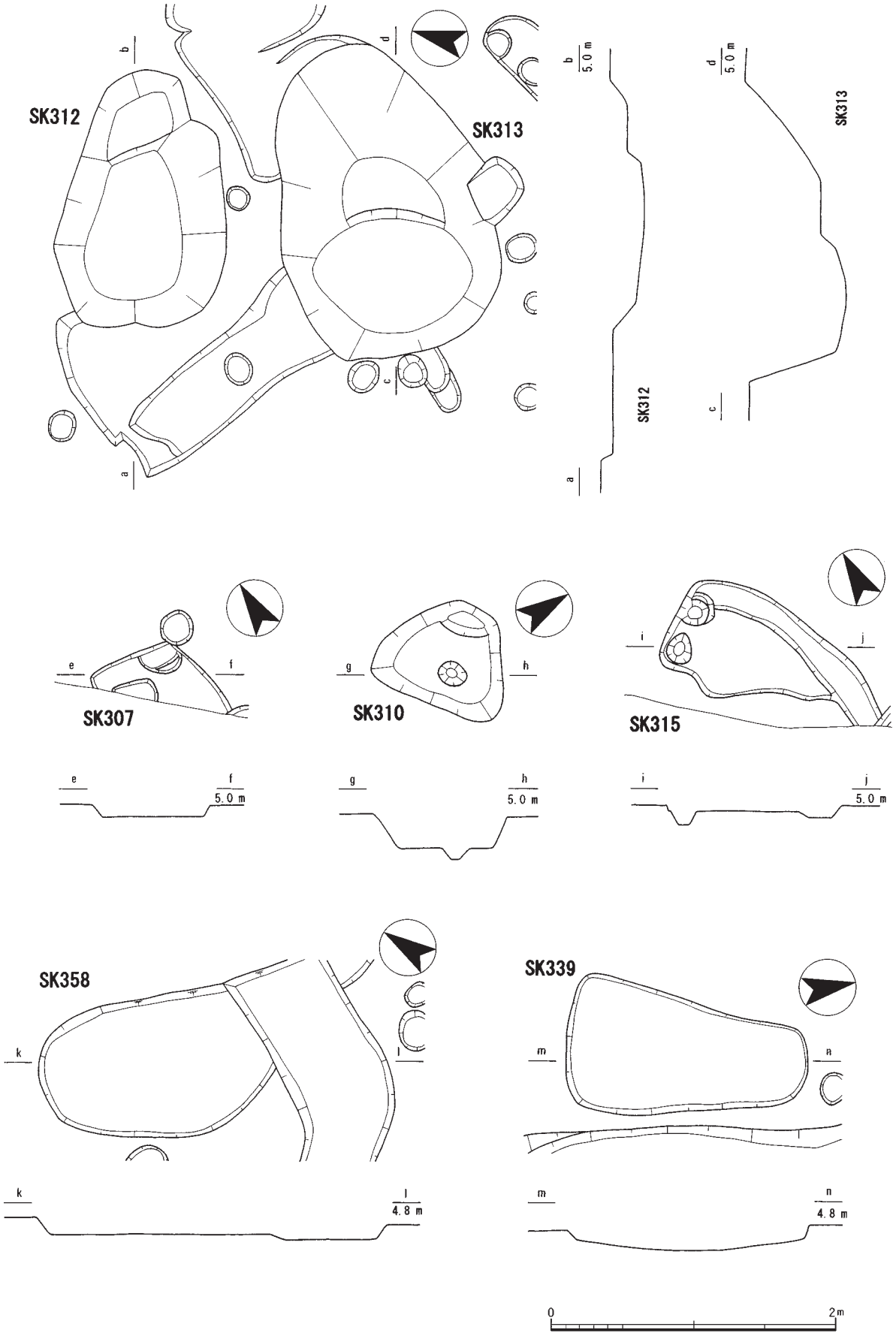
第40図　SK205・206・303・321・540・545・727平面図、断面図（1:40）



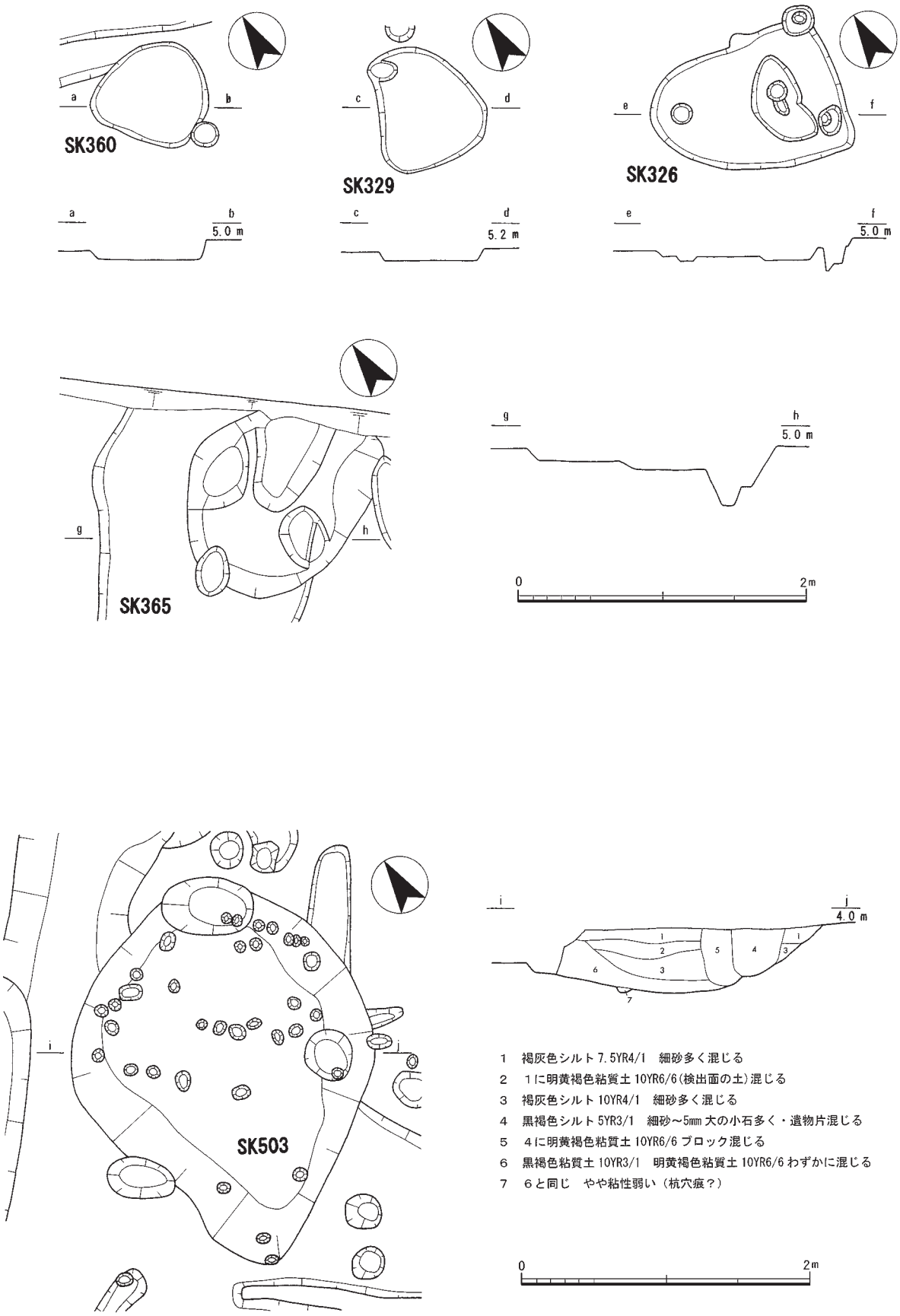
第41図　SK212・305・482・557・628遺物出土状況平面図、断面図（1:20）



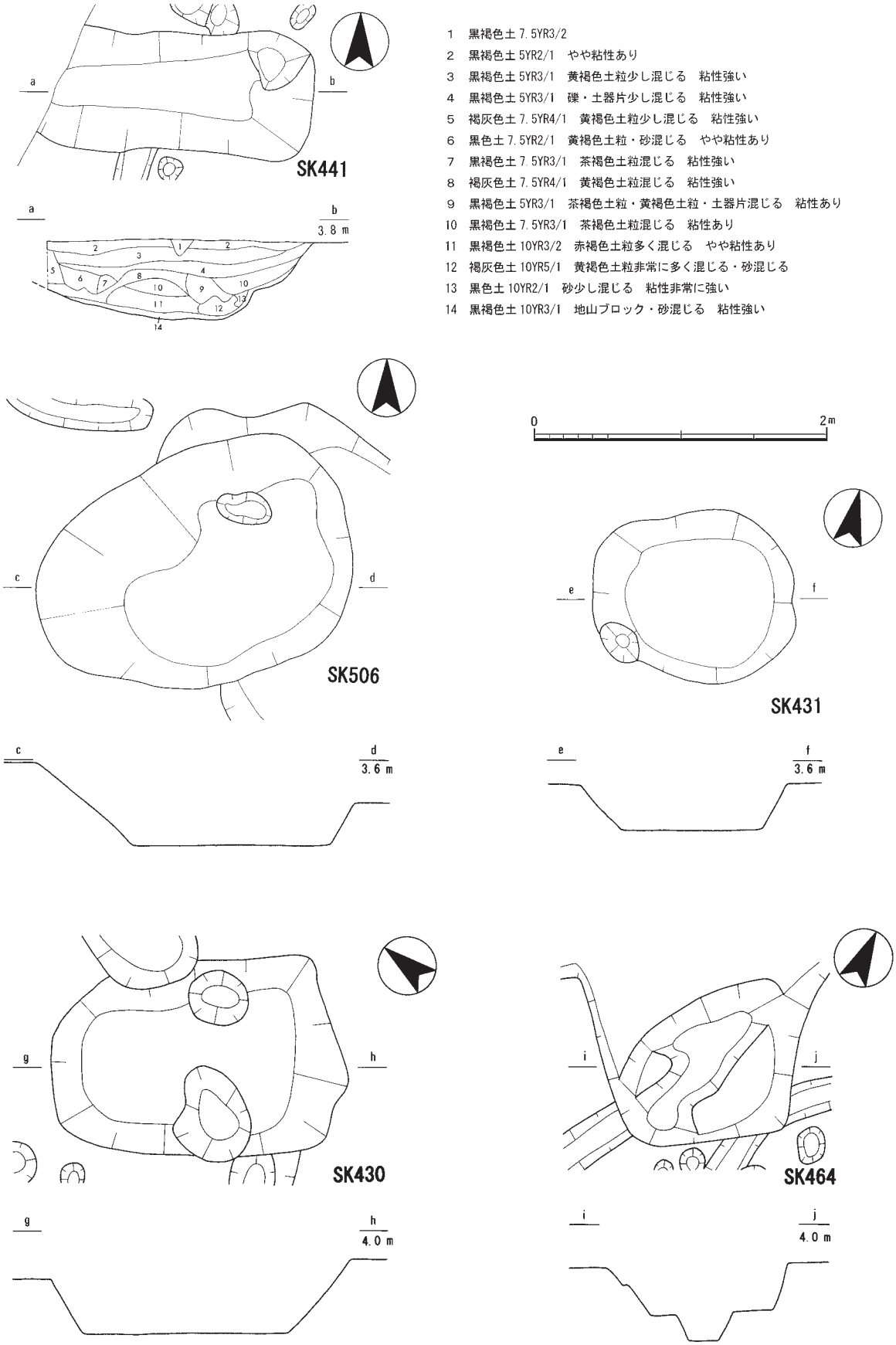
第42図 SK253・262・274・291・404・410・411平面図、断面図、土層断面図（1:40）



第43図　SK307・310・312・313・315・339・358平面図、断面図（1:40）

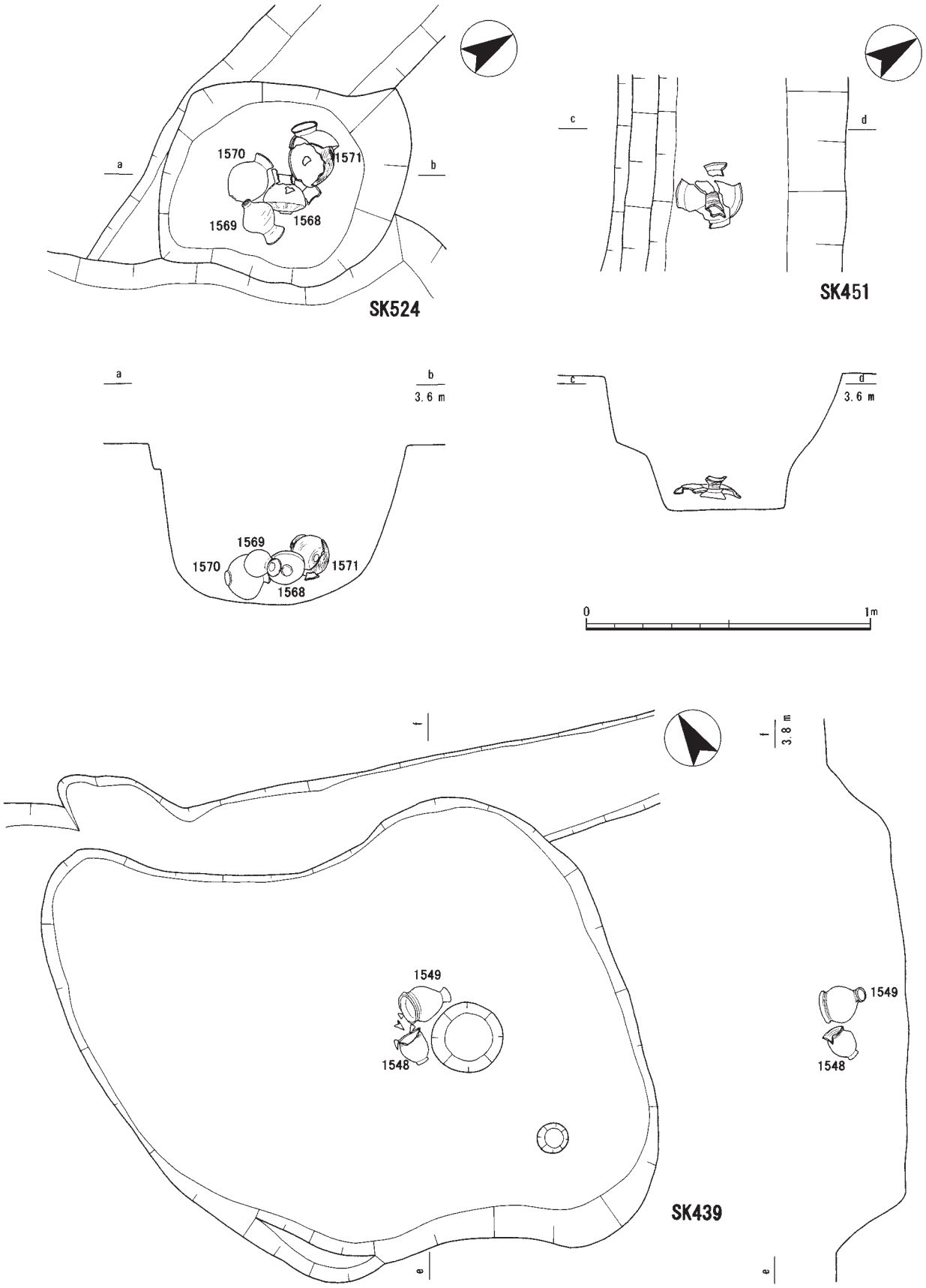


第44図　SK326・329・360・365・503平面図、断面図、土層断面図（1:40）

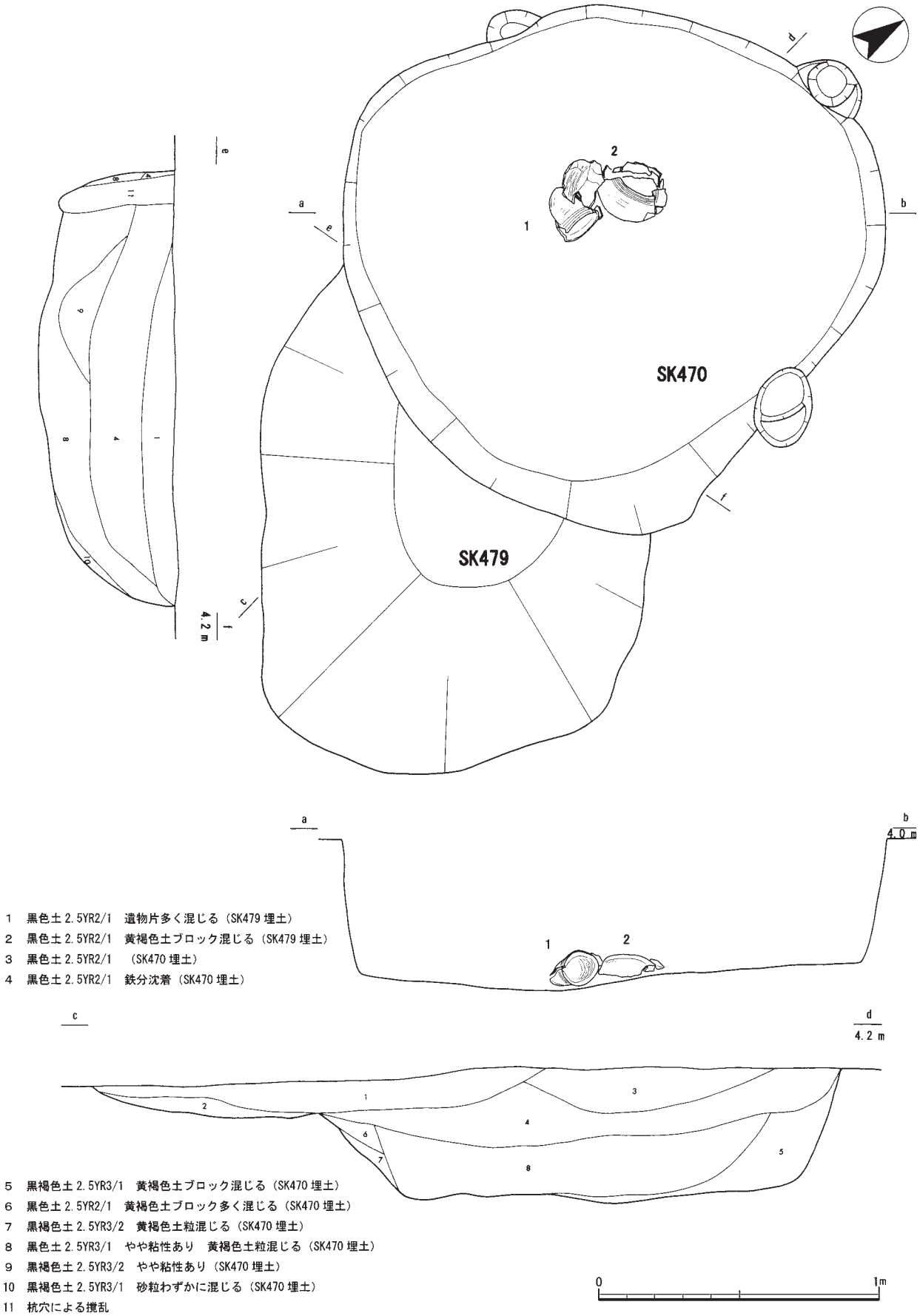


1　黒褐色土 7.5YR3/2
2　黒褐色土 5YR2/1　やや粘性あり
3　黒褐色土 5YR3/1　黄褐色土粒少し混じる　粘性強い
4　黒褐色土 5YR3/1　礫・土器片少し混じる　粘性強い
5　褐灰色土 7.5YR4/1　黄褐色土粒少し混じる　粘性強い
6　黒色土 7.5YR2/1　黄褐色土粒・砂混じる　やや粘性あり
7　黒褐色土 7.5YR3/1　茶褐色土粒混じる　粘性強い
8　褐灰色土 7.5YR4/1　黄褐色土粒混じる　粘性強い
9　黒褐色土 5YR3/1　茶褐色土粒・黄褐色土粒・土器片混じる　粘性あり
10　黒褐色土 7.5YR3/1　茶褐色土粒混じる　粘性あり
11　黒褐色土 10YR3/2　赤褐色土粒多く混じる　やや粘性あり
12　褐灰色土 10YR5/1　黄褐色土粒非常に多く混じる・砂混じる
13　黒色土 10YR2/1　砂少し混じる　粘性非常に強い
14　黒褐色土 10YR3/1　地山ブロック・砂混じる　粘性強い

第45図　SK430・431・441・464・506平面図、断面図、土層断面図（1:40）

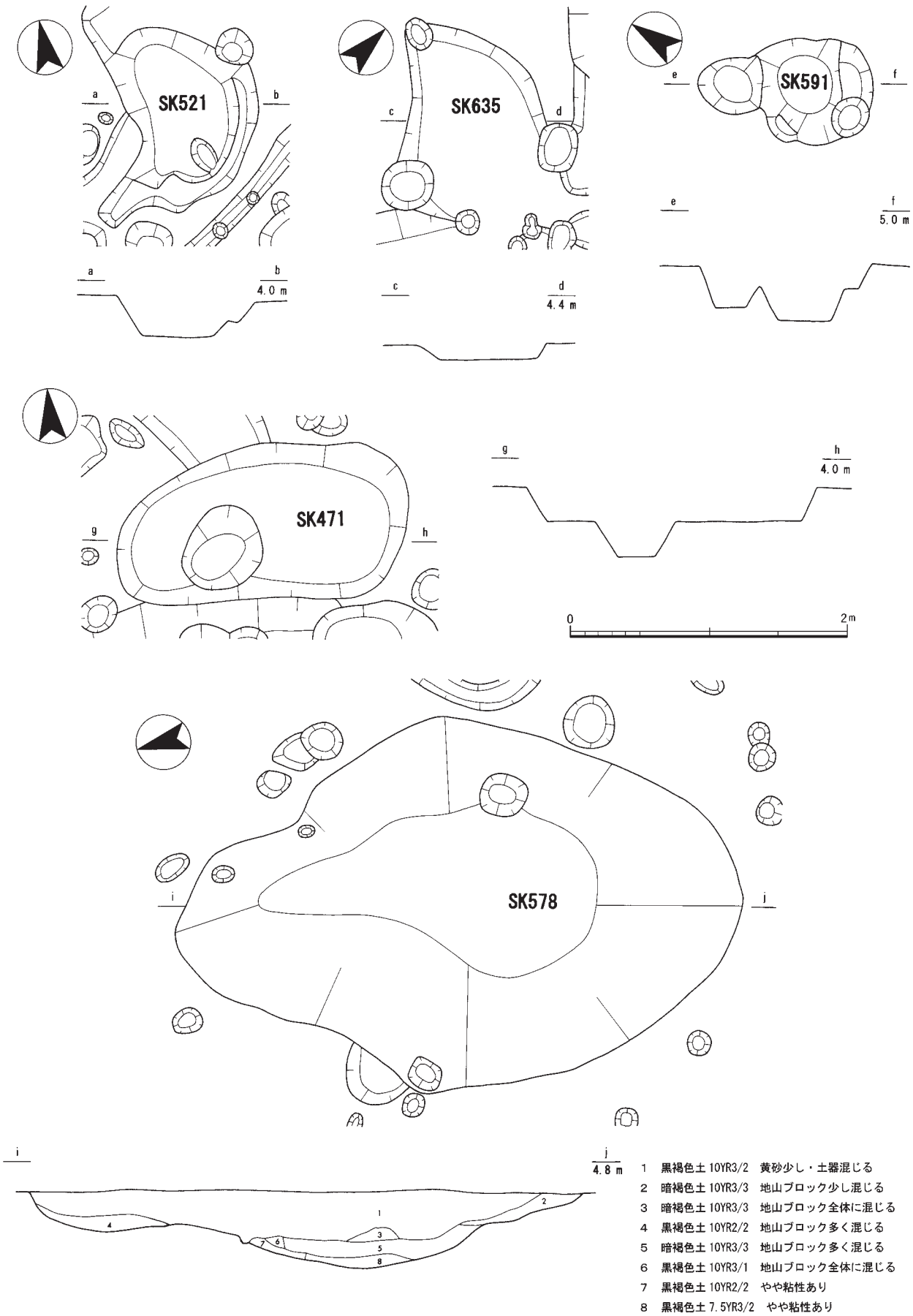


第46図　SK439・451・524遺物出土状況平面図、断面図（1:20）



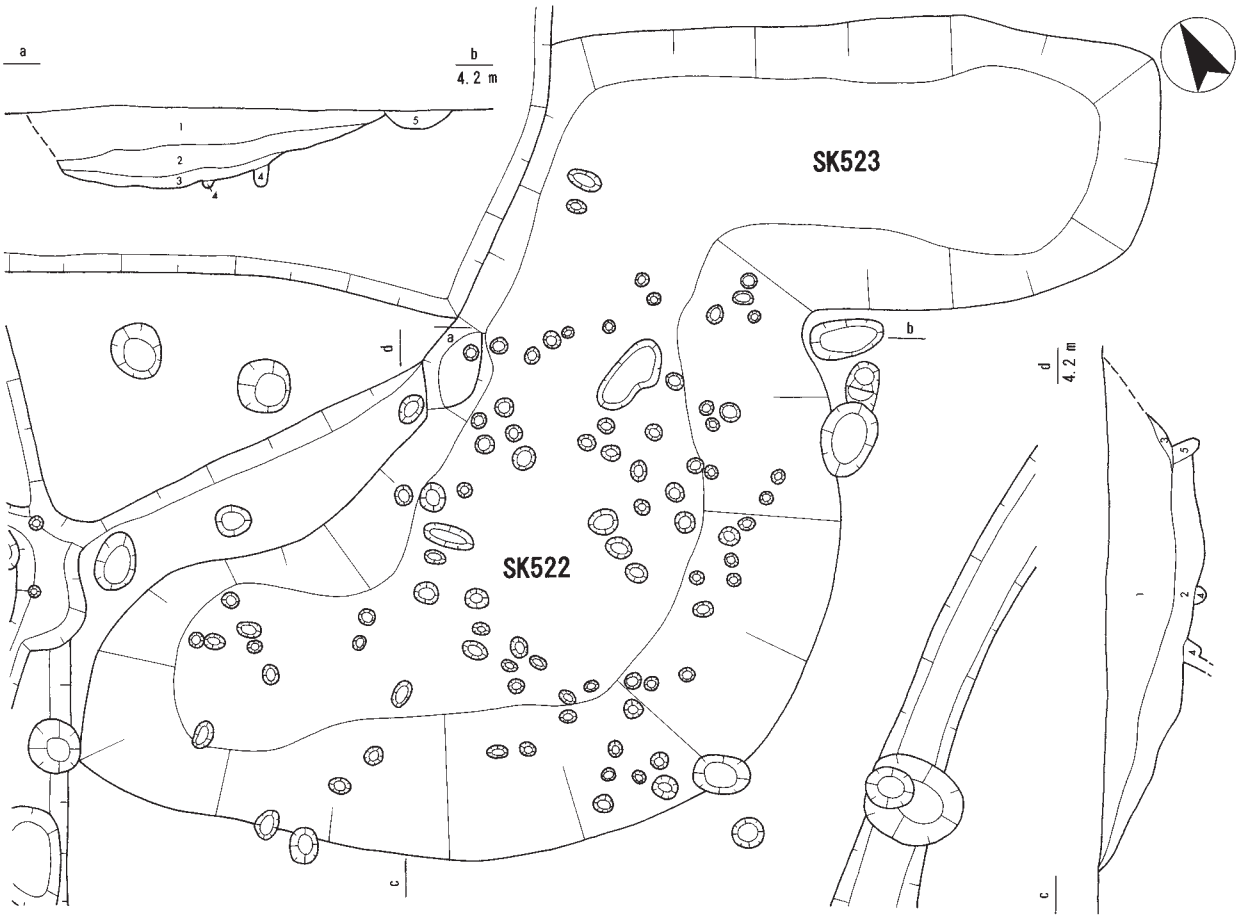
1　黒色土 2.5YR2/1　遺物片多く混じる（SK479 埋土）
2　黒色土 2.5YR2/1　黄褐色土ブロック混じる（SK479 埋土）
3　黒色土 2.5YR2/1　（SK470 埋土）
4　黒色土 2.5YR2/1　鉄分沈着（SK470 埋土）
5　黒褐色土 2.5YR3/1　黄褐色土ブロック混じる（SK470 埋土）
6　黒色土 2.5YR2/1　黄褐色土ブロック多く混じる（SK470 埋土）
7　黒褐色土 2.5YR3/2　黄褐色土粒混じる（SK470 埋土）
8　黒色土 2.5YR3/1　やや粘性あり　黄褐色土粒混じる（SK470 埋土）
9　黒褐色土 2.5YR3/2　やや粘性あり（SK470 埋土）
10　黒褐色土 2.5YR3/1　砂粒わずかに混じる（SK470 埋土）
11　杭穴による攪乱

第47図　SK470・479遺物出土状況平面図、断面図、土層断面図（1:20）



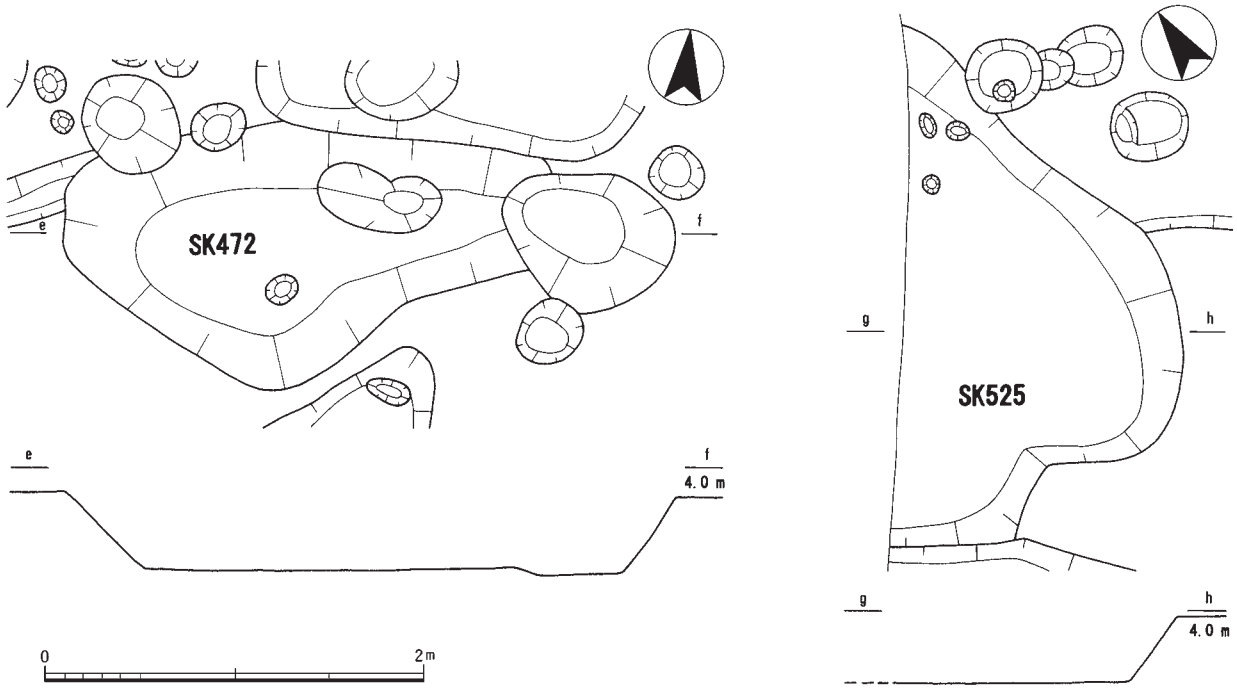
第48図　SK471・521・578・591・635平面図、断面図、土層断面図（1:40）

第49図　SK7遺物出土状況平面図、断面図（1:20）、SD5・SK6・7平面図、断面図（1:40）

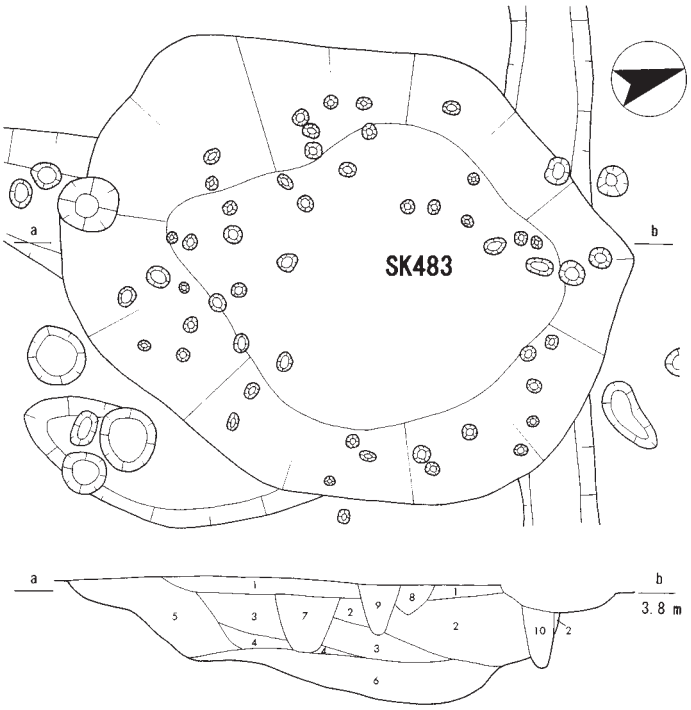


1　褐灰色シルト 10YR4/1　細砂多く混じる
2　黒褐色粘質土 10YR3/1　明黄褐色粘質土 10YR6/6 ブロック混じる
3　２に灰色細砂混じる
4　黒褐色粘質土 10YR3/1　粘性弱い（杭穴痕？）
5　褐灰色シルト 10YR4/1　明黄褐色粘質土 10YR6/6 混じる（Pit 埋土）

1　褐灰色シルト 10YR4/1　細砂多く混じる
2　黒褐色粘質土 10YR3/1　明黄褐色粘質土 10YR6/6 ブロック混じる
3　褐灰色シルト 10YR4/1　明黄褐色粘質土 10YR6/6 ブロック混じる
4　２と同じ　やや粘性弱い（杭穴痕？）
5　黒色粘質土 10YR2/1（杭穴痕？）

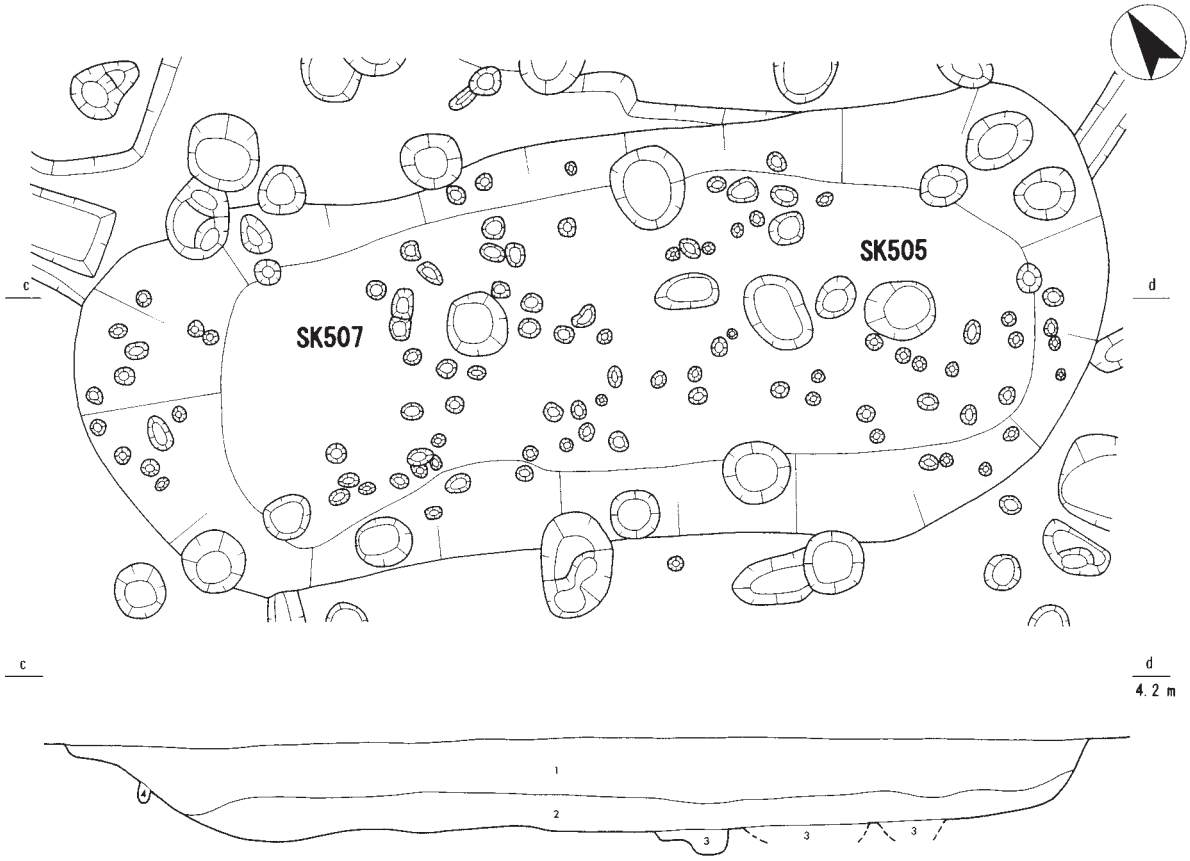


第50図　SK472・522・523・525平面図、断面図、土層断面図（1:40）



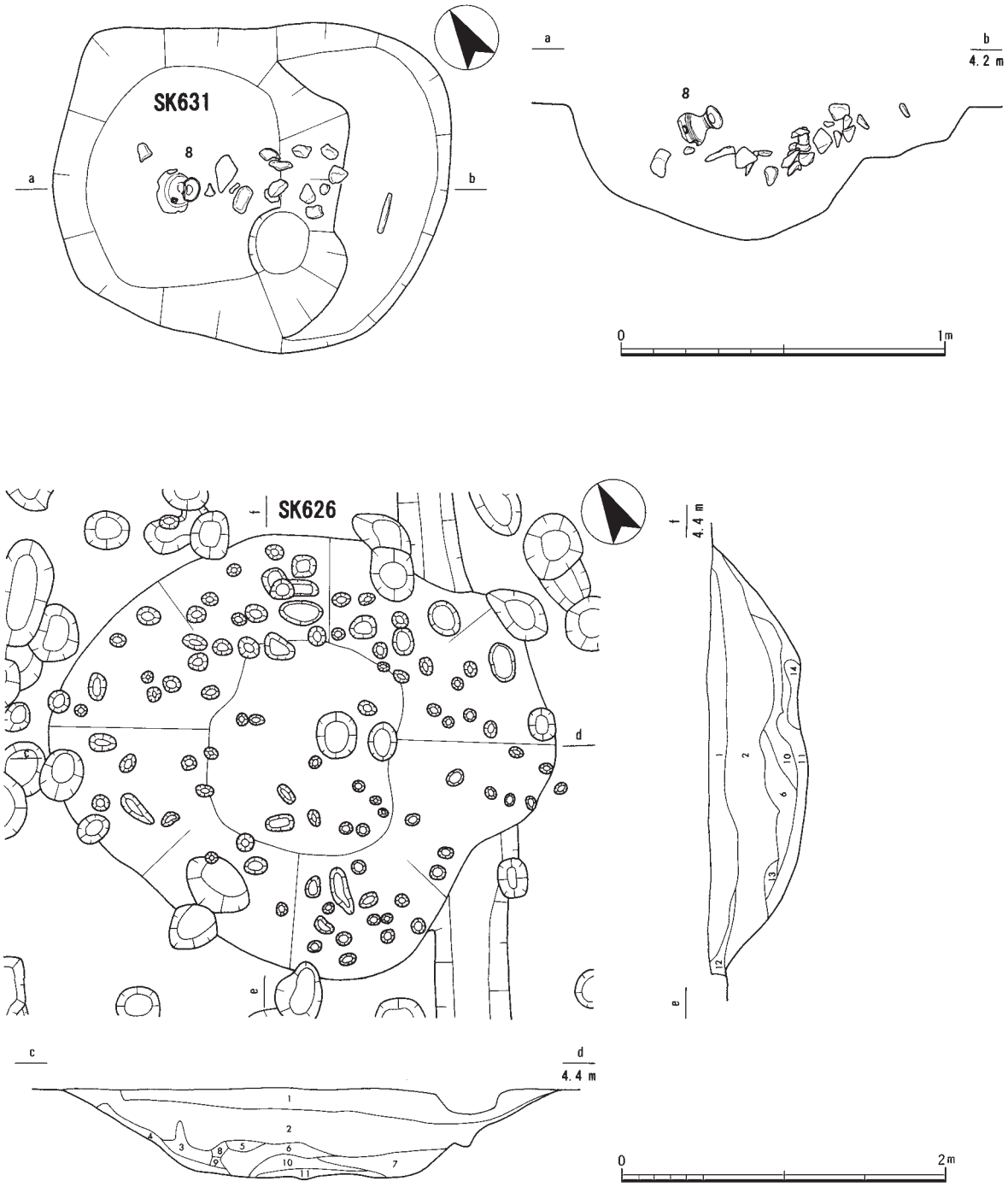
1　黒褐色土 5YR2/2　遺物細片混じる
2　黒褐色土 5YR3/1　粘性あり
3　黒色土 5YR1.7/1
4　黒色土 7.5YR1.7/1　酸化鉄粒状に混じる
5　黒色土 10YR1.7/1　黄褐色土ブロック多く混じる
6　黒色土 5YR1.7/1　黄褐色土粒・ブロック混じる
7　黒色土 7.5YR2/1　遺物片混じる（Pit 埋土）
8　黒色土 7.5YR1.7/1　黄褐色土粒混じる（Pit 埋土）
9　極暗褐色土 7.5YR2/3　遺物片混じる（Pit 埋土）
10　黒褐色土 7.5YR2/2　黄褐色土粒混じる　粘性あり（Pit 埋土）

0　2m



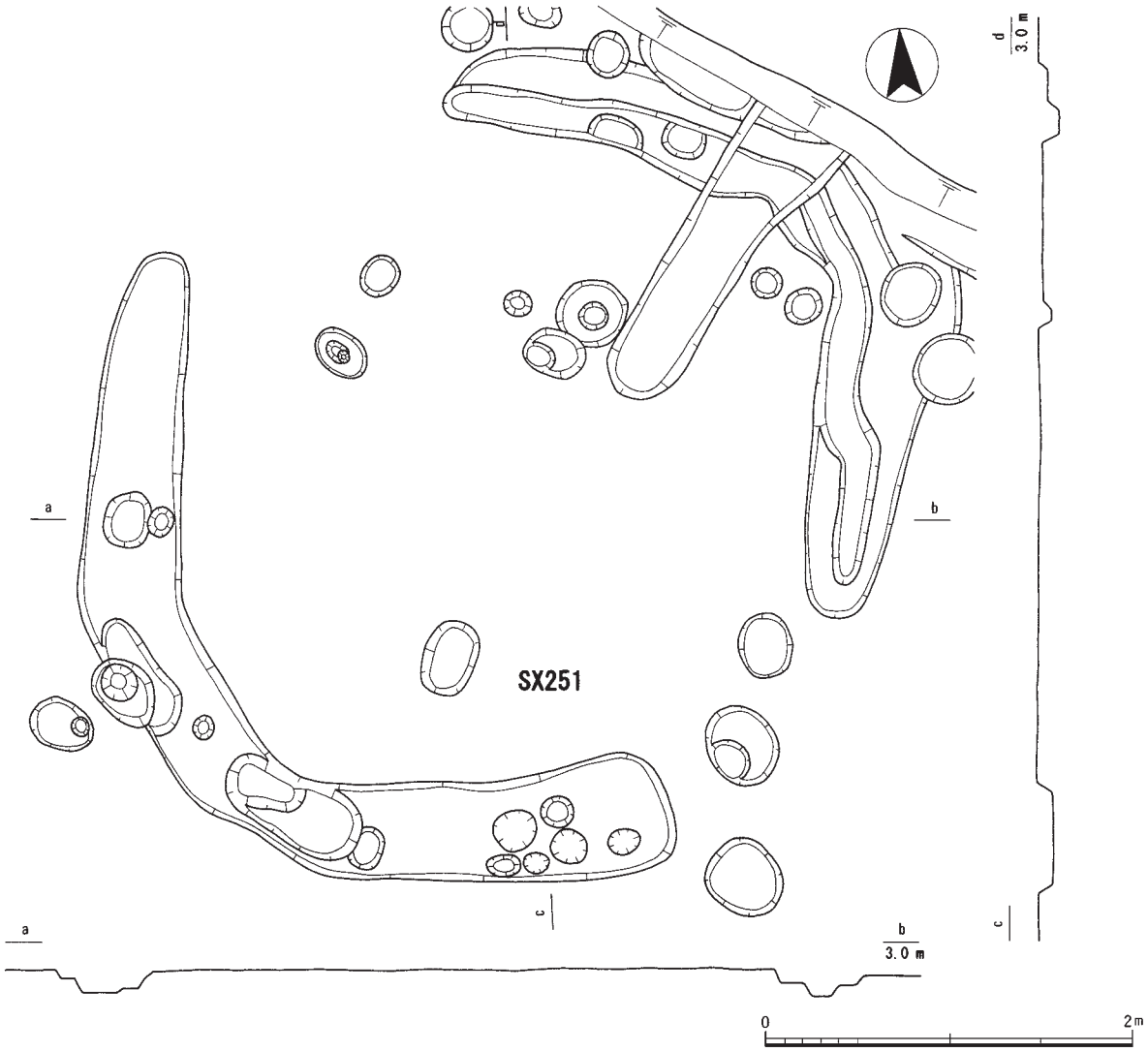
1　黒褐色粘質土 5YR2/1
2　黒色粘質土 10YR1.7/1　明黄褐色粘質土 10YR7/6 まだらに混じる
3　黒色粘質土 2.5Y2/1　明黄褐色粘質土 10YR7/6 まだらに混じる
4　1とほぼ同色　粘性弱い（杭穴痕？）

第51図　SK483・505・507平面図、土層断面図（1:40）



1　黒色土 7.5YR2/1　粘性弱い
2　黒色土 10YR1.7/1
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3　黄砂ブロック少し混じる
4　明黄褐色土 10YR6/6　黄砂ブロック多く混じる
5　黒色土 10YR1.7/1　しまりなし　黄砂ブロック少し混じる
6　黒褐色土 7.5YR3/1　黄砂ブロック少し混じる
7　黒色土 10YR2/1　黄砂ブロック少し混じる
8　黒褐色土 10YR2/3　黄砂ブロック混じる
9　黒色土 7.5YR2/1
10　黒褐色土 7.5YR3/2　しまりなし
11　黒褐色土 10YR3/2　粘性弱い
12　黒褐色砂質土 7.5YR3/2
13　黒褐色土 7.5YR3/1　しまりなし
14　にぶい橙色土 7.5YR6/4　黄砂ブロック多く混じる

第52図　SK626平面図、土層断面図（1:40）、SK631遺物出土状況平面図、断面図（1:20）



第53図　SX251平面図、断面図（1:40）

焼失家屋を処分したことが想定される。

方形周溝墓

調査区北端に偏って検出された。ただし、方形周溝墓とするには溝が浅く狭い。竪穴住居の周溝である可能性もある。

ＳＸ251（第53図）

周溝は南東と北西隅が途切れる。

ＳＸ252（第54図）

北辺でＳＸ251に接し、周溝は北側が途切れる。

ＳＸ256（第56図）

ＳＸ252の西側に並存する。周溝は北側が削平されている。

木棺墓

いずれも平面形は隅丸長方形で、長軸方向の両端内部に細長い溝状の遺構を伴う。これは棺の木口を固定するためのものと想定できる。

ＳＸ510（第58図）

遺構検出時に、長さ約2.0m、幅約1.0mの棺痕跡が確認された。

ＳＸ637（第58図）

棺痕跡は確認されなかった。

ＳＸ646（第58図）

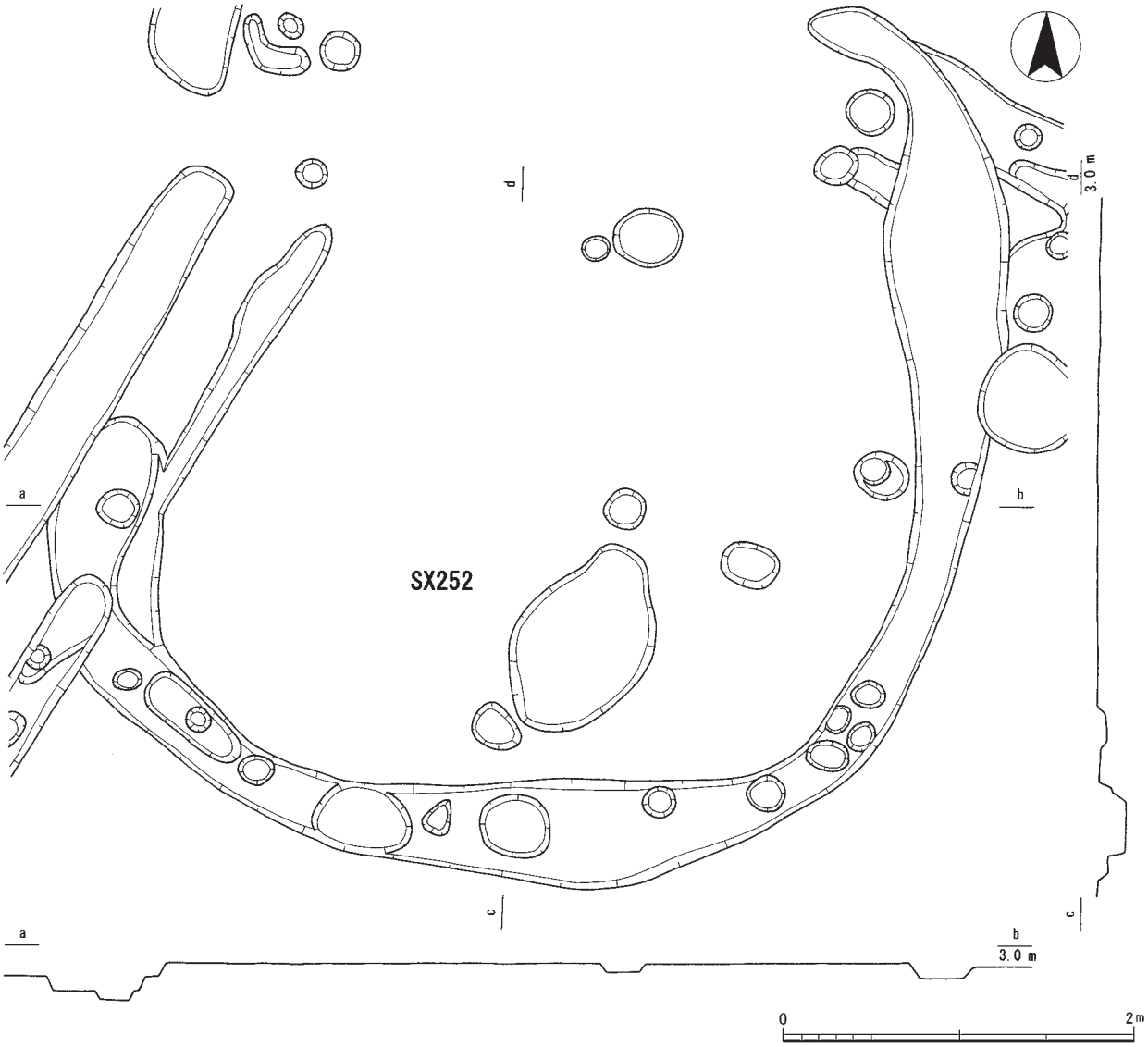
棺痕跡は確認されなかった。

③ 中世

この時期の遺構には井戸２基、溝30条、土坑３基がある。

井戸

ＳＥ582（第39図）



第54図　SX252平面図、断面図（1:40）

平面形はやや楕円形である。底近くで土師器皿や板状木製品が出土した。

ＳＥ587（第39図）

平面形は楕円形である。

２　Ｂ地区

第３次調査の「県道東」に相当する。

(1) 基本層序

第１層が道路敷設造成時の盛土、第２層が黒褐色粘質土（旧耕作土）、第３層が黄褐色粘質土（基盤層）である。遺構検出は第３層上面でおこなった。

(2) 検出遺構

① 弥生時代後期から古墳時代初頭

この時期の遺構には、竪穴住居６棟、前述の環濠ＳＤ301（ＳＤ282・ＳＤ741）１条、溝11条、土坑12基、不明遺構２基がある。

竪穴住居

ＳＨ531（第33図）

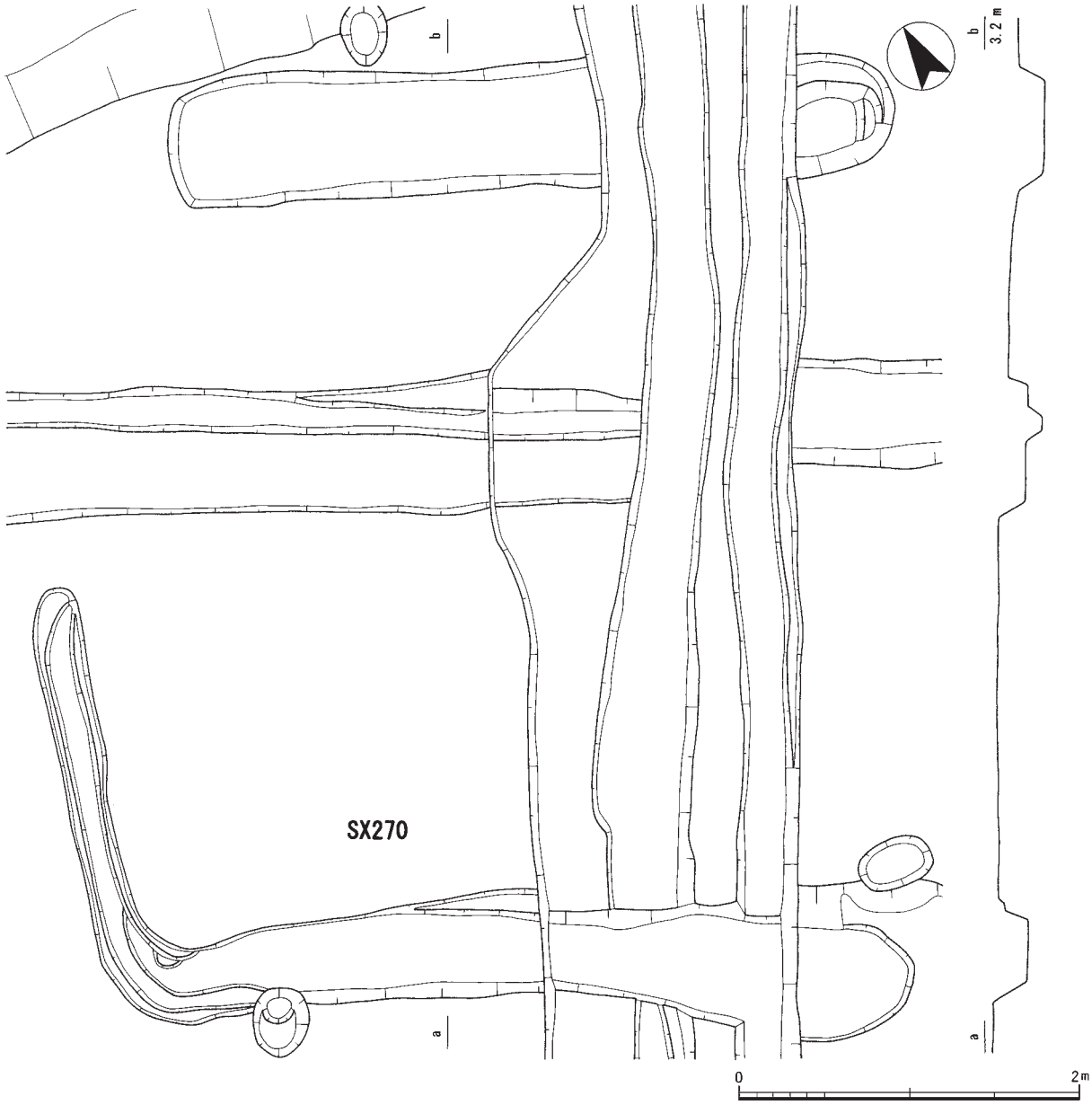
大部分が調査区外にあるが、平面形は隅丸方形と思われる。ＳＤ301（ＳＤ282・ＳＤ741）の東側（外側）に位置する。

ＳＨ560（第33図）

大部分が調査区外にあるが、平面形は隅丸方形と思われる。南辺中央に貯蔵穴をもつ。

ＳＨ567・ＳＨ573（第33図）

平面形はともに方形と思われ、方向を45度ほど違えて重複して検出した。時期の前後関係は不明である。



第55図　SX270平面図、断面図（1:40）

ＳＨ572（第33図）

平面形は隅丸方形と思われる。ＳＤ301（ＳＤ282・ＳＤ741）の東側（外側）に位置する。ＳＨ531とは北西方向に50mほど隔てているが、方向をほぼ同じくする。

② 奈良時代

この時期の遺構には、溝１条がある。

溝

ＳＤ527（第66図）

検出し得た延長は10mほどであるが、南北方向に真直ぐ延びると思われる。検出箇所から南に510mほどには、東西に直線的に延びる古代の官道が推定されており、この溝は官道と直交する方向にある。

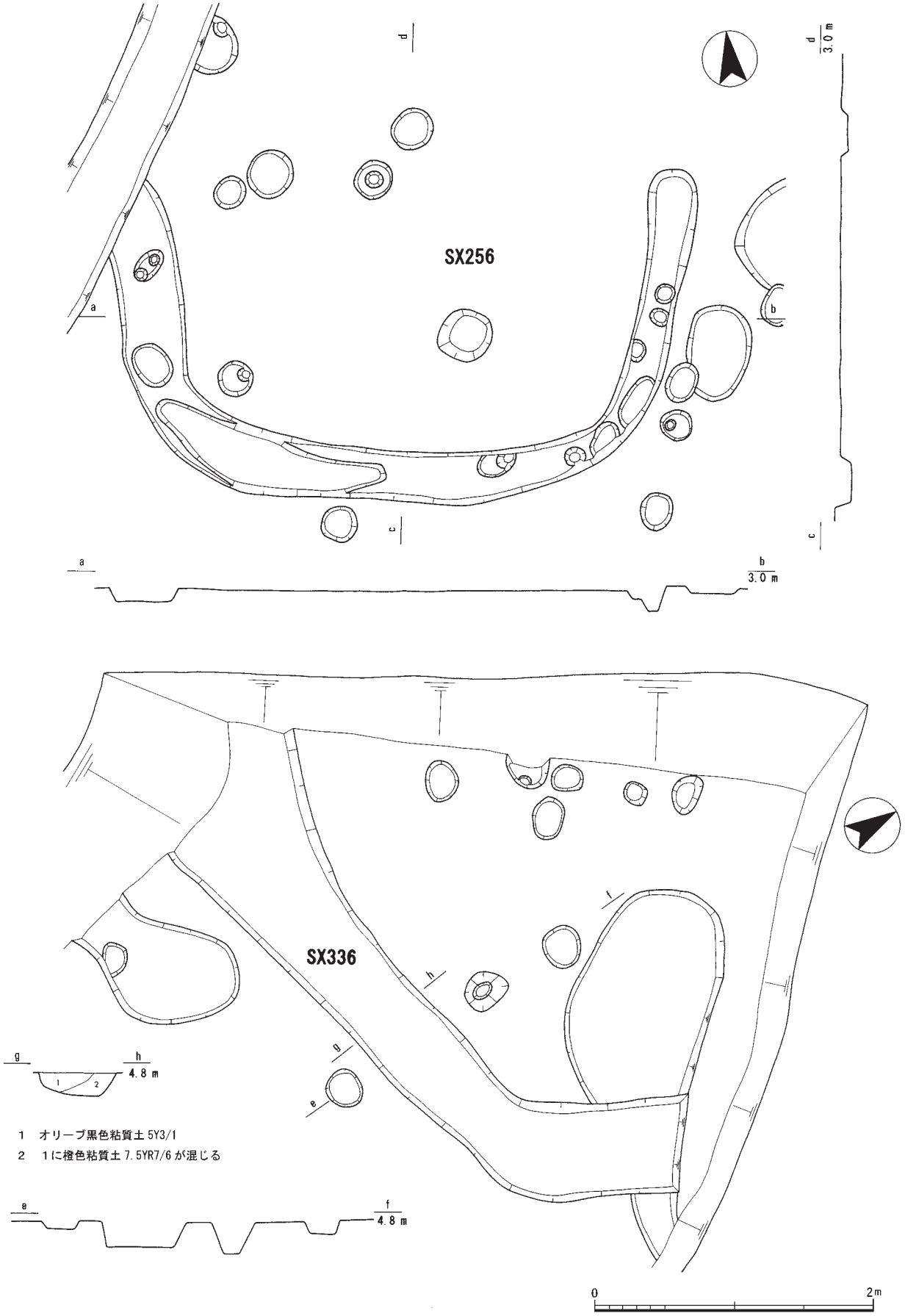
③ 中世

この時期の遺構には、溝３条、井戸１基、土坑２基がある。

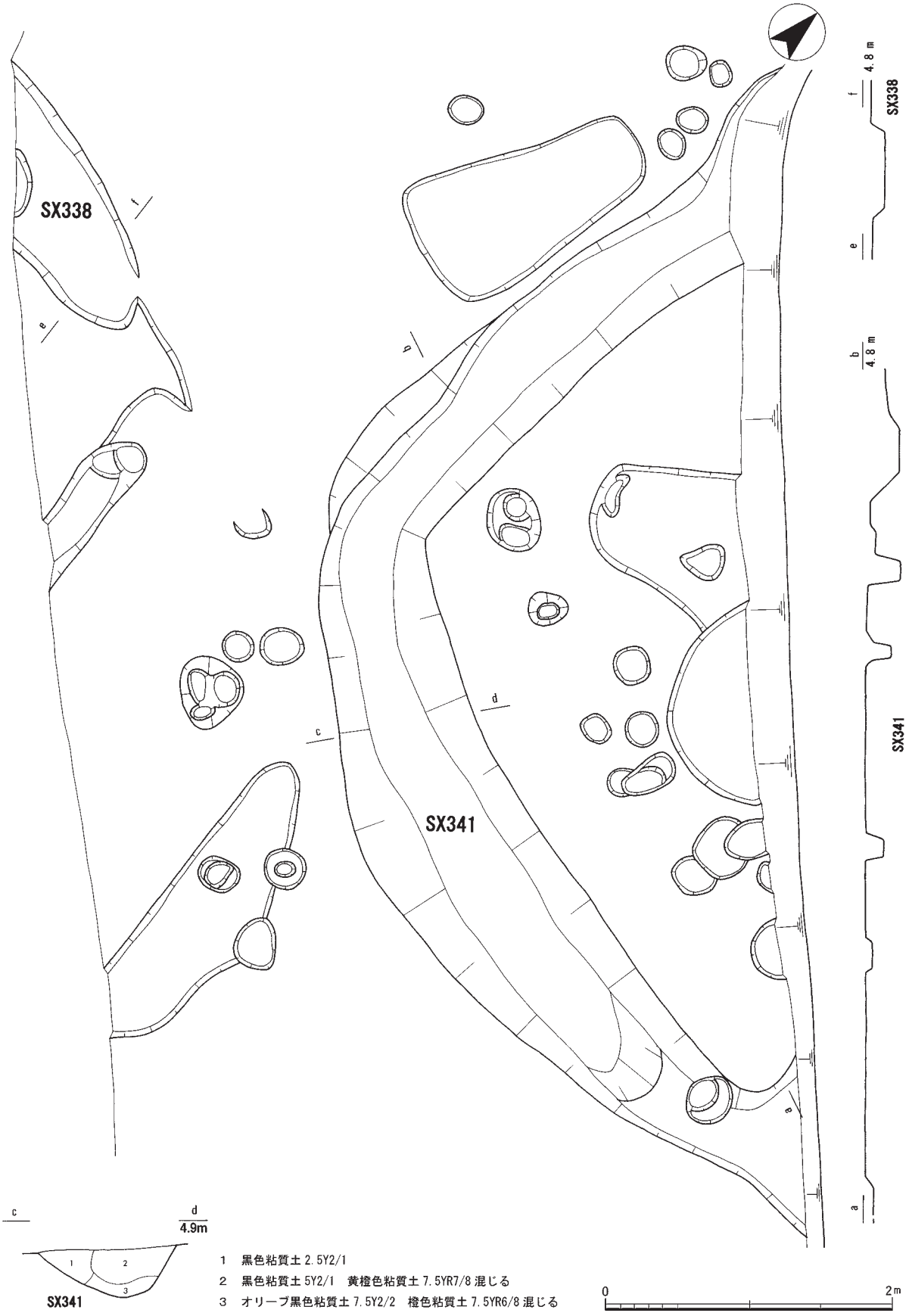
溝

ＳＤ528・ＳＤ529（第66図）

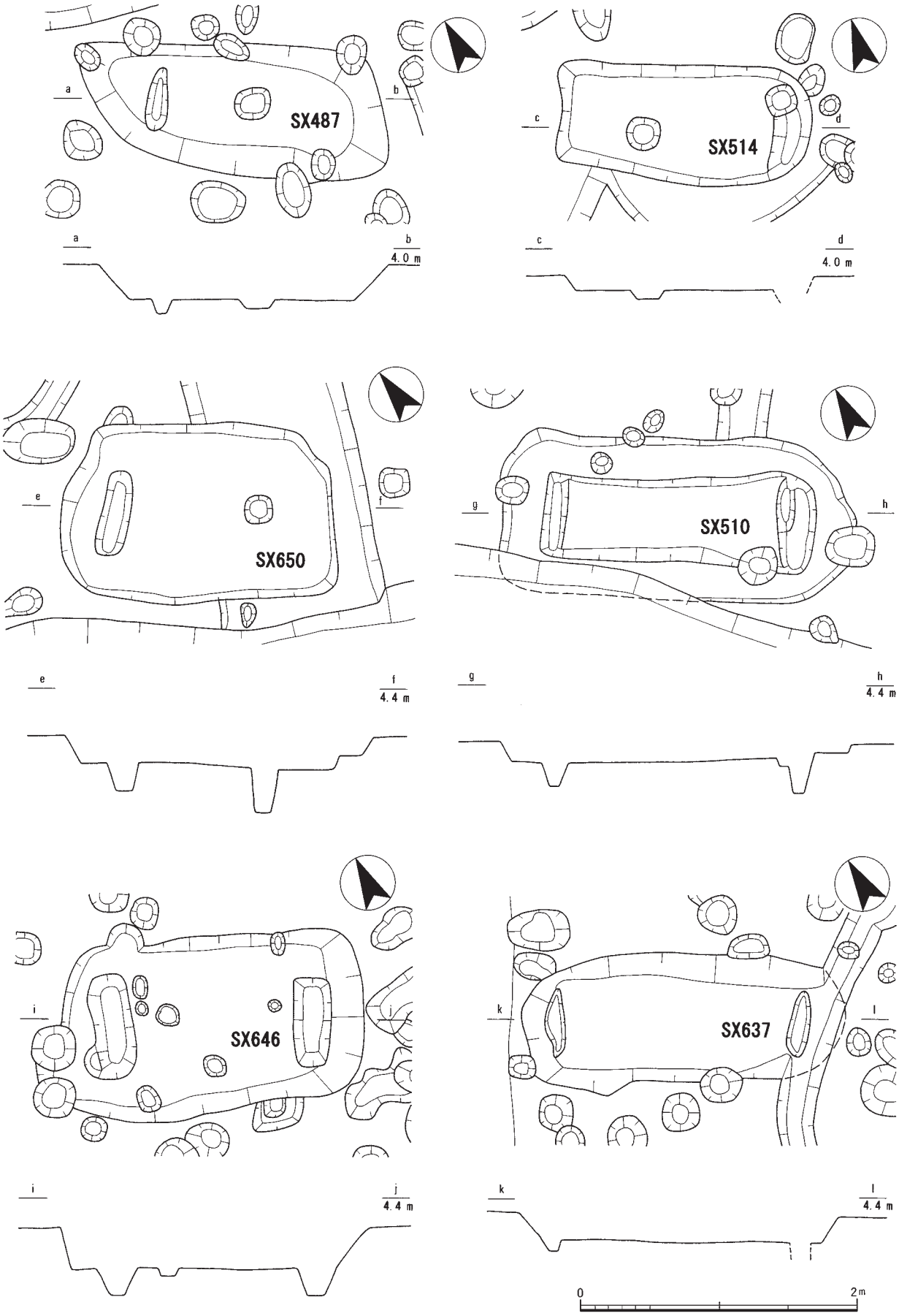
近接して並行する溝である。北側は調査区外へ出るため不明であるが、南側は直角に屈曲する。方向



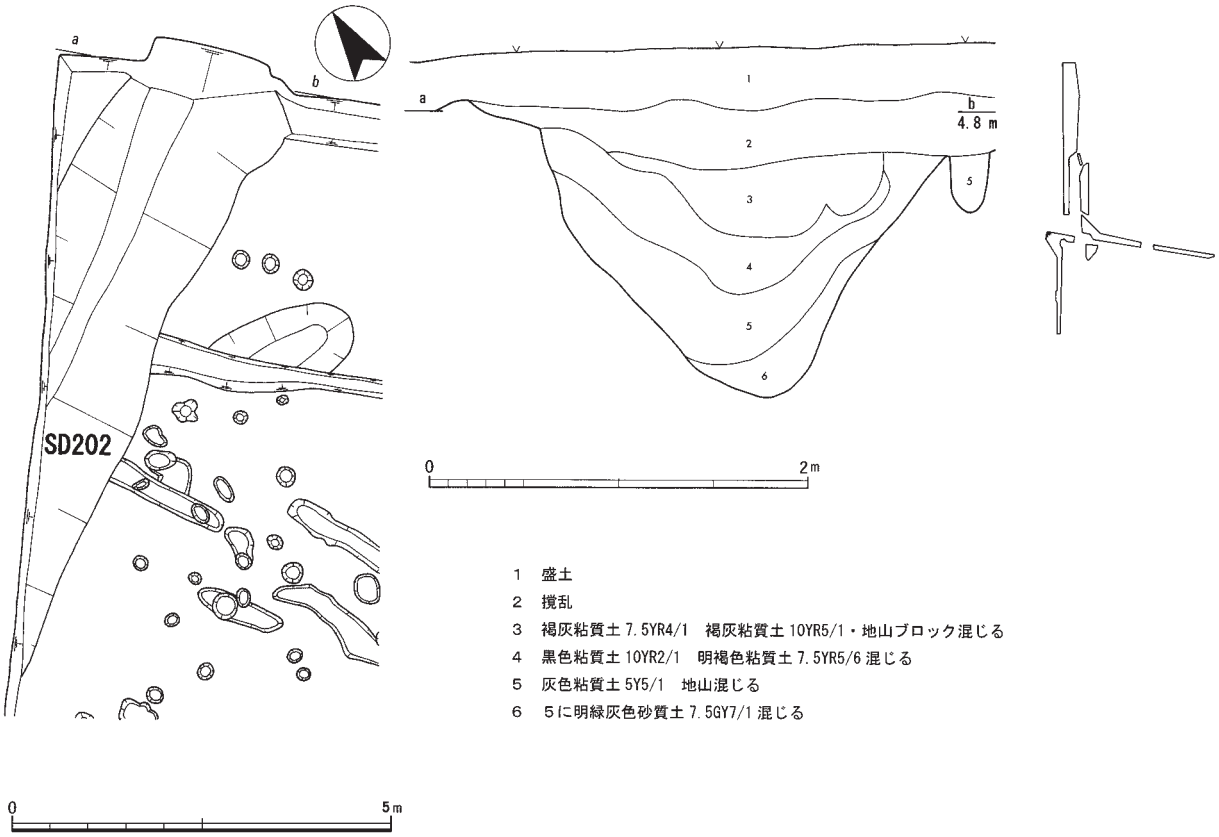
第56図　SX256・336平面図、断面図、土層断面図（1:40）



第57図 SX338・341平面図、断面図、土層断面図（1:40）



第58図　SX487・510・514・637・646・650平面図、断面図（1:40）



第59図　SD202平面図（1:100）、土層断面図（1:40）

は、東偏約30度である。これは旧飯高郡条里方向に重なるため、これを踏襲したものと考えられる。

3　C地区

第２次調査の「Ｂ４・Ｃ４区」に相当する。

(1) 基本層序

第１層が水田床土、第２層が黒褐色粘質土（包含層）、第３層が黄褐色粘質土（基盤層）である。遺構検出は第３層上面でおこなった。

(2) 検出遺構

① 弥生時代後期から古墳時代初頭

この時期の遺構には、竪穴住居２棟、前述の環濠ＳＤ282（ＳＤ301・ＳＤ741）を含めて環濠が２条、溝３条、土坑11基がある。

竪穴住居

ＳＨ304・ＳＨ306（第30図）

ＳＨ304の平面形は隅丸方形である。床面中央には貼床の痕跡が認められた。南東辺中央に貯蔵穴をもつ。ＳＨ306は西辺の周溝のみの検出で、ＳＨ304に先行する遺構である。なお、ＳＨ304は後述のＳＤ320を排水溝とする。

環濠

ＳＤ302（ＳＤ745）（第62図、第67図）

第１次調査で確認された遺構である。ＳＤ282（ＳＤ301・ＳＤ741）とほぼ平行する方向に延びる。Ｆ地区で検出されたＳＤ745と同一遺構であると判断される。断面形は、Ｃ地区で逆台形や緩やかなＵ字形、Ｆ地区ではＶ字形となっている。上層からは古墳時代初頭、中層からは弥生時代後期末の土器がそれぞれ出土し、下層からは木製品が出土している。

溝

ＳＤ320（第30図）

先述のＳＨ304の排水溝である。環濠ＳＤ301に排水するように掘削されている。

土坑

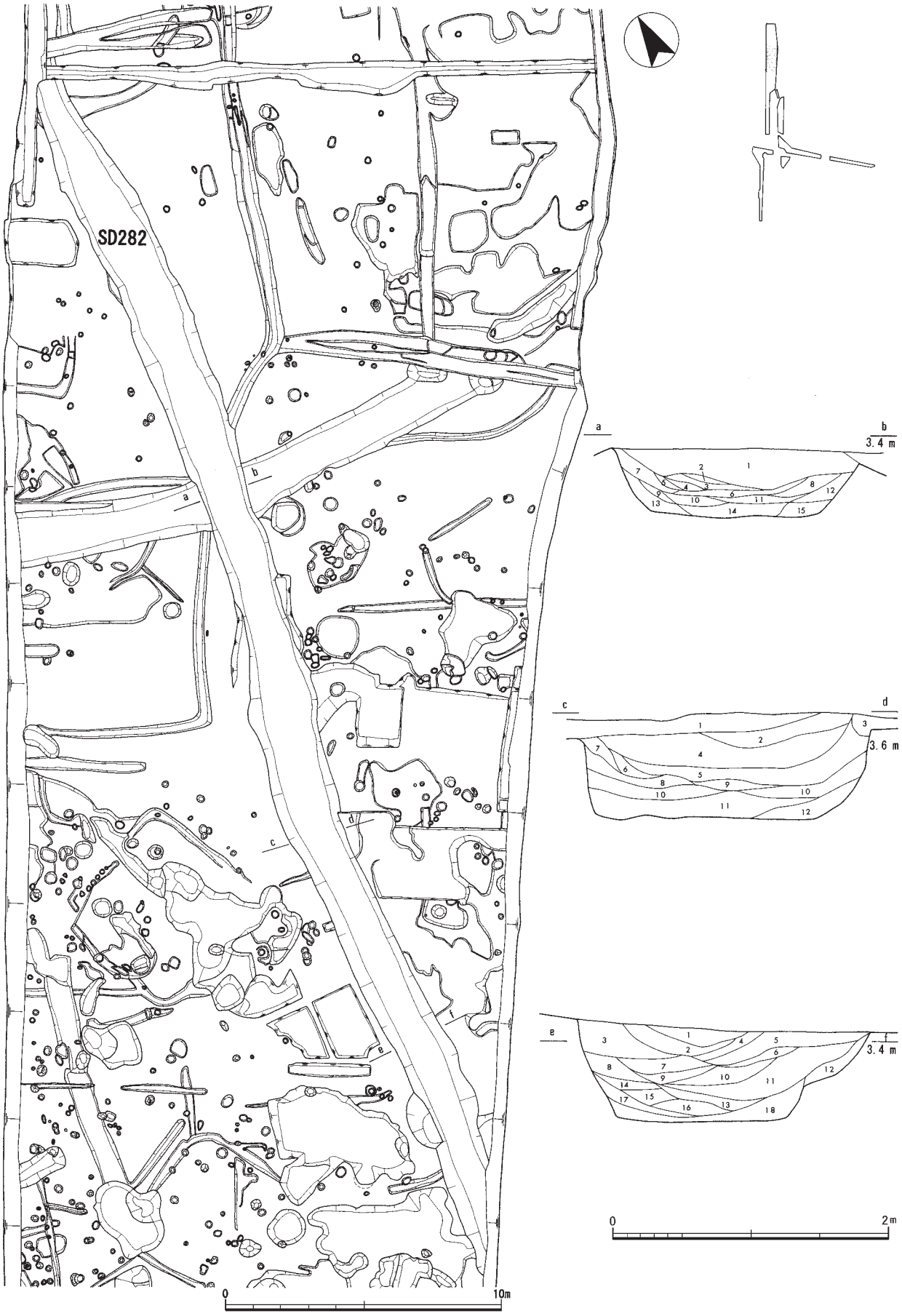
ＳＫ305（第41図）

平面形は円形の小土坑である。土坑底部で壺（1482）が出土した。

4　D地区

第２次調査の「Ｂ４区」に相当する。

(1) 基本層序



第60図　SD282平面図（1:200）、土層断面図（1:40）

SD282 土層断面図 a-b
1　黒褐色土 10YR2/2　粘性あり　明黄褐色土マーブル状に多く混じる
2　黒褐色土 10YR2/3　粘性やや強い　明黄褐色土粒状に混じる
3　黒褐色土 10YR2/3　粘性やや強い　明黄褐色土ブロック混じる
4　灰黄褐色土 10YR4/2　粘性あり　明黄褐色土少し混じる
5　褐色土 10YR4/6　粘性あり　４が少し混じる
6　黒褐色土 10YR3/1　粘性あり
7　黒褐色土 10YR2/3　粘性あり　明黄褐色土ブロック混じる
8　灰黄褐色土 10YR4/2　粘性やや強い　明黄褐色土ブロック混じる
9　暗褐色土 10YR3/3
10　黒褐色砂 10YR3/1　黒褐色粘質土混じる
11　黒色砂 10YR2/1　黒色粘質土混じる
12　褐灰色土 10YR4/1　粘性あり　明黄褐色土粒多く混じる
13　にぶい黄褐色土 10YR5/4　粘性強い　灰黄褐色粘質土混じる
14　褐灰色砂 10YR4/1　褐灰粘質土混じる
15　褐灰色土 10YR4/1　粘性強い　地山ブロック混じる

SD282 土層断面図 c-d
1　黒褐色土 7.5YR3/2　粘性あり　灰色粗砂混じる
2　黒褐色土 7.5YR3/2　粘性あり　黄色砂混じる
3　浅黄色粗砂 2.5Y7/3
4　褐色土 10YR4/4　粘性あり　灰白色砂・黄色砂・炭混じる
5　黒色土 10YR2/1　灰白色土・黄色土・炭混じる
6　明黄橙色粘質土 10YR6/8　灰白色土・砂・炭混じる
7　にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3　灰色土・砂・炭混じる
8　黒色粘質土 10YR1.7/1　細砂混じる
9　灰黄褐色砂質土 10YR4/2
10　黒色粘質土 2.5Y2/1　黄色細砂・炭混じる
11　黒褐色粗砂 10YR3/1　灰白色土・黄色土まばらに混じる
12　黒色粘質土 2.5Y2/1　灰白色土まばらに混じる

SD282 土層断面図 e-f
1　黒褐色土 5YR2/1　粗砂混じる
2　黒色土 5YR1.7/1　灰黄褐色粘質土ブロック混じる
3　黒褐色土 5YR3/1　赤褐色土粒混じる
4　黒色土 5YR1.7/1　灰黄褐色粘質土ブロック多く混じる
5　３と同じ
6　黒褐色土 7.5YR2/2　やや粘性あり
7　黒色土 10YR2/1　灰黄褐色粘質土粒混じる
8　黒褐色土 10YR3/1　やや粘性あり
9　黒色土 7.5YR2/1　灰白色粘土粒混じる
10　黒褐色土 5YR3/1　灰黄褐色粘土ブロック混じる
11　黒色土 10YR2/1　粘性あり　灰黄褐色粘土粒多く混じる
12　にぶい黄橙色粘土 10YR6/4　黒褐色粘質土ブロック混じる
13　黒色土 2.5YR2/1　細砂多く混じる
14　黒色土 2.5YR2/1　灰白色粘土ブロック・細砂多く混じる
15　黒褐色土 10YR3/1　粘性あり
16　灰黄褐色砂 10YR5/2　黒褐・灰白粘土ブロック混じる
17　黒色土 7.5YR2/1　粘性強い　灰白粘土多く混じる
18　褐灰色粘質土 7.5YR4/1　青灰色粘土層・灰黄褐色粘土ブロック混じる

第４表　SD282土層土色一覧

第１層が水田床土、第２層が黒褐色粘質土（包含層）、第３層が黄褐色粘質土（基盤層）である。遺構検出は第３層上面でおこなった。

(2) 検出遺構

① 弥生時代後期から古墳時代初頭

この時期の遺構には、竪穴住居７棟、溝２条、井戸１基、土坑７基がある。

竪穴住居

ＳＨ324・ＳＨ325・ＳＨ327（第30図）

一帯は撹乱が多く、検出は困難であった。いずれも調査区外に出る部分が多く、詳細は不明である。ＳＨ324はＳＨ327に先行する遺構である。

ＳＨ328・ＳＨ377（第30図）

いずれも周溝の一部の検出にとどまった。平面形は方形である。ＳＨ328が先行する遺構である。

ＳＨ333（第30図）

平面形は方形である。Ｄ地区内の他の竪穴住居とは方向を異にする。

ＳＨ335（第30図）

平面形は隅丸方形である。

井戸

ＳＥ556（第38図）

平面形はほぼ円形の素掘り井戸である。深さ0.8mで、検出された井戸の中で最も浅い。

５　Ｅ地区

第２次調査の「Ｃ４・Ｄ４区」に相当する。

(1) 基本層序

第１層が水田床土、第２層が黒褐色粘質土（包含層）、第３層が黄褐色粘質土（基盤層）である。遺構検出は第３層上面でおこなった。

(2) 検出遺構

① 弥生時代後期から古墳時代初頭

この時期の遺構には、方形周溝墓３基の他、環濠１条、溝10条、土坑11基、自然流路１条がある。

方形周溝墓

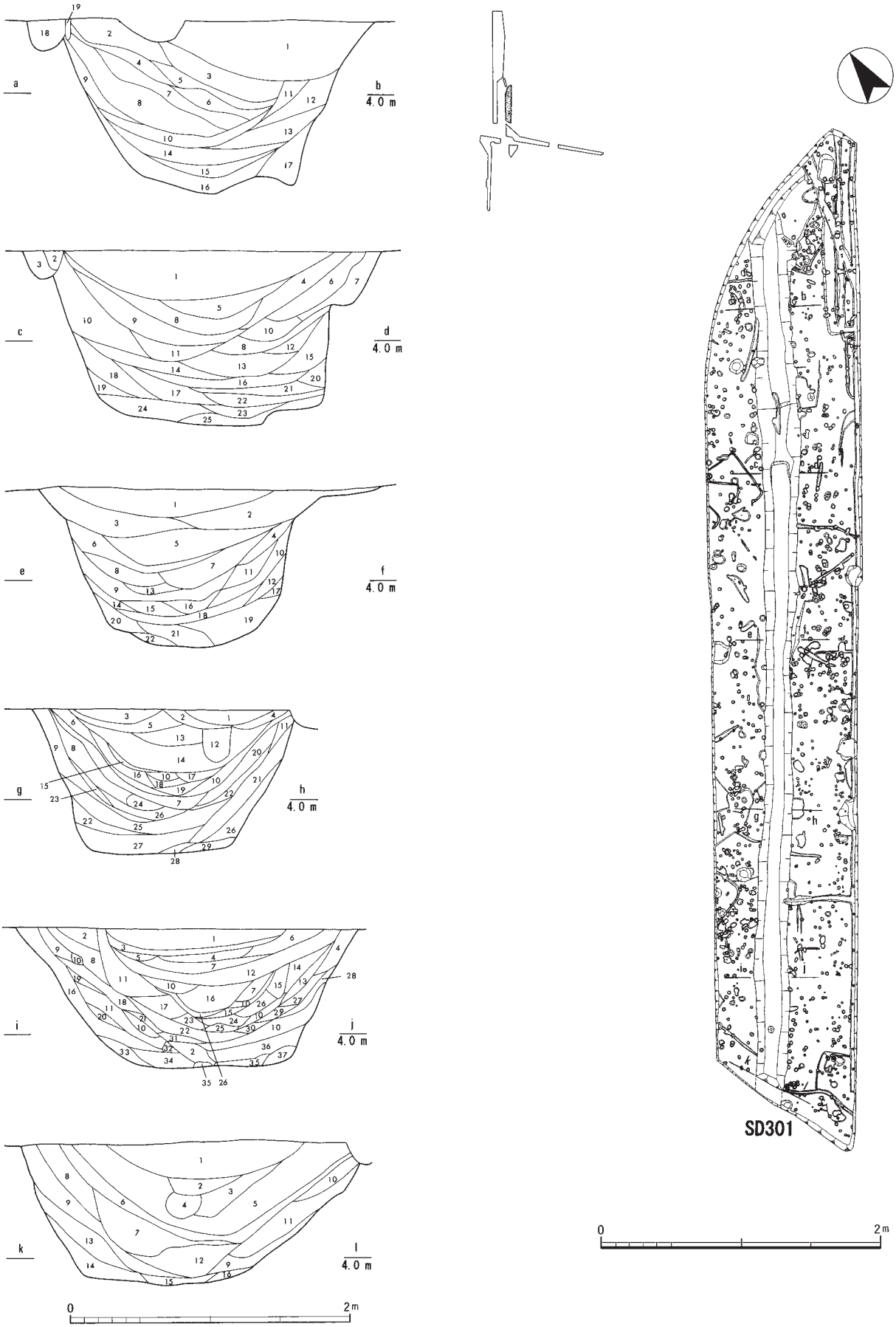
ＳＸ336（第56図）

大部分が調査区外にあり、詳細は不明である。

ＳＸ338（第57図）

大部分が調査区外にあり、詳細は不明である。

ＳＸ341（第57図）



第61図　SD301平面図（1:400）、土層断面図（1:40）

SD301 土層断面図 a-b
1　黒褐色土 7.5YR3/2　粒粗い　やや粘性あり　土器多数混じる
2　褐色土 7.5YR4/3　粘性少ない
3　褐色土 7.5YR4/4　粒粗い　やや粘性あり　黄砂混じる
4　にぶい黄褐色土 10YR4/3　粒粗い　黄砂混じる
5　黒褐色土 10YR2/2　粒細かい　粘性あり　黄砂・黒土混じる
6　明黄褐色土 10YR6/6　粒粗い　やや粘性あり　黄砂多く混じる
7　灰黄褐色土 10YR4/2　粒粗い　やや粘性あり　黒土・灰色土少し混じる　黄砂多く混じる
8　明褐色土 7.5YR5/8　粒粗い　黄砂底部に多く混じる　黒土少し混じる
9　黒褐色土 5YR3/1　粒細かい　やや粘性あり　赤茶土・土器混じる
10　黒褐色土 7.5YR3/1　粒非常に細かい　粘性強い　土器多く混じる
11　黒褐色土 10YR3/2　粒粗い　やや粘性あり
12　暗褐色土 10YR3/3　粒やや細かい　やや粘性あり　土器混じる
13　黒色土 7.5YR2/1　粒やや細かい　粘性あり　土器混じる
14　黒褐色土 10YR3/1　粒細かい　粘性強い
15　黒色土 10YR2/1　粒粗い　やや粘性あり　灰色土・土器混じる
16　黒色土 10YR1.7/1　粒非常に細かい　粘性強い　灰色土・土器混じる
17　黒褐色土 7.5YR3/1　粒細かい　粘性強い　灰色土混じる
18　黒褐色土 10YR2/3　粒粗い　粘性少ない
19　11 と同じ

SD301 土層断面図 c-d
1　黒褐色土 7.5YR3/2　粒粗い　土器多く混じる
2　黒褐色土 10YR3/2　粒粗い　土器混じる
3　褐色土 7.5YR4/4　粒粗い　粘性少ない　黄砂混じる
4　灰黄褐色土 10YR4/2　粒粗い　やや粘性あり　黄砂多く・土器混じる
5　黒褐色土 7.5YR3/2　粒粗い　やや粘性あり　黄砂・土器混じる
6　黒褐色土 10YR3/2　やや粘性あり　黄砂少し・土器混じる
7　褐色土 10YR4/4　やや粘性あり　黄砂多く混じる
8　黒褐色土 10YR2/2　やや粘性あり　黄砂・土器混じる
9　黒褐色土 7.5YR3/2　粘性あり　黄砂混じる　土器非常に多く混じる
10　黒褐色土 10YR2/3　やや粘性あり　黄砂・土器混じる
11　黒色土 7.5YR2/1　粘性あり　土器混じる
12　黒褐色土 7.5YR2/2　やや粘性あり　黄砂・土器混じる
13　黒色土 10YR2/1　粘性あり　土器多く混じる
14　黒褐色土 7.5YR3/1　粘性強い　黄砂少し混じる
15　黒褐色土 7.5YR2/2　やや粘性あり　黄砂混じる
16　黒色土 10YR2/1　粘性強い
17　黒色粘質土 7.5YR2/1　粘性非常に強い
18　黒褐色粘質土 7.5YR3/1　粘性あり　黄砂混じる
19　褐灰色土 10YR4/1　やや粘性あり　灰色土混じる
20　にぶい黄橙色土 10YR6/3　やや粘性あり　黄砂多く混じる
21　黒色土 10YR1.7/1　粘性非常に強い　灰色土・土器混じる
22　黒褐色土 7.5YR3/1　粒粗い　土器混じる
23　黒褐色土 7.5YR3/1　粒粗い
24　黒褐色土 10YR3/1　粒粗い　細砂多く混じる
25　黒色粘質土 10YR1.7/1　粘性非常に強い

SD301 土層断面図 e-f
1　黒褐色土 7.5YR3/2　粒粗い　やや粘性あり　土器多く混じる
2　黒褐色土 7.5YR3/2　粒粗い　赤褐色土少し混じる　土器多く混じる
3　暗褐色土 7.5YR3/4　粒粗い　黄砂・土器混じる
4　にぶい黄褐色土 10YR4/3　やや粘性あり　黄砂多く混じる
5　暗褐色土 10YR3/4　黄砂・土器混じる
6　灰褐色土 7.5YR4/2　粒粗い　黄砂混じる
7　黒褐色土 7.5YR3/1　粘性あり　黄砂混じる
8　黒褐色土 7.5YR2/2　粘性あり　黄砂・土器混じる
9　黒褐色土 7.5YR3/2　粒細かい　やや粘性あり　土器混じる
10　橙色土 7.5YR6/6　黄砂多く混じる　灰色粘土少し混じる
11　７と同じ
12　黒褐色土 10YR3/2　粘性あり　粗砂混じる
13　褐灰色土 7.5YR4/1　粒粗い　粘性少ない　黄砂・土器混じる
14　黒褐色土 7.5YR2/2　粒細かい　粘性あり
15　黒褐色土 10YR3/1　粒細かい　粘性あり　黄砂・灰色土少し混じる
16　黒褐色土 10YR3/2　粒細かい　粘性あり　黄砂・灰色土少し混じる
17　黒褐色土 10YR2/2　粒細かい　粘性あり
18　黒色土 10YR2/1　粒細かい　粘性強い　灰色土混じる
19　黒褐色土 7.5YR3/1　粒細かい　粘性強い　灰色土混じる
20　黒色粘質土 7.5YR2/1　粗砂混じる
21　黒色土 10YR2/1　粘性少ない　粗砂・土器混じる
22　褐灰色土 7.5YR4/1　粒細かい　粘性強い　灰色土多く混じる

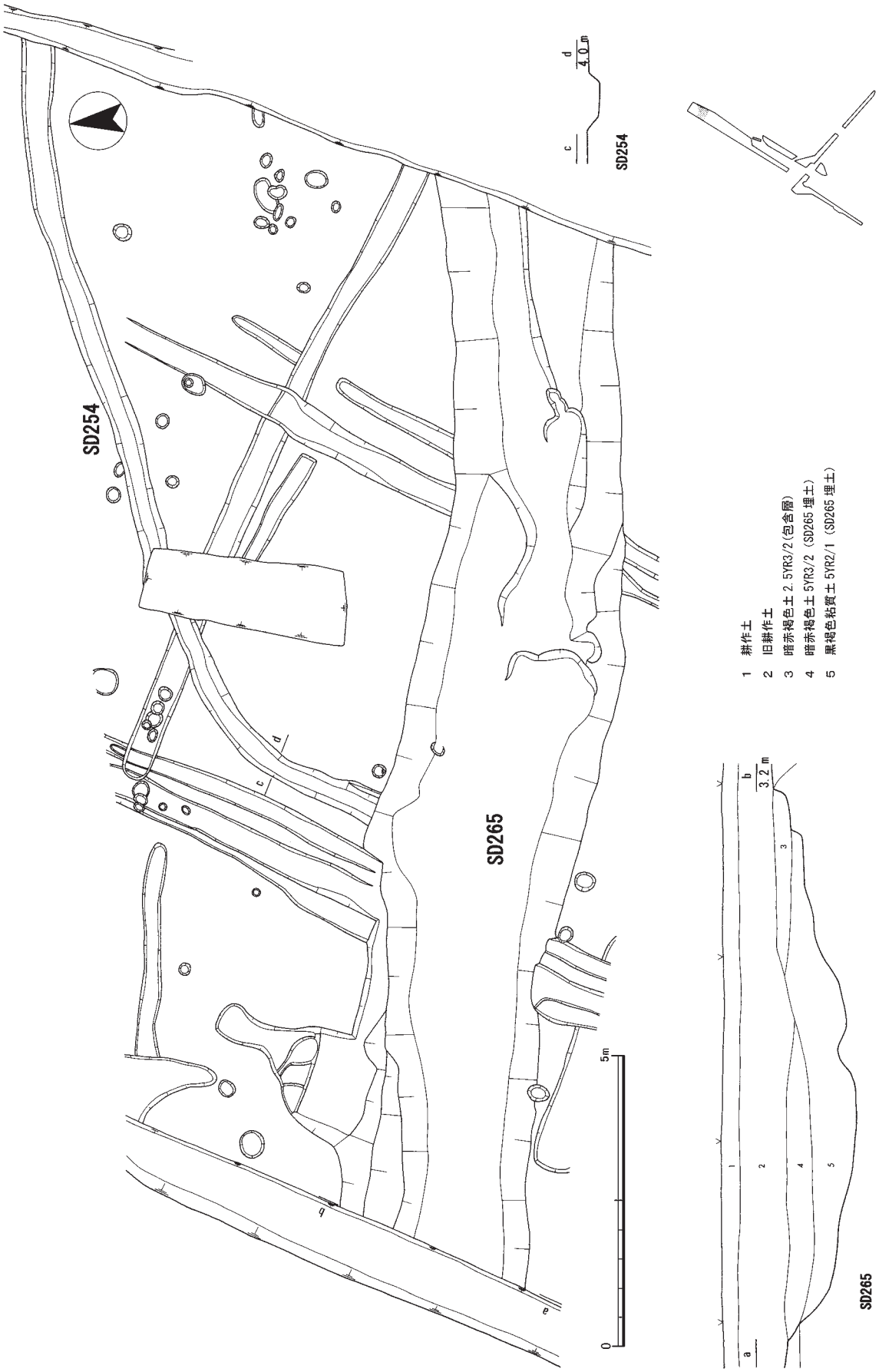
SD301 土層断面図 g-h
1　黒褐色土 7.5YR3/2　粒粗い
2　暗褐色土 10YR3/3　粒粗い
3　黒褐色土 10YR3/2　粒粗い
4　灰黄褐色土 10YR4/2　粒粗い　粘性少ない　黄砂少し混じる
5　暗褐色土 10YR3/3　粒粗い　やや粘性あり　黄砂混じる
6　黒褐色土 10YR2/2　粒粗い　やや粘性あり　黄砂・土器混じる
7　暗褐色土 10YR3/3　やや粘性あり　黄砂・木混じる
8　褐色土 7.5YR4/3　やや粘性あり　黄砂・土器混じる
9　黒褐色土 10YR3/2　やや粘性あり　黄砂混じる
10　黒褐色土 7.5YR3/2　粘性あり　黄砂少し混じる
11　黒褐色土 7.5YR3/2　粒粗い　やや粘性あり
12　暗褐色土 10YR3/3　やや粘性あり　黄砂・土器混じる
13　暗褐色土 10YR3/3　粒粗い　やや粘性あり　黄砂混じる
14　黄褐色土 10YR5/6　やや粘性あり　黄砂多く混じる
15　褐色土 10YR4/4　やや粘性あり　黄砂混じる
16　黄褐色土 10YR5/6　黄砂多く混じる
17　黒褐色土 7.5YR3/1　粘性あり　黄砂混じる
18　褐灰色土 7.5YR4/1　粒粗い　やや粘性あり　黄砂混じる
19　黒色土 7.5YR2/1　粘性あり　黄砂混じる
20　褐色土 7.5YR4/3　粒細かい　粘性あり　黄砂多く混じる
21　黒褐色土 10YR2/2　粒細かい　粘性強い
22　黒色土 10YR2/1　粘性強い
23　褐灰色土 7.5YR6/1　灰白色土多く混じる
24　にぶい黄橙色土 10YR6/4　粒粗い　少し粘性あり　土器あり
25　黒色土 7.5YR2/1　粘性強い
26　黒褐色土 10YR3/1　粘性強い　土器混じる
27　黒褐色土 7.5YR3/1　砂多く混じる
28　黒色粘質土 10YR1.7/1　非常に粘性強い
29　黒色土 10YR2/1　粘性強い　粗砂混じる

SD301 土層断面図 i-j
1　黒褐色土 7.5YR2/2　粒粗い　土器混じる
2　黒褐色土 7.5YR3/2　粒粗い
3　黒褐色土 10YR2/3　粒粗い　黄砂・土器混じる
4　黒褐色土 10YR2/3　粒粗い
5　黒褐色土 10YR2/2　粒粗い
6　黒褐色土 10YR3/2　少し粒粗い　やや粘性あり
7　黒褐色土 10YR2/3　少し粒粗い　やや粘性あり　黄砂少し混じる
8　にぶい黄褐色土 10YR4/3　やや粘性あり　黄砂多く混じる
9　黒褐色土 10YR3/2　粒粗い
10　黒褐色土 10YR2/2　やや粘性あり　黄砂少し混じる
11　にぶい黄褐色土 10YR5/4　やや粘性あり　黄砂多く混じる
12　黒褐色土 10YR2/2　少し粒粗い　やや粘性あり　黄砂混じる
13　暗褐色土 10YR3/3　粒細かい　黄砂混じる
14　黒褐色土 10YR3/2　粒粗い　少し黄砂混じる
15　黒褐色土 5YR3/1　粒細かい　やや粘性あり　黄砂少し混じる
16　黒褐色土 10YR3/2　粒粗い　やや粘性あり　黄砂多く混じる
17　黒褐色土 10YR2/3　やや粘性あり　黄砂多く混じる
18　黒褐色土 5YR2/1　粘性あり
19　褐色土 7.5YR4/4　黄褐色砂多く混じる
20　黒褐色土 10YR3/2　粘性強い　黒色土・黄砂まばらに混じる
21　灰褐色土 7.5YR4/2　粒粗い　灰色土・黄砂混じる
22　黒褐色土 10YR3/2　粒粗い　黒色土・黄砂・土器混じる
23　黒褐色土 10YR2/2　粒粗い　少し黄砂混じる
24　黒褐色土 7.5YR2/2　黄砂まばらに混じる
25　黒色土 10YR2/1　粘性あり　土器混じる
26　黒褐色土 10YR2/2　粘性あり　黄砂多く混じる
27　暗褐色土 10YR3/3　やや粘性あり　黄砂少し混じる
28　黒褐色土 10YR2/3　粘性あり
29　黒褐色土 7.5YR3/2　やや粘性あり
30　褐色土 10YR4/4　粒粗い　やや粘性あり　黄砂多く混じる
31　青黒色土 5B1.7/1　粒細かい　黒色土多く混じる
32　黒色土 7.5YR2/1　粘性あり
33　黒色粘質土 10YR2/1　粘性強い
34　黒色粘質土 7.5YR2/1　粘性強い
35　黒色土 10YR1.7/1　粘性強い
36　黒褐色土 10YR2/2　粘性あり
37　黒色土 7.5YR1.7/1　粘性強い

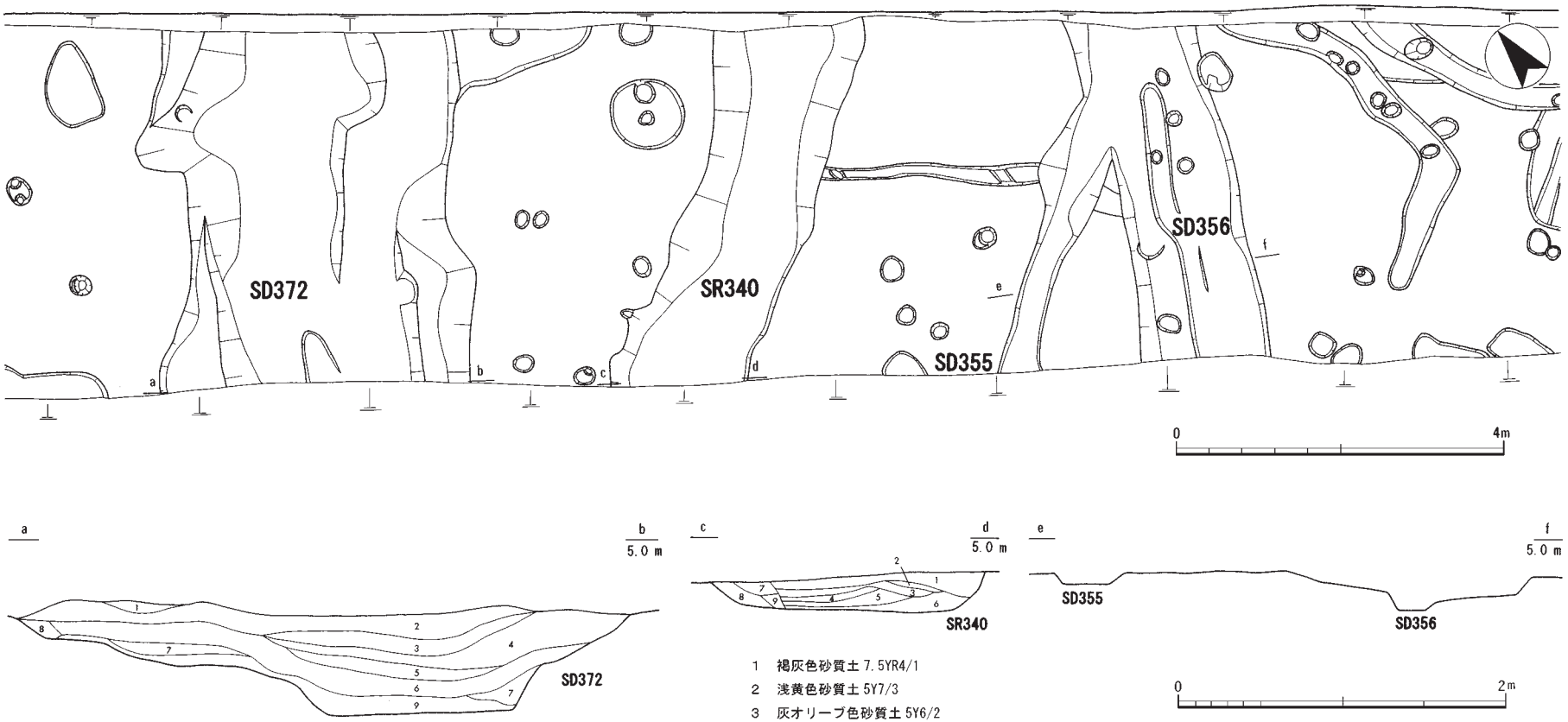
SD301 土層断面図 k-l
1　黒褐色土 10YR3/2　土器混じる
2　黒褐色土 7.5YR2/2　黄ブロック少し混じる
3　黒褐色土 7.5YR2/2　やや粘性あり　黄ブロック多く混じる
4　黒褐色土 7.5YR3/2　やや粘性あり　黄ブロック少し混じる
5　黒褐色土 7.5YR3/1　粘性強い　黄ブロック多量に混じる
6　黒色土 10YR2/1　粘性強い　黄ブロックわずかに混じる
7　明赤褐色 5YR5/6　焼土層　土器片混じる
8　黒褐色土 7.5YR3/2　やや粘性あり　黄ブロック混じる
9　黒褐色土 10YR3/1　粘性あり　黄ブロック多量に混じる
10　８と同じ
11　黒褐色土 10YR3/2　やや粘性あり　黄ブロック粒状に混じる
12　黒褐色砂 7.5YR3/2
13　11 と同じ
14　黒褐色土 10YR3/2　粘性強い　黄ブロック多く混じる
15　黒色土 7.5YR1.7/1　粘性強い　炭化物（植物遺体）多量に混じる
16　黒褐色土 10YR2/2　粘性強い　黄ブロック少し混じる

第５表　SD301土層土色一覧

第62図　SD301・302平面図（1:200）、土層断面図（1:40）



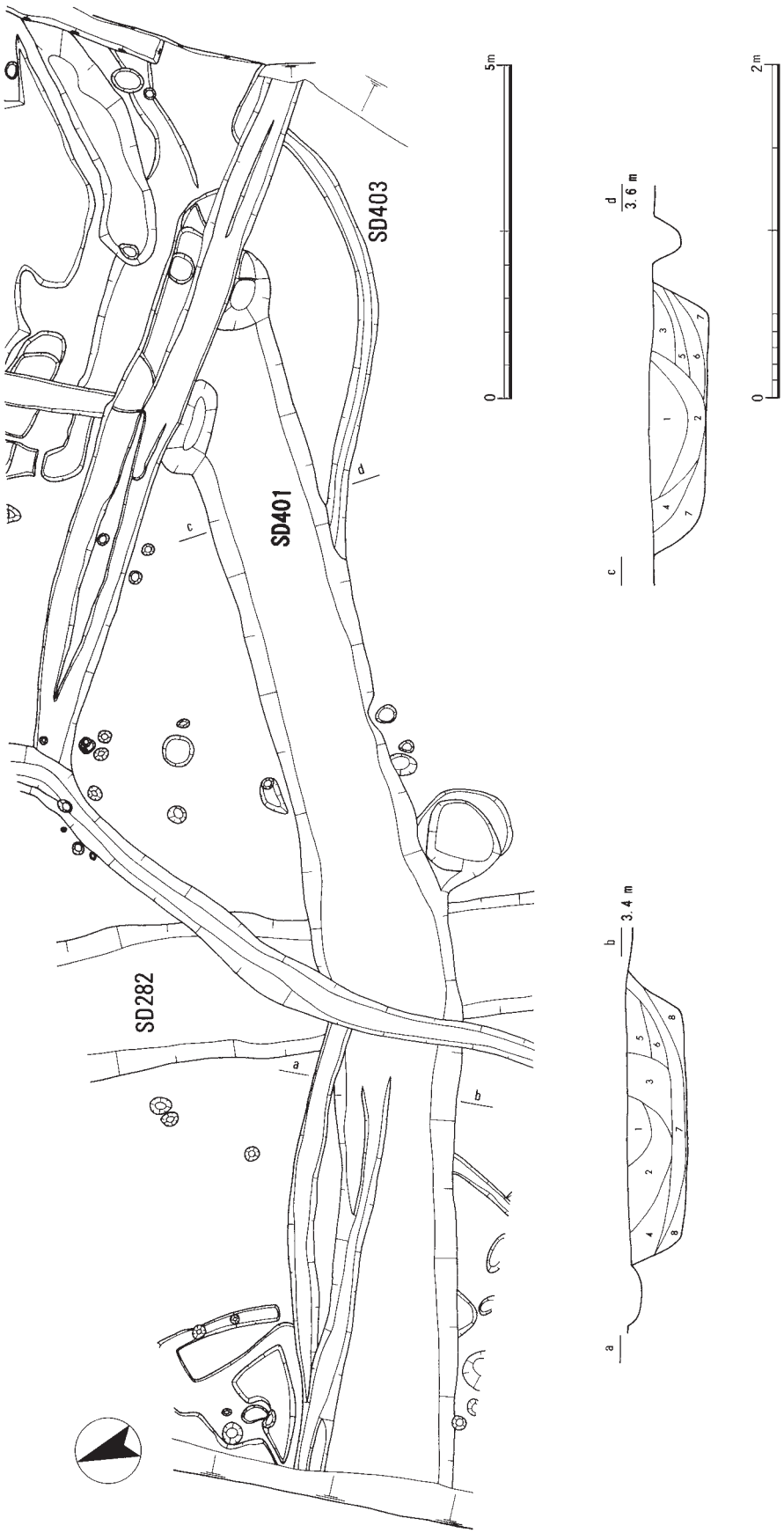
第63図　SD254・265平面図（1:100）、断面図、土層断面図（1:40）



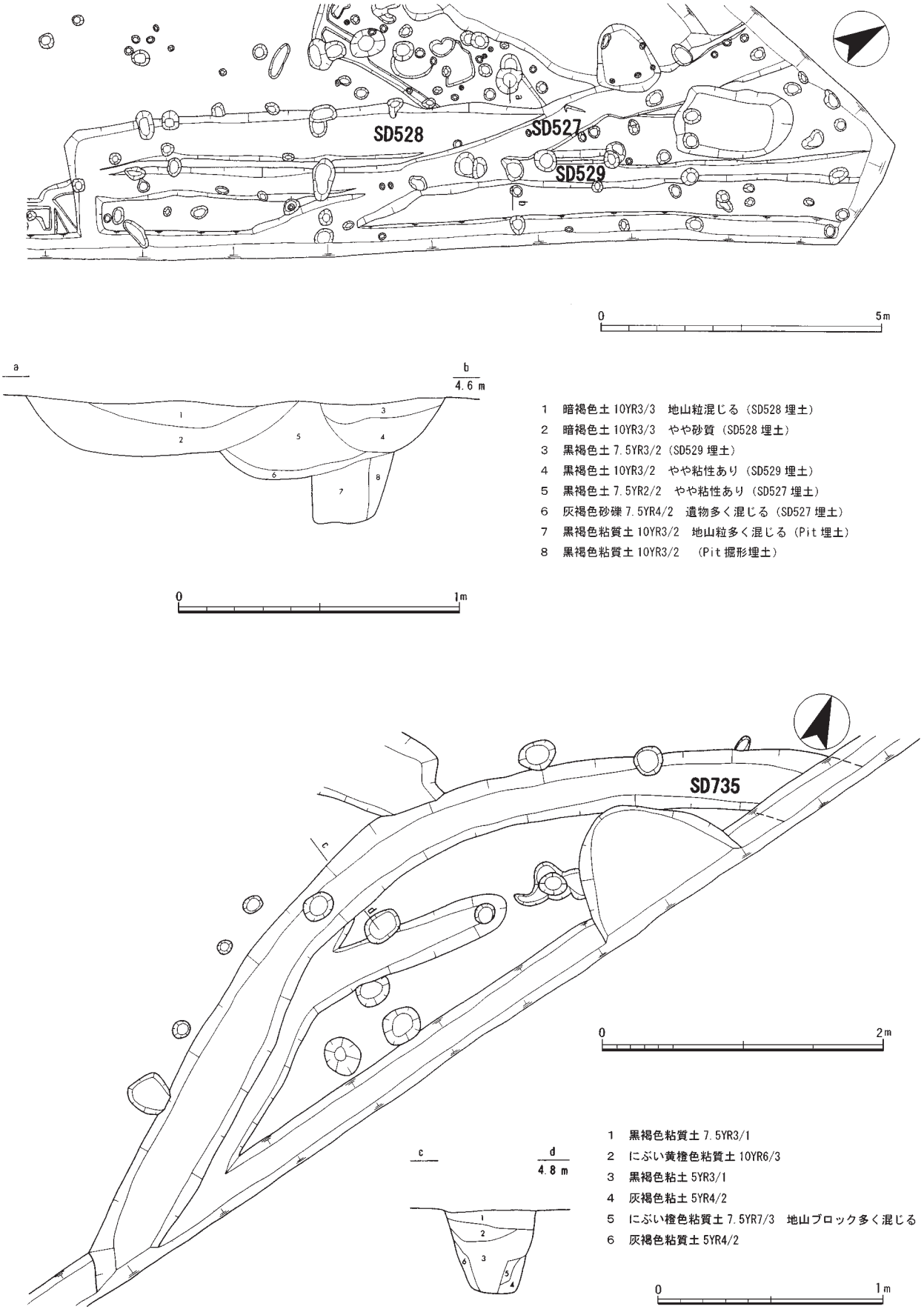
1　黒色粘質土 7.5YR2/1
2　黒色粘質土 7.5YR1.7/1
3　黒色粘質土 5YR1.7/1
4　赤黒色粘質土 2.5YR2/1
5　黒褐色粘質土 5YR3/1　砂質土・礫混じる
6　褐灰色粘質土 7.5YR4/1
7　黒褐色粘質土 10YR3/1
8　黒褐色粘質土 2.5Y3/2
9　灰黄褐色砂質土 10YR5/2　礫混じる

1　褐灰色砂質土 7.5YR4/1
2　浅黄色砂質土 5Y7/3
3　灰オリーブ色砂質土 5Y6/2
4　灰オリーブ色砂質土 5Y5/3
5　暗オリーブ色砂質土 5Y4/4
6　灰色砂質土 5Y4/1　礫混じる
7　黄灰色粘質土 2.5Y4/1
8　黒褐色粘質土 2.5Y3/2
9　灰色砂質土 5Y4/1　粘質土混じる

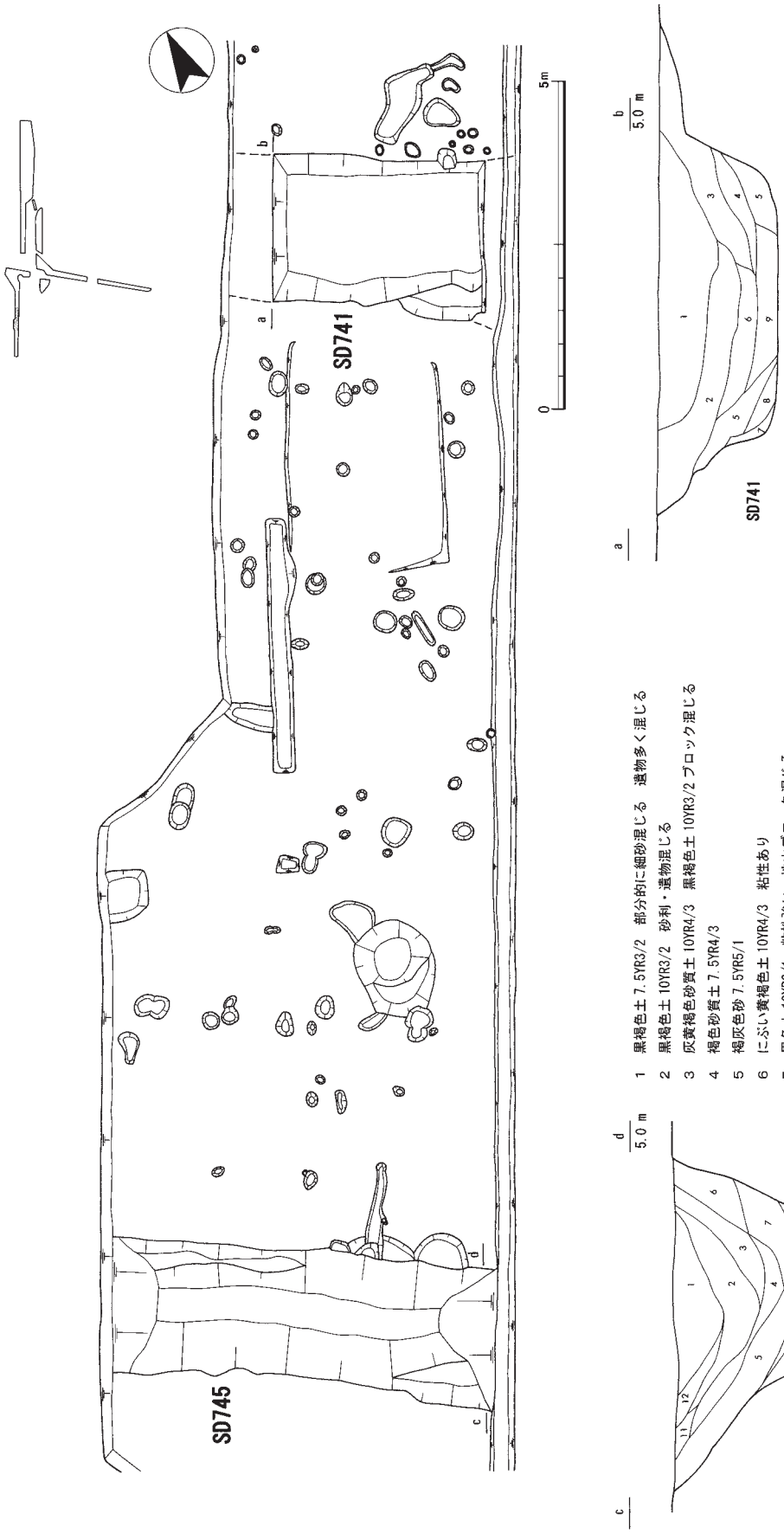
第64図　SD355・356・372・SR340平面図（1:80）、断面図、土層断面図（1:40）



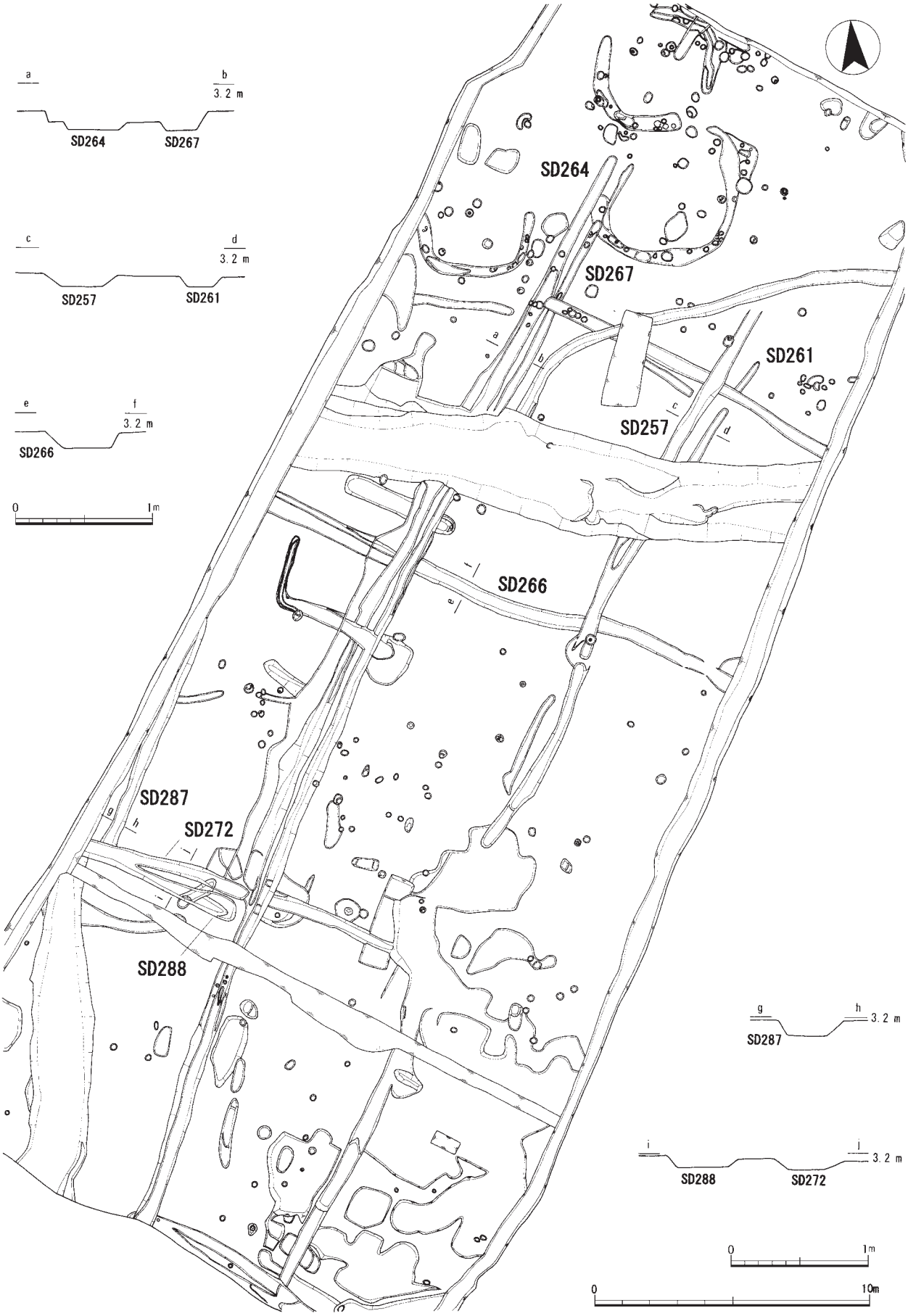
第65図　SD401・403平面図（1:100）、土層断面図（1:40）



第66図　SD527・528・529平面図（1:100）、土層断面図（1:20）、SD735平面図（1:40）、土層断面図（1:25）



第67図　SD741・745平面図（1:100）、土層断面図（1:40）



第68図　SD257・261・264・266・267・272・287・288平面図（1:200）、断面図（1:40）

大部分が調査区外にあり、詳細は不明である。南辺の周溝内から土器片がややまとまって出土した。

6　Ｆ地区

第２次調査の「Ｂ４区」と第４次調査区に相当する。

(1) 基本層序

第１層が側道の盛土、第２層が黒褐色粘質土（旧耕作土）、第３層が黄褐色粘質土（基盤層）である。遺構検出は第３層上面でおこなった。

(2) 検出遺構

① 弥生時代後期から古墳時代初頭

この時期の遺構には竪穴住居11棟、前述のＳＤ301（ＳＤ282・ＳＤ741）とＳＤ302（ＳＤ745）を含めて環濠が３条、溝14条、井戸５基、土坑20基、不明遺構２基がある

竪穴住居

ＳＨ209（第29図）

平面形は方形である。南東辺中央に周溝と接して貯蔵穴をもつ。主柱穴は方形に４箇所配置される。

ＳＨ210（第29図）

平面形は隅丸方形である。南東辺に貯蔵穴をもつ。

ＳＨ215・ＳＨ221（第29図）

両方ともに平面形は隅丸方形である。ＳＨ215は他の竪穴住居に比べて幅広で浅い周溝をもつ。ＳＨ221はＳＨ215に先行する遺構で、方向を45度違える。

ＳＨ217（第29図）

平面形は隅丸方形と思われる。南西隅を後述のＳＥ220に切られる。

ＳＨ701（第35図）

平面形は隅丸方形である。南東辺には等間隔に直径約20㎝の小穴が並ぶ。主柱穴は方形に４箇所配置され、南東辺中央には貯蔵穴が確認された。

ＳＨ718（第35図）

平面形は隅丸方形で、ＳＨ701の内側で検出された。ＳＨ718が先行する遺構で、方向をほぼ同じくする。床面には貼床の痕跡が認められた。主柱穴が４箇所と南東辺中央で貯蔵穴が確認された。炉跡と思われる焼土痕も検出したが、ＳＨ701とＳＨ718のいずれに伴うものか判然としなかった。

ＳＨ725（第29図）

平面形は方形と思われる。大部分が調査区外にあり、詳細は不明である。

ＳＨ729（第33図）

平面形は方形である。大部分が調査区外にあるが、主柱穴は２箇所確認できた。南東辺中央には貯蔵穴がみつかった。なお、後述のＳＤ733を排水溝とする。

ＳＨ730（第33図）

ＳＨ729から若干南東にずれ、方向を揃えて重なる。なお、後述のＳＤ733を排水溝とする。この排水溝をみるとＳＨ730がＳＨ729に先行すると思われる。平面形は方形である。主柱穴２箇所と南東辺中央に貯蔵穴が確認された。炉跡と思われる焼土痕も検出したが、ＳＨ729とＳＨ730のいずれに伴うものか判然としなかった。

ＳＨ742（第33図）

平面形は方形である。主柱穴が２箇所確認された。

環濠

ＳＤ202（第59図）

断面形はＶ字形である。調査区内で確認し得た延長はわずかである。

ＳＤ741（ＳＤ282・ＳＤ301）（第67図）

Ａ、Ｂ、Ｃ地区で検出されたＳＤ282（ＳＤ301）と同一遺構と判断される。

ＳＤ745（ＳＤ302）（第67図）

Ｃ地区のＳＤ302と同一遺構と判断される。この環濠以南に旧河道以外の遺構は検出されず、集落の南限を示すものと思われる。

溝

ＳＤ733（第33図）

前述のＳＨ729とＳＨ730の排水溝である。両方の南隅を通るように掘削されている。

ＳＤ735（第66図）

検出した部分では平面形は弧状となっている。断面は逆台形である。

井戸

ＳＥ208（第36図）

平面形は不整円形の素掘りの井戸である。上層からは壺（1581）や甕（1591）などが、中層からは壺（1579）や高杯（1600）などが出土した。

ＳＥ216（第37図）

平面形は不整円形の素掘りの井戸である。最下層からは高杯（1663）、壺（1647、1648）が出土した。

ＳＥ218（第38図）

平面形は不整円形の素掘りの井戸である。

ＳＥ220（第38図）

一部が調査区外に出るが、平面形はおそらく円形である。

ＳＥ744（第38図）

平面形は不整円形の素掘りの井戸である。

② 中世

この時期の遺構には溝７条と土坑１基がある。

溝

ＳＤ702・ＳＤ719、ＳＤ703・ＳＤ705（第20図）

それぞれ一連のものと考えられる。削平を受け、部分的に残っている。

ＳＤ706（第20図）

直線に延びる溝である。削平を受けている。

土坑

ＳＫ704（第20図）

後世の削平を受け、詳細は不明である。

７　Ｇ地区

第４次調査の「立会調査区」に相当する。

(1) 基本層序

第１層が道路敷設造成時の盛土、第２層が黒褐色粘質土（旧耕作土）、第３層が黄褐色粘質土（基盤層）である。遺構検出は第３層上面でおこなった。

(2) 検出遺構

① 弥生時代前期

この時期の遺構には土坑１基がある。

土坑

ＳＫ７（第49図）

内部に多数の小穴をもつ。底から壺（６）が出土した。

② 弥生時代後期から古墳時代初頭

この時期の遺構には溝１条と土坑１基がある。

溝

ＳＤ５（第49図）

調査区をおおむね東西に直線的に横切る。

土坑

ＳＫ６（第49図）

内部に多数の小穴をもつことから、ＳＫ７と同様に前期に属する可能性もある。

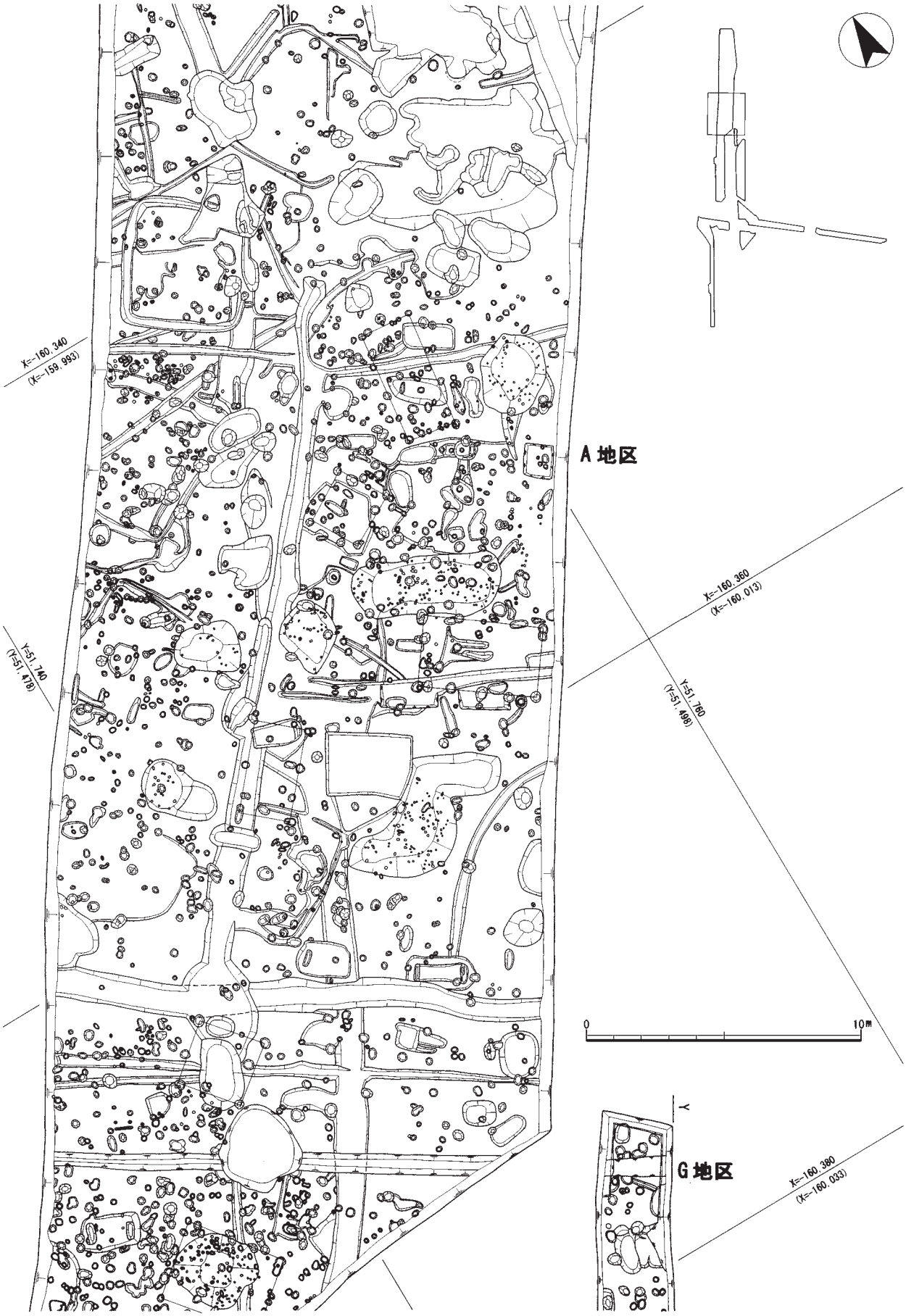
８　掘立柱建物（第69図～第75図）

Ａ地区で検出された独立棟持柱形式のＳＢ647とＳＢ648についてはＡ地区の項で前述した。調査区全体では柱穴と思われるピットは多数検出されており、特にＡ地区南半、Ｂ地区、Ｃ地区西半、Ｄ地区、Ｆ地区北半に集中している。ここでは復元案として比較的まとまりのよいＡ地区16棟、Ｂ地区６棟、Ｃ地区４棟、Ｄ地区４棟、Ｆ地区11棟、計41棟について図示するが、図示したものの他にも想定可能である。１×２間、２×３間などの小規模なものが多い。時期については明確ではないが、独立棟持柱形式の掘立柱建物が検出されたＡ地区南端部の数棟は弥生時代後期後半から古墳時代初頭に属する可能性がある。他はおおむね中世に属するものと思われる。

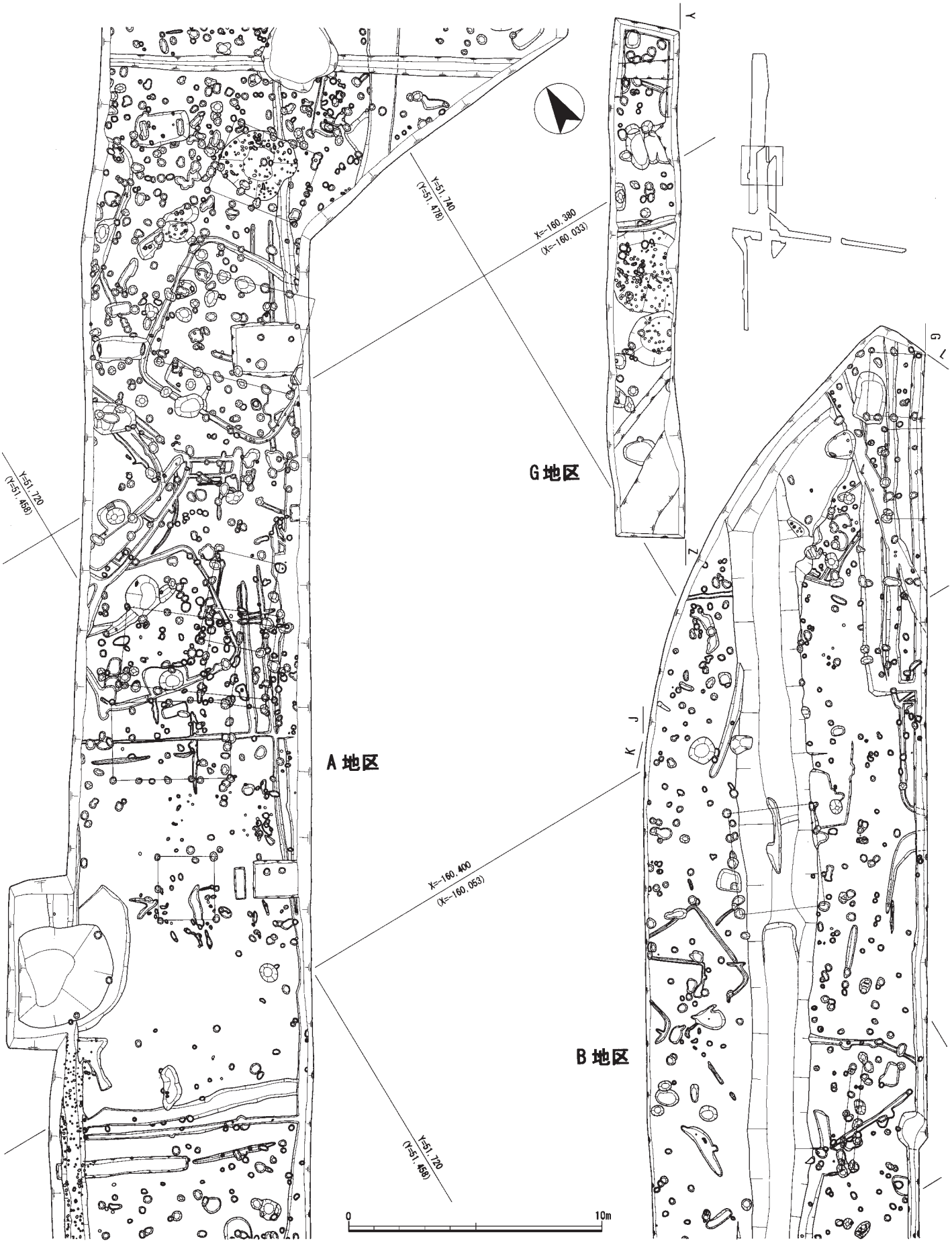
９　柱列（第70図～第72図、第74図、第75図）

掘立柱建物と同様に、柱穴と思われるピットのうち、比較的まとまりよく直列するものを柱列として復元案を示した。Ｂ地区５列、Ｃ地区２列、Ｆ地区２列、計９列について図示した。時期については明確ではないが、おおむね中世に属するものと思われる。

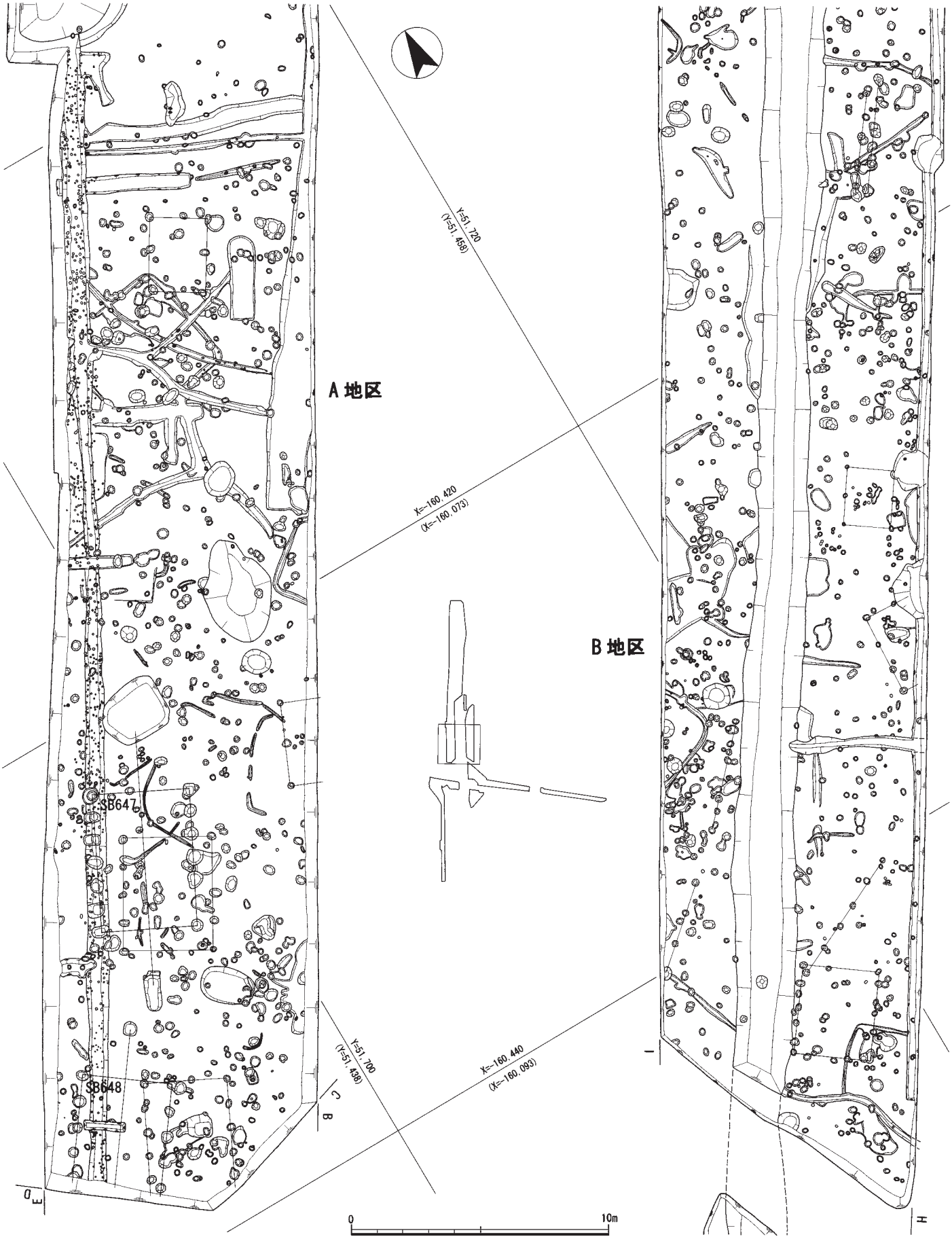
（松葉和也・西口剛司）



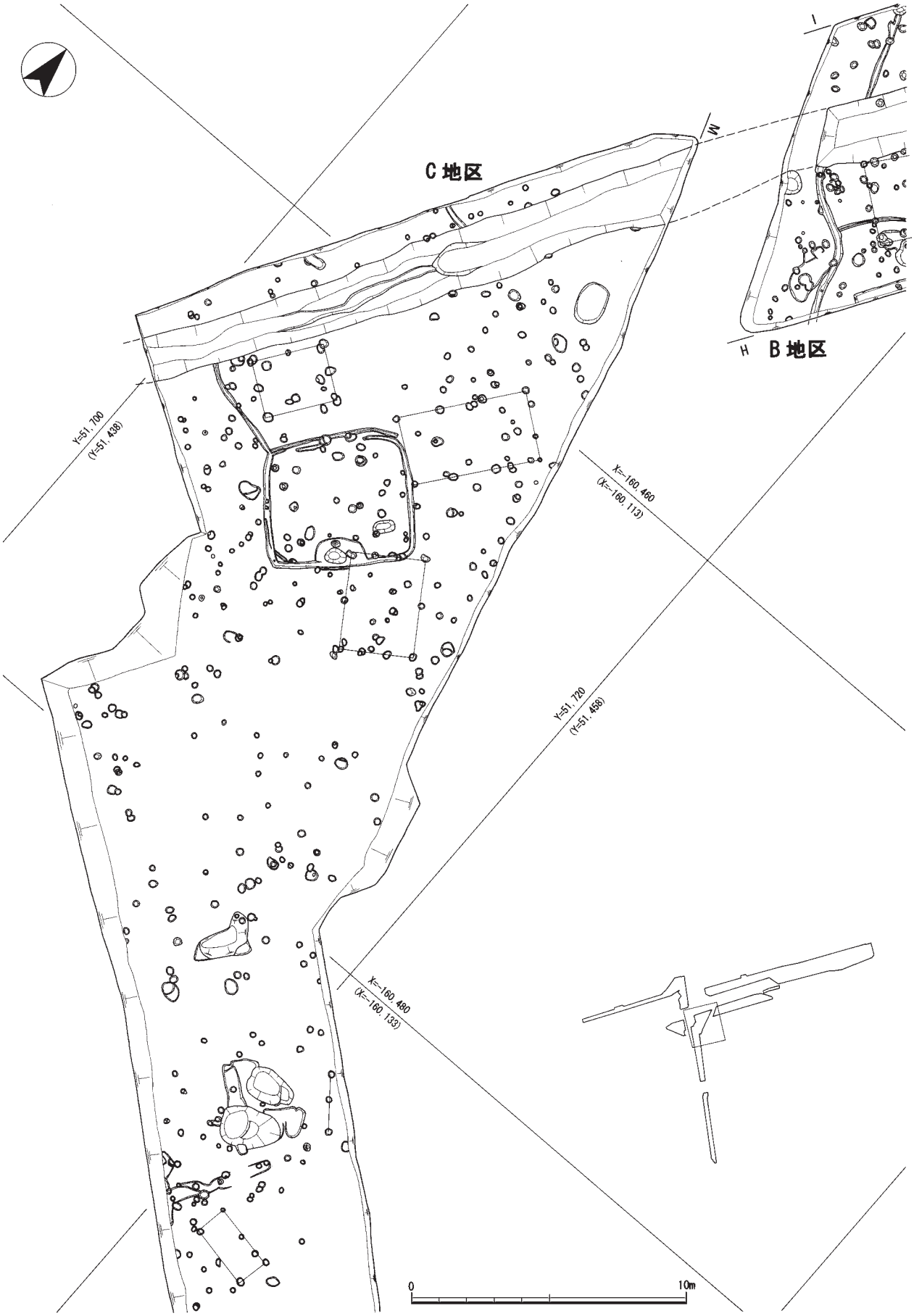
第69図　掘立柱建物復元案（1）（1：200）



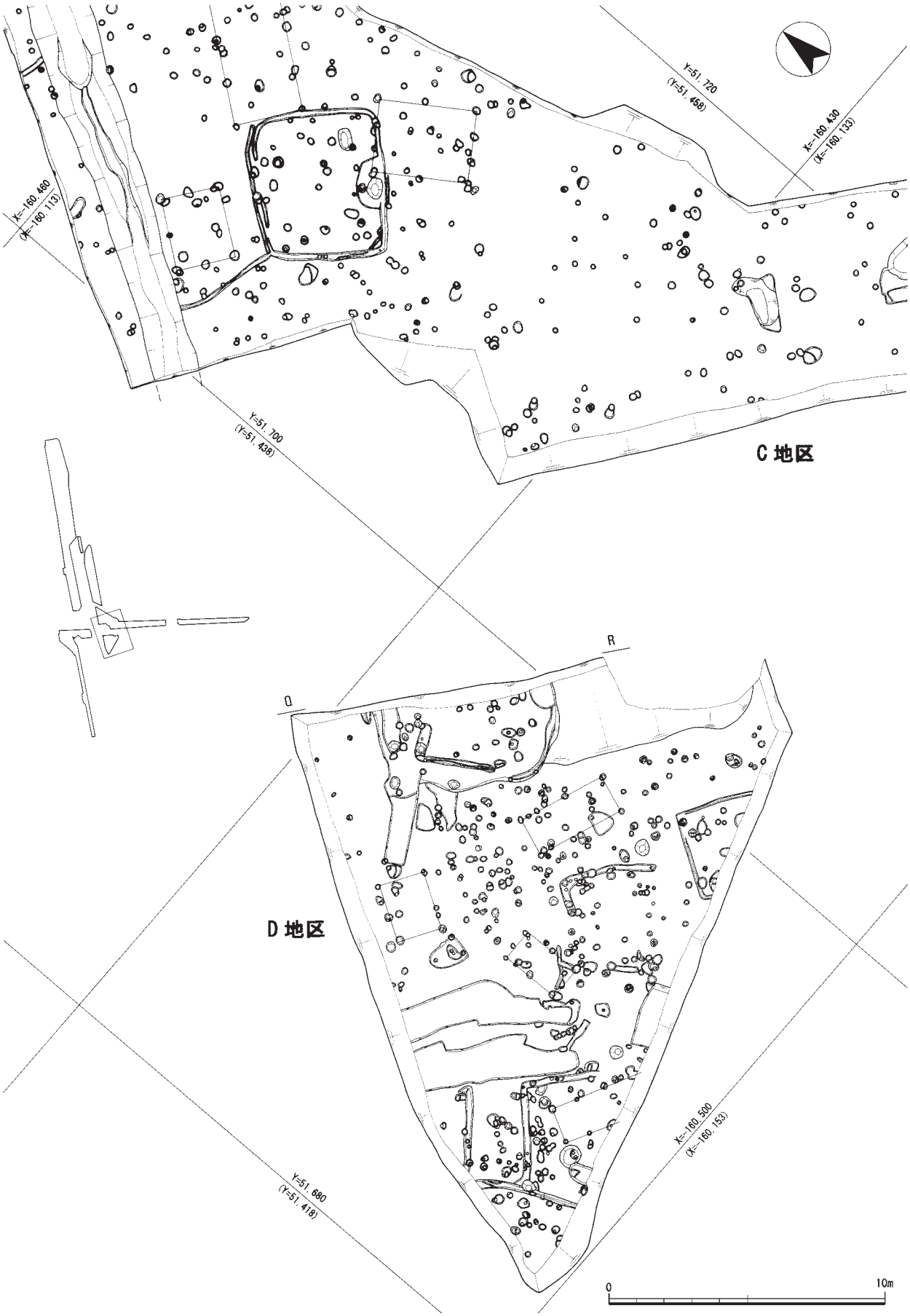
第70図　掘立柱建物復元案（2）（1：200）



第71図　掘立柱建物復元案（3）（1：200）

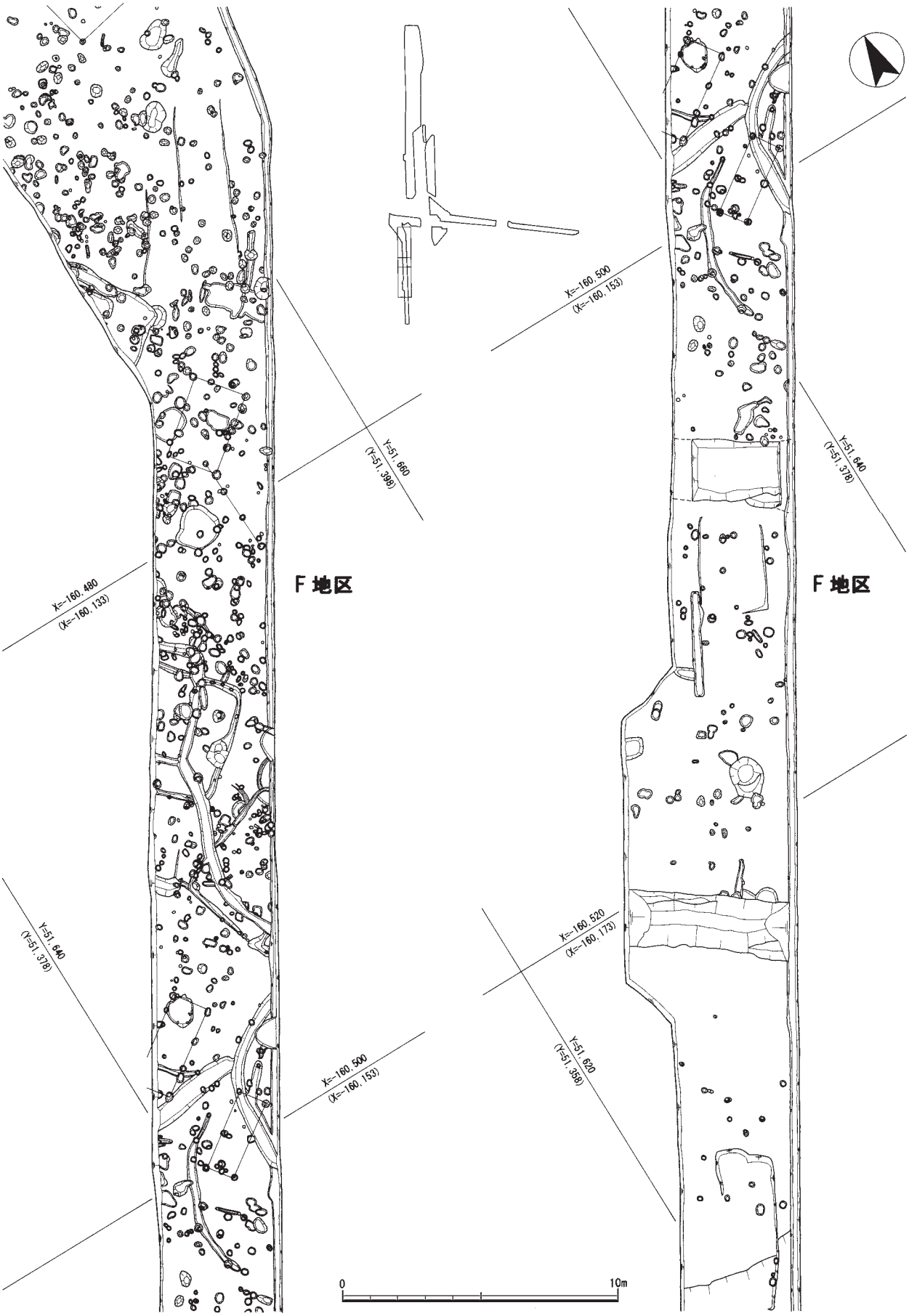


第72図　掘立柱建物復元案（4）（1：200）



第73図　掘立柱建物復元案（5）（1：200）

第74図　掘立柱建物復元案（6）（1：200）



第75図　掘立柱建物復元案（7）（1：200）

Ⅳ　遺　物

1　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器の分類

(1) 分類の目的と方法

村竹コノ遺跡から出土した大量の遺物のなかでも、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器はその大半を占めている。これらについて個々に詳細な記述を行うことは、かなりの煩雑さを招くことになろう。したがって、まずはこれらの土器について器形の分類を行い、その分類を用いることによって少しでも記述の煩雑化を軽減したい。

また、こうした器形による分類は、一見雑多にも見える土器群の内容の整理としても有効であり、村竹コノ遺跡出土土器群を、当該地域における弥生時代後期～古墳時代初頭の土器群全体の様式構造や編年の中へ位置づけていくための足がかりともなりうると考えられる。

以上のような目的のもと、ここでは分類そのものが煩雑化することを防ぐために、網羅的な分類を避けて代表的な器形に絞って分類を行った。そのため、たとえばミニチュアとされる小型品については大型品の器形を縮小したものであるため、特に取り上げて分類は行っていない。同様に、手捏ねにより成形された小型品についても型式としての独立性が弱いため、特に分類は行っていない。

分類は、大分類＝器種（例：壺）、中分類＝全体の器形（例：壺Ａ）、小分類＝口縁部形態・脚部形態等の属性（例：壺Ａ１）、という階層的分類となっている。中分類・小分類にあたっては形態のみではなく、器壁の調整技法や加飾傾向などとの関連性も考慮した。ただし、壺・甕などの体部は破片化しやすいことや、口縁部に特徴が表れることが多いことなどから、主に口縁部形態を重視した分類となっている。

また、分類にあたっては、型式間の相関関係や型式としての独立性などを考慮しつつ行った。また、既存の分類を参照し、ある程度これらとの間の比較や参照が可能となるよう留意している[1]。

なお、ここで行った分類は村竹コノ遺跡出土土器に基づいているが、先に述べたように村竹コノ遺跡出土土器を当該地域における土器様式構造の中に位置づけるという点についても意識しているため、村竹コノ遺跡からは出土していない器形や、出土量がごく少ない器形についても、いくつか分類に加えている[2]。

(2) 分類

【壺】

多様な形態のものが存在するが、全体の器形を中心とし、口縁部形態や加飾などを加味して中分類を行った。壺Ｂについては中・大型壺のうち壺Ａ以外といった様相が強く、やや雑多なものを含む。また、脚が付くものについては基本的に脚付壺として独立させず、壺の形状によって分類を行っている。

壺Ａ：大・中型[3]の、口縁部が大きく外反する広口壺。体部上半・口縁部の加飾傾向が強い。口縁端部を拡張し、加飾するものが多い。体部外面調整はミガキが多い。

Ａ１：口縁部が単純に外反する。口縁端部はあまり大きく拡張しないが面を持ち、刺突などによる文様を施すものが多い。

Ａ２：口縁部が単純に外反する。口縁端部を明確に拡張し、擬凹線や刺突などによる文様を施すものが多い。口縁端部の拡張方法にはいくつかの形態がある。

Ａ３：口縁部から頸部にかけての間で屈曲し、頸部は直立気味となる。口縁端部は若干拡張し、刺突やヘラ描きで文様を施す。

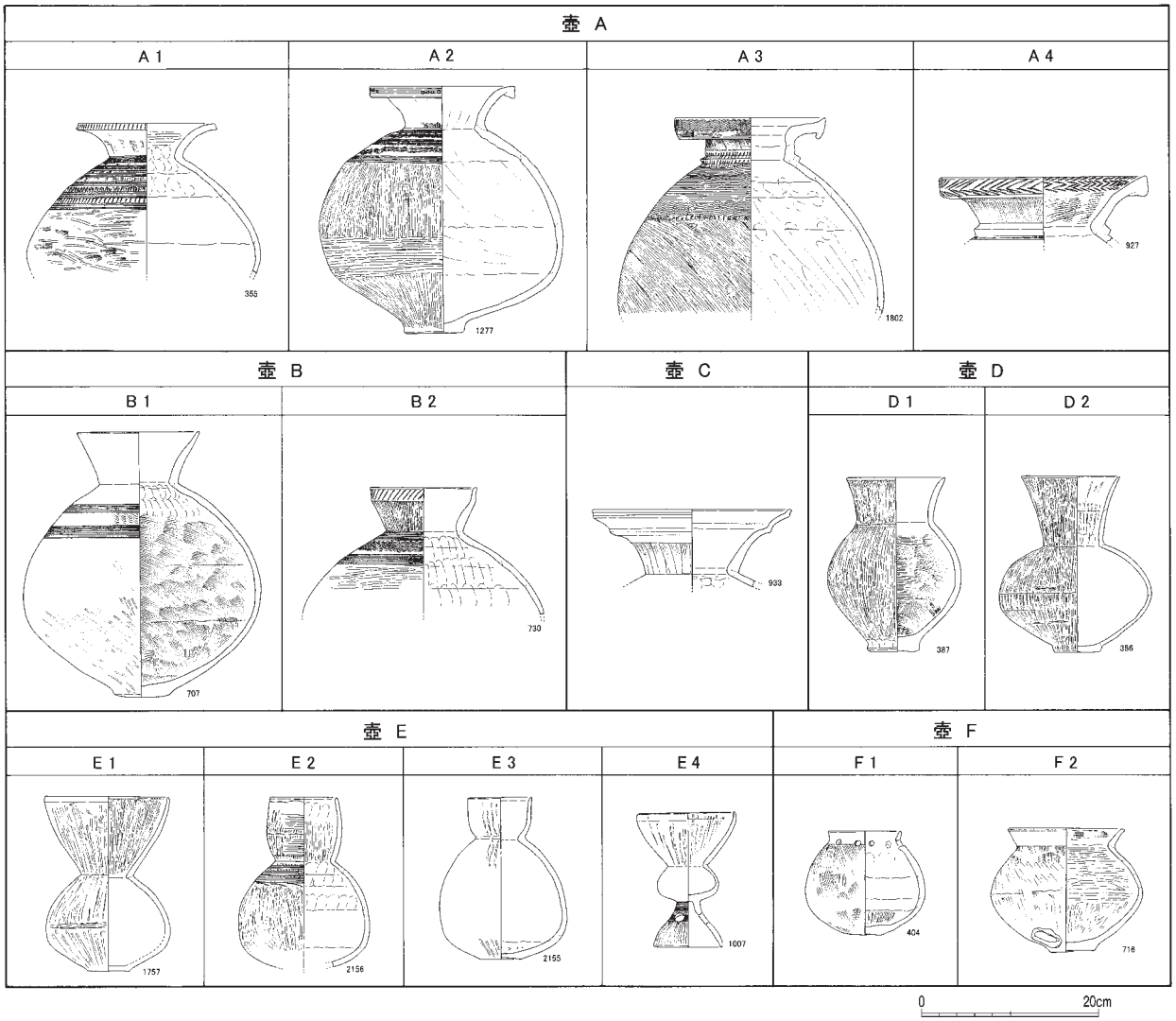
Ａ４：口縁部から頸部にかけての間で屈曲する。口縁内部に平坦面からなる明確な文様帯を作る。口縁端部を明確に拡張し、擬凹線や刺突・ヘラ描きなどによる文様を施す。

壺Ｂ：大・中型の、口縁部があまり外反しない直口壺に近いもの。体部・口縁部の加飾傾向は弱い。口縁端部はほとんど拡張しない。体部外面調整はミガキのほかに、ハケも多い。

Ｂ１：口縁部が単純に直立気味に立ち上がる。

Ｂ２：口縁部が受け口状に緩く屈曲ないし内湾する。

壺Ｃ：大・中型の複合口縁壺。口縁部が頸部から外反する。１次口縁の端部を拡張し、２次口縁端部



第76図　土器の分類（1）（壺）（1:8）

は上方にはね上げるものが多い。いわゆる伊勢型二重口縁壺。

壺Ｄ：中型の長頸壺。体部高と口頸部高が近しいものが基本であるが、口頸部高が体部高の半分程度のものも一部含む。

Ｄ１：口縁部が直立気味に上方へのびる。体部は胴が張らず細身なものが多い。口頸部高が低いものも存在する。

Ｄ２：口縁部が外反する。体部は丸みを帯びるものが多い。脚付のものも一定量存在する。

壺Ｅ：口縁部が内湾する中型壺。いわゆる内湾口縁壺で、中型長頸壺の一種といえるが、口縁部の内湾傾向や体部形状、外面調整、文様などにおいて関連性が強い一群であり、独立させて扱う。

Ｅ１：口縁部が外方へ開く。内湾傾向は弱い。

Ｅ２：口縁部がほぼ直立し、内湾傾向が強い。口縁端部に内傾する面を作る。いわゆる瓢壺。

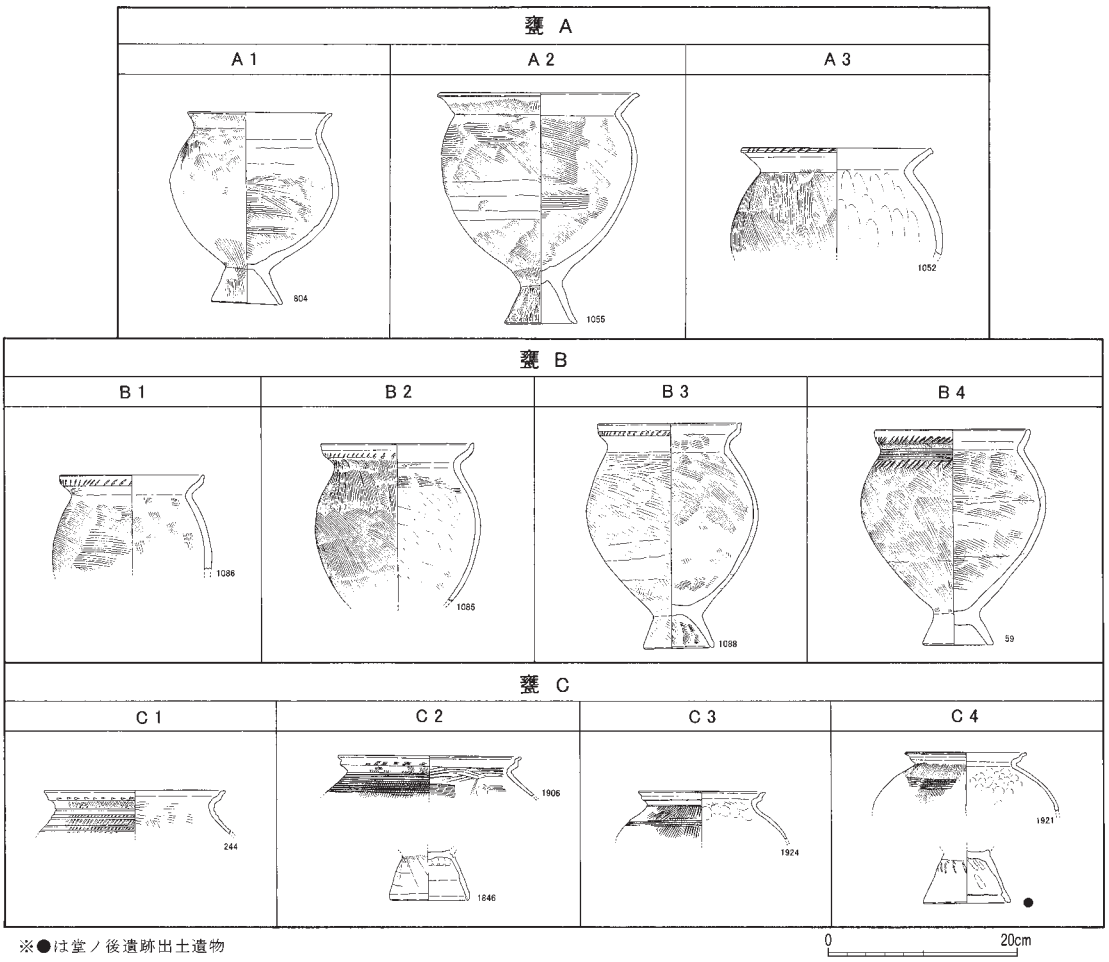
Ｅ３：Ｅ２のうち、口縁部が短いもの。いわゆる短頸瓢壺。

Ｅ４：脚付の小型のもの。体部は小さく、口縁部が大きくのびる。

壺Ｆ：中・小型の短頸壺。壺Ｂ１などにも口縁部がやや短く短頸壺と呼びうるものがあるが、ここでは特に口縁部が短いものを扱う。

Ｆ１：球形の体部にごく短い口縁部を持つ。頸部の屈曲は緩く、頸部に小孔を穿つものが多い。

Ｆ２：胴の張った体部に短く外反する口縁部を持つ。頸部の屈曲は強い。



第77図　土器の分類（2）（甕）（1:8）

【甕】

遺存状態が悪くても分類が可能な口縁部の形態を基本として分類を行っているが、中分類においては、口縁部形態の差異に体部の製作技法や調整技法などの差異も基本的に対応している。平底の甕も少量存在するが、基本的にほとんどの甕が脚台を持つものと考えられ、また、全形が復元できないものも多いことから、底部形態は分類には加味していない。小分類は他の器種に比べてやや些末な属性によるが、これらの属性による区分から多くの情報が得られることがこれまでの研究からも明らかであるため[4]、それを踏襲した。

甕A：く字状口縁甕。脚が付くものが多い。

Ａ１：頸部の屈曲がやや甘く、口縁部は顕著に外湾する。口縁端部に明瞭な面を持たないものが多い。体部外面調整は多様だが、ストロークの短い不整方向のハケが多い。

Ａ２：頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は直線的に開く。口縁端部に明瞭な面を持つものが多く、刺突文を施すものもある。体部外面調整は多様だが、ストロークの長い単斜方向のハケのものはＡ１より多い傾向にある。

Ａ３：口縁部形態はＡ２と共通するが、口縁端部に刺突文を施す。体部外面の調整はストロークの長い単斜方向のハケのものが目立つ。

甕B：受け口状口縁甕。脚が付くものが多い。

Ｂ１：口縁端部が上方にはね上げられる。

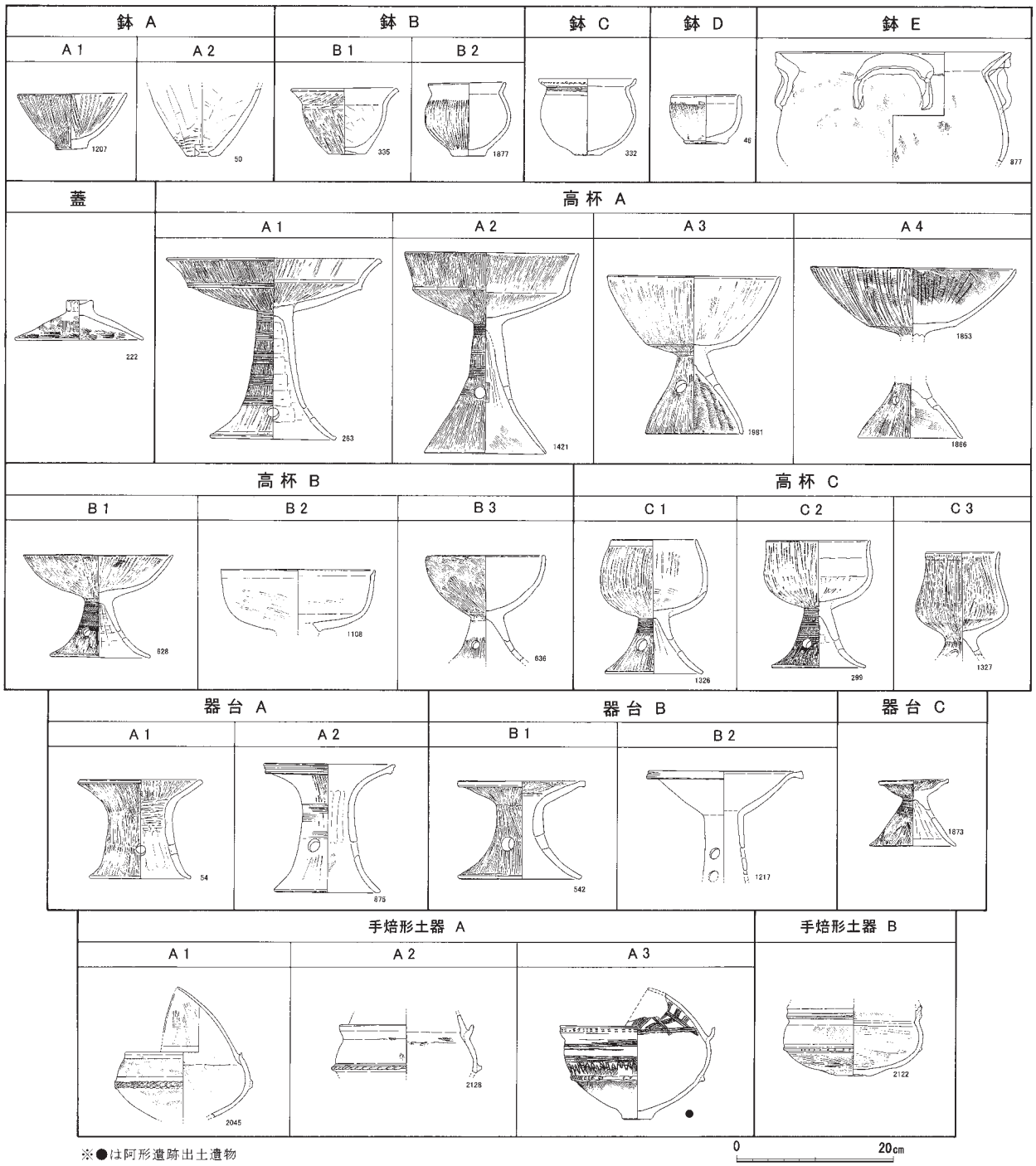
Ｂ２：口縁端部は丸い。やや明確な屈曲による受け口。

Ｂ３：口縁端部に面を作る。明確な屈曲による受け口。

Ｂ４：口縁部の屈曲が明瞭ではなく、受け口というより内湾状になる。

甕C：Ｓ字状口縁甕[5]。基本的にすべての個体に脚がつく。

Ｃ１：口縁部が全体に外反する。口縁部外面には



第78図　土器の分類（3）（鉢・蓋・高杯・器台・手焙形土器）（1：8）

刺突文を施す。頸部の屈曲はやや緩い（S字甕0類）。

C２：口縁部上段がほぼ垂直に立ち上がる。口縁部外面には押し引き刺突文を施す（S字甕A類）。

C３：口縁部上段がほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は強いナデにより面をなしたり、やや外方に突出するなどする。口縁部外面には刺突文を施さない。体部外面の調整として羽状のハケが普遍的に見られる（S字甕B類）。

C４：口縁部上段は拡張され、全体に外反する。肩部のヨコハケが頸部よりやや下方に施されるものが普遍的である（S字甕C類）。

【鉢】

主に全体の器形によって中分類を行っている。多様な形態のものがあるが、一定数の存在が認められるものを中心に取り上げている。甕と器形が類似す

るものもあるが、主に甕と比べて頸部の締まりが弱いものや、小型で器高が低いものなどを鉢とした。

鉢Ａ：底部から体部が、直線的かやや内湾しつつ外方へ開く。頸部は持たない。

Ａ１：底部がしっかりした平底。

Ａ２：底部が小さな平底で不安定。有孔鉢。

鉢Ｂ：小型のく字状口縁の鉢。低い脚がつくものもある。

Ｂ１：底部から直線的に体部が開く。甕に近い形態。

Ｂ２：頸部がやや締まり、体部は丸みを帯びる。壺に近い形態。

鉢Ｃ：受け口状口縁の鉢。脚がつくものもある。

鉢Ｄ：無頸で、口縁はやや内湾する。平底。

鉢Ｅ：大型のく字状口縁の鉢で、逆Ｕ字形の把手を２箇所に貼り付ける。片口のものがみられ、また多くのものに脚がつく可能性が高い[(6)]。

【蓋】

甕ないしは鉢に伴う蓋と思われる。頂部から口縁部へむかって直線的に開く。

【高杯】

主に杯部の形態によって中分類を行い、小分類は杯部と脚部の形態を中心に行っている。

高杯Ａ：杯部に屈曲部を持つ有稜高杯。

Ａ１：杯部の稜以上が外反する。脚部も外反する。

Ａ２：杯部の稜以上が直立気味に立ち上がる。口径と杯部稜径の差が小さく、杯部はやや浅い。脚部は上半部に若干の柱状部を作り、下半部は内湾傾向を持つ。

Ａ３：杯部の稜以上が内湾傾向を持つ。口径と杯部稜径の差が大きく、杯部が深い。脚部には柱状部がなく全体的に内湾する。

Ａ４：杯部が浅く、内湾度も弱い。脚部は直線的にのびるか、もしくは外反する。

高杯Ｂ：杯部が椀形を呈する椀形高杯。

Ｂ１：杯部が浅い。口縁部はやや外反気味となるものもある。

Ｂ２：杯部が深く、口縁部は底部から直立気味に立ち上がる。口縁端部に内傾する面を作るものが多い。

Ｂ３：杯部が深い椀ないし鉢形を呈し、ハの字状に開く低い脚が付く。台付鉢に近い形態のもの。

高杯Ｃ：杯部が深く無頸壺に近い形態で、全体としてワイングラス形を呈する[(7)]。

Ｃ１：口縁部が外反せず、球形に近い杯部を持つ。

Ｃ２：口縁部がやや外反する。口縁部の直下がやや締まり頸部状になる。

Ｃ３：Ｃ２の口縁部が上方へのびたもの。口縁部の外反傾向はＣ２より強まり、頸部はさらに締まる。

【器台】

頸部の屈折の有無を大きな分類基準とした。小型器台に関しては、大型のものとは形状が異なるため、別に分類した。

器台Ａ：口縁部から脚部までの間に明確な屈折を持たない。

Ａ１：器高が低く口径と同程度。

Ａ２：器高が高く口径をかなり上回る。

器台Ｂ：口縁部から脚部までの間に、明確な屈折からなる頸部を持つ。

Ｂ１：脚部が短く、外反する。

Ｂ２：脚部が長く、外反する。

器台Ｃ：小型器台。口縁部はやや内湾する。脚部は直線的に大きく開き、口径より脚裾径が大きい。杯部と脚部の接合部は中実で貫通していない。

【手焙形土器】

手焙形土器Ａ：鉢部と覆部との区別が明瞭で、鉢部の頸部内側に覆部が付加されている。

Ａ１：鉢部がく字状口縁の鉢や無頸壺などを基調とする。

Ａ２：鉢部が受け口状口縁の鉢を基調とする。

Ａ３：鉢部がＳ字状口縁の鉢を基調とする。

手焙形土器Ｂ：鉢部と覆部の一体化が進み、鉢部の口縁端部に覆部が付加されている。　（石井智大）

［註］

(1) 以下の文献において提示されている器種分類を参照した。

愛知県埋蔵文化財センター『廻間遺跡』1990、愛知県埋蔵文化財センター『山中遺跡』1992、三重県埋蔵文化財センター『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』1992、赤塚次郎「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡』（財）愛知県教育サービスセン

ター・愛知県埋蔵文化財センター　2001、三重県埋蔵文化財センター『六大Ａ遺跡発掘調査報告』2002

(2) 松阪市草山遺跡・阿形遺跡・天王山遺跡・杉垣内遺跡・堂ノ後遺跡などから出土した土器を参照した。

(3) ここでいう大型・中型・小型については絶対的な数値基準は特になく、各器種の中における相対的な大きさである。

(4) 赤塚次郎「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター　1990、比田井克仁「受け口状口縁甕考」『西相模考古』第９号　西相模考古学研究会　2000、など。

(5) Ｓ字状口縁甕の分類については、基本的に尾張平野における分類に依拠している（愛知県埋蔵文化財センター　1990）。

(6) 伊勢湾西岸地域には普遍的に見られる器種で、他の鉢とは様相を異にするものの、頸部の締まりが弱く口が広いことや、片口を持つものが見られることなどから鉢に含めた。

(7) 高杯というよりも脚付の鉢・壺などに分類できるかもしれないが、椀形高杯の一部との関係性が考えられることや、脚の付かない無頸壺の存在が希薄であることから高杯に含めた。

２　土器・土製品

村竹コノ遺跡からは、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての環濠と考えられる溝ＳＤ301を中心に、多くの遺物が出土している。特に土器の出土量は多い。まず、土器・土製品について、大きく弥生時代前期、弥生時代後期～古墳時代初頭、古代～中世にわけて述べていきたい。

(1) 弥生時代前期

弥生時代前期の土器の出土量は多くないが、遺構に伴って良好な資料が出土している。以下、遺構ごとに述べていきたい。

ＳＫ470出土土器（第79図１・２）　１は甕である。頸部には４条の平行沈線を施し、その下には鋸歯文を施す。口縁部は短く外反する。体部外面はタテナデによって調整する。２は壺である。肩部には４条の平行沈線を施す。内外面とも横方向のヘラミガキによって調整している。これらの土器は前期中段階のものと思われる。

ＳＫ507出土土器（第79図３）　３は壺である。肩部で不明瞭ながらも段をなし、段の直下に３条の平行沈線が施される。頸部にも２条の平行沈線が施される。体部外面にはヘラミガキが施されている。

ＳＫ７出土土器（第79図５・６）　５・６は壺である。５は胴が張るやや扁平な体部を持ち、口縁部には小孔が開けられている。６も口縁部に小孔を持つ。両者とも内外面ともにヘラミガキで調整されている。

ＳＥ477出土土器（第79図７）　７は壺である。体部は胴が張らず、器高が高い。肩部には不明瞭な段を作っており、段の直下には４条の平行沈線を施す。外面は丁寧なヘラミガキによって調整されている。

ＳＫ631出土土器（第79図８）　８は小型の壺である。口縁部には小孔が開けられている。肩部には不明瞭な段があり、段の直上には２条の平行沈線が施され、段の直下には粘土貼り付けによる文様が施されている。

ＳＫ525出土土器（第79図９）　９は小型の壺である。肩部には不明瞭な段を作っている。肩部の直上には２条の平行沈線が施される。外面は丁寧なヘラミガキによって調整される。

ＳＫ472出土土器（第79図10）　10は壺の口縁部である。小孔が開けられている。内外面ともにヘラミガキで調整されている。

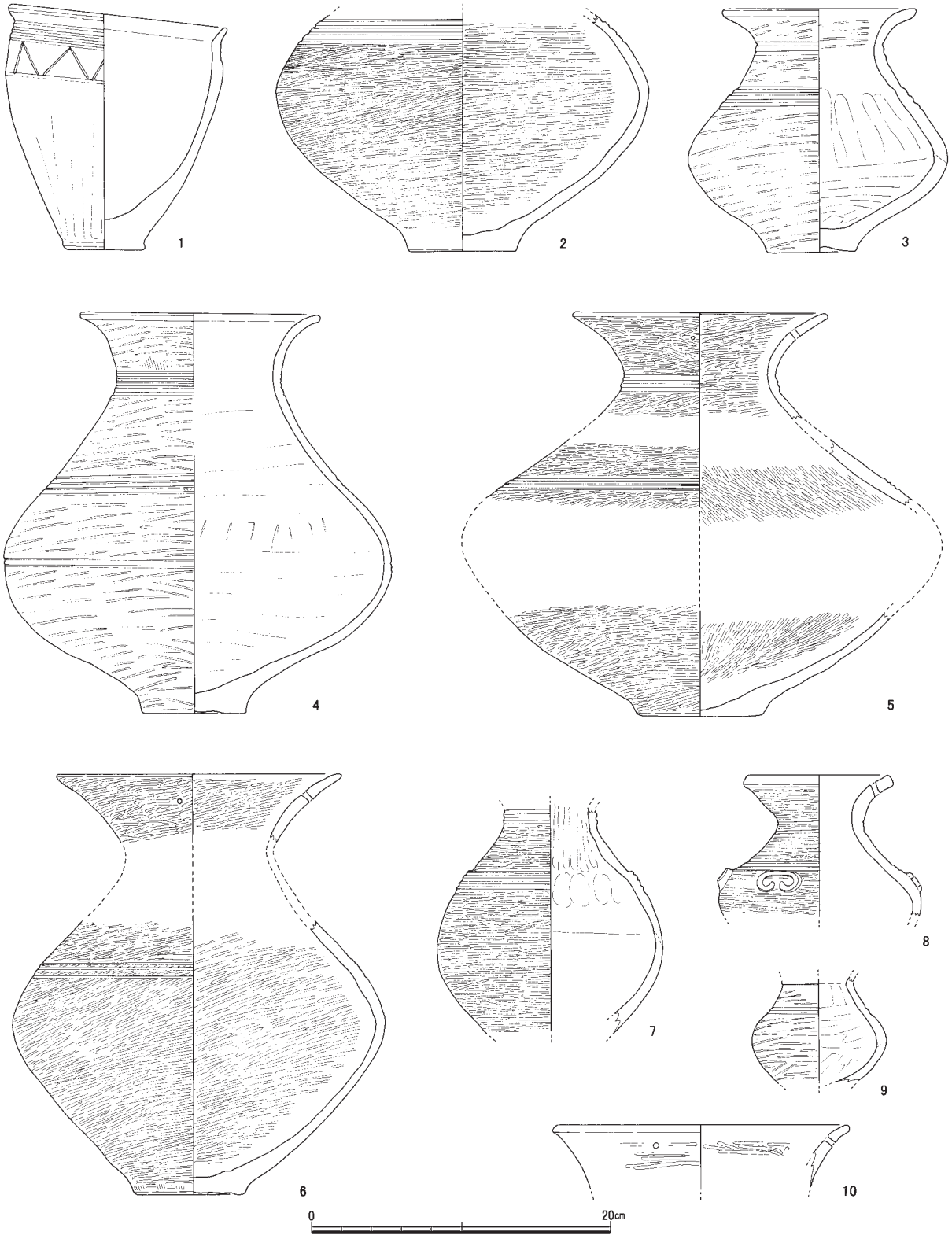
遺構検出中出土土器（第79図４）　４は遺構検出中に出土した壺で、伴う遺構は不明である。肩部に段は持たず、頸部・肩部・体部中位に平行沈線を施す。

(2) 弥生時代中期～古墳時代初頭

今回の調査で最も出土量が多かったのが弥生時代後期～古墳時代初頭の土器である。それに加えて、ごく少量ではあるが弥生時代中期に属する土器も、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構内から出土している。これらの弥生時代中期～古墳時代初頭の土器・土製品について遺構ごとに述べていきたい。

土器の記述については、前節で行った分類にしたがって、器種の構成などに主眼を置き、各遺構から出土した土器群全体の様相について概略的に述べる。なお、分類中に該当するものがない特殊な器形の土器や、他地域との関係が窺われる土器など、個々の記述が必要であるものについてはその都度特に取り上げて述べる。

ＳＤ202出土土器（第80～84図11～132）　ＳＤ202から出土した土器の一部は、最下層・下層・中層・上



第79図　弥生前期出土遺物実測図（1:4）

層に分けて取り上げられている。

最下層から出土した土器は11～17・50・52・55・61・63・71・84・85・89・94・97・98である。壺・甕・鉢・蓋・高杯などがみられる。

壺にはＡ１・Ａ２・Ｄ１などがみられる。14は体部の形状などからみて壺Ｄ１に近いが、頸部がかなり短く短頸壺状である。

甕は全形のわかるものがほとんどないが、口縁部が遺存しているものでは甕Ａが主体を占めている。55・61のように甕Ｂ３もみられる。84は内面をタテヘラケズリで調整し、頸部の締まりが弱いなど、やや特徴的な形態を示す。脚部も複数出土しており、甕は基本的に脚付のものが多数を占めると思われる。

鉢にはＡ２がみられる。50はタタキによって成形されているが、その後にナデが施されているためにタタキの痕跡がほとんど消されている。内面は板ナデで調整されている。

蓋は52の１点が出土しているが、やや器高が高いものである。口縁端部にはススが付着している。

高杯は脚部のみのものが多いが、大半が高杯Ａ１の脚部であると思われる。高杯Ｃ１も出土している。

下層から出土したとされる土器は53・56・64・107・111で、量的には少ない。甕・高杯・器台などがみられる。

甕にはＢ３とＡ２がみられる。64は甕Ａ２で、体部外面の下半部は板ナデ状のヘラケズリによって調整している。

高杯はＡ１に属する111が出土している。もう１点107が出土しているが、低い脚であり、高杯Ｂないし高杯Ｃの脚部であると思われる。

器台には、器高の低い点が器台Ａ１に似た53がみられるが、この個体は全体の形状や施文などからみて、一般的な器台Ａ１とは異なる。外来系土器である可能性があろう。

中層から出土した土器には18～21・23・45・62・67・83・101がある。壺・甕・鉢・高杯がみられる。

壺ではＡ１・Ｄ２などがみられる。Ｄ２に属すると思われる19・20には脚が付けられており、口縁部はあまり外反しない。

甕にはＡ２・Ｂがみられる。67は短い口縁部を持ち、脚部も体部に比べて小さい。外面全体をハケで調整する。

鉢にはＢ１・Ｄがみられる。45は鉢Ｄで、46とは法量や器壁の調整などの点で共通性が高い。

高杯はＢないしＣの脚部と思われるものが出土している。

上層から出土したとされる土器は44のみである。おそらく壺Ａの体部片であろう。

以上の層位別に取り上げられたものの他にも、多くの遺物が出土している。壺・甕・鉢・高杯・器台がみられる。

壺にはＢ１・Ｅ１・Ｅ４などがみられる。30・51は頸部が締まらず太頸であるが、おそらく脚が付くものであり、壺Ｅ４に属するものと考えられる。

甕には甕Ａに属するものが多いが、甕Ｂに属するものも一定量を占めている。甕Ｂの中では57・60などのようにＢ３に属するものが目立つ。甕Ａでは口縁端部に刺突を加えているＡ３もみられる。

鉢にはＤに属する46がみられる。

高杯はＡ１が多くを占めるが、ＢやＣと思われる脚部も出土している。また、114はＡ２に属するものと考えられ、ＳＤ202出土土器の中でもやや新しい様相を示すものと見られる。132も透孔の位置がかなり上部にきており、高杯Ａ２の脚部と考えられる。99はＢ３に属するものであろう。108のみは柱状の脚部である。こうした柱状の脚部は、他にはほとんどみられない。施文は高杯Ｂの脚部と同様の構成である。

器台ではＡ１に属する54が出土している。外面全体をタテミガキで調整するが、無文である。

以上のＳＤ202出土遺物には、甕Ｃが全く認められず、また高杯ＡにもＡ３やＡ４が全く認められず、Ａ２もほとんどみられないことから、全体として山中式期に位置づけることができよう[1]。

ＳＤ301（ＳＤ282部分）出土土器・土製品（第85～94・181図133～340・2181・2182）　ＳＤ301からはかなり多量の土器・土製品が出土している。このうち、第２次調査において調査が行われた部分（ＳＤ282）については層位別に遺物の取り上げが行われていないが、壺・甕・鉢・蓋・高杯・器台など、多様な器種の土器が出土している。まず、これらの土器について述べていきたい。

壺にはＡ１・Ａ２・Ａ４・Ｂ１・Ｄ１・Ｄ２・Ｆ

１・Ｆ２などがあり、かなりバリエーションが多い。中でもＡ１が目立つ。161の外面には被籠痕が残されている。確実に壺Ｅと思われる個体は見あたらず、172がＥ１の小型品である可能性が考えられる程度である。151は頸部に把手状のものを貼り付けていたようである。137は基本的に壺Ａ１を意識して作られていると思われるが、口頸部が短く、大型の壺Ｆ２といった器形となっている。138・141は大きく波打つ波状文を口縁部内面に施しており、ＳＫ477出土品にも類品がある（1784）。176は壺Ｆ１に似た器形であるが、脚が付くものである。内外面をミガキで調整しており、壺Ｆ１というよりは高杯Ｃとして捉える方が妥当かもしれない。

甕にはＡ１・Ａ２・Ａ３・Ｂ１・Ｂ２・Ｂ４・Ｃ１などがある。主体を占めるのは甕Ａで、大型品から小型品まで法量にも多様なものが存在している。また、234や235のような平底のものも認められる。内面調整はハケのものが多いが、218のようにヘラケズリを施すものもある。甕Ｃはごく少ない。

鉢にはＡ２・Ｂ１・Ｃなどがみられる。261は鉢Ｂ１で、外面にはタタキが認められる。333はミニチュアの鉢であろう。

蓋は２個体が図化できた。223は外面にタテミガキが施されている。

高杯にはＡ１・Ａ３・Ｂ１・Ｂ３・Ｃ２がみられる。確実にＡ２とみられるものはないが、293や324はＡ２の脚部である可能性もある。主体を占めるのはＡ１で、口縁部外面に波状文と直線文を施すものが多い。また、278や279のように、無文のやや粗雑な作りの脚部の出土が目立つ。272はＢ１に分類できるものであるが、Ａ１の杯部の稜以下までで成形を止めたものと見ることもできる。脚部は欠損しているが、杯部内面にはススが濃く付着しており、何らかの用途に転用されたものとみられる。

器台にはＡ１・Ａ２がある。326は口縁部内面に扇状文を施し、また柱状部に直線文や斜格子文を施すなど、装飾性が高い。

このほかに土製品が出土している。340は杵形の土製品である。用途などは不明である。また、2181・2182のような土玉も出土している。

ＳＤ301（ＳＤ741部分）出土土器（第94図341～350）

ＳＤ301のうち、第４次調査で調査が行われた部分（ＳＤ741）については、出土遺物の量は多くないものの、下層・中層・上層に分けて遺物が取り上げられている。壺・甕が出土している。

下層から出土した土器は341・342・349である。壺の小型品またはミニチュアと考えられるものと、甕Ｂ３である。349は体部内面を頸部直下までヘラケズリによって調整している点が特徴的である。

中層から出土した土器には344・347がある。壺Ａと甕Ａ２である。

上層から出土した土器には343・345・346・348・350がある。343は壺Ｄ１と思われる。甕はいずれもＡ２である。350は受け口状の口縁部を持つが、元の器形は不明である。やや口径が大きいが、壺Ｂ２とも考えられる。

ＳＤ301出土土器・土製品（第95～145・177・181図351～1268・2061～2075・2174～2180・2194・2195）

ＳＤ301の中で最も遺物が多く出土しているのは、第３次調査で調査が行われた部分である。この部分については、下層・中層・上層に分けて遺物が取り上げられている。

下層から出土した土器は351～662・1231・1249である。壺・甕・鉢・蓋・高杯・器台がある。

壺にはＡ１・Ａ２・Ｂ１・Ｂ２・Ｄ１・Ｄ２・Ｅ１・Ｆ１・Ｆ２がある。バリエーションは多いが、確実にＡ３・Ａ４と考えられるものがみられない点や、壺Ｅが少ない点などに特徴がある。壺Ａの肩部には波状文や斜行列点文を直線文と共に施しているものが多くみられる。410の内面には水銀朱と思われる赤色顔料が付着している。外面にススや被熱痕跡は認められず、水銀朱の貯蔵用として使われた可能性もある。364～369は小型の壺で、器形などからみて壺Ａ１を意識して作られたものが多いと思われる。393は壺Ｅ１であるが、やや口頸部が短い。505は体部外面をミガキによって調整しており、壺Ｆ２に分類できよう。652～659は壺のミニチュアである。

また、このほかに特徴的な器形の壺もみられる。401は大型の長頸壺で、長い口頸部を持つ。口頸部の内外面は丁寧にミガキで調整されており、胎土は雲母を含まず白っぽい色調を呈する。器形としては、当該地域ではほとんどみられないものであるが、尾

張平野では山中式期にみられるものであり、こうした地域からの搬入品である可能性が高い。402は大型の壺の口縁部と思われる。受け口状の口縁部を持つものであろう。408は内面調整や文様などからみて壺の肩部であると思われるが、なで肩で頸部がかなり締まる器形に復元される。407はやや受け口状を呈する細頸壺である。当該地域では一般的な器形ではなく、他地域との関連性を持つものである可能性が高い。口縁部外面には羽状文が施されるが、この文様は櫛状工具や貝殻ではなく、細い中空のものを一列に束ねたような工具で施されている。同様の工具によって施された文様を持つものは、同じくＳＤ301から出土した669・671・805やＳＫ321から出土した1535など、他にも複数出土している。415は算盤玉形の体部をもつ壺で、ＳＤ301中層出土の718のような長頸壺になるものと思われる。435は縄文と思われる文様が施されている破片である。また、壺には436～438のように絵や文様が線刻されているものもある。437にはサギとみられる鳥が描かれている。

甕にはＡ１・Ａ２・Ａ３・Ｂ２・Ｂ３などがみられる。甕Ａ２が主体を占め、甕Ｃはみられない。底部がわかるものについては多くが脚の付くものであり、甕は基本的に脚付のものであったものと思われる。525や532は平底であるが、底部をやや重厚に作っており、脚台風となっている。529も平底の甕であるが、この個体は底部に孔が穿たれている。甕Ａについては基本的に体部外面をハケによって調整するが、中には板ナデ状の調整を施すものも散見されるほか、478のようにかなり粗いハケを施しているものもみられる。また、495・501はタタキによって成形されているようである。

鉢にはＡ１・Ｂ１・Ｂ２などがある。ややＡ１が目立つが、Ｂ１・Ｂ２もある程度の数が出土している。506・507は器形からみて鉢と考えられるが、口縁部は鉢Ｃのように緩やかながらも受け口状になっている。551は鉢Ｂ１であるが、鉢Ａ２のように焼成前に底部に孔が穿たれている。533は外面を丁寧にタテナデによって調整しており、ススの付着や被熱痕跡は認められない。535は甕の底部である可能性もあるが、鉢Ａ２のような器形のものの底部に複数の孔を穿っており、いわゆる多孔鉢であると考えられる。540も鉢であると思われる。平底で円筒形をなす。外面にはベンガラが塗布されている。器形や胎土などからみて、他地域からの搬入品である可能性もある。662は鉢Ａ１のミニチュアであろう。

蓋はいずれも内外面ともにハケで調整されている。539は器高が高い。538は鉢Ｂ１である可能性が高い。

高杯はかなりの数が出土しており、出土土器群の中でもかなりの割合を占める。Ａ１・Ｂ１・Ｂ３・Ｃ１・Ｃ２がみられる。中でもＡ１・Ｂ１・Ｃ２が多い。Ａ２やＡ３の存在は確認できない。Ａ１には第２次調査で出土した高杯と同様に、口縁部外面に波状文と直線文を施すものが多くみられる。口縁部が強く外反するものも多い。また、612のように口縁端部をやや拡張しているものもみられる。579は深い杯部をもつが、高杯Ｃに類するものであると思われる。杯部外面には、高杯Ｃの脚部に多くみられる文様と同様の文様が貝殻腹縁によって施されている。高杯Ｂ１には口縁部がやや外反傾向を示すものがみられ、口縁端部には内傾する面は認められない。

器台にはＢ１の542がある。頸部には明瞭な屈曲部を持ち、外面は全体的にミガキで丁寧に調整されている。541は器台Ａ１に属するものと思われる。

中層から出土した土器は663～915・1245である。壺・甕・鉢・蓋・高杯・器台がある。

壺にはＡ１・Ａ２・Ａ３・Ｂ１・Ｂ２・Ｄ１・Ｄ２・Ｅ１・Ｅ４・Ｆ２と、ほぼすべての器形のものがそろっている。壺Ａ１がやや多いほか、壺Ｂ２や壺Ｅ１も複数個体が出土している。ただし、壺Ｅ２・Ｅ３はみられない。壺Ａの口縁部内面には貝殻腹縁などによる羽状文が施されているものが多い。667は施文にヘラ状工具が用いられており、また外面にはベンガラが塗布されている。こうした特徴や器形、胎土などからみて、他地域からの搬入品である可能性が高い。682・686にもベンガラの塗布が認められる。壺Ｅには711のように口頸部が体部高よりも長いものがみられる。小型～中型の壺には、734や738のように壺Ｄ２に分類できるものが多いが、いずれも口頸部が短く、長頸壺というよりは直口壺というべき形状である。886～891のようなミニチュアの壺も多く出土しており、小型品の中にも898のように明らかに壺Ａ１を小型化したものもみられる。

壺にはこのほかに特徴的な器形のものもみられる。704は頸部が直立し、口縁部が屈曲して外反する。類例は少ない。720は壺Ｄ１に脚部を付けている。725は大型の壺で、やや長い胴部と底部がボタン状に突出する点が特徴的である。727は大型壺の口縁部と考えられ、受け口状になるものと思われる。下層出土の402と似た形態のものである。884・885は球形の体部の中位に刻みを施した突帯を付けている。こうした形態の壺はいくつか出土しているが、全形を窺えるものはない。手焙形土器の破片の可能性もある。

甕は図化できなかった個体も含めればかなりの個体数が出土している。Ａ１・Ａ２・Ａ３・Ｂ２・Ｂ３がみられる。ほとんどを甕Ａが占めており、甕Ｂの占める割合はごくわずかである。甕Ａの体部外面はハケで調整されているものが多いが、761や790のように板ナデによって調整されているものも認められる。909のように、甕のミニチュアと思われるものも出土している。

なお、ＳＤ301中層出土の甕の中には、タタキによって成形されたと思われるものが２個体存在している。808・809はいずれも平底の甕で、外面全体にタタキが認められる。これらの甕には体部に分割成形された痕跡は見られない。口縁部は体部成形後に付加されており、809は頸部に接合痕が明瞭に観察できる。外面のタタキは両者とも右上がりに施されている。ただし、両者ともタタキ工具があたることによって生じる微妙な面が観察されず、また808には部分的に頸部の屈曲点よりわずかに上までタタキ状の痕跡が及んでいるようにみえる部分もあることなどから、これをタタキと断定することはやや躊躇される。808・809の外面のタタキ状の痕跡は、粗い条痕状のハケをタタキ風に施すことによって生じたものである可能性も考えられるのではなかろうか。なお、この２個体の甕は胎土からみると搬入品ではなく、当該地域で作られた可能性がある。

鉢にはＡ１・Ｂ１・Ｃ・Ｅがみられる。878は口縁部の屈曲がやや緩いものの、文様などからみても鉢Ｃと考えられる。883は口縁部を外方へ折り返して肥厚させており、体部は半球状を呈する。

蓋は880の１個体が図化できた。内外面ともミガキによって調整される。

高杯にはＡ１・Ａ２・Ａ３・Ｂ１・Ｂ３・Ｃ１・Ｃ２がみられる。中でもＡ１が多く、Ｃ１・Ｃ２もかなりの数が出土している。Ｂ１は下層に比べて出土量が少ない。高杯Ａ１にはやや杯部の深くなるものがみられる。口縁部外面に波状文や直線文を施すものもみられるが、817や819のように波状文が粗雑なものも認められ、杯部が無文のものも多い。824はやや白っぽい胎土で、脚部内面をケズリによって整形している。また、820のように脚部内面の頂部に刺突痕が認められるものもある。

器台にはＡ２の875がある。口縁端部を拡張し、擬凹線を施している。874は全体の形状は不明であるが、器台であると思われる。

土器の他には、2195の小型で孔の開けられていない土玉が出土している。

上層から出土した土器は916～1230・1232～1244・1246～1248・1250～1268である。壺・甕・鉢・蓋・高杯・器台がみられる。

壺にはＡ１・Ａ２・Ａ３・Ａ４・Ｂ１・Ｃ・Ｄ２・Ｅ１・Ｅ４・Ｆ２などがみられる。Ａ３・Ｂ１・Ｅ１・Ｅ４が増加傾向にある点が特徴的である。また、これまで下層・中層ではみられなかった壺Ｃが出現している。一方で壺Ｅ２やＥ３は確実には認められない。997が可能性として考え得るのみである。壺Ｅ１には983や984のように口頸部の内湾傾向が強いものが認められる。壺のミニチュアと考えられるものも多い。

また、特徴的な個体としては、931の竹管文を多用した装飾を施しているものがある。この個体は形状としては壺Ｃに近いが、口縁部は一次口縁に二次口縁を付加したものではなく、屈曲部に粘土帯を貼り付けて垂下させたものである。973の外面にはベンガラが塗布されている。胎土などからみて搬入品である可能性もある。1218・1219は中層出土の884・885と同様の形態の壺である。ただし、これらについても口頸部を欠いており、全形を窺うことはできない。

甕にはＡ１・Ａ２・Ａ３・Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３・Ｂ４・Ｃ２・Ｃ４がある。バリエーションは多いが、下層・中層に比べて甕Ｂの占める割合が増し、また甕Ｃがみられるようになる。ただし、甕Ｃは少ない。甕はほとんどが脚付である。外面調整はほとんどが

ハケで、板ナデによる調整がみられる個体は少ない。

鉢にはＡ１・Ａ２・Ｂ１・Ｂ２・Ｃなどがみられる。Ａ１・Ａ２が目立つ。1225や1228は鉢ではなく壺の底部に穿孔したものである可能性がある。1211は鉢Ｃに高杯状の脚を付けたものである。1220は小片であり全体の器形は不明であるが、受け部状の張り出しをもち、そこに棒状浮文を貼り付けている。これも鉢であると思われるが、手焙形土器の破片の可能性もある。

蓋には1221があるが、甕と組み合わせられるものではなく、壺と組み合わせて使ったと思われるものである。

高杯にはＡ１・Ａ２・Ａ３・Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３・Ｃ３などがみられる。大半を占めているのはＡ２・Ａ３である。そのほかの器形のものは少ない。Ｃ１・Ｃ２はみられないが、1110・1111は高杯Ｃに属するものであろう。また、高杯Ｂ２を小型にしたような1106・1107・1109などがみられる。1113は脚部を欠くが、鉢ではなく高杯と考えられるものである。椀形の杯部の中位に断面三角形の突帯を貼り付け、口縁端部は上方にはね上げる。こうした杯部の特徴からみて、壺Ｃとの関連性が強く窺われる個体である。1261は形態としては高杯Ｂ２であるが、かなり小型であり、ミニチュアであると思われる。

器台にはＢ２・Ｃがある。1216は脚部を欠いているが、1217同様に長い脚を持つ器台Ｂ２であると思われる。口縁端部には円形浮文を貼り付けている。

その他に土製品も出土している。1229は勾玉形土製品であると思われる。土玉も多数出土している。土玉には2194のように小型で孔が開けられていないものもみられる。

なおＳＤ301からは、これらの層位別に取り上げられた土器群の他に、2061～2075の土器が出土している。壺Ａ１・Ａ３・Ｅ１・甕Ｂ３・高杯Ａ１・Ａ３などが出土している。2067はやや変わった形状の口縁部で、ベンガラを塗布している。2069は壺Ｂ２に近い形態の口頸部を持つが、口縁部が受け口状になるというよりは全体に内湾しており、口縁端部に明瞭な面を作っている。

以上のＳＤ301出土土器群をみていくと、下層出土の高杯では高杯Ａ１が主体を占めているのに対し、上層出土の高杯では高杯Ａ２・Ａ３が主体を占めている。また、甕では下層から上層に行くにしたがって甕Ｂの占める割合が増加し、また上層では甕Ｃがみられる。こうしたことから、下層出土土器群と上層出土土器群が時期差を持つことは明らかである。したがって、下層出土土器群から上層土器群への変遷は、ある程度の土器様式の時期的変遷を示しているといえよう。先にあげた高杯・甕の組成に加えて、壺では壺Ａ３・Ｅ１・Ｅ４の増加や壺Ｄ１の減少、鉢では鉢Ａ２の増加、器台では器台Ｂの出現などに、時期的な土器様式の変遷が表れていると考えられる。

高杯や甕の様相からみれば、下層出土土器群は山中Ⅰ式期から山中Ⅱ式期の早い段階に位置づけられる可能性が高い。この点は、401の大型長頸壺が下層から出土している点からも首肯されよう。したがって、ＳＤ301の埋没開始はこの時期であるとみられ、掘削時期もそれに近い時期と見ることができる。

中層出土土器群は、やや新しい様相を示す土器が混ざるものの、総体的にみて山中Ⅱ式期に位置づけることができよう。

一方、上層出土土器群は廻間Ⅰ式期に位置づけることができる。甕Ｃがごく少数にとどまることや、高杯にＡ２が多いことからは、廻間Ⅰ式期でも早い段階に位置づけることができるのではなかろうか。こうした点からみて、ＳＤ301がほぼ埋没したのもこの時期であると見ることができよう。ただし、廻間Ⅲ式期にみられる甕Ｃ４が出土している点などからみて、廻間Ⅲ式期に至っても完全には埋没しきっていなかったものと思われる。廻間Ⅰ式期に位置づけられる他の遺構では壺Ｃの出土例がみあたらないことから、ＳＤ301出土の壺Ｃも甕Ｃなどと同様に廻間Ⅲ式期まで下るものである可能性が高いであろう。

ＳＤ302（ＳＤ745）出土土器（第146～150図1269～1371）　ＳＤ302出土遺物は、下層・中層・上層に分けて取り上げられている。なお、同一の遺構と考えられるＳＤ745から出土した土器もＳＤ302出土土器として一括してここで述べるが、これらについてもＳＤ302同様に層位別に取り上げられている。

下層から出土した土器は、1269～1301である。壺・甕・高杯などがみられる。

壺にはＡ１・Ａ２・Ｂ１・Ｂ２・Ｄ１がみられる。

壺Ａ・Ｂともに肩部に波状文を施すものが目立つ。また、底部がボタン状に突出するものも目立つ。1284は壺Ａ１に低い脚部を付けたものである。1285・1286は壺の小型品ないし鉢Ｂ２である。

甕はＡ２が主体を占める。ただし、細部形態には多様性がみられ、1295のように口縁部の外反が強く、体部内面をタテナデで調整するものや、1296のように口縁部がやや内湾するものなどがある。

高杯にはＡ２・Ｃ１・Ｃ２がある。1300は高杯Ｃ２で、外面に文様を持つ点が特徴的である。口縁部はやや上方へのびる傾向を見せる。1301は高杯Ｃ１であるが、粗雑な作りである。1299は器台Ｃとも思われるが、口縁部形態が他の器台Ｃとは異なっており、形状や器面の調整などからみて高杯Ａ２のミニチュアである可能性が考えられよう。

中層から出土した土器には1302～1313・1315～1318・1320～1324・1327・1329～1347・1349・1350がある。壺・甕・鉢・高杯・器台などがみられる。

壺にはＡ１・Ｂ１・Ｄ２・Ｅ４などがみられる。装飾の少ないＢ１やそれに類するものが多くみられる。また、壺Ｅ４もある程度の数の存在が確認できる。1303は口縁部の形状や外面調整などに差異があるものの、壺Ｅ３に近い形態をもつ。1322は口頸部を欠くが、体部の形状などからみて壺Ｄ２に脚部が付くものであろう。

鉢は個体数が少ないが、1337は鉢Ｂ１のミニチュアであろう。1341は甕とも思われるが頸部の締まりが弱く、鉢Ｅのような大型の鉢の破片である可能性も考えられる。

高杯にはＡ２・Ｃ２がみられる。中層でも下層と同じく、高杯Ａの中でもＡ２が主体を占めるようである。1329はやや裾広がりで低い脚部である。

器台にはＡ２の1330がある。かなり器高が高く、柱状部には透孔が３段に穿たれている。

上層から出土した土器には1314・1319・1325・1326・1328・1348・1351～1371がある。壺・甕・高杯・器台などがみられる。

壺にはＡ・Ｂ１などがみられる。1351は口縁端部の拡張や頸部の突帯などは壺Ａ３に近いが、口頸部に明瞭な屈曲は認められない。1352は壺の口縁部もしくは鉢と考えられる。口縁部は内湾し、口縁端部を拡張して羽状文を施している。当該地域では類例が認めがたい器形であり、外来系土器である可能性が高い。

甕にはＡ１・Ａ３・Ｂ３・Ｃ２がみられる。1367は甕Ｃ１ないしＣ２の脚部であると思われる。

高杯にはＡ２・Ｃ１がある。下層・中層と同じく、やはりＡ２が主体的である。ただし、1370などは口縁部が上方へのび、杯部が深くなるなど、高杯Ａ２の中でもやや新しい傾向を示す。

器台にはＡ１の1355がある。無文で装飾性はあまり高くないものである。

以上のＳＤ302出土土器群については、下層から上層まで高杯Ａ２が高杯の主体を占めることからみて、下層出土土器群から上層出土土器群に至るまでの間に大きな時間差は見て取ることはできない。ただし、上層出土土器に甕Ｃがみられることや、高杯Ａ２でも上層出土のものに杯部が深いものがみられることは、上層出土土器群が下層・中層出土土器群に比べて若干時期が下るものを含むことを示している。下層・中層出土土器群は、全体的にみて山中Ⅱ式期でも新しい段階にあたる時期に位置づけることができると思われるが、上層出土土器群は山中Ⅱ式期の新しい段階から廻間Ⅰ式期の古い段階に位置づけることができよう。したがって、ＳＤ302は山中Ⅱ式期の新しい段階には埋没が始まったと考えられ、掘削時期もそれに近い時期と見ることができよう。そして、廻間Ⅰ式期の古い段階にはほぼ完全に埋没したと考えられる。ＳＤ302の存続期間はＳＤ301などにくらべて短かかったものと思われる。

ＳＤ401出土土器・土製品（第151～154・181図1373～1447・2183）　壺・甕・鉢・高杯などが出土している。

壺にはＡ１・Ａ２・Ａ３・Ｂ２・Ｄ２・Ｅ１・Ｅ２などがみられる。かなりのバリエーションがある。1373と1374は似た形態のもので、口縁部の外反が弱い。1373は口縁端部に縦位の棒状浮文を貼り付けている。1376は口頸部に明瞭な屈曲部を持たないものの、口縁内部をやや肥厚させて文様帯を作っている。1378は口縁端部が上方に屈曲し、受け口状になる。

甕にはＡ１・Ａ２・Ａ３・Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３・Ｂ４・Ｃ２がみられる。甕もバリエーションが多い。

甕Ａが主体を占めるが、甕Ｂや甕Ｃもある程度の割合を占めている。甕Ａの中には1392のように口縁部が直立気味になるものもある。

鉢にはＢ１・Ｃ・Ｄなどがみられる。1393や1404も頸部の締まりが弱く小型であり、甕というよりは鉢に近い形態を示す。鉢Ｄの1444と1446は、全体の形状や外面調整など、非常に似通った形態を示す。

高杯にはＡ１・Ａ２・Ａ３・Ｂなどがある。Ａ１よりもＡ２・Ａ３が多いようである。1431・1434のような脚部は高杯Ｂのものであると考えられる。

この他に、1447のような平底の無頸壺状のものを象ったミニチュアや、土玉などが出土している。

ＳＤ401出土土器群には時期的にやや幅のある資料が含まれているものと思われるが、その中心は廻間Ⅰ式期にあると考えられる。

ＳＤ265出土土器・土製品（第154・181図1448～1466・2184）　壺・甕が出土している。

壺にはＡ１・Ａ２がみられる。1449はＡ２に属すると思われるが、胎土に赤色粒が目立つなど、他地域からの搬入品である可能性もある。1455・1456は類似する形態を示す。大型の長頸壺と考えられるもので、口縁部に竹管文を施す点などが特徴的である。

また、明らかに時期の遡るものも認められる。1453・1454は中期後葉の細頸壺の口縁部である。

甕にはＢ１・Ｃ２などがみられる。1466は口縁部形態はＣ３に近いが、体部が球胴化している点や外面調整などからみて、やや時期の下るものである可能性もある。また、外来系のものもみられる。1460は北陸系の有段口縁の甕である。口縁部は上方に拡張し、外面にはしっかりした擬凹線を施す。口縁内面には不明瞭ながらも連続する指頭圧痕が認められる。胎土や製作技法などからみて、他地域からの搬入品である可能性が高い。1462は体部内面を頸部直下から細かい横方向のケズリによって調整している点が特徴的である。1459にはタタキが施される。

この他に、2184の土玉が１点出土している。

ＳＫ206出土土器（第155図1467～1470）　壺・甕が出土している。1467は壺Ａ１、1469は甕Ａ２である。1470は壺の頸部片である。頸部に刻目を施した突帯を貼り付け、肩部には組紐文状の複雑な文様を施している。

ＳＫ212出土土器（第155図1471）　高杯が出土している。杯部の形状は高杯Ｂ２に近いが、通常の高杯Ｂ２より口縁部が緩やかに外方へ開いており、また杯部の底部と口縁部との境に緩やかな屈曲部があり、そこで粘土の接合痕が認められることから、高杯Ａ３の杯部が丸みを帯びたものとみることができる。口縁端部には内傾する面が明確に作られている。

ＳＫ253出土土器（第155図1472）　甕Ａの下半部が出土している。内外面ともハケで調整されている。

ＳＫ262出土土器（第155図1474）　高杯Ａ１の口縁部片が出土している。

ＳＫ291出土土器（第155図1475～1479）　壺・甕が出土している。

壺にはＡ１がある。1475は口縁部内面や肩部に扇状文を施す。1476は口縁部の外反がやや緩く、壺Ｂ１に近い形態を取る。

甕にはＡ１・Ａ３・Ｂ３がある。いずれも内面を横方向のハケによって調整している。1478はＢ３であるが、口縁部外面に刺突文を持たない。

ＳＫ293出土土器（第155図1480）　壺Ｆ１に属すると考えられるものが出土している。頸部の屈曲は緩く、口縁部直下に小孔が穿たれている。

ＳＫ312出土土器（第155図1481）　甕Ａ２が出土している。口縁部は水平に近い角度で屈曲している。外面はハケで調整されているが、頸部直下はヨコナデによりハケが消されている。中期に遡るものである可能性もある。

ＳＫ305出土土器（第155図1482）　壺Ｂ１が出土している。口縁部は内外面ともハケで調整され、体部外面もハケで調整されている。

ＳＫ307出土土器（第155図1483）　甕Ｃ１に近い特徴を持つ口縁部の小片が出土している。

ＳＫ310出土土器（第155図1484）　小型の甕の底部が出土している。体部外面はハケで調整されている。

ＳＫ313出土土器（第155・158図1485～1492・1532～1534）　壺・甕・高杯などが出土している。

壺にはＥ２の1485がある。この個体は外面全体と口頸部内面にスリップを施して赤色に発色させており、また、体部上半から口頸部にかけては連弧文や鋸歯文、斜行列点文などを貝殻腹縁を用いて施している。こうした装飾の施し方や、胎土の特徴などか

ら考えて、他地域からの搬入品である可能性が高いと思われる。

甕はＢが主体を占める。1489は口縁部外面に刺突文が施されていない。1490は口縁端部が若干外方に突出しており、甕Ｃ２に近い様相を示す。

高杯にはＡ３・Ｂ２がある。1532は高杯Ｂ２で、杯部外面はタテミガキによって調整するが、内面はヨコミガキによって調整している。口縁端部には内傾する面が明瞭に作られている。1492は小型器台ないしは台付鉢に近い形状のものであるが、杯部の形態などからみて高杯Ｂのミニチュアとして製作された可能性もあろう。

甕Ｂが主体を占めることなどから見て、ＳＫ313出土土器群は廻間Ⅰ式期に位置づけることができるものと思われるが、高杯の様相などから見れば廻間Ⅰ式期でも新しい時期に位置づけられると考えられよう。

ＳＤ425出土土器（第156図1495・1519）　高杯Ａ１が出土している。1495は口縁部外面には波状文を施し、杯部の稜付近には櫛描直線文を施している。1519は杯部がやや浅く、内外面ともタテヘラミガキによって調整される。

ＳＤ254出土土器（第155・156図1473・1496～1498）

甕や高杯Ａ１が出土している。1496の口縁端部は丸く収められており、甕Ｂ２に属すると思われる。1497は内外面をハケ調整した甕であり、口縁部を欠くもののおそらく甕Ａであろう。高杯Ａ１の脚部である1498は透孔が比較的高い位置にあけられており、やや新しい様相を示している。

これらのＳＤ254出土土器群は山中Ⅱ式期にあたるものと思われる。

ＳＤ267出土土器（第156図1499）　小型の甕Ａが出土している。器面の調整は風化のためによくわからないが、体部は脚部から粘土紐を積み上げて成形されている。

ＳＤ278出土土器（第156図1500）　甕が出土している。口縁部形態は甕Ｃ２に似るが、頸部の屈曲はやや弱く、口縁端部の外方への突出も弱いことから、甕Ｂに属するものと考えられる。

ＳＤ280出土土器（第156図1501・1502）　小型の甕と高杯が出土している。1502は高杯Ａの脚部で、緩やかに外反する。無文であり、透孔の位置は高い。

ＳＤ286出土土器（第156図1503）　壺Ａ２が出土している。口縁端部は下方に垂下させ、擬凹線を施した上に円形浮文を貼り付けている。内外面はタテミガキによって丁寧に調整されている。

ＳＫ303出土土器（第156図1504～1507）　壺や高杯が出土している。1504は壺の口縁部の小片で、口縁端部と口縁内面には貝殻腹縁による羽状文が施されている。こうした文様や口縁端部の形態などから見て壺Ａ３の破片である可能性がある。1505は高杯Ｂ１で、脚部の櫛描直線文の間に施された斜行列点文は貝殻腹縁によるものである。

ＳＤ372出土土器（第156図1508～1511）　壺が数点図化できたほか、縄文時代に遡る遺物も出土している。

1509は壺Ｅ４である。頸部の締まりは弱い。1511は口縁部がやや内湾し、壺Ｂ２に近い形態を取る。肩部には円形の記号状のものが刻まれている。

1510は縄文時代晩期の深鉢の口縁部である。口縁部外面には一条の突帯が貼り付けられている。突帯に刻目は施されていない。

ＳＤ432出土土器（第156図1512・1513）　壺・高杯が出土している。1512は壺Ａである。文様は認められない。1513は高杯Ａ３である。口縁端部内面には不明瞭ながらも内傾する面が作られている。

ＳＤ469出土土器（第156図1514）　高杯の脚部が出土している。外反する低い脚で、高杯Ｂの脚部と考えられるが、脚付壺の脚部である可能性もある。

ＳＤ407出土土器（第156・178図1515・1516・2086）

壺・甕・高杯が出土している。1515は壺Ａ１、1516は甕Ｂ２である。1515の口縁端部には刺突文が施されている。2086は高杯Ａ１の脚部と考えられる。

ＳＤ493出土土器・土製品（第151・156図1372・1517・1518）　壺が出土している。1372はＡ２で、外面と口縁部内面にベンガラを塗布している。口縁端部には縦位の棒状浮文と円形浮文を貼り付けている。1517は壺Ａ３に近い口縁部形態を取る。

ＳＤ454出土土製品（第181図2185）　一部を欠損した土玉が１点出土している。

ＳＤ515出土土器（第157図1520～1523）　壺・甕・鉢・高杯が出土している。1520は壺Ａ３に属するも

のであり、口縁部の内外面に赤色顔料[2]が塗布されている。口縁部外面には縦位の棒状浮文を貼り付ける。口縁部内面には明瞭な文様帯を作り出しており、羽状文を２段に施す。1521は高杯Ｂ１、1522は甕Ｂ２である。1523はやや口径が大きい鉢Ｃである。

ＳＤ533出土土製品（第181図2186）　土玉が１点出土している。村竹コノ遺跡から出土した土玉の中では、比較的大型のものである。

ＳＤ551出土土器（第157図1524）　壺Ｂ１が出土している。体部は無文で、タテヘラミガキによって調整されている。体部内面上半には指頭圧痕が明瞭に残されている。

ＳＤ733出土土器（第157図1525・1526）　蓋と高杯が出土している。1525は小型の高杯の脚部である。1526は蓋で、頂部は摘み状に突出している。内外面ともハケで調整されている。

ＳＤ735出土土器（第157図1527～1530）　壺・甕・鉢などが出土している。1528は壺Ａの体部であろう。1530は口縁端部に面を持たず甕Ａ１に属すが、頸部の屈曲は明瞭で、体部は内外面ともハケで丁寧に調整される。1529は鉢Ａ１である。

1527は双口の小型土器である。鳥を象ったような土器で、全体としての形状はやや異なるものの、松阪市天王山遺跡・西肥留遺跡や、四日市市山奥遺跡、愛知県朝日遺跡などで出土しているものと同様の意識の下に製作されたものと考えられる[3]。

ＳＤ738出土土器（第157図1531）　高杯Ａ１の脚部が出土している。脚裾部はやや強く外反する。

ＳＫ321出土土器（第158図1535）　壺の口縁部が出土している。口縁部は屈曲して直立する。口縁端部には面が作られ、刺突文が施されている。また、口縁部外面には羽状文が施されているが、これは櫛状工具ではなく、細い中空のものを一直線に並べたような工具で施されている。この壺は村竹コノ遺跡近辺では類例の見られないものである。肉眼観察では胎土に特徴的な点は認めがたいが、外来系土器である可能性が高い。

ＳＫ329出土土器（第158図1536）　甕Ｂが出土している。口縁端部はやや丸く収める。肩部には横方向の櫛描直線文を施すが、部分的に工具を止めた痕跡が認められる。

ＳＸ341出土土器（第158図1537・1538）　甕が出土している。1537は甕Ａ１で、頸部の作りはやや雑である。1538は甕Ａ２である。口縁端部の面は明瞭である。

ＳＫ358出土土器（第158図1539～1541）　壺・鉢が出土している。1539は壺Ｂ１である。頸部内面もハケで調整している。1540は壺Ａないし壺Ｂの体部とみられ、外面はヨコミガキで調整されている。1541は鉢で、形状としては鉢Ｄに近い。かなり小型で外面はミガキで調整されており、ミニチュアとして製作されたものである可能性もある。

ＳＫ410出土土器（第158図1542・1543）　甕と高杯が出土している。1542は高杯Ａ３の脚部であると考えられるが、直線的に開き、内湾しない。1543は甕Ａないしは甕Ｂ１に近い口縁部形態であるが、口縁部がかなり短く、やや特異な形態を示す。

ＳＫ404出土土器（第158図1544）　甕Ｂと思われる口縁部の小片が出土している。

ＳＫ411出土土器（第158図1545）　壺Ａないしは壺Ｂの下半部が出土している。内外面ともハケで調整されている。底部は平底で、中央部が凹んでいる。

ＳＫ６出土土器（第158図1546）　壺Ｄ１が出土している。口頸部の長さは体部高に近い。外面は全体的にタテミガキによって丁寧に調整されている。

ＳＫ430出土土器（第158図1547）　高杯Ａ３の脚部が出土している。透孔は頸部直下のかなり高い位置に開けられており、頸部には櫛描直線文が施されている。脚部内面はハケによって調整されている。

ＳＫ439出土土器（第158図1548・1549）　小型の甕ないし鉢が出土している。1548は鉢Ｂ１に近い形態を持つ。1549は小型の甕で、肩部には直線文を持つ。口縁部は短く、一見く字状口縁にみえるが、口縁端部はやや内湾しており、甕Ｂを意識して作られていることがわかる。

ＳＫ441出土土器（第158図1550・1551）　高杯が出土している。1550は高杯Ａ１である。1551は高杯Ａ１の脚部を低平にしたような形状の脚部であり、やや特異な形態のものである。高杯Ｂないしは脚付壺の脚部である可能性が考えられる。

ＳＫ464出土土器（第158図1552・1553）　壺と甕が出土している。1552は甕Ｃ２の口縁部である。1553

は小型の壺Ｅ２であろう。やや崩れた形態をなすが、口頸部はやや内湾し、また口縁端部には不明瞭ながら内湾する面を作っている。

ＳＫ471出土土器（第158図1554・1555）　壺と甕が出土している。1554は壺Ａ３であるが、口縁端部は拡張しない。1555は甕Ｃ２と考えられるが、体部外面のハケなどが、一般的な甕Ｃとはやや異なるようである。

ＳＫ479出土土器（第158図1556）　甕Ａ１が出土している。体部内面の頸部直下には、ヘラケズリないしは板ナデ状の痕跡が認められる。

ＳＫ431出土土器（第159図1557・1558）　壺と甕が出土している。1557は甕Ａ３である。口縁端部の面は内傾し、口縁端部はやや外方へ突出するなど、甕Ｃに近い形態を示す。1558は壺Ｅ１である。

これらのＳＫ431出土土器は、廻間Ⅰ式期に位置づけられる可能性が高いであろう。

ＳＫ482出土土器（第159図1559～1561）　甕・高杯・手焙形土器が出土している。1560は甕Ｃ２である。口縁端部はあまり外方に突出しない。1561は高杯Ａ３の脚部と思われる。1559は手焙形土器Ｂのミニチュアである。外面には粗いハケが施されており、また鉢部の肩部にはハケが横方向に施されている。

ＳＫ482出土土器群は、量的には少ないものの、廻間Ⅰ式期に位置づけることができよう。

ＳＫ505出土土器（第159図1562）　壺Ｂ２が出土している。口縁端部には明瞭な面を持つ。

ＳＫ506出土土器（第159図1563）　甕Ａ２が出土している。小型の甕で、頸部の締まりが弱い。口縁部はやや上方に立ち上がる。

ＳＫ507出土土器（第159図1564・1565）　1564は甕Ａ３であるが、口縁端部への刺突文ではなく、口縁端部の角に刻みを施す。1565は高杯Ａ１で、口縁部はやや外反するが、杯部全体としてはある程度の深さがあり、高杯Ａ１の中でもやや新しい様相を示すものと思われる。

ＳＫ508出土土器（第159図1566）　甕Ａ２が出土している。小型の甕で、体部内面にはタテヘラケズリが施されている。

ＳＫ521出土土器（第159図1567）　脚付壺の脚部と考えられる低平な脚部が出土している。透孔は小さな円形で、脚裾部はやや内湾する。

ＳＫ524出土土器（第159図1568～1571）　壺が４点図化できている。1568は壺Ｄ２である。体部最大径がかなり下位にきている。1569は小型の壺で、体部外面上半をヨコミガキで調整し、口縁部はやや内湾気味である。1570・1571は壺Ｂ１の小型のものと思われる。ただし、両者とも体部外面下半に板ナデ状のヘラケズリの痕跡が明瞭に残されている点が特徴的である。

ＳＫ545出土土器（第159図1572・1573）　壺Ｅ１と考えられるものが２個体図化できた。1572の底部内面にはクモの巣状のハケが認められる。1573は頸部の締まりがやや弱く、肩部には貝殻腹縁による連弧文が施されている。

ＳＫ557出土土器（第159図1574）　壺の口縁部片が出土している。口頸部は緩やかに外反し、口縁端部には面を持つ。

ＳＫ578出土土器（第159図1575・1576）　壺が出土している。1575は壺Ｅのミニチュアである可能性が考えられる。外面にはミガキが施されている。1576の口縁部は直線的に外方に開き、体部外面にはミガキが施される。体部内面はユビオサエやユビナデによって調整されている。

ＳＫ591出土土器（第159図1577）　ミニチュアの鉢が出土している。底部は上げ底であり、やや脚台状をなしている。

ＳＫ628出土土器（第159図1578）　器台Ａ２が出土している。この器台は、口縁端部に面を持たず、また無文であり、875などの他の器台Ａ２よりも加飾性に乏しい。どちらかといえば、器台Ａ１に近い様相を示している。

ＳＥ208出土土器（第160図1579～1606）　壺・甕・高杯が出土している。

壺にはＡ１・Ａ２・Ｄ１などがある。1579はＡ２で、口縁部内面と肩部に扇状文を施している。1583も口縁部内面に扇状文を施す。1582は口縁部の形態的にはＢ１に近いが、体部の形状などから見てＤ２に脚を付けたものであろう。

甕にはＡ１・Ａ２・Ａ３・Ｂ３があり、かなりのバリエーションを見せる。ただし、甕Ａが大半を占めている。1588・1589のようにやや小型のものは体

部内面をヘラケズリしている。

高杯にはＡ１・Ｃ１がある。図化できたものには脚部が多いが、脚部を見てもこの２種類の高杯が大半を占めているようである。1599は脚部に波状文が施されている点が特徴的である。

以上のＳＥ208出土土器群は、甕Ａが主体を占める点や、高杯Ａ１の脚の透孔の位置が低い点、1580のような壺Ｄ１が存在する点などからみて、山中Ⅰ式期から山中Ⅱ式期でも早い段階に位置づけることができるものと思われる。

ＳＥ216出土土器（第161～163図1607～1717）　壺・甕・高杯が出土している。

壺にはＡ１・Ａ２・Ａ３・Ｂ１・Ｅ１・Ｅ４などがある。壺Ａ・Ｂについては口縁部の小片が多く、全形を窺えるものはない。ただ、壺Ａには1631～1635のように頸部に突帯を持つものが目立つ。1635については文様の施し方や胎土の特徴などからみて他地域からの搬入品と考えられる。壺Ｅはある程度の出土数が認められるが、口頸部を欠損するものが多い。体部の形態などからみるとＥ１が大半を占めているものと思われる。1652は壺Ｅ４であるが、口頸部外面全体に羽状文を施している点が特徴的である。内外面にベンガラを塗布している。1630は口縁端部がやや内湾しており、Ｂ２に近い形態を示す。1632は口縁内部を肥厚させて文様帯としているようである。1711は球形の体部の中位に突帯をめぐらせるものである。

甕にはＡ２・Ａ３・Ｂ２・Ｂ３・Ｂ４・Ｃ１・Ｃ２がある。主体を占めるのは甕Ｂで、甕Ｃも目立つ。1714のように甕Ｃの脚部もみられる。1708は口縁端部に工具を連続して押し当てており、波状口縁のようになっている。

高杯にはＡ３・Ｂ２がある。主体を占めるのはＡ３である。1664や1665は高杯Ｂ２の小型のものであると思われる。同様に高杯Ａ３にも1666のような小型のものが認められる。

これらのＳＥ216出土土器群は、甕の組成や高杯の形態などからみて、廻間Ⅰ式期に位置づけることができよう。高杯の様相からは、廻間Ⅰ式期でも新しい段階に相当する資料が中心を占めているものと考えられる。

ＳＥ218出土土器（第164図1718～1746）　壺・甕・高杯が出土している。

壺にはＡ３・Ｂ１・Ｅ１・Ｅ２がある。特にＡ３に分類できる個体が目立つ。1718や1720も、口縁部の屈曲は弱いものの、口縁端部の文様などからみて壺Ａ３に類するものであると見ることができよう。1728は壺Ｅ２に特徴的な貝殻腹縁による上向きの連弧文が施されている。1729は体部の形状からみて壺Ｅ１であろう。1730・1731は底部外面に木葉痕が認められる。

甕にはＡ・Ｂ・Ｃすべてが認められる。1737は甕Ｃ２で、不明瞭ながらも口縁部には押し引き刺突文が認められる。1740は甕Ｂ４である。

高杯にはＡ・Ｂ１がある。高杯Ｂ１の1745は口縁端部に明瞭な内傾する面を持つ。1746は高杯Ａ３ないしはＡ４の脚部であり、内面はハケによって調整される。

以上のＳＥ218出土土器群は、甕の組成や口縁部形態、壺の組成、高杯の形態などからみて、廻間Ⅰ式期に位置づけることができよう。

ＳＥ220出土土器（第165図1747～1782）　壺・甕・鉢・高杯が出土している。

壺にはＡ１・Ａ２・Ｂ１・Ｅ１がある。1747は壺Ａ１であるが、口縁端部をやや拡張し、羽状文を施している。1755は頸部がやや長く、口縁部がそれほど大きく開かない壺である。1763の底部外面には木葉痕が認められる。なお、1748のみは最下層から出土したとされている。

甕にはＡ１・Ａ２・Ｂ３・Ｂ４・Ｃ２などがあり、かなりのバリエーションを見せる。甕Ａ・Ｂが多いようである。1768は甕Ａであるが、体部外面上半のハケが体部外面下半のハケよりも粗い。また、口縁部も他の個体に比べて短く、やや内湾するなど特徴的な形態を持つ。甕の脚部も多く出土しており、甕は脚付のものが主体となるようである。

高杯には1781のようなやや深めのＡ１の杯部がある。1782はおそらく高杯Ａ３の脚部であろう。

これらのＳＥ220出土土器群は、甕の組成や口縁部形態、壺Ｅ１の存在などからみて、廻間Ⅰ式期に位置づけられる可能性が高い。1781のような高杯Ａ１はやや時期的に遡るものであろう。

ＳＥ556出土土器（第166図1783）　壺が出土している。口縁部は粘土貼り付けによって下方に拡張され、端面には櫛状工具によってピッチの細かい簾状文のような文様が施されている。口縁部内面には貝殻腹縁と思われる工具によって羽状文が施されている。こうした口縁部の特徴に加え、胎土などからみて、他地域からの搬入品である可能性もある。

ＳＥ477出土土器（第166図1784）　壺Ａ２ないしはＡ３と考えられる口縁部片が出土している。口縁端部は下方に垂下させていたようであるが、欠損している。口縁部内面には波状文が施されている。

ＳＥ496出土土器（第166・174・181図1785～1797・1999・2191）　壺・甕・鉢・高杯・器台などが出土している。

壺にはＢ１がある。1786はやや体部の張りが弱く、外面はミガキによって調整されている。

甕にはＡ１がある。1793は頸部内面に粘土接合痕が確認でき、体部成形後に口縁部を付加しているものと思われる。

鉢にはＢ１がある。1791はやや頸部が締まる。

高杯にはＡ１がある。口縁部外面に波状文を施すものがある。1796は高杯Ａの脚であると思われるが、やや細身である。

器台にはＡ２の1797がある。上位にやや屈曲部があり、器台Ｂのような形態になる可能性もある。外面には直線文の間に連弧状の文様を施している。

ＳＥ615出土土器（第102・144・167～171図476・1210・1798～1941）　ＳＥ615から出土した土器は、下層と上層に大きく分けて取り上げられている。

下層から出土した土器は476・1210・1798～1890・1924である。壺・甕・鉢・高杯・器台が出土している。

壺にはＡ１・Ａ３・Ｂ１・Ｅ２・Ｅ３などがある。壺Ｅ２・Ｅ３が目立ち、1817～1819のように肩部及び口頸部に貝殻腹縁による連弧文を施すものがみられる。1817・1818は精良な作りのもので、外面及び口縁部内面にはスリップを施し、赤茶色に発色させている。1809は口縁部がやや受け口状になる広口壺である。1810は小型の壺で、口縁部の作りは雑であるが、壺Ａ３を意識して作られたものであろうか。体部には焼成後に小孔が穿たれている。

甕にはＡ１・Ａ２・Ｂ３・Ｂ４・Ｃ２・Ｃ３がみられる。甕Ｃが多い点が他の遺構出土土器群に比べて特徴的である。1846のように甕Ｃの脚部も出土している。また、1836・1837のように小型の甕Ｃもみられる。1841・1842は甕Ａ１に分類できると思われるが、作りが粗い。1840は平底である可能性もある。1890はやや特徴的な形態のもので、体部外面にはススが濃く付着している。

鉢にはＡ１・Ａ２・Ｂ１・Ｂ２と、多様なものがみられる。1879は鉢Ｄに近い形態を持つものである。また、1889は無頸壺状の口縁部片であるが、鉢Ａ２などの口縁部である可能性もある。外面には部分的に薄くススが付着する。

高杯にはＡ３・Ａ４・Ｂ１がみられる。主体を占めるのはＡ３である。1850・1855・1856は、やや他の高杯Ａ３とは異なる特徴を持つ。1850は杯部が深く、スリップを施して赤く発色させている。1855・1856は内外面にヨコミガキの痕跡が残り、口縁端部も内傾する面ではなく外傾する面が作られているなどの点が特徴的である。1851・1852は高杯Ｂ１あるいはＢ２の小型化したものと思われる。

器台ではＣが２点図化できた。1873は口縁部がやや外方に屈曲するものである。

上層から出土した土器は1891～1923・1925～1941である。壺・甕・鉢・高杯がみられる。全体として壺・甕が多く、高杯の出土量は少ない。

壺にはＡ１・Ａ２・Ａ３・Ａ４・Ｅ２・Ｅ３などがみられる。1897は小型の壺Ａ１で、肩部には壺Ｅに多くみられるような連弧文が施されている。1895は壺Ｃに似るが、一次口縁端部が垂下せず、二次口縁外面に円形浮文を貼り付ける点などが異なる。他系統の二重口縁壺である可能性も考えられる。1896は直立する頸部の上に二重口縁を取り付けたような形態の壺である。口縁部内面には櫛状工具による斜行列点文が施されている。当該地域ではあまりみられない器形のもので、外来系土器の可能性があろう。

甕にはＡ１・Ｃ２・Ｃ３・Ｃ４がみられる。甕Ｃが主体を占め、甕Ａはごくわずかである。甕Ｃの中でもＣ３・Ｃ４が多くみられる。甕Ｃ４は肩部のヨコハケが頸部よりかなり下方に施されており、また内面は頸部付近まで指頭圧痕が明瞭にみられる。

鉢は1931の１点が図化できた。鉢Ａ１に近い形態

を持つが、体部の内湾傾向が強い。

高杯はごく少数で、全形がわかるものではＡ３ないしＡ４を小型にしたようなものが目立つ。大型の高杯は確認できない。

これらのＳＥ615出土土器群は、下層出土の土器群と上層出土の土器群で明瞭に時期差がみられる。下層出土土器群は甕の組成や高杯の組成・形態などからみて、廻間Ⅰ式期でも新しい段階に位置づけることができよう。それに対して、上層出土土器群は、主に甕の組成からみて廻間Ⅱ式期から廻間Ⅲ式期の古い段階に位置づけることができる。こうした土器群の位置づけから、ＳＥ615は村竹コノ遺跡の弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺構の中でも最も新しい時期に存在していたものであるといえよう。

ＳＺ201出土土器（第172図1942～1944）　甕・壺が出土している。

1942は甕Ａ１に分類できるが、口縁部が短く強く屈曲し、体部内面はハケで調整した後にケズリを加えているなど、甕Ａ１の一般的な特徴とはやや異なる特徴を持つようである。時期的にやや遡る資料である可能性もあろう。

壺には1943のような壺Ｂ１と思われるものがある。口縁端部には明瞭な面を作る。口頸部内面もハケで調整しており、この個体も壺Ｂ１の一般的な特徴とはやや異なった特徴を持つようである。1944は壺Ａないし壺Ｂの底部で、内外面にハケが認められる。底部外面中央は凹んでいる。

ＳＺ285出土土器（第172図1945～1947）　甕と高杯が図化できた。

1947は甕Ａの下半部と考えられる。脚台を作ってから体部を積み上げているものと思われる。1946は高杯Ａ３ないしはＡ４である。1945は低い脚部を持つ小型の有稜高杯である可能性がある。そうであるとすれば、村竹コノ遺跡付近では出土例が少ないものである。

ＳＺ292出土土器（第172図1948・1949）　甕が２点図化できた。1948は甕Ａ１である。体部外面のハケはやや粗い。1949は甕Ｃ２である。

ＳＺ413出土土器（第172図1950～1952）　甕と高杯が出土している。

甕にはＡ１がある。1951は甕Ａ１に分類できるが、法量などから見ると鉢Ｂ２に分類できる可能性もある。体部内面はヘラケズリによって調整している。

高杯としてはＡ３の脚部が出土している。

ＳＺ422出土土器（第172図1953）　高杯Ａ３の杯部が出土している。器壁は風化しており調整等は不明であるが、口縁端部には内傾する面を明瞭に作る。

ＳＺ419出土土器（第172・173図1954～1987）　壺・甕・高杯が出土している。

壺には多様な形態のものが存在するが、1959や1957など口縁端部に刺突文を施した壺Ｂが目立つ。また、壺Ｅもある程度の数が認められる。1955はやや特異な口縁部形態であり、大きく上方に拡張した口縁部に綾杉文状の文様が施されており、口縁部は内外面ともヨコミガキで丁寧に仕上げられている。1963は壺の底部であるが、底部外面に木葉痕が残る。

甕は1978の大型の甕Ａ２などが存在するものの、全体として甕Ｂが主体を占める。Ｂ１・Ｂ２・Ｂ４などが認められる。

高杯はＡ３が主体を占めており、1985なども高杯Ａ３の小型品であると思われる。

以上のＳＺ419出土土器群は、その組成や高杯の形態などから、廻間Ⅰ式期に位置づけられる。

ＳＺ428出土土器・土製品（第174～176・181図1988～1998・2000～2045・2187）　壺・甕・鉢・高杯・手焙形土器が出土している。

壺にはＡ１・Ａ２・Ｅ１などがある。1988は壺Ａ２で、口縁部内外面にベンガラの塗布が認められる。また、口縁部内面の羽状文は放射肋の深い貝殻腹縁によって施されている点が特徴的である。2011は壺Ｅ１であるが、口頸部の形状や肩部の貝殻腹縁による連弧文などは、壺Ｅ２との共通性が強い。1995は、口縁端部を拡張して竹管文を施す、1455・1456と類似する壺の口縁部である。

甕にはＡ１・Ａ２・Ｂ１・Ｂ２・Ｂ３・Ｃ１がある。甕Ｂが多い。2015は甕Ａ２であるが、肩部に甕Ｂや甕Ｃと同様のヨコハケが施されている。また、2017のような平底のものもある。

鉢ではＡ２が２点図化できた。また、2034は鉢のミニチュアと思われる。

高杯は器形のわかるものについてはほとんどがＡ３である。脚部の上部に櫛描直線文を施しているも

のが多い。

手焙形土器にはＡ１の2045がある。鉢部は短頸壺状のごく短い口縁部を持つ。内外面ともハケで調整されている。

この他に、2187の土玉が１点出土している。

これらのＳＺ428出土土器群は、廻間Ｉ式期に位置づけることができよう。甕の組成や高杯の脚部形態などからみれば、廻間Ｉ式期でも古い段階に位置づけられる可能性が高い。

ＳＺ511出土土器（第176図2046～2049）　壺Ａなどが出土している。2046は壺Ａ２である。頸部がやや直立し、Ａ３に近い傾向を示す。他は器形がよくわからないものが多いが、2047は一部遺存する頸部がやや内湾傾向であることから、壺Ｅ１とみられる。

ＳＺ513出土土器・土製品（第176・181図2050～2056・2189）　壺・甕・高杯が出土している。

壺にはＡ４・Ｅ２などがある。2050は壺Ａ３に似た口縁部形状をもつ壺である。口縁端部には面を作り、円形浮文を貼り付けている。2052は壺Ａ４で、口縁部内面に羽状文を連続させて綾杉文状にした文様を施した文様帯を作っている。口縁端部にも同様の文様を施している。胎土に赤色粒を多く含む点が特徴的である。2053は壺Ｅ２であるが、体部がやや細身で口縁端部の面も不明瞭である。

甕にはＢ３がある。口縁端部はやや外方に突出し、甕Ｃ２に近い形態を取るが、体部は肩が張らない。

高杯は脚部のみが図化できた。おそらく高杯ＢないしＣの脚部と考えられる。

また、土器の他に2189の土玉が出土している。

ＳＺ519出土土器・土製品（第176・181図2057～2060・2188）　小型壺や高杯が出土している。2057・2059は高杯Ａ３で、2057は口縁端部に内傾する面を持つ。2058は高杯Ｂ２である。2060はミニチュアの壺である。器壁の遺存状況が悪く、調整などは不明である。この他に、2188の土玉が１点出土している。

ＳＨ621出土土器（第177図2076）　壺Ａ２が出土している。口縁部内面には貝殻腹縁による羽状文が施されている。口縁部は下方に垂下し、擬凹線が施されている。

ＳＨ209出土土器（第178図2077・2078）　甕と高杯が出土している。2077は口縁端部に明瞭な面を作る甕Ｂ３であるが、口縁部の屈曲は緩い。2078は直線文の間に貝殻腹縁で斜行列点文を施しており、高杯ＢまたはＣの脚部であると考えられる。

ＳＨ215出土土器（第156・178図1493・1494・2079・2080）　壺・甕・高杯などが竪穴住居の壁周溝内から出土している。1493は甕Ｂの口縁部片である。明瞭な受け口状は呈しておらず、口縁部外面に刺突文も施されていない。2079は壺ＡないしＢの底部と思われ、底部中央は凹んでいる。2080は高杯Ａ３またはＡ４の脚部と考えられる。脚部内面はハケで調整される。

ＳＨ217出土土器（第178図2081・2082）　2081は甕Ｂ３の口縁部片で、口縁部外面に羽状の刺突文が施される。2082は壺Ａと考えられる。

ＳＸ251出土土器（第178図2083～2085）　図化できたのは壺や甕、鉢などの底部のみである。2083は小型の壺ないしは鉢Ａ１の底部と考えられる。作りはやや粗く、ユビナデ痕が明瞭に残る。2085は器形や法量から見て壺や鉢ではなく、甕の底部と考えられる。甕Ａの底部である可能性が高いが、脚は付かず平底の甕である。また、体部内面にはヘラケズリと思われる痕跡が認められる。

ＳＨ424出土土器（第178図2087・2088）　甕が２点図化できた。2088は甕Ａ１、2087は甕Ｂ２である。2087の口縁部外面には不明瞭ながら刺突文が認められる。

ＳＨ452出土土器（第178図2089～2091）　高杯と鉢が出土している。鉢2089はほぼ丸底である。2090は高杯Ｂ１と考えられるが、杯部が小型化しており、また透孔の位置もかなり高く、新しい傾向を示す。2091も高杯Ｂの脚部と考えられるが、大きくハの字状に開くものであり、やはり新しい傾向を示すといえよう。

以上のＳＨ452出土土器は、弥生時代～古墳時代初頭にかけての村竹コノ遺跡の集落存続期間の中でも新しい様相を示す一群である。

ＳＨ467出土土器（第178図2092）　壺ＡないしＢの底部と考えられる破片が出土している。内面にはハケが施されている。

ＳＨ423出土土器（第178図2093）　大型の鉢と考え

られるものが出土している。体部と口縁部の境で緩く屈曲し、不明瞭ながらも頸部を形成している。

ＳＨ640出土土器（第178図2094）　壺のミニチュアと思われるものが出土している。内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。

ＳＨ701出土土器（第178図2095）　壺の肩部片が出土している。鋸歯文が施されている。

ＳＸ336出土土器（第178図2096・2097）　甕が出土している。2096は甕Ａ１に近いが、口径がかなり大きく、また口縁部外面に横位の直線が施されている。2097は甕Ａ２である。

ＳＲ340出土土器（第178図2098）　2098は壺Ａ１ないしＢ１である。口縁端部の内外面には櫛状工具による刺突によって羽状文が施されている。

ピット出土土器（第178・179図2100～2127）　多数検出されたピットのうちいくつかからは、図化可能な遺物が出土している。土器についてはそれらのうち特徴的なものを取り上げ、まとめて記述したい。個々の遺物が出土したピットの遺構番号については遺物観察表に記載している。

壺は多くのピットからの出土例があり、壺ＡやＢが出土している。B3i8pit８やB2m17pit２からは、壺Ａの口縁部片が出土している。2100は壺Ａ１と思われ、口縁端部には刺突文が施されている。2104も壺Ａ１で、口縁端部には貝殻腹縁による斜行列点文が施され、口縁部内面にも貝殻腹縁によって羽状文を施している。B3o25pit７から出土した2103は、壺Ａ３の口縁部片である。口縁部を垂下させて拡張しているようであるが、垂下部分は欠損する。口縁部内面には直線文と押し引き刺突文による文様帯が認められる。B3p21pit９からは、壺Ｂ１に属すると思われるものが出土している。2106の体部はあまり胴が張らず、やや細身である。全体的に作りは粗い。

甕は各種の形態のものが出土している。B4f13pit７やB3i7pit４などからは、甕Ａが出土している。B3l6pit20出土の2110は小型の脚の付く甕で、体部の下半部には成形時の接合痕が明瞭に残る。

B3j7pit１やB3i8pit８からは、甕Ｂが出土している。2112は甕Ｂ３で、口縁部外面に刺突文が施されている。B3i14pit14などからは、甕Ｃが出土している。2118は甕Ｃ１と思われる。

高杯もいくつかのピットから出土している。2126はB4q18pit３から出土した高杯Ａ３の小型品と考えられるものである。また、B4f23pit１からは高杯Ｃ２が出土している。

このほか、B3i14pit16からは手焙形土器が出土している。

遺構外出土土器・土製品（第179～181図2128～2173・2190・2192・2193）　以上で述べてきた遺構出土遺物の他に、表土や包含層の中などからも土器・土製品が出土している。その中でも特徴的なものについて若干述べたい。

2130は鉢であるが、口縁部外面に円形浮文を貼り付けている。2131・2132は鉢Ｅである。2132は体部の形状がやや異なるようである。2147は壺Ａ１で、肩部に円形の文様が３個施されている。2150は口縁端部を拡張して竹管文を施す壺である。1456と共通性が高い。2155は壺Ｅ３である。外面に文様は施されていない。2156は壺Ｅ２で、この個体には外面に直線文と貝殻腹縁による連弧文が施されている。2173は甕Ａ２であるが、かなり大型のものである。

外来系の土器もみられる。2161は北陸系の有段口縁の甕である。口縁部を上方に拡張し、口縁部外面にはしっかりした擬凹線を施す。口縁部内面にはごく不明瞭な指頭圧痕がみられる。胎土は1460と異なり、どちらかといえば在地の胎土と似通った様相を示す。

また土製品としては、2136の土弾や2190・2192・2193の土玉が出土している。

第１次調査出土土器（第183図2237～2262）　工事立会調査として行った第１次調査においても、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が出土している。

遺構から出土した遺物もあり、2237はＳＫ３、2239・2241はＳＫ８、2245はＳＫ７、2238・2249・2250・2253・2254・2256・2261・2262はＳＤ302から出土している[4]。2251・2255・2259もＳＤ302付近から出土したものである。また、2243・2244は同じピットから出土している。

ＳＤ302やその近辺から出土した土器の中には高杯Ａ２が数個体みられる。2253もＳＤ302から出土したものであるが、小型の壺で、外面全体に丁寧なヨコミガキが施されている。

ＳＫ８から出土した2241は甕Ｂ３で、体部内面には指頭圧痕が明瞭に残されている。

(3) 古代～中世

古代から中世の遺構もいくつか確認されており、その中から遺物も出土している。古代の遺物はわずかであるが、中世の遺物はややまとまった量が出土している。以下、遺構ごとに主だったものについて述べていきたい。

ＳＤ527出土土器（第182図2196～2198）　2196は須恵器の杯で、高台は付かない。

2197・2198は土師器の杯である。いずれも外面は口縁部付近をヨコナデするのみで、体部及び底部には目立った器面調整は認められず、粘土紐の接合痕や成形時のユビナデ痕などを残す。奈良時代中葉ころのものと考えられる。

ＳＤ497出土土器（第182図2199）　2199は土師器の鍋である。口縁部は上方にはね上げるように肥厚させており、いわゆる南伊勢系土師器であると考えられる。15世紀末～16世紀前半頃のものであろう[5]。

ＳＫ548出土土器・陶磁器（第182図2200～2204）

2200は土師器の小皿である。手捏ねで成形される。2201は土師器の皿で、外面にユビオサエによる成形痕を残し、口縁部付近にはヨコナデを施す。薄手の作りで、口縁部はやや内湾する。後述の2215・2216など白色系の色調を呈するものと異なり、赤褐色を呈する。

2202・2203は無釉陶器[6]である。いずれも断面方形の不整形な高台を貼り付ける。2202の底部内面及び高台内部の一部には黒色物が付着する。

2204は白磁椀である。低い輪高台を持ち、畳付および高台内部には釉は施されていない。12世紀代のものと思われる[7]。

ＳＥ565出土土器・陶器（第182図2205～2211）

2205～2210は無釉陶器である。2208・2209の高台はかなり矮小化している。2205・2207の底部内面には黒色物が付着している。2210は片口鉢と思われるが、この個体の底部内面にも黒色物が付着している。2211は南伊勢系土師器の鍋である。口縁端部は内面に折り返して肥厚させる。頸部は緩く屈曲し、外面はユビオサエ・ナデ等で調整される。13世紀後半～14世紀前半頃のものと考えられる。

ＳＥ587出土土器（第182図2212～2216）　2212・2213は土師器の小皿である。手捏ね成形で、口縁端部は丸く収められる。2214～2216は土師器皿である。いずれも外面にはユビオサエによる成形痕が残り、口縁部付近にはヨコナデを施す。2215は内面及び外面の口縁部付近にススが付着しており、灯火具として使用されたものと考えられる。

ＳＫ625出土陶器（第182図2217）　2217は陶器の椀である。瀬戸・美濃産の折縁皿であろうか。底部外面以外に灰釉が施されている。底部外面には墨書が認められるが、破片であるために何が書かれていたのかは不明である。

ＳＲ340出土土器（第178図2099）　2099は土師器の甕である。口縁端部はやや上方にはね上げている。体部内面はヨコハケによって調整されている。奈良時代に属するものと考えられる。

B3p23pit９出土陶器（第182図2218）　2218は無釉陶器である。口縁部は外反する。

B3n24pit４出土陶器（第182図2219・2222）　2219・2222は無釉陶器である。2222は片口鉢と考えられる。両者とも焼成が悪く、土師質を呈している。

B3h24pit４出土土器・陶器（第182図2220・2221・2223）　2220・2221は無釉陶器である。2220は小皿で高台を貼り付けている。口縁部の内外面に自然釉が顕著に付着している。また、底部内面には重ね焼きの痕跡が残る。2221は断面台形の不整形な高台を貼り付けている。2223は土師器の甕である。口縁はやや直立し、口縁端部は内面に向かって肥厚する。外面にはススが付着している。

B5g12旧河道出土土器（第182図2224）　2224は須恵器の椀である。小片であり、口径はもう少し大きくなる可能性がある。焼成は甘く、やや土師質である。底部の内外面には不整方向のヨコナデやユビオサエによる成形痕を残している。

遺構外出土土器・陶磁器・土製品（第182図2225～2236）　この他に、表土や包含層の中などからも遺物が出土している。2225は白磁椀である。口縁端部は玉縁状をなす。12世紀代のものと思われる。

2227は龍泉窯系の青磁椀である。見込みには櫛状のもので施された文様が認められる。底部は体部よりも厚い。高台内には釉は施されていない。14世紀

後半～15世紀前半頃のものと思われる。

2226・2228・2233～2235は無釉陶器である。2226は小皿で、高台は付かない。2233・2235の高台端部には籾殻痕が認められる。2228の底部外面には「○」の記号が墨書されている。2234の底部内面には黒色物が厚く付着している。

2229は瀬戸・美濃産の平碗で、内外面に灰釉を施すが、外面の下半部は無釉であったようである。口縁端部はやや外反する。おそらく14世紀後半～15世紀前半頃のものであろう[8]。

2230・2232は南伊勢系土師器の鍋である。2232は口縁端部を内側に折り返し、幅広く肥厚させている。2230は2232より時期の遡るもので、口縁端部を折り返して丸く肥厚させている。体部は丸みを帯び、甕の形態を残している。

2231は加工円盤である。常滑産の壺と思われる陶器片を打ち欠いて丸く加工している。

2236は陶器の甕である。常滑産のものと思われ、口縁端部は幅広に拡張し、外方に短く折り曲げる。折り曲げられた口縁部は体部と接着しておらず、15世紀前半頃のものと思われる[9]。

第１次調査出土陶器（第183図2263・2264）　2263・2264は無釉陶器である。2263の高台端部には籾殻痕が認められる。2264は小皿で、高台を貼り付ける。底部外面には爪の先で付けたような、連続する傷状の痕跡が認められる。　（石井智大）

[註]

(1) 当該期の土器の編年については、主に下記の尾張地域のものに関する文献を参照した。伊勢地域特有の地域色はあるものの、大枠の様式構造や時期的変遷は尾張地域と大きな差はないものと考えられる。
赤塚次郎「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター　1990、赤塚次郎「山中式土器について」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター　1992、赤塚次郎「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター　1997、赤塚次郎「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡』（財）愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター　2001

(2) 遺物に付着する赤色顔料については、成分分析によって水銀朱・ベンガラ等の種類が判明したものや、肉眼観察によって判別が可能であったものについては、その名称を記している。成分分析や肉眼観察によってその種類が判然としなかったものについては、単に赤色顔料とのみ記した。なお、成分分析を行った資料とその結果については第11表に記載している。

(3) 三重県埋蔵文化財センター『天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告』2006、三重県埋蔵文化財センター『西肥留遺跡発掘調査報告（第１・２・３・５次）』2008、四日市市教育委員会『山奥遺跡Ⅱ』2004、飴谷一「朝日遺跡の異形土器について－鳥形土器を考えるにあたって－」『年報』昭和62年度　愛知県埋蔵文化財センター　1988

(4) ＳＤ302は、第１次調査時にはＳＤ１と呼称されていた。

(5) 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol.1　三重歴史文化研究会　1990

(6) 本報告では、いわゆる山茶椀を指すものとして無釉陶器という名称を用いている。なお、その編年観については以下の文献を参考にしている。
藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター　1994

(7) 青磁椀・白磁椀の編年や実年代観については、以下の文献を参考にした。
横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館　1978、上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会　1982、原廣志「横地氏関連遺跡群と周辺遺跡の特徴について」『横地城跡－総合調査報告書－』菊川町教育委員会　1999

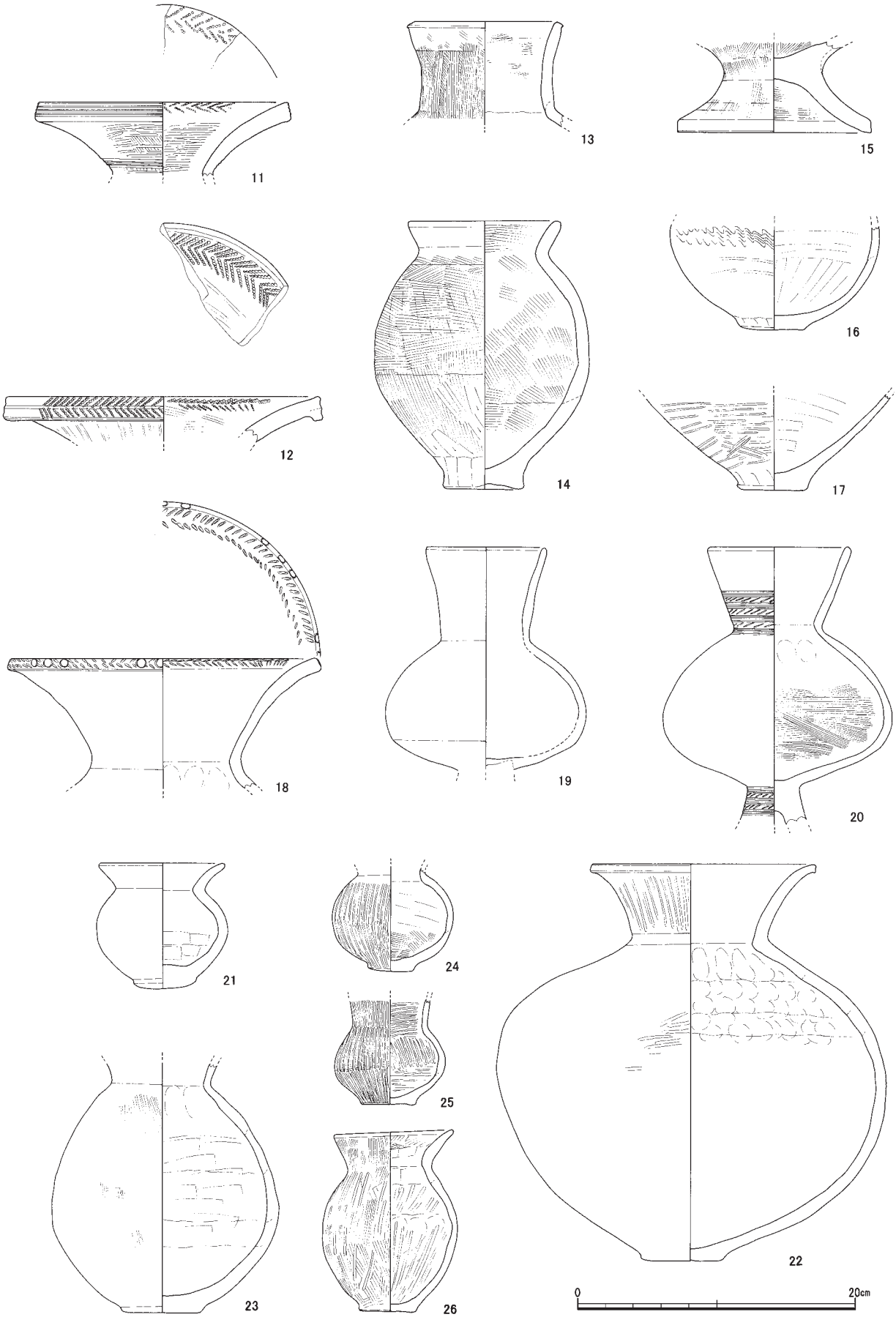
(8) 藤澤良祐「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相』発表要旨集　全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会　2005

(9) 中野晴久「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館　1995

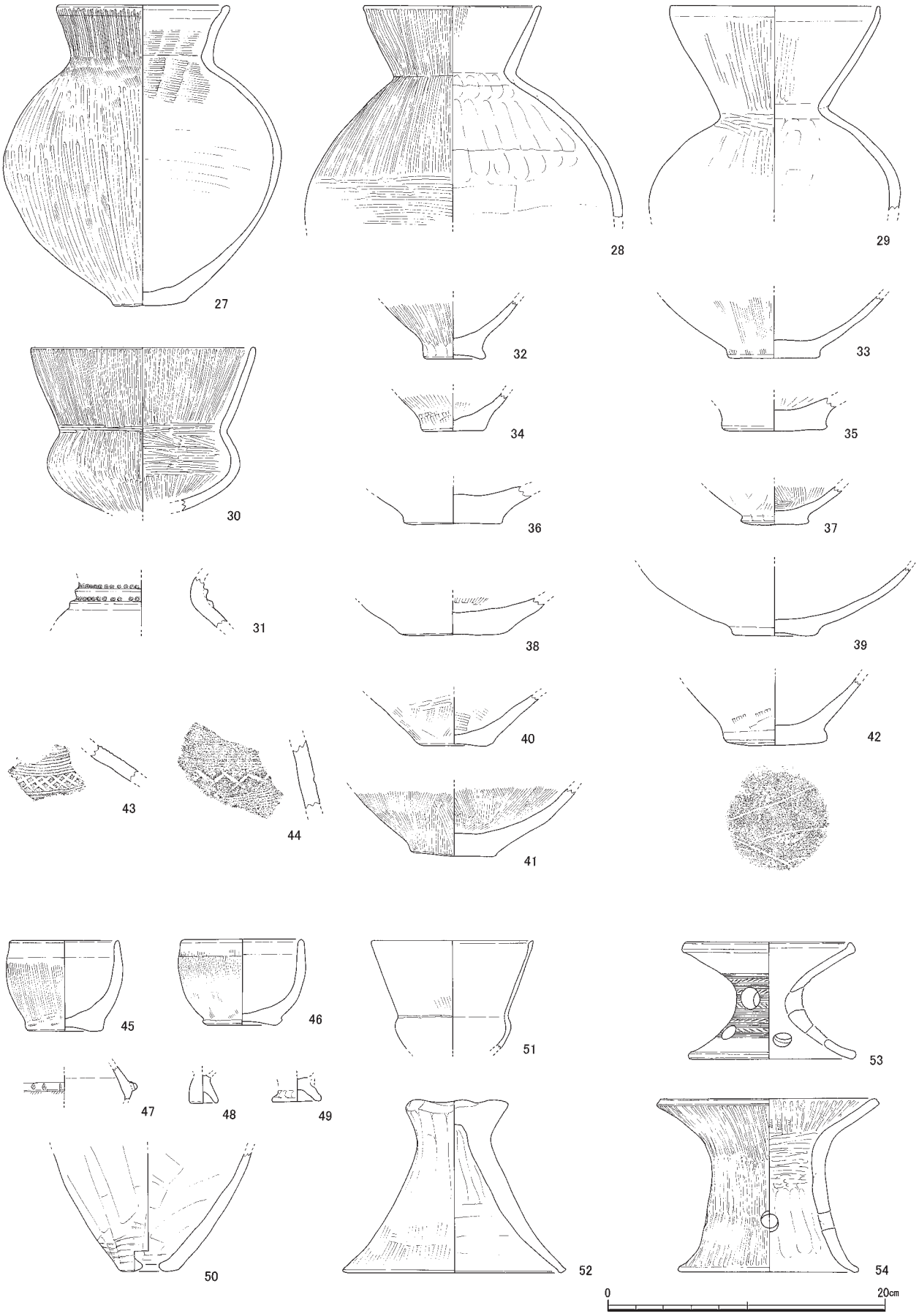
３　石製品

土器の他にも、遺構の内外から多くの石製品が出土している。時期的には弥生時代後期～古墳時代初頭のものが多いと思われるが、中には弥生時代以前に遡りうると思われるものや、あるいは古墳時代以降のものと思われるものも少数ながら出土している。

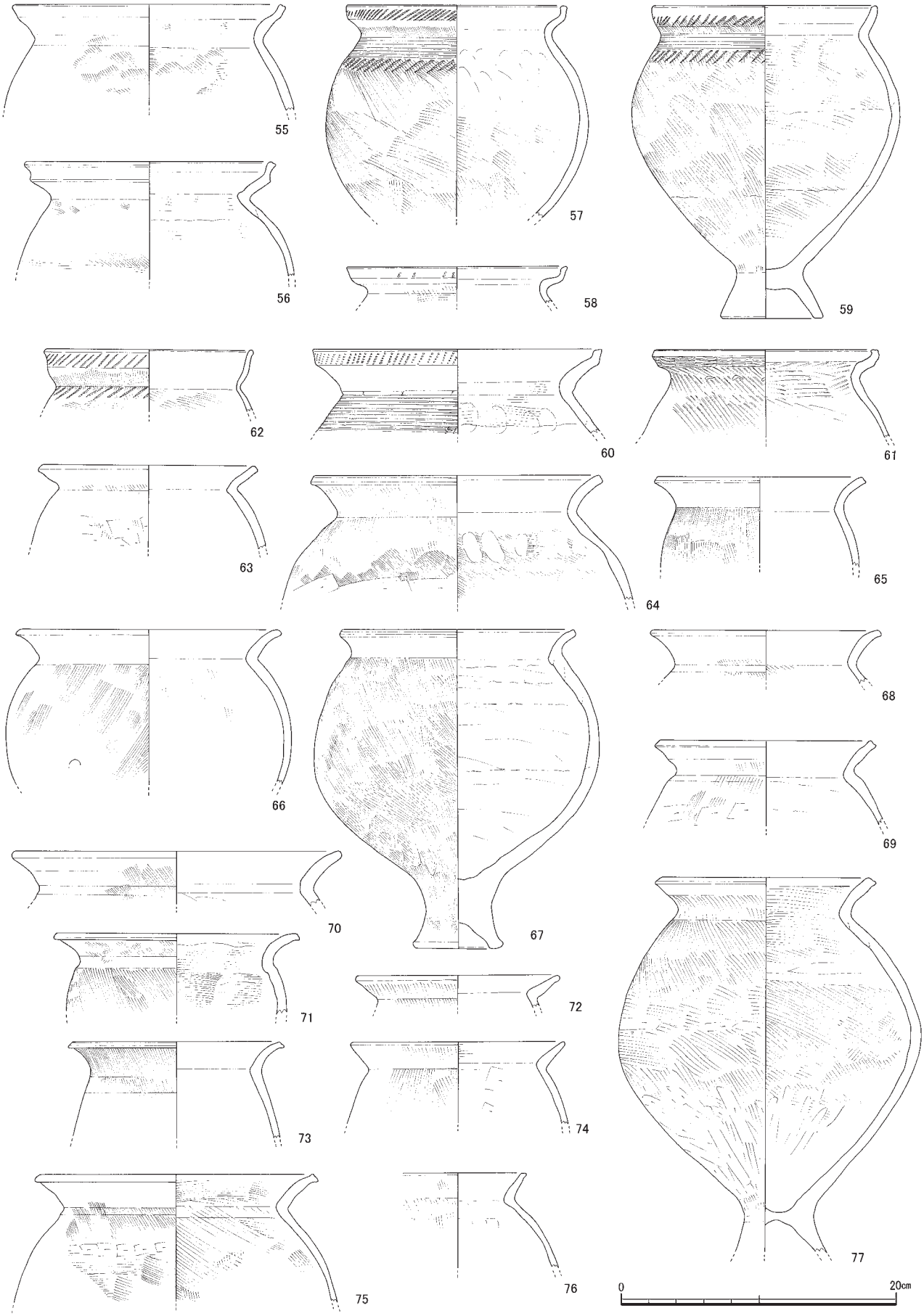
以下、これらの石器について遺構ごとに述べてい



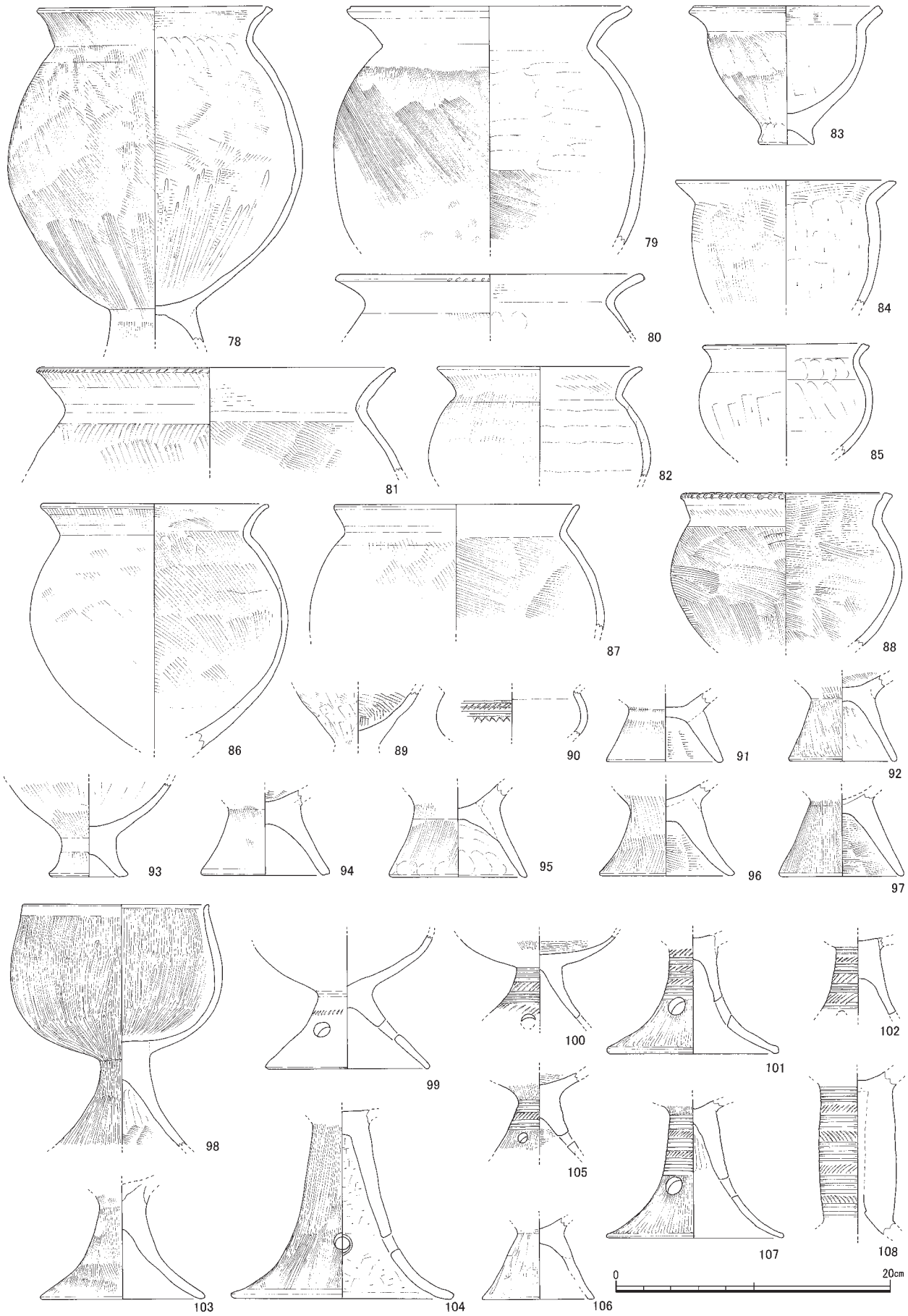
第80図　SD202出土遺物実測図（1）（1:4）



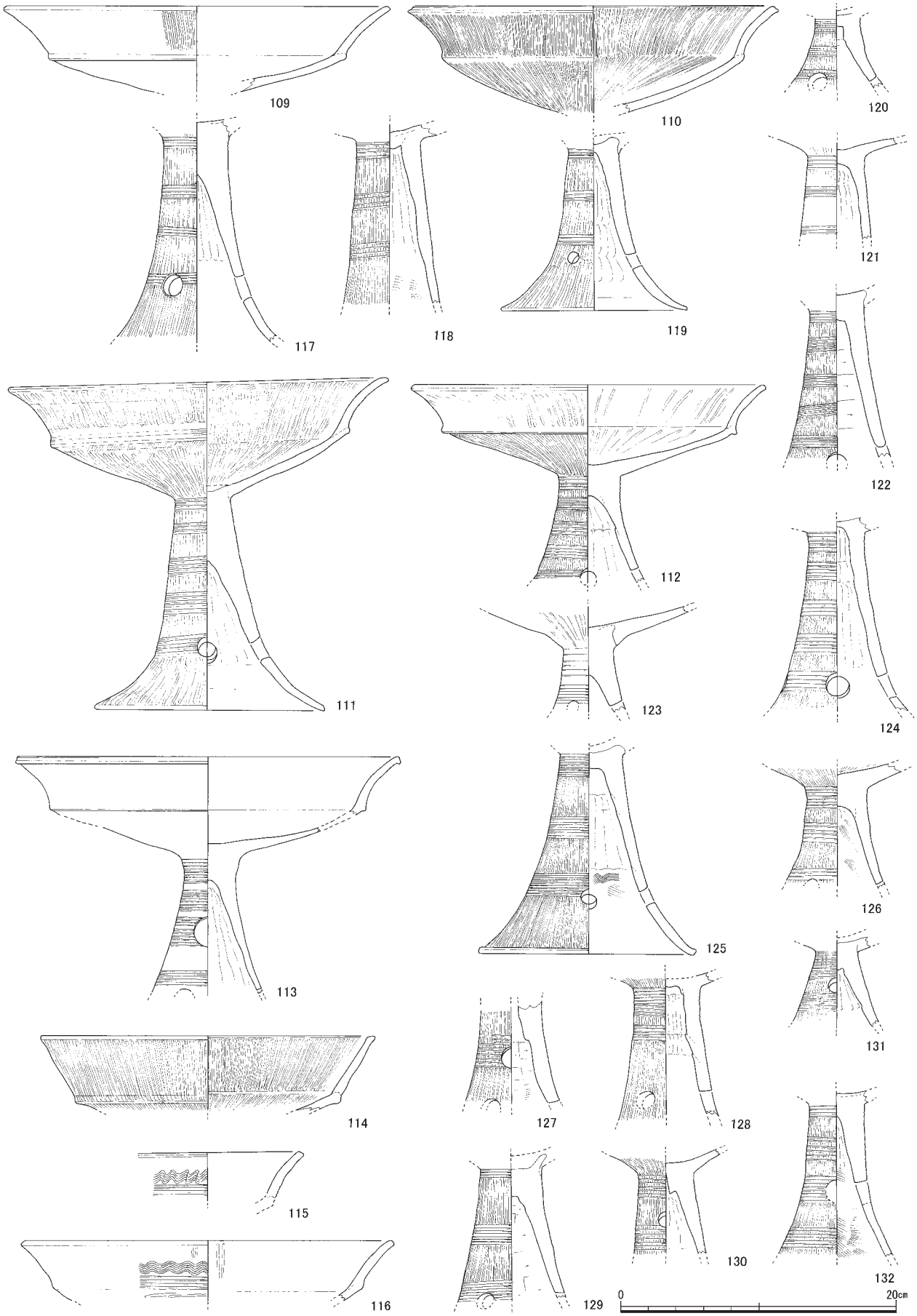
第81図　SD202出土遺物実測図（2）（1:4）



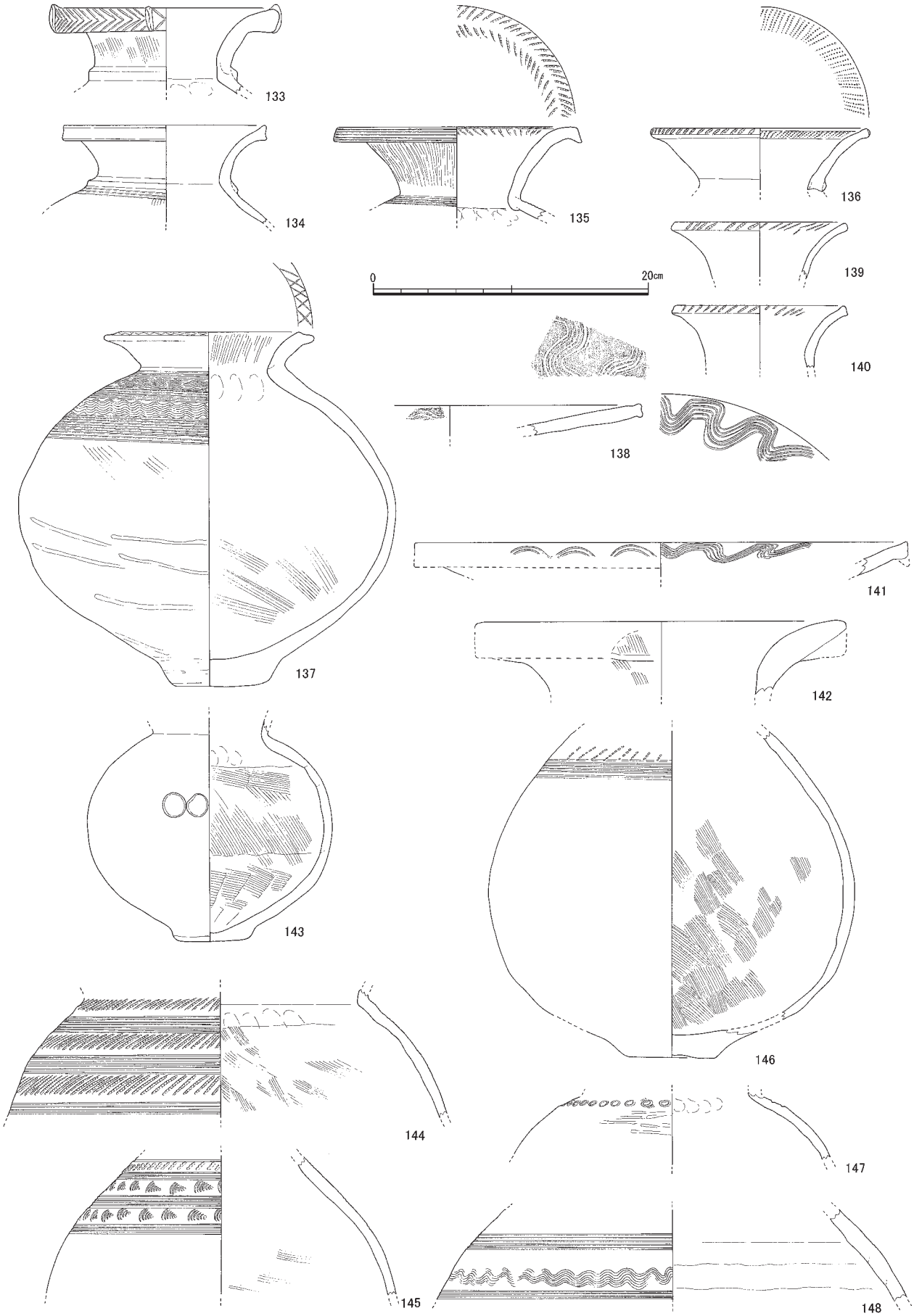
第82図　SD202出土遺物実測図（3）（1:4）



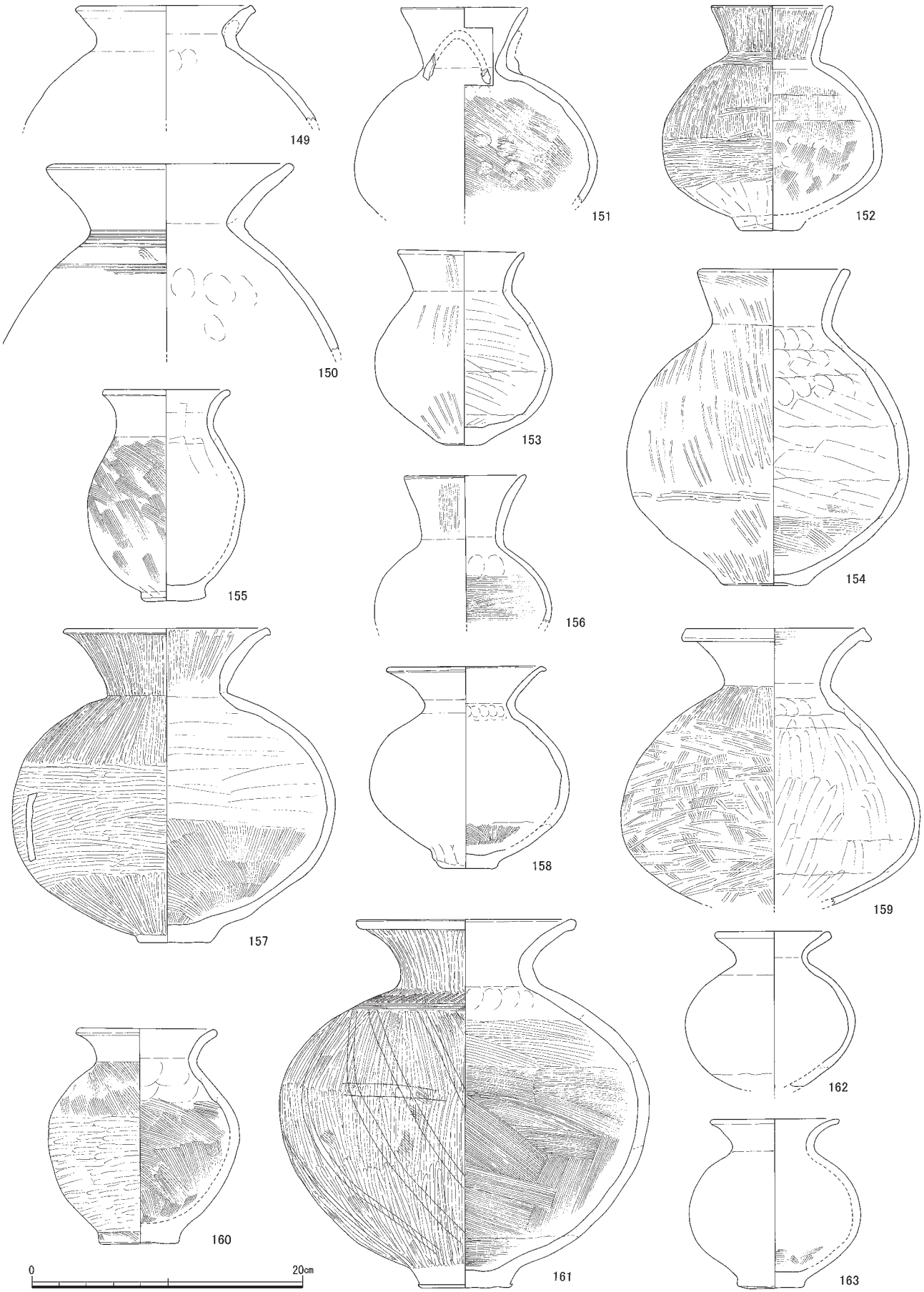
第83図　SD202出土遺物実測図（4）（1:4）　※アミがけは赤色顔料



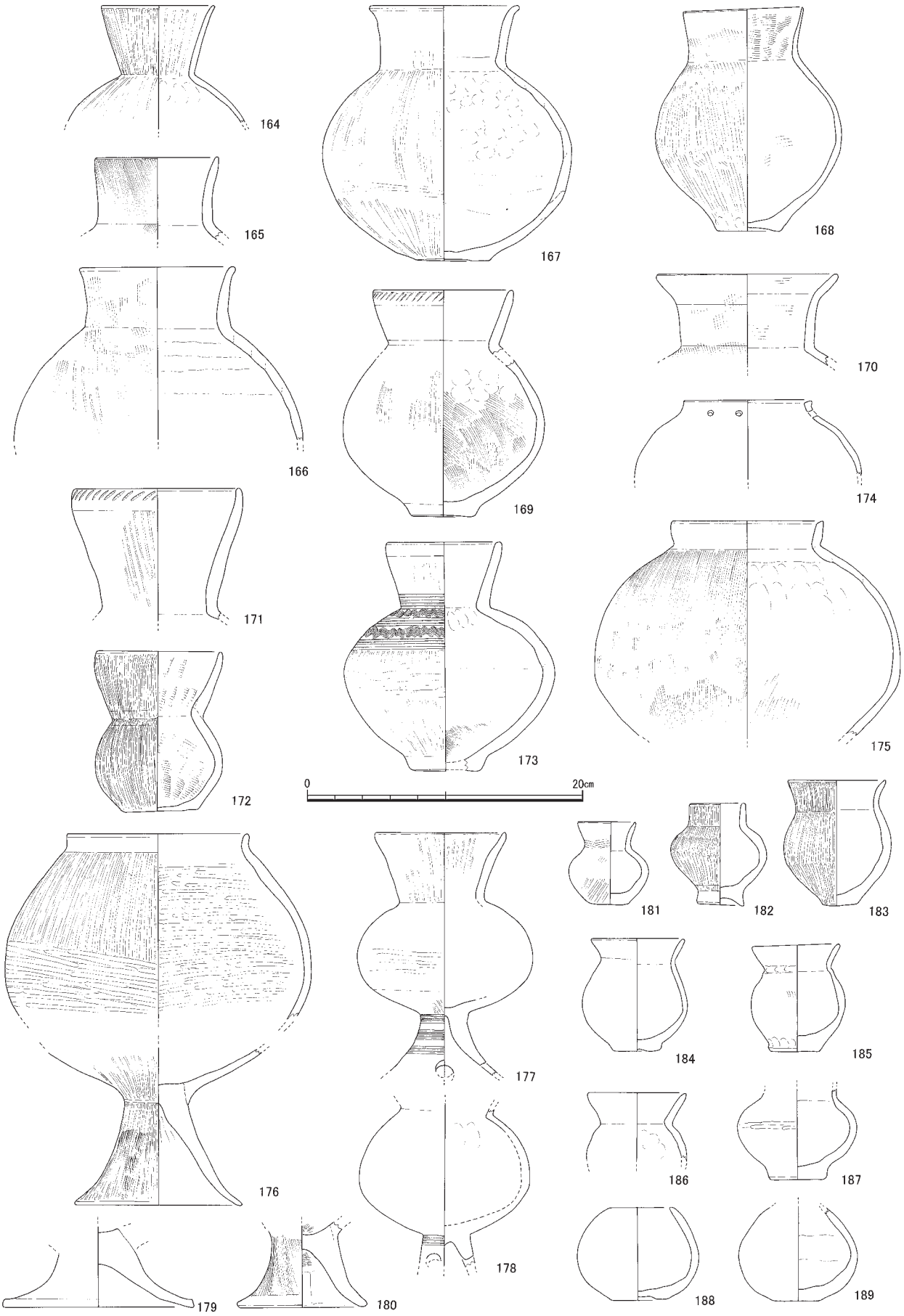
第84図　SD202出土遺物実測図（5）（1:4）



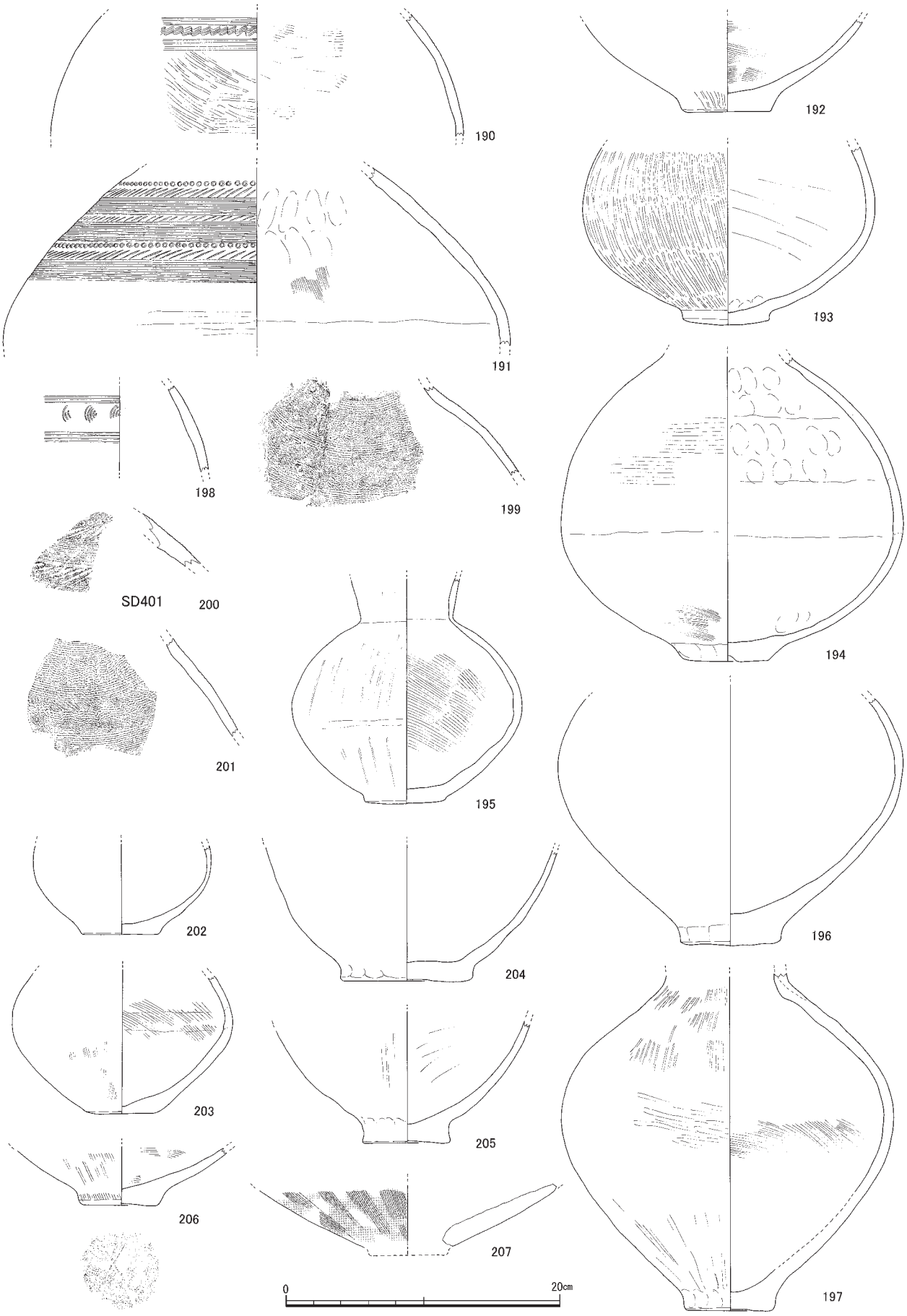
第85図　SD301（SD282）出土遺物実測図（1）（1:4）



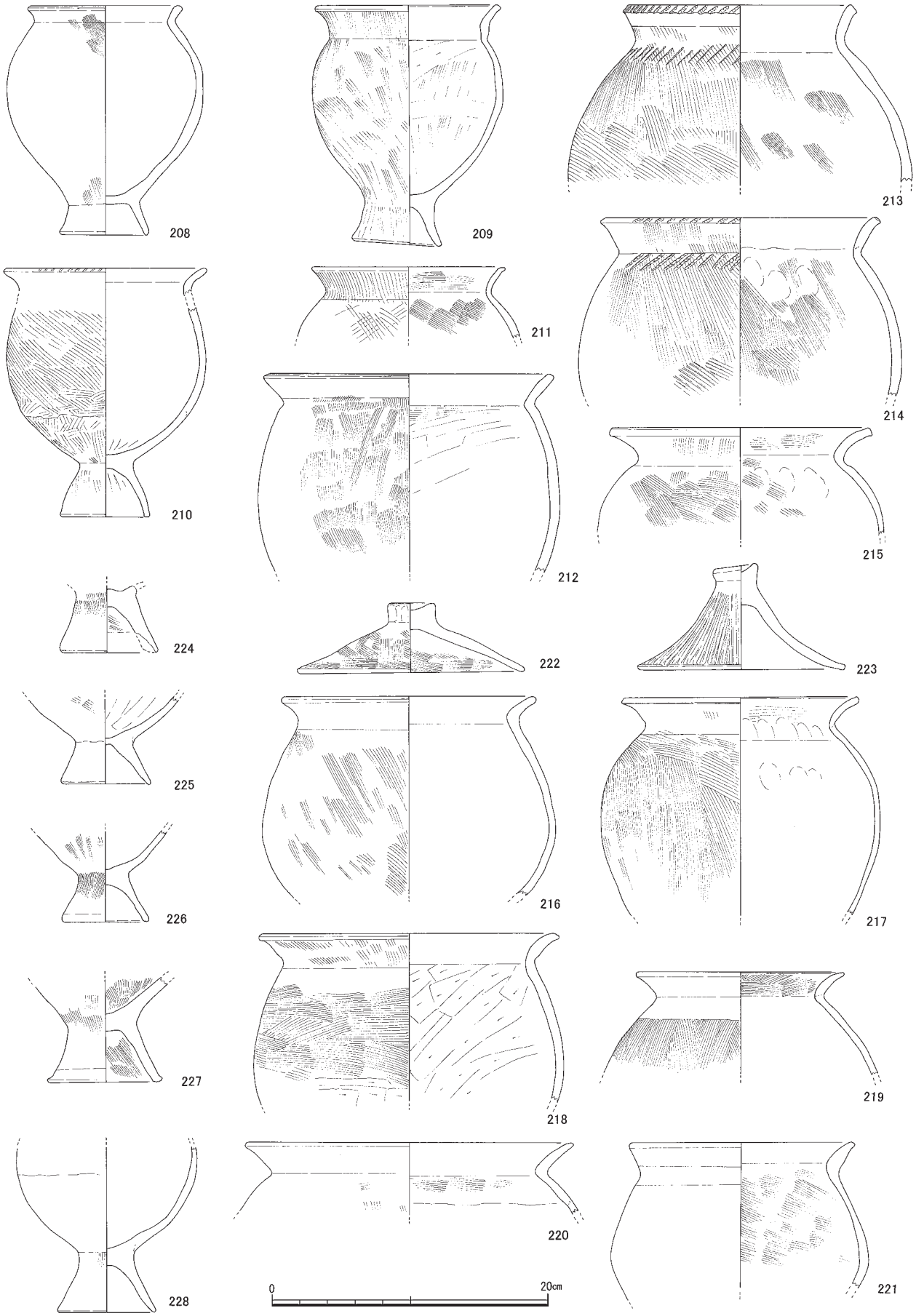
第86図　SD301（SD282）出土遺物実測図（2）（1:4）



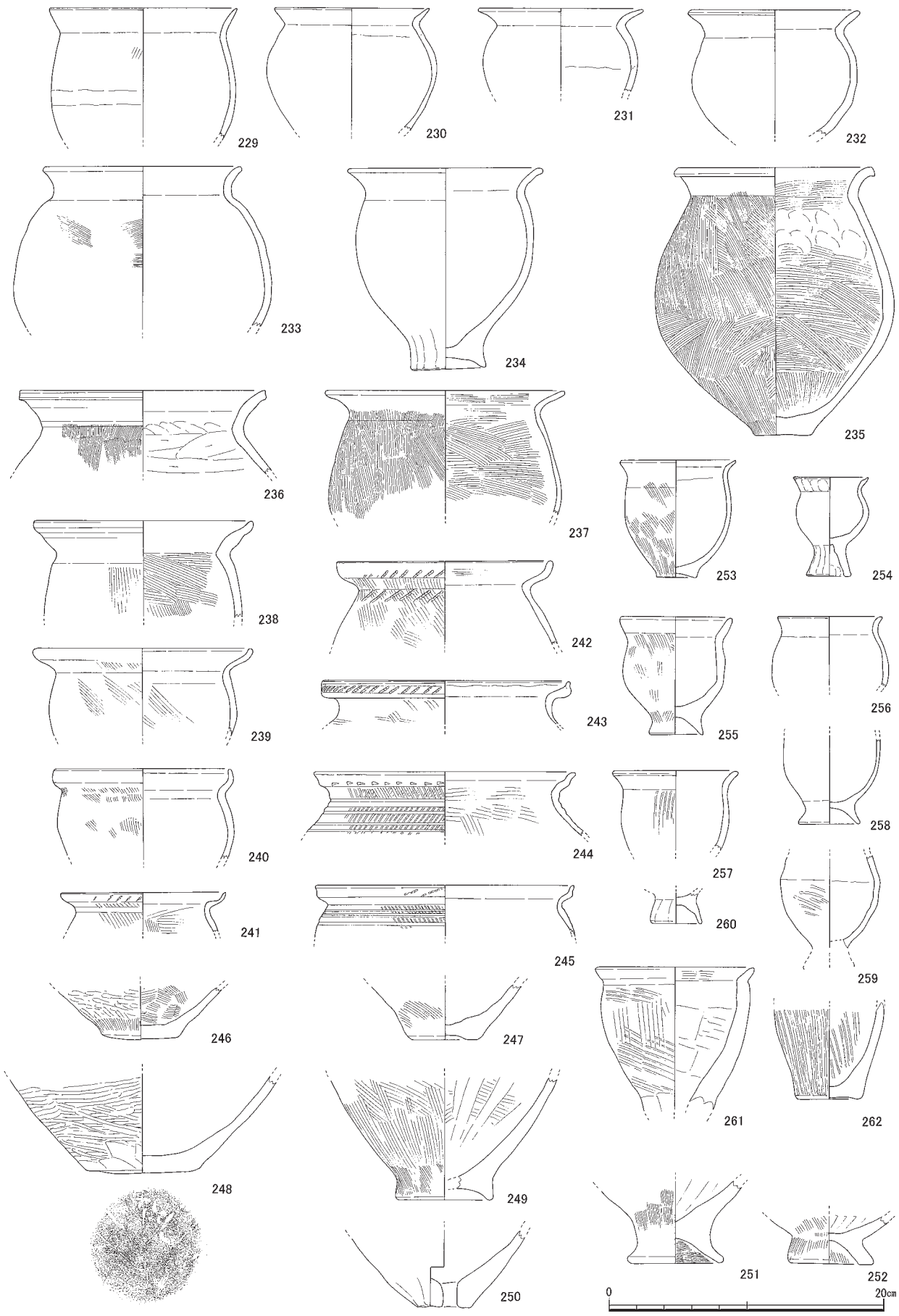
第87図　SD301（SD282）出土遺物実測図（3）（1:4）



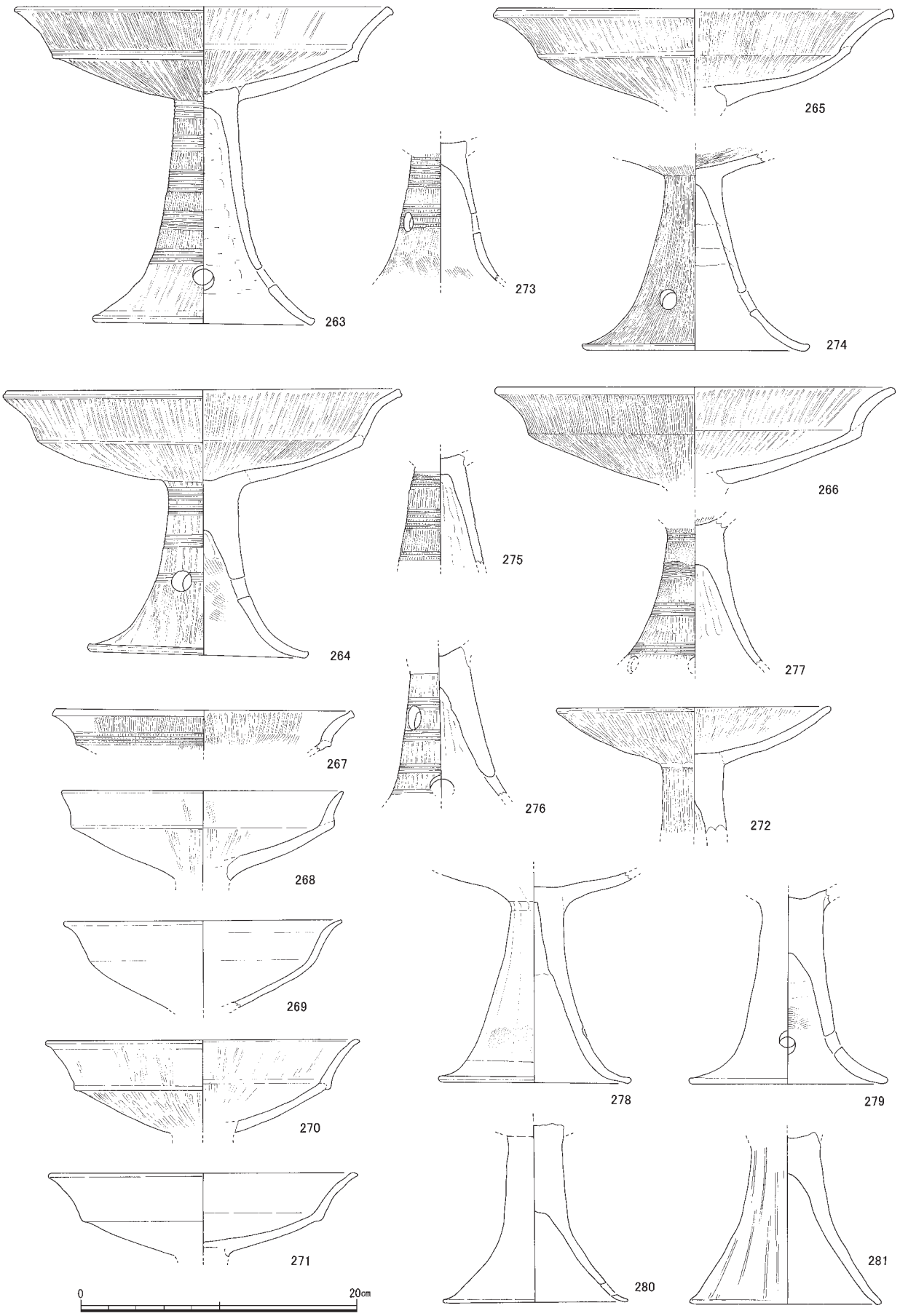
第88図　SD301（SD282）(4)・401出土遺物実測図（1:4）　※アミがけは赤色顔料



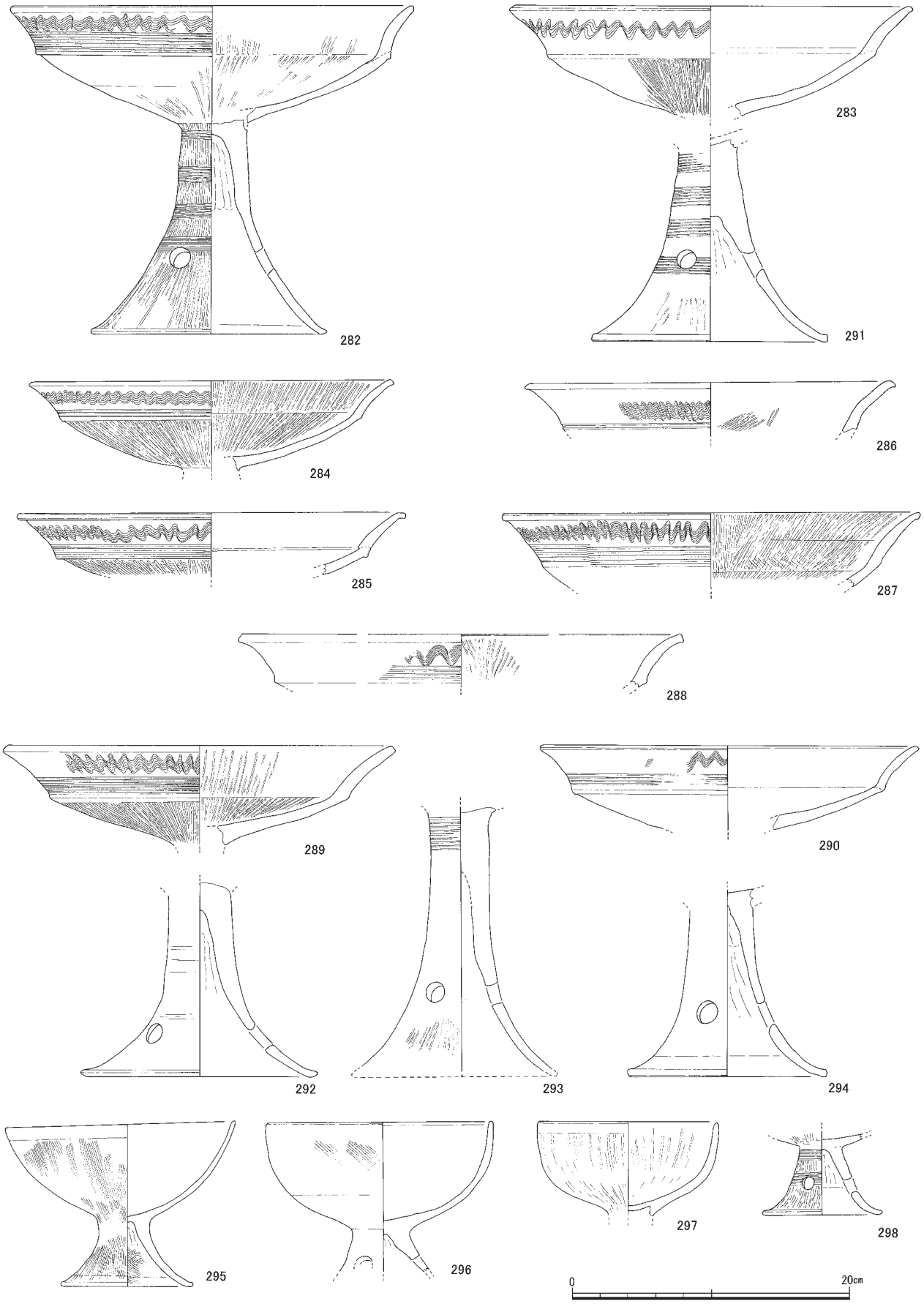
第89図　SD301（SD282）出土遺物実測図（5）（1:4）



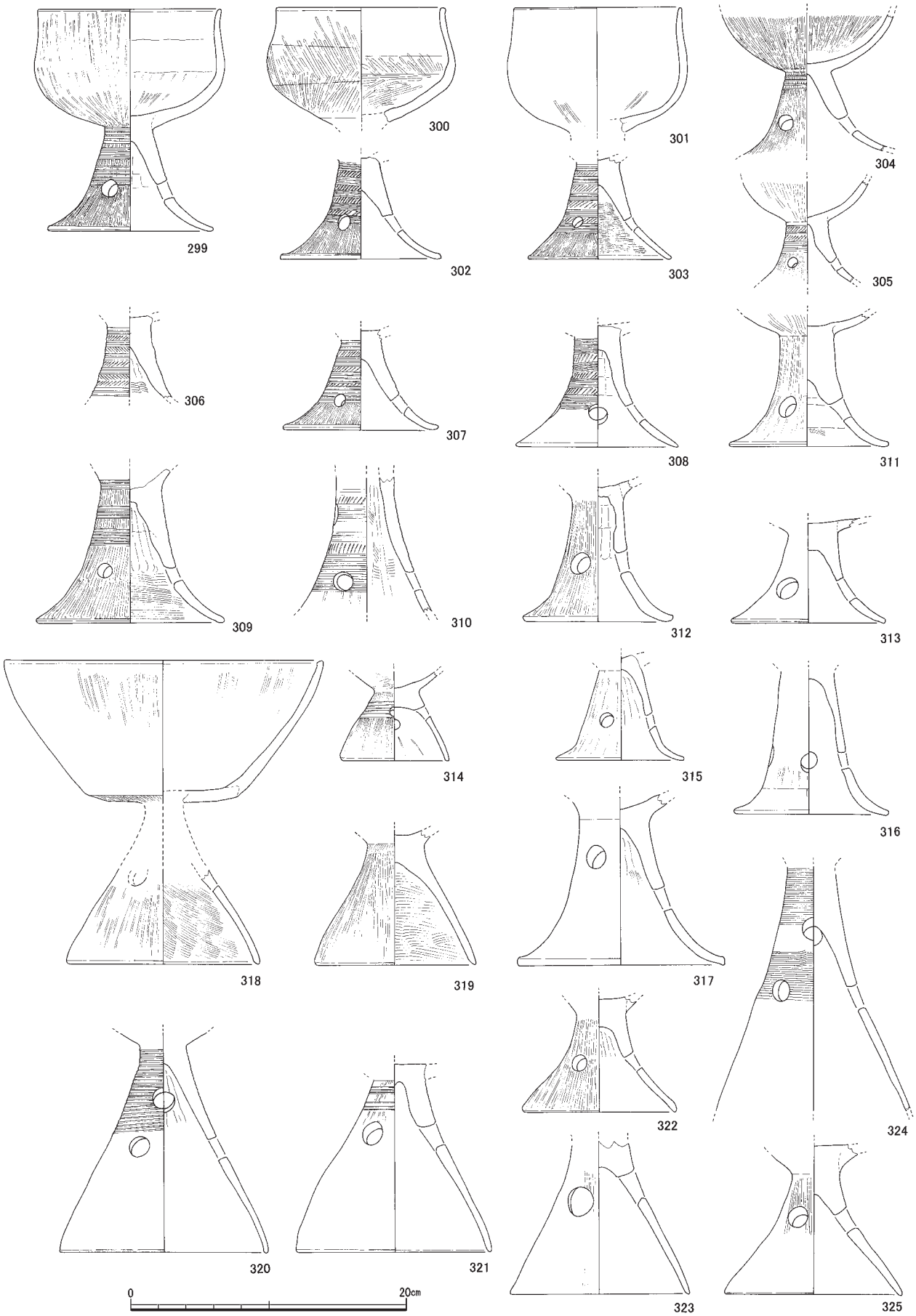
第90図　SD301（SD282）出土遺物実測図（6）（1:4）



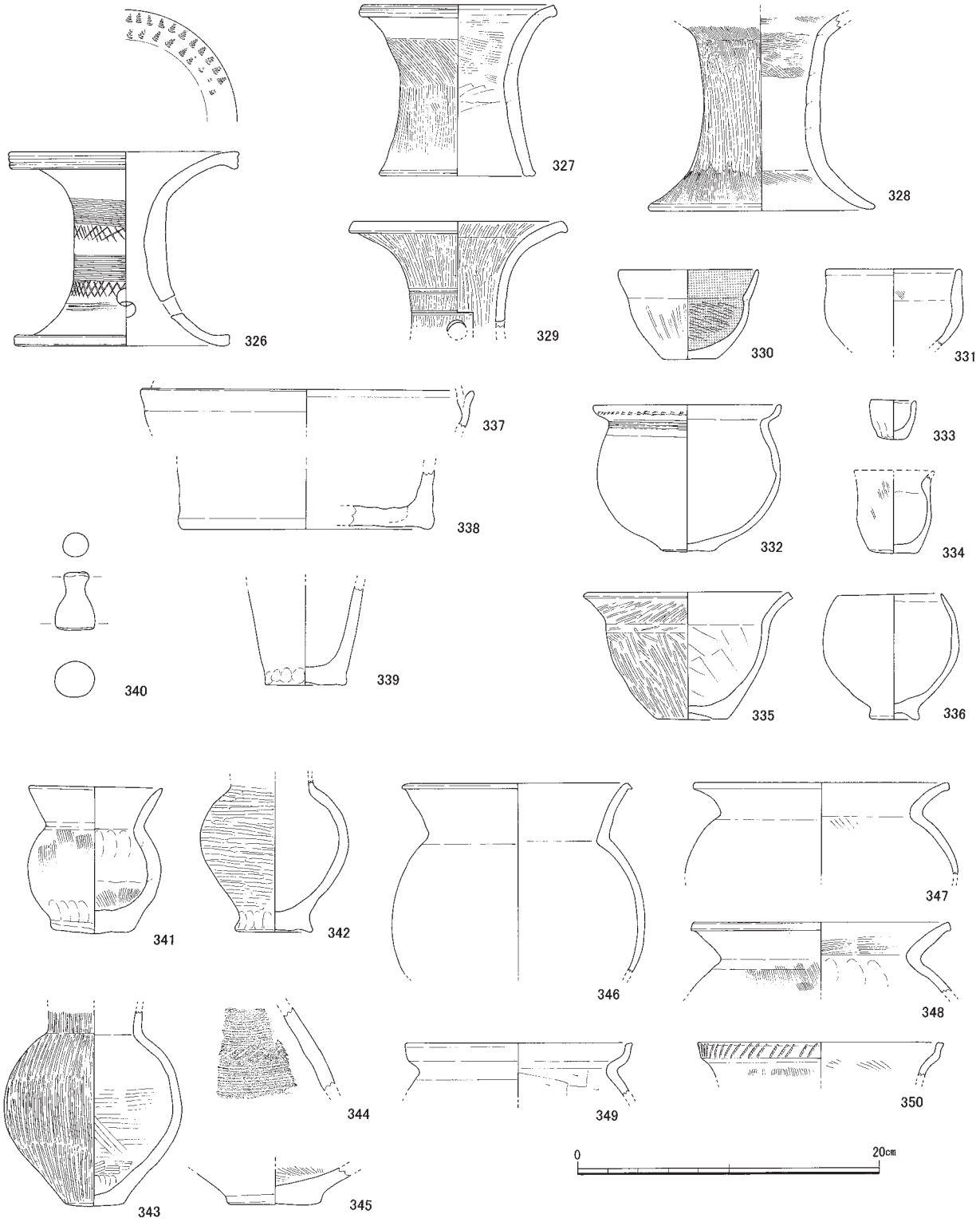
第91図　SD301（SD282）出土遺物実測図（7）（1:4）



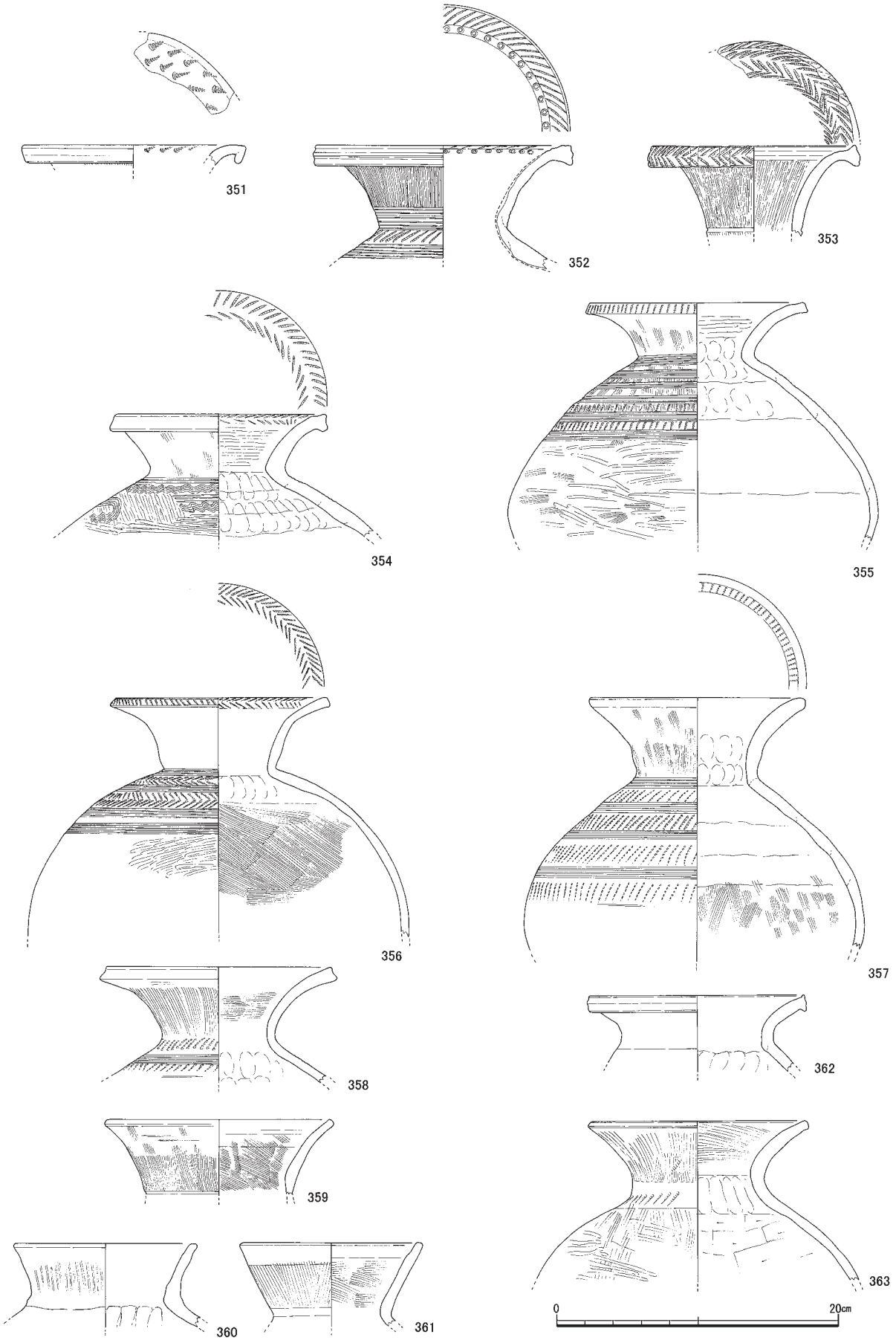
第92図　SD301（SD282）出土遺物実測図（8）（1:4）



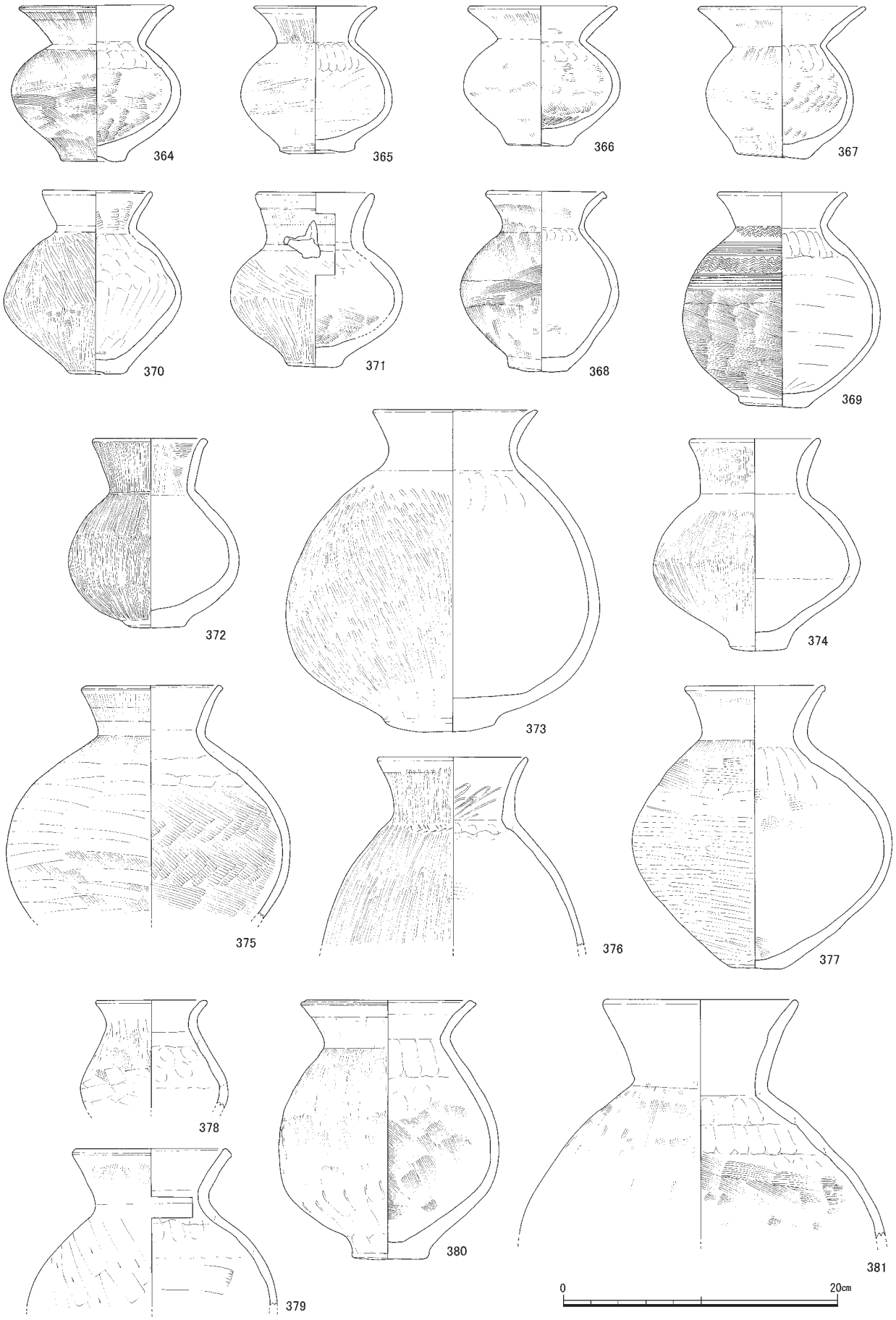
第93図　SD301（SD282）出土遺物実測図（9）（1:4）



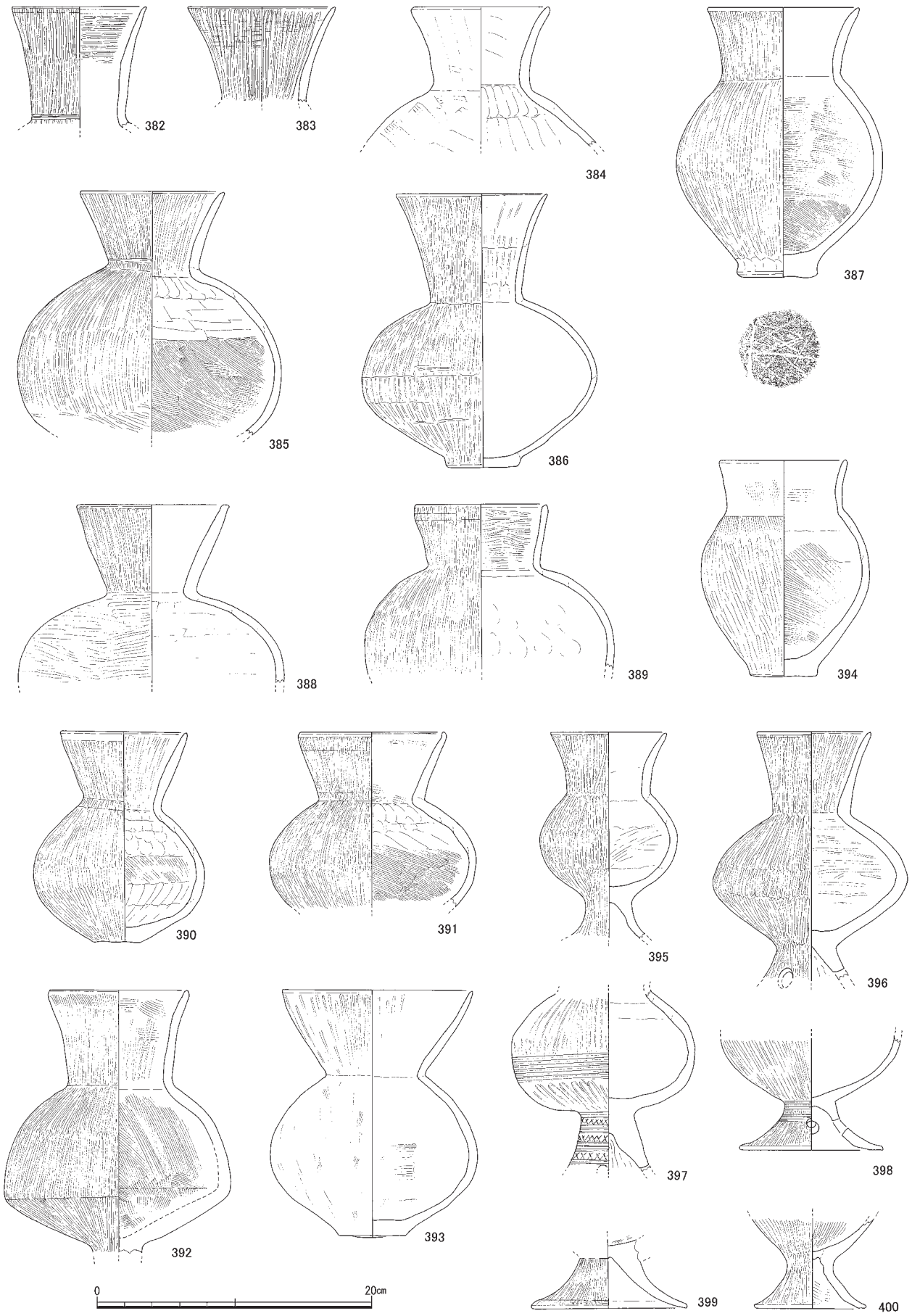
第94図　SD301（SD282）（10）・SD301（SD741）出土遺物実測図（1:4）　※アミがけは赤色顔料



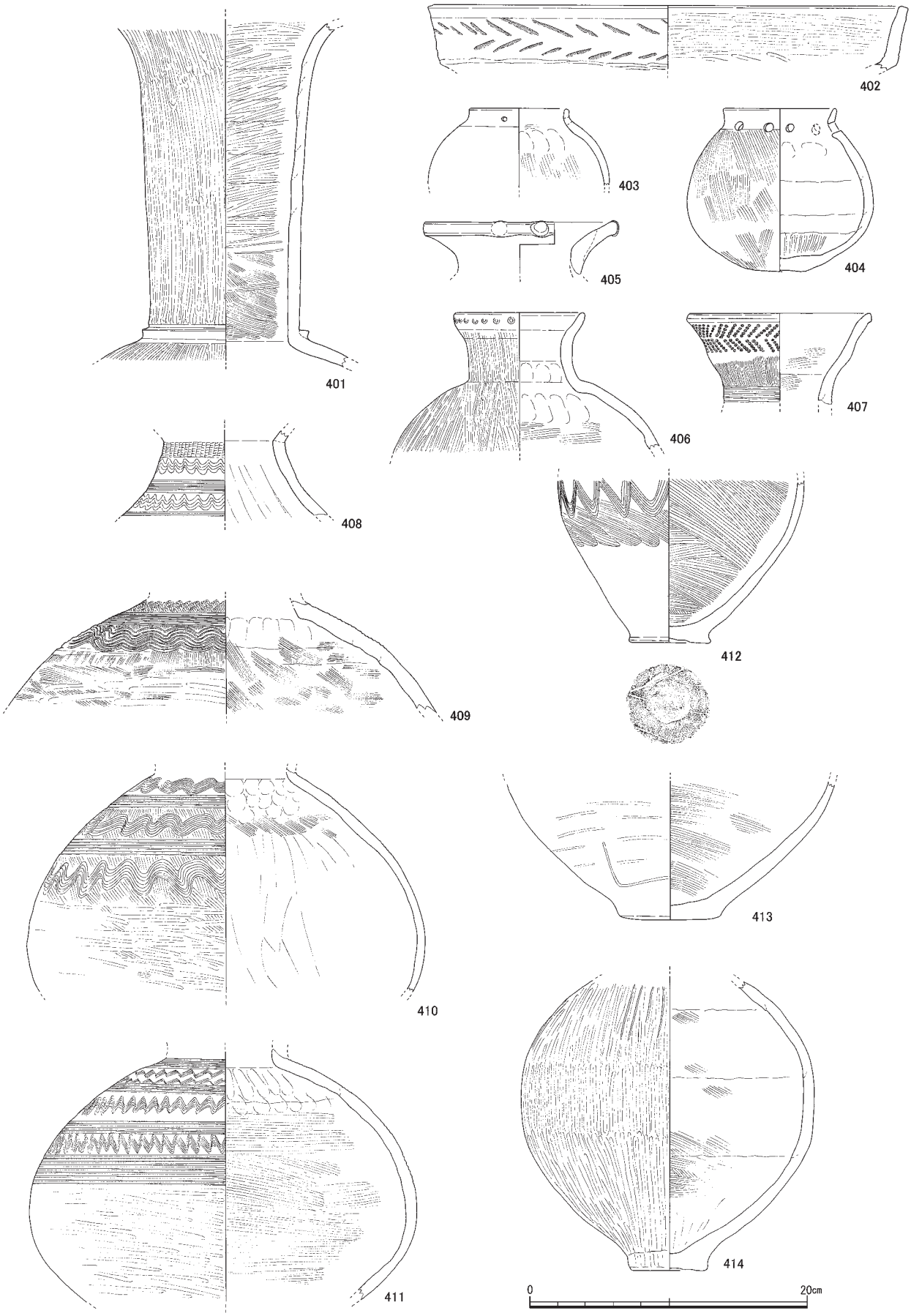
第95図　SD301下層出土遺物実測図（1）（1:4）



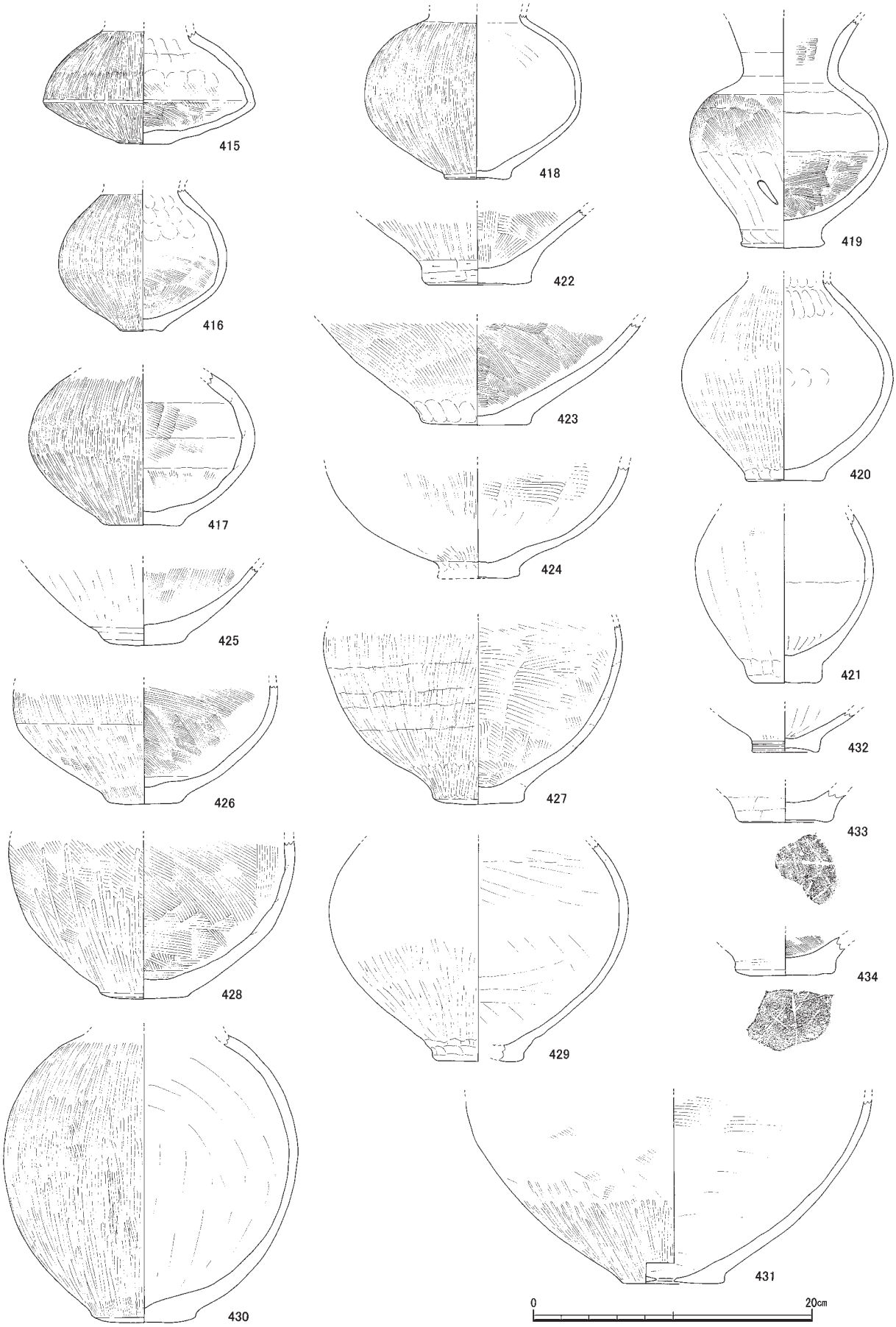
第96図　SD301下層出土遺物実測図（2）（1:4）



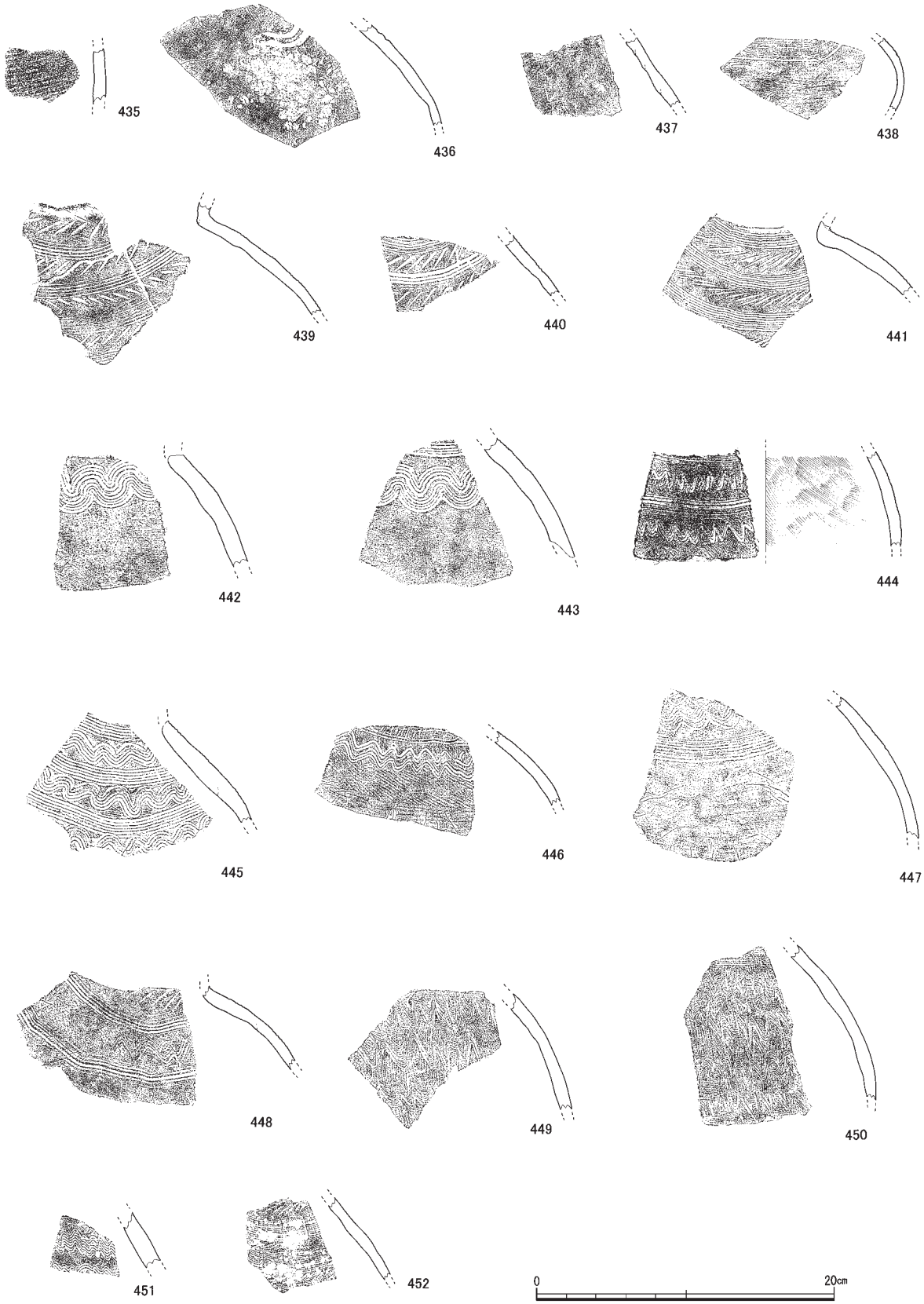
第97図　SD301下層出土遺物実測図（3）（1：4）



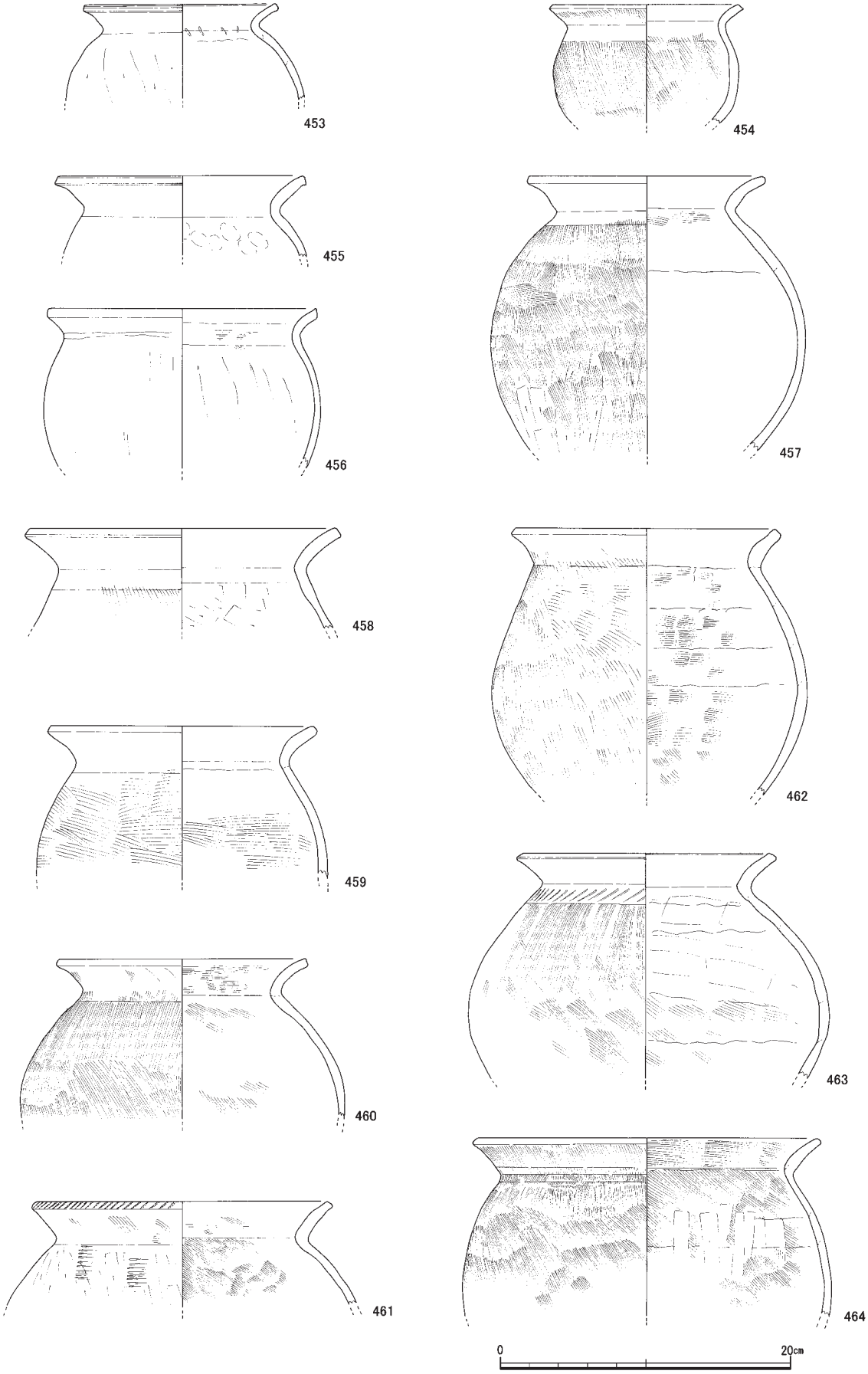
第98図　SD301下層出土遺物実測図（4）（1:4）



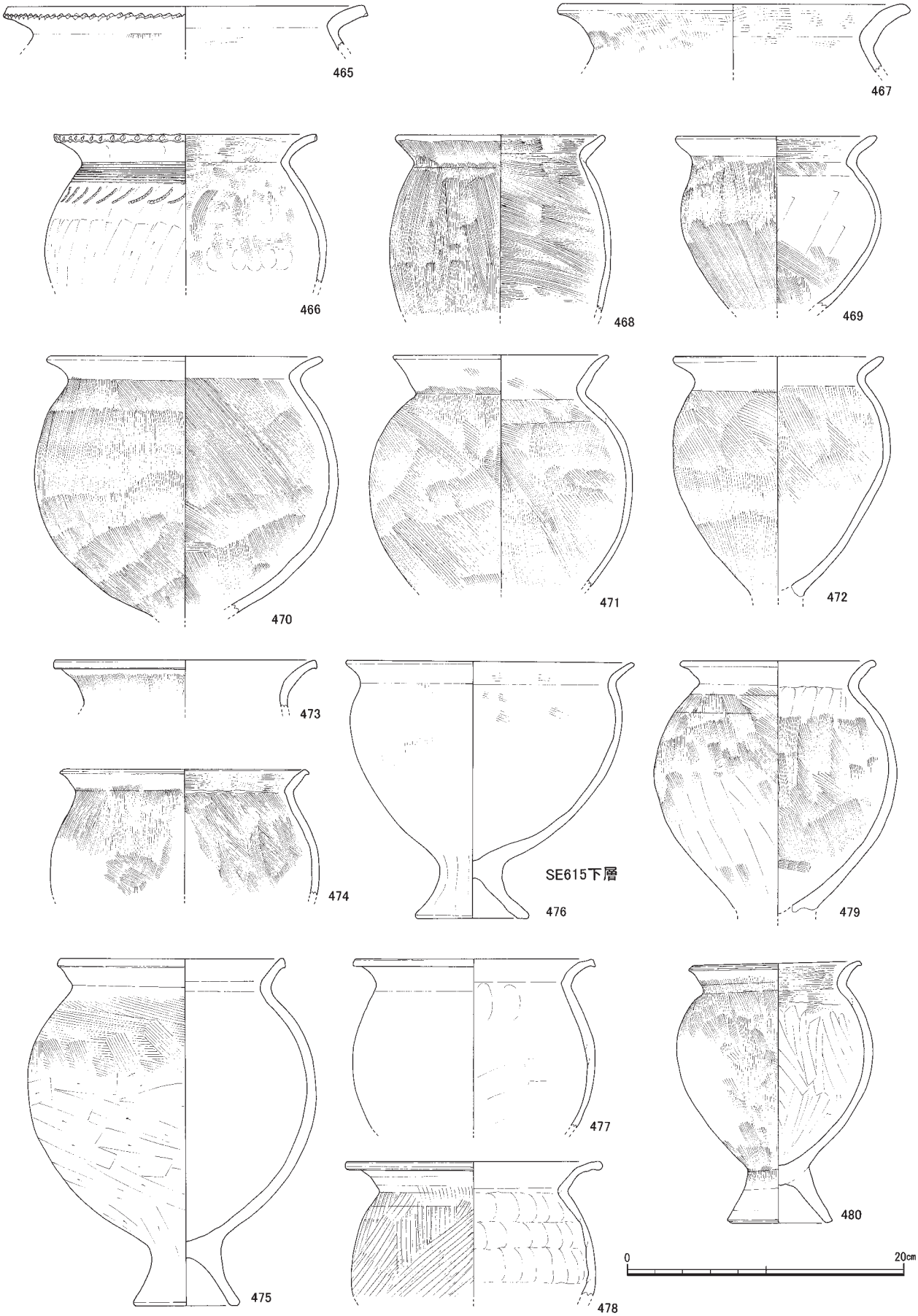
第99図　SD301下層出土遺物実測図（5）（1:4）



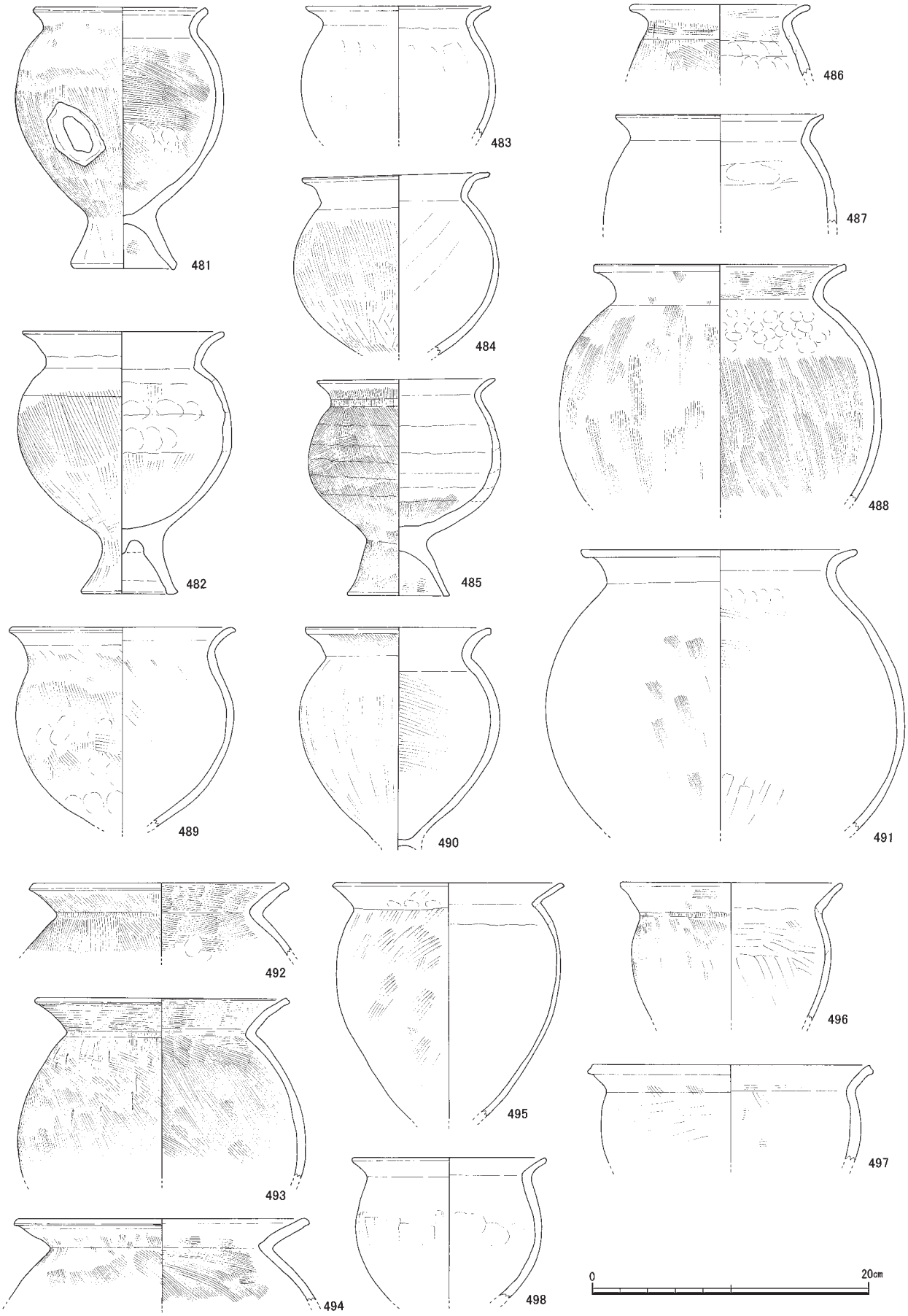
第100図　SD301下層出土遺物実測図（6）（1:4）



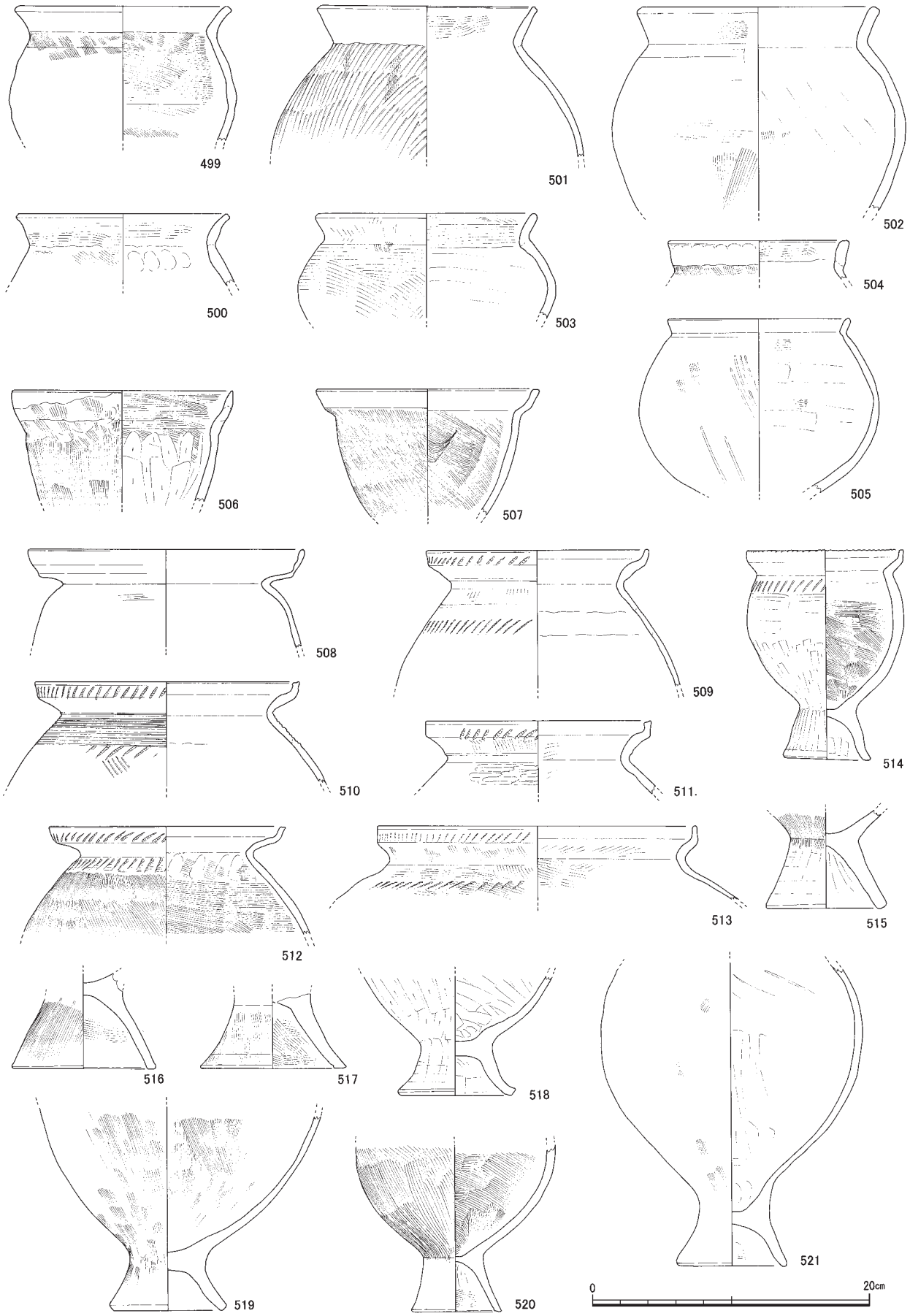
第101図　SD301下層出土遺物実測図（7）（1:4）



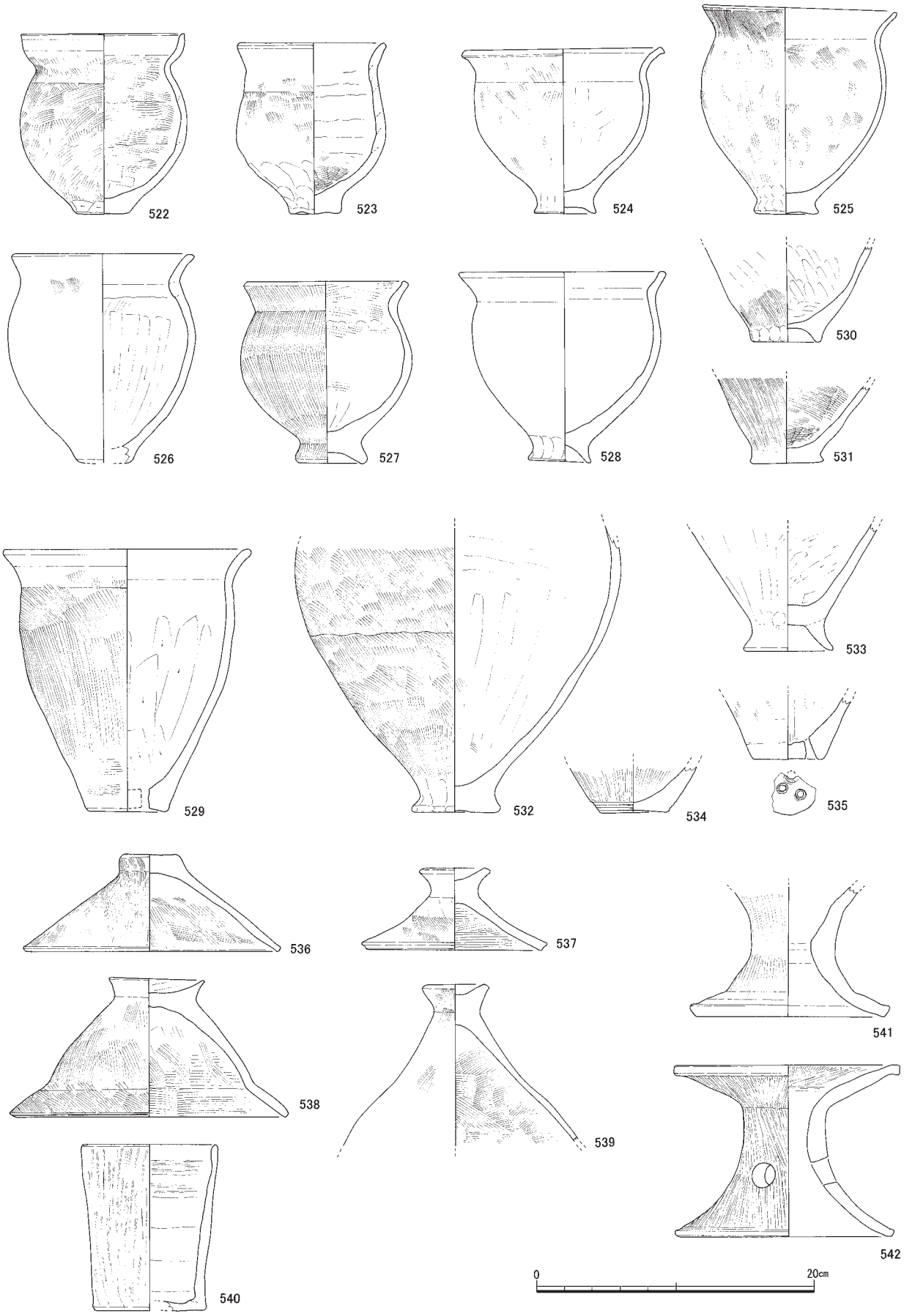
第102図　SD301下層（8）・SE615（1）下層出土遺物実測図（1:4）



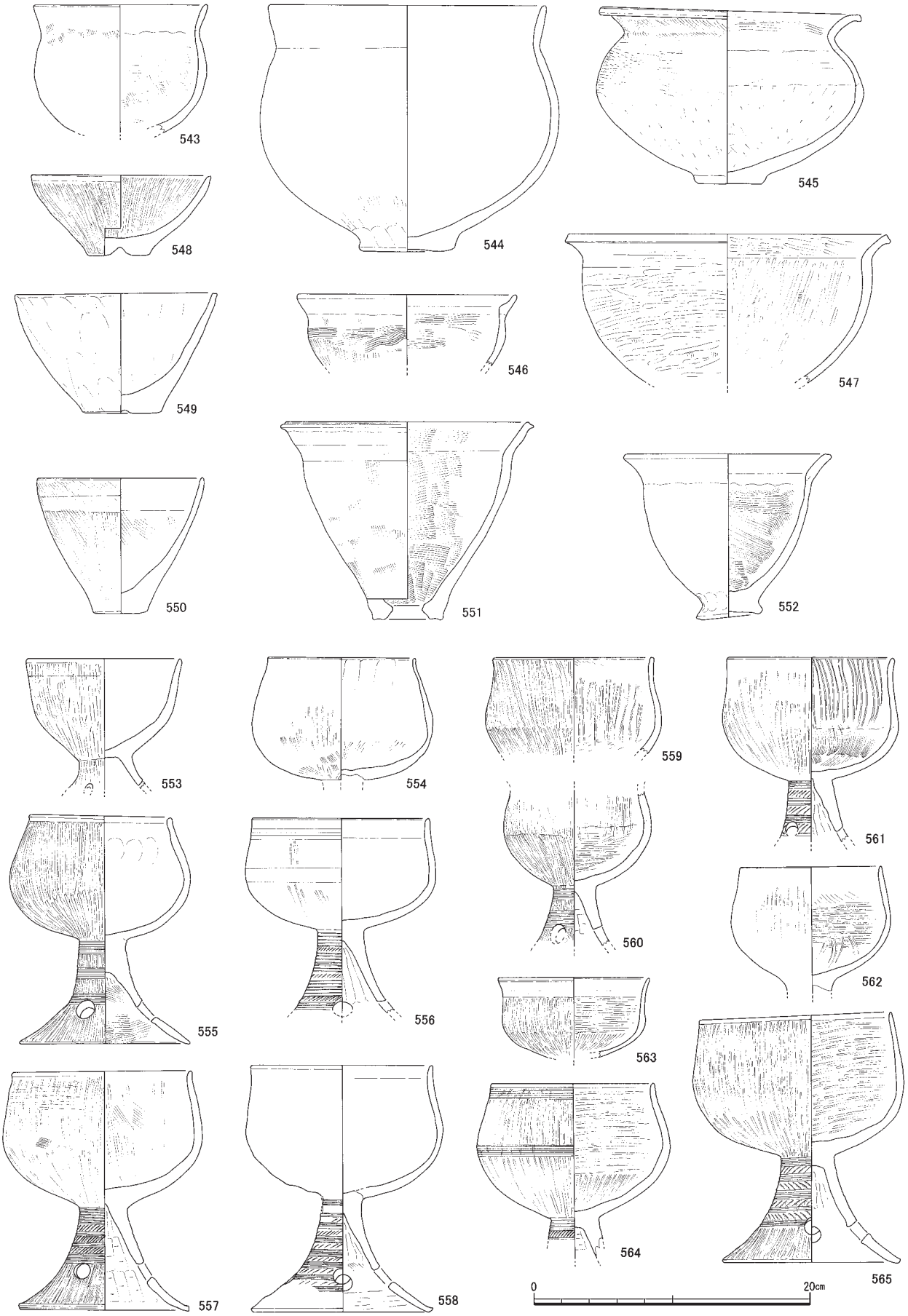
第103図　SD301下層出土遺物実測図（9）（1:4）



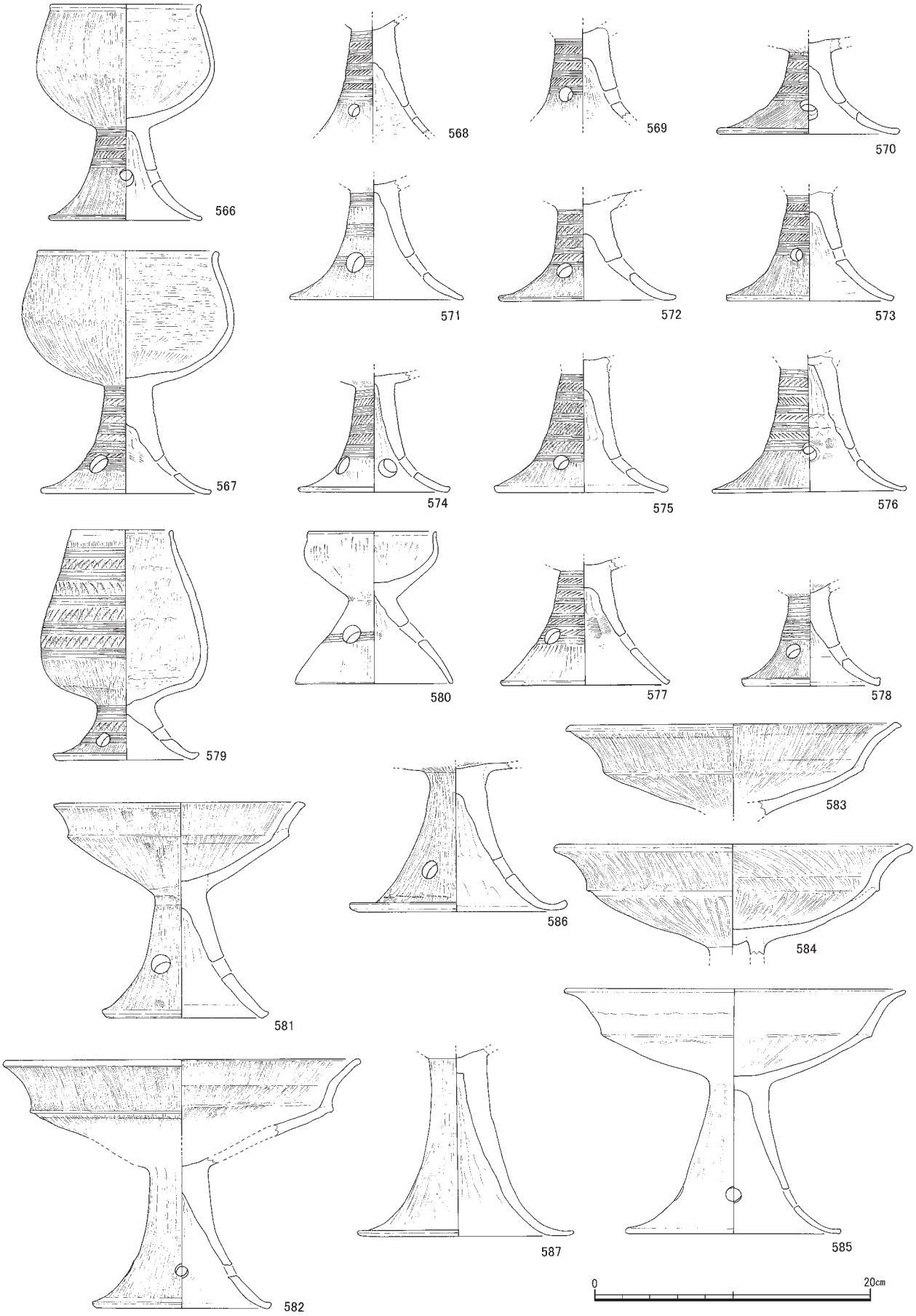
第104図　SD301下層出土遺物実測図（10）（1:4）



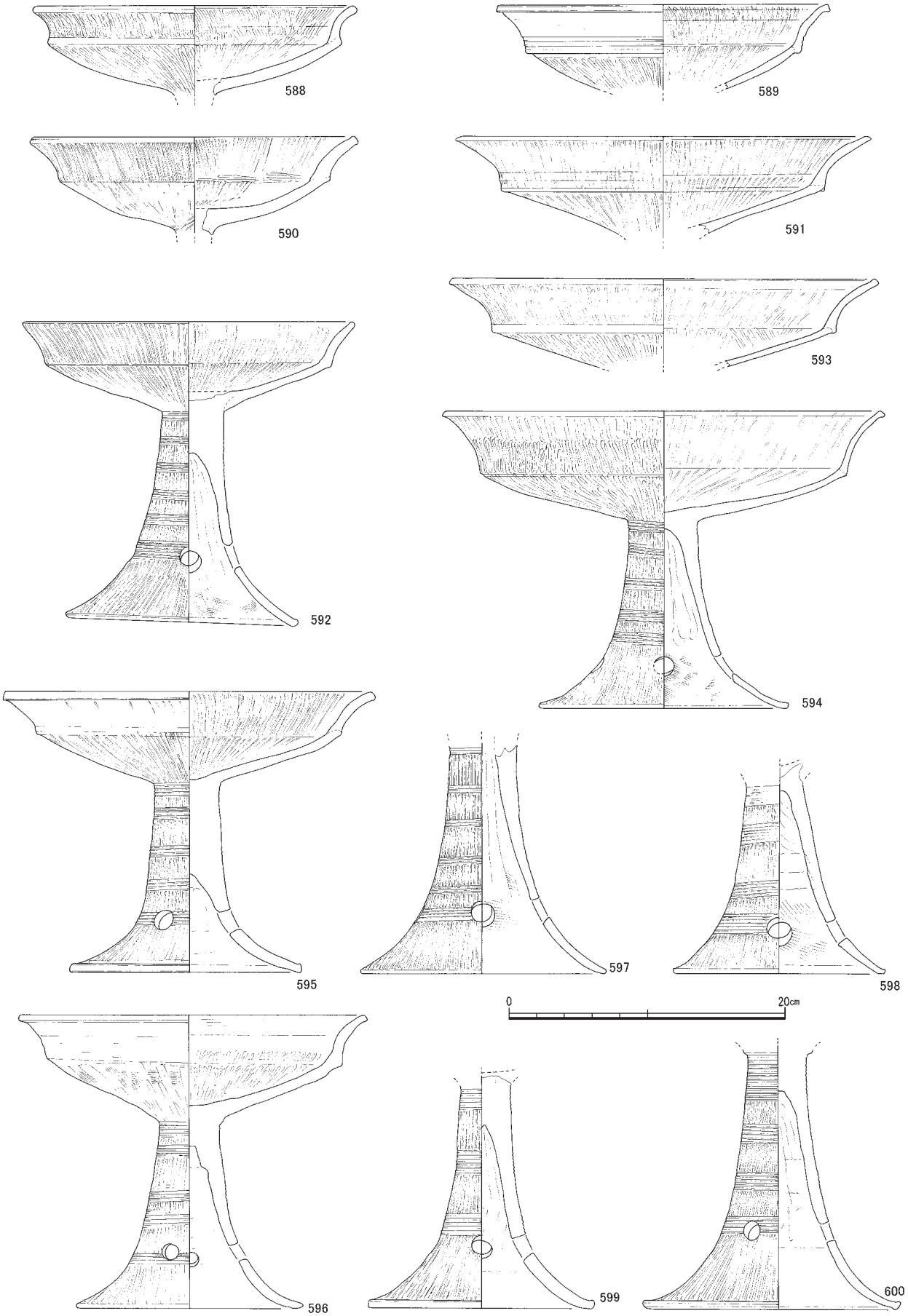
第105図　SD301下層出土遺物実測図（11）（1:4）



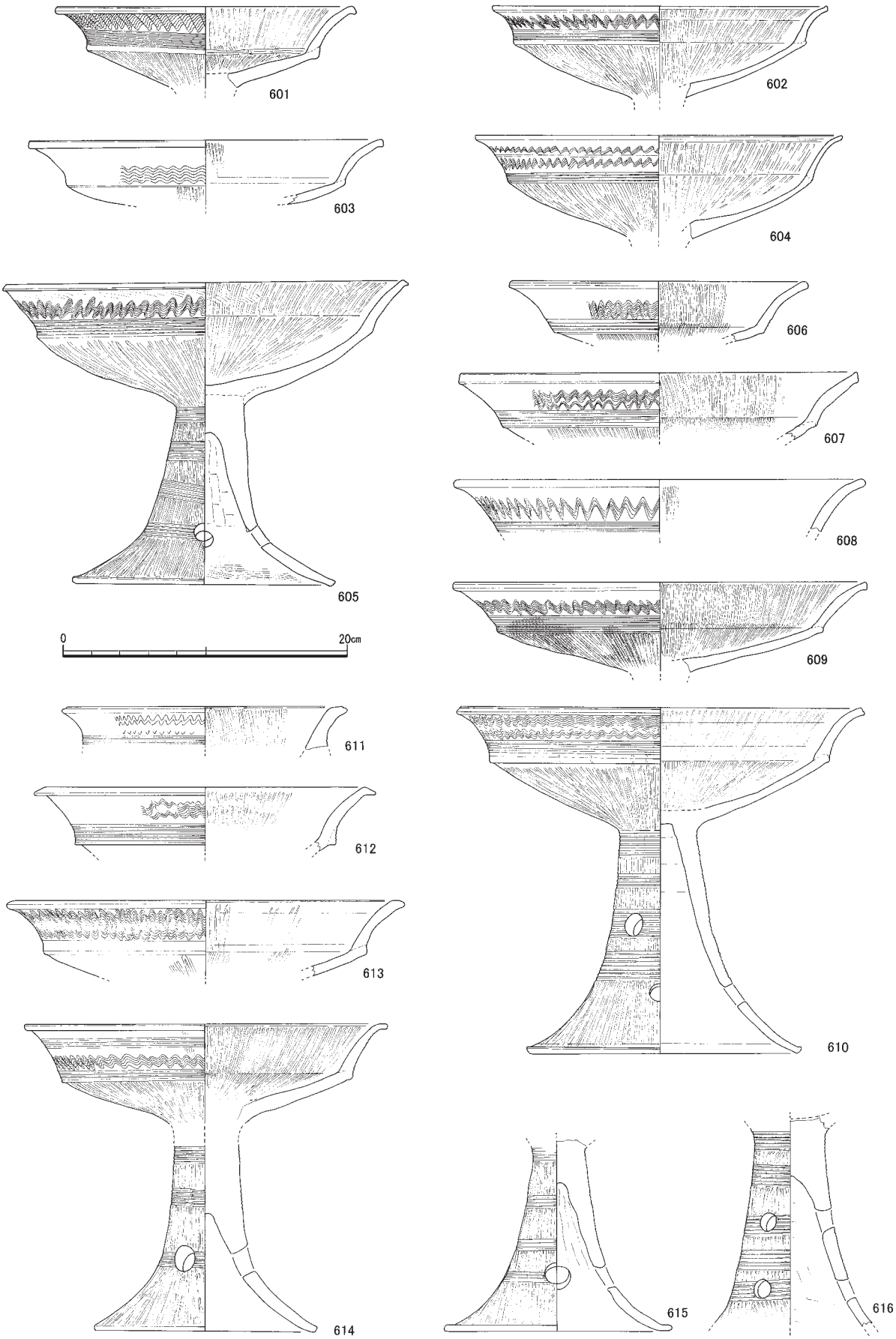
第106図　SD301下層出土遺物実測図（12）（1:4）



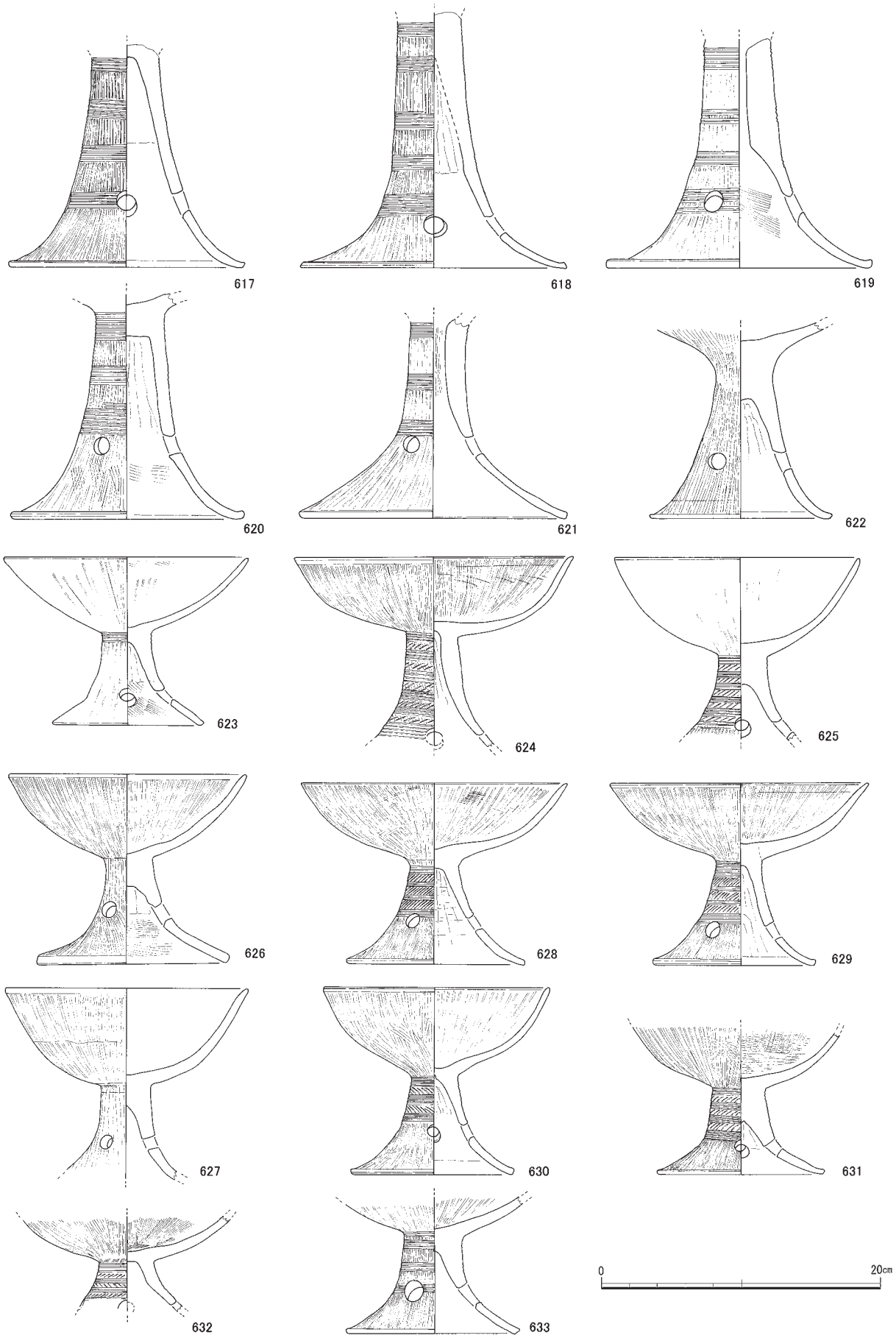
第107図　SD301下層出土遺物実測図（13）（1:4）



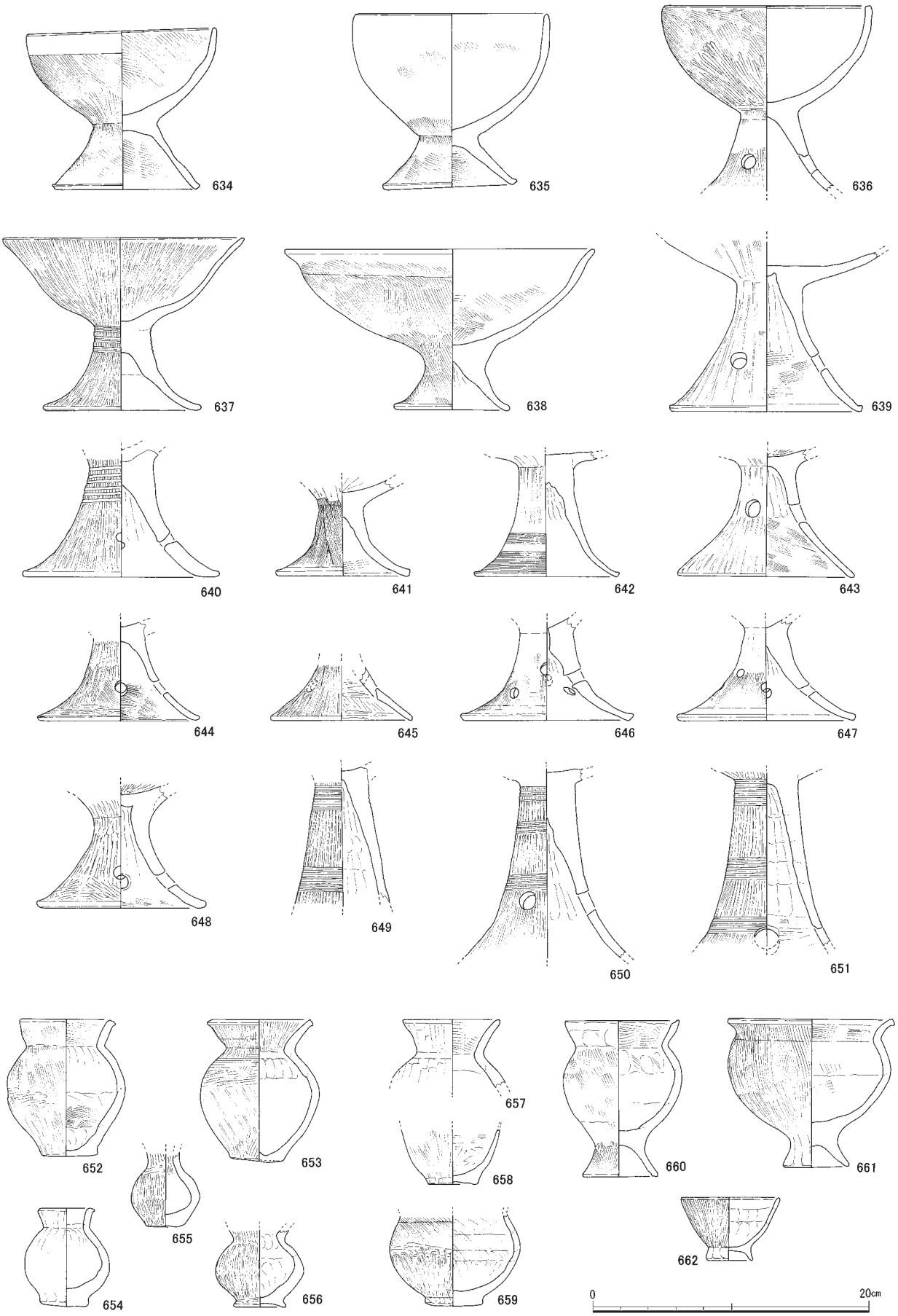
第108図　SD301下層出土遺物実測図（14）（1:4）



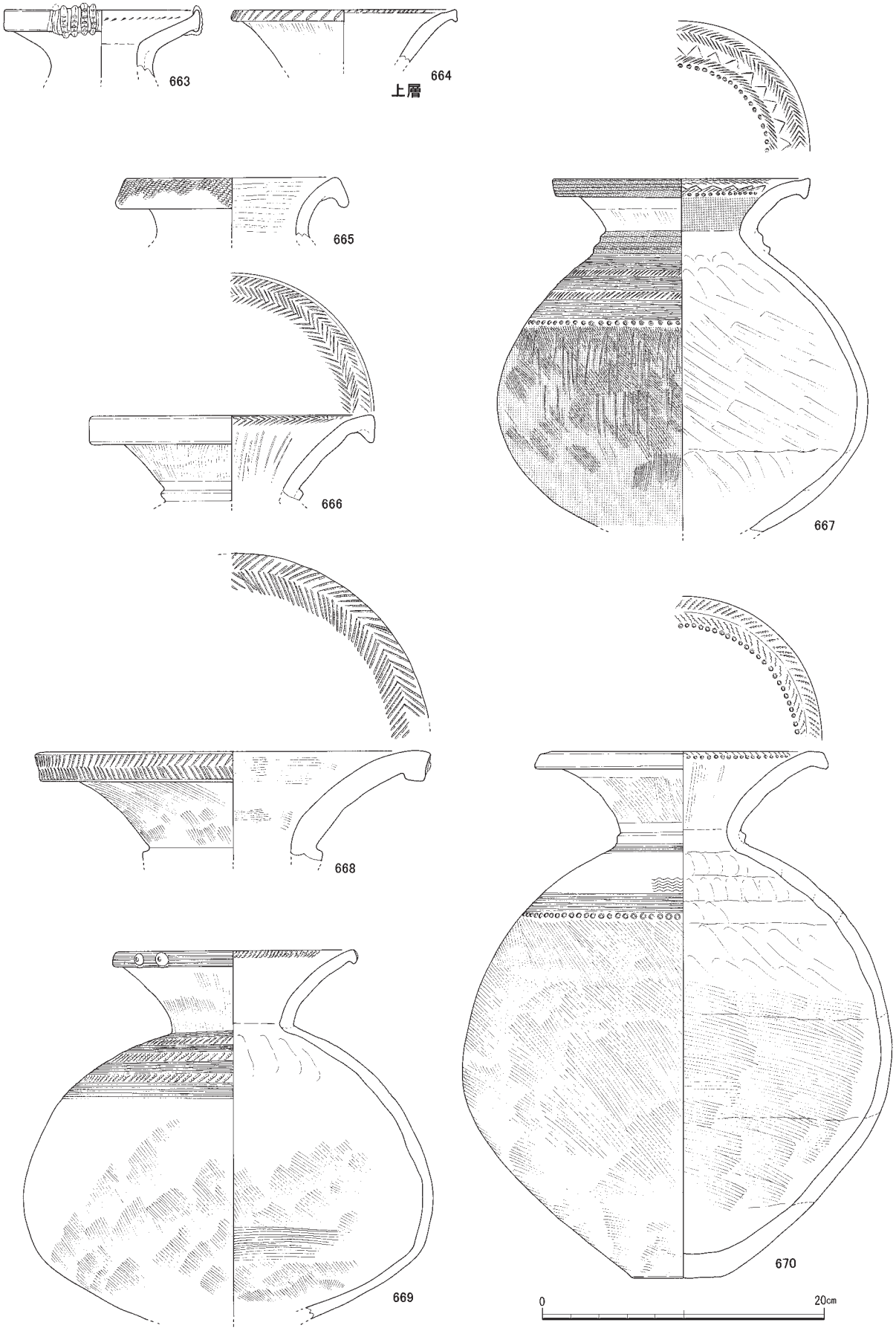
第109図　SD301下層出土遺物実測図（15）（1:4）　※アミがけは赤色顔料



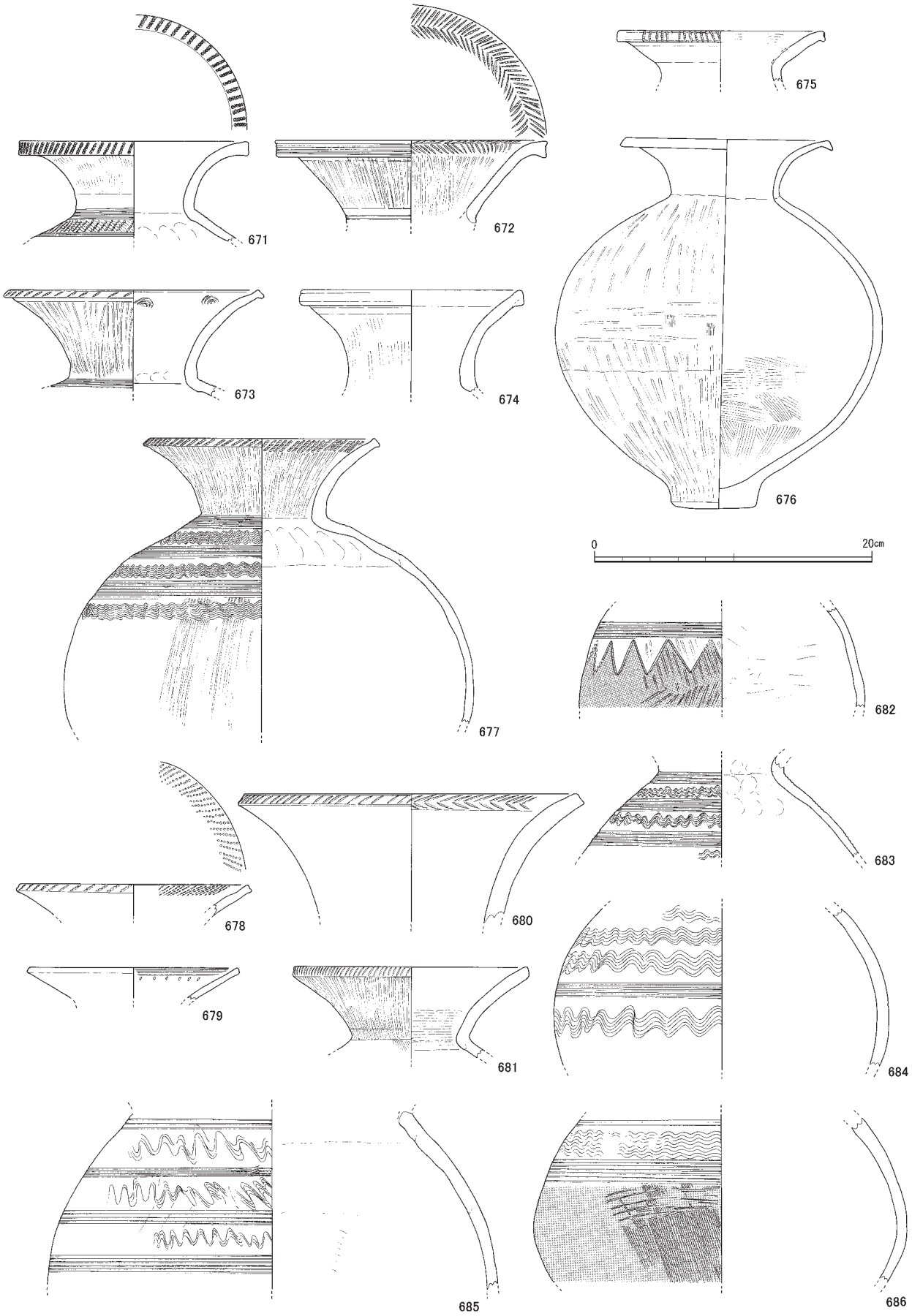
第110図　SD301下層出土遺物実測図（16）（1:4）



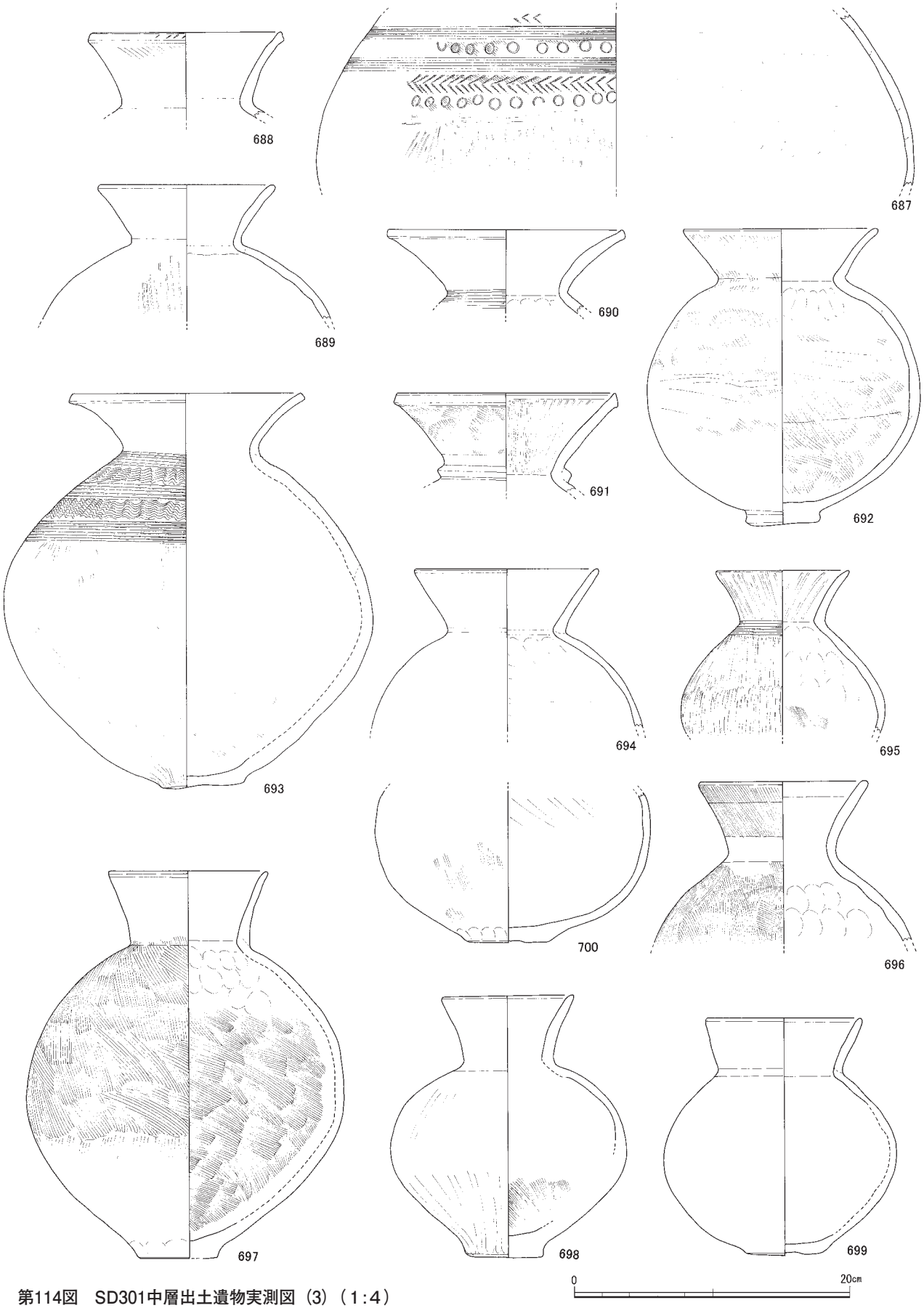
第111図　SD301下層出土遺物実測図（17）（1:4）



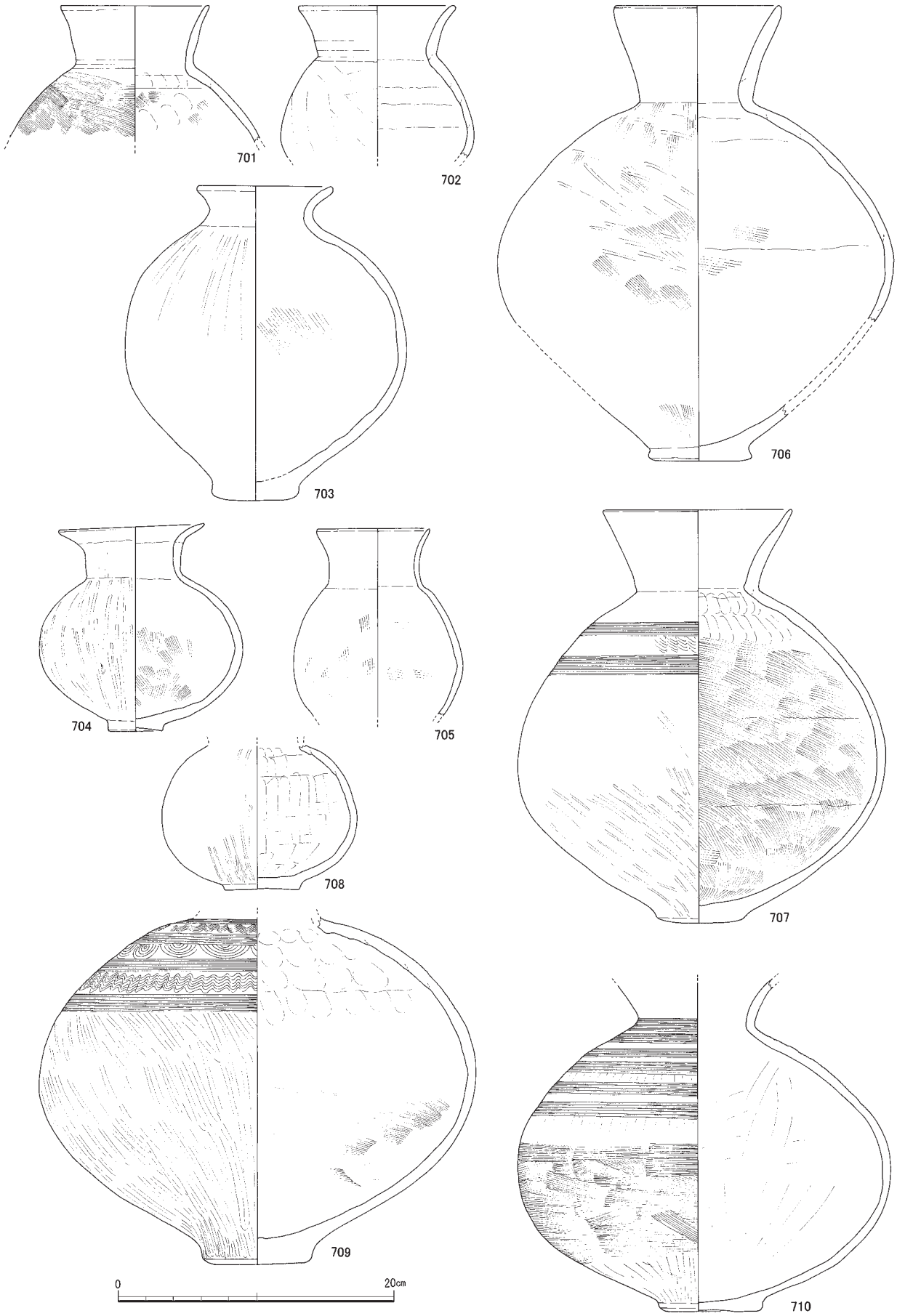
第112図　SD301中層（1）・上層（1）出土遺物実測図（1:4）　※アミがけは赤色顔料



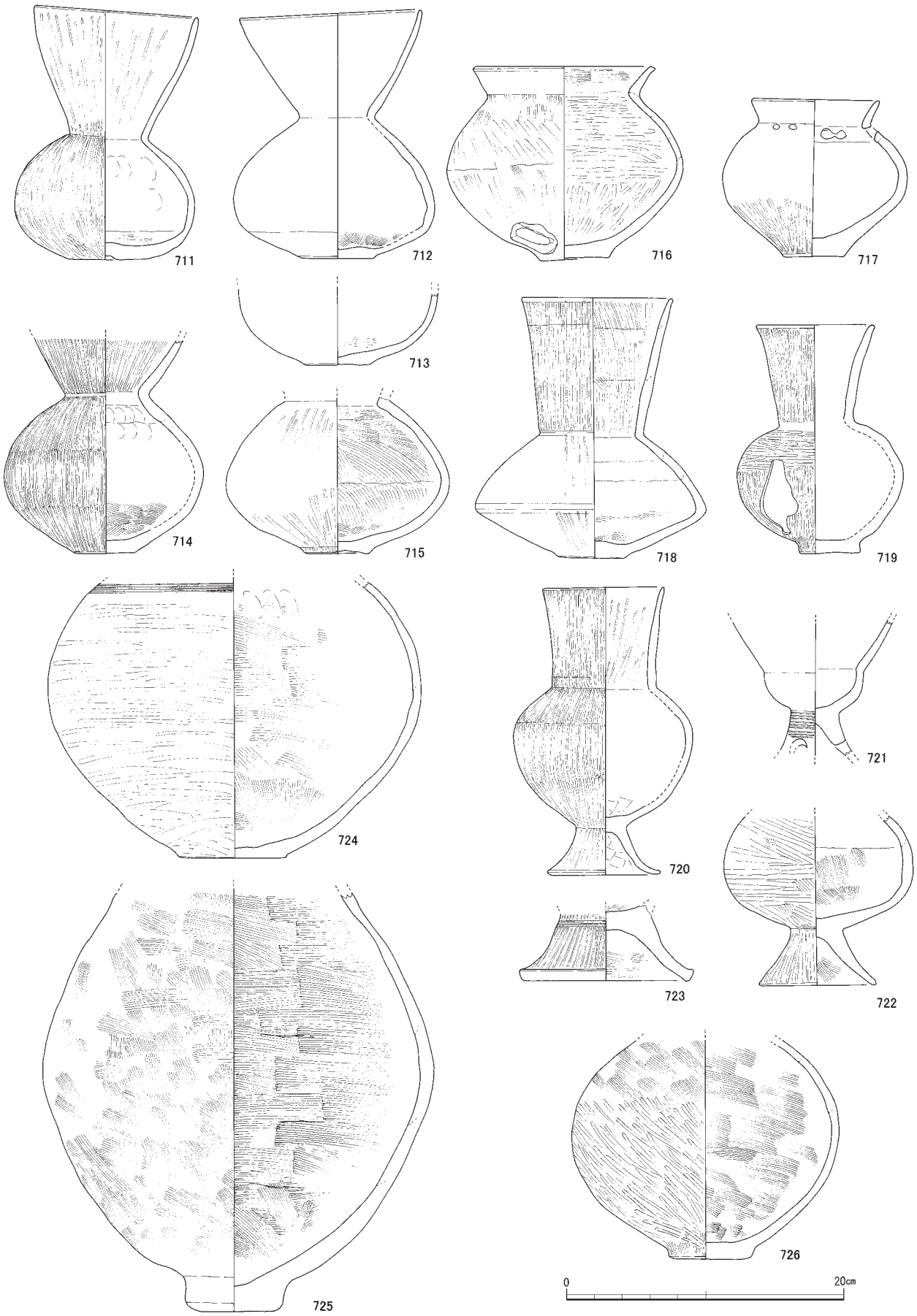
第113図　SD301中層出土遺物実測図（2）（1:4）　※アミがけは赤色顔料



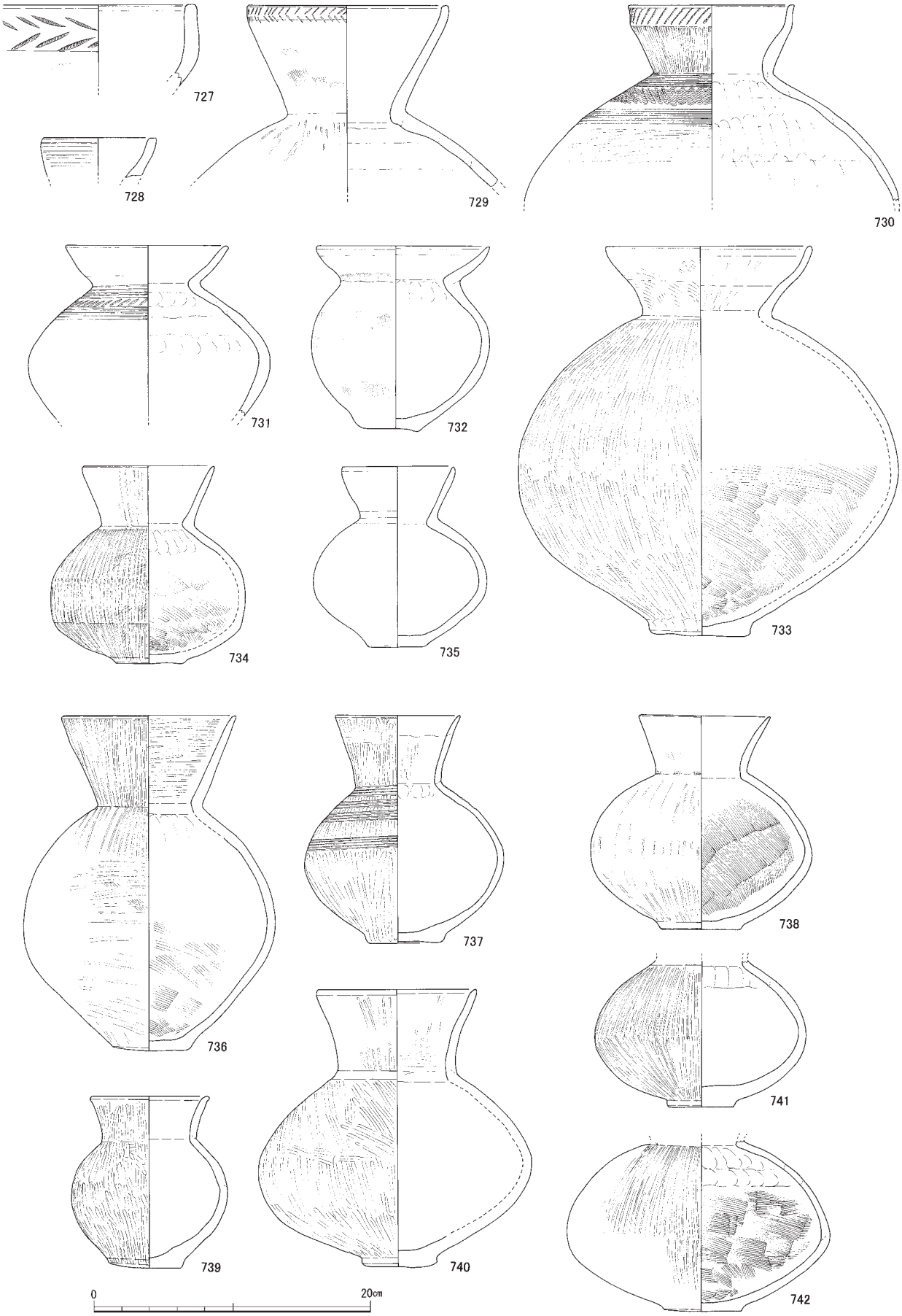
第114図　SD301中層出土遺物実測図（3）（1:4）



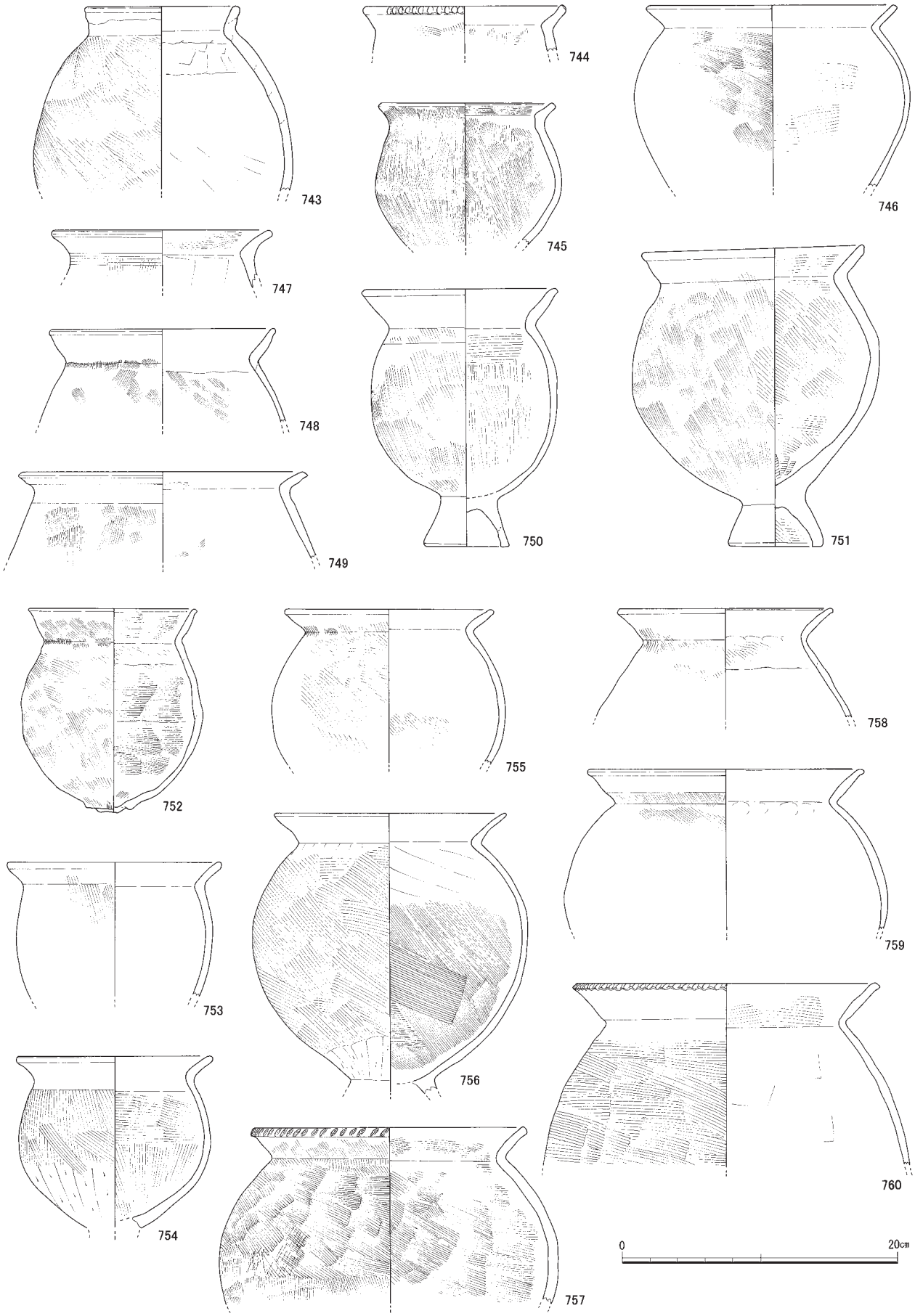
第115図　SD301中層出土遺物実測図（4）（1:4）



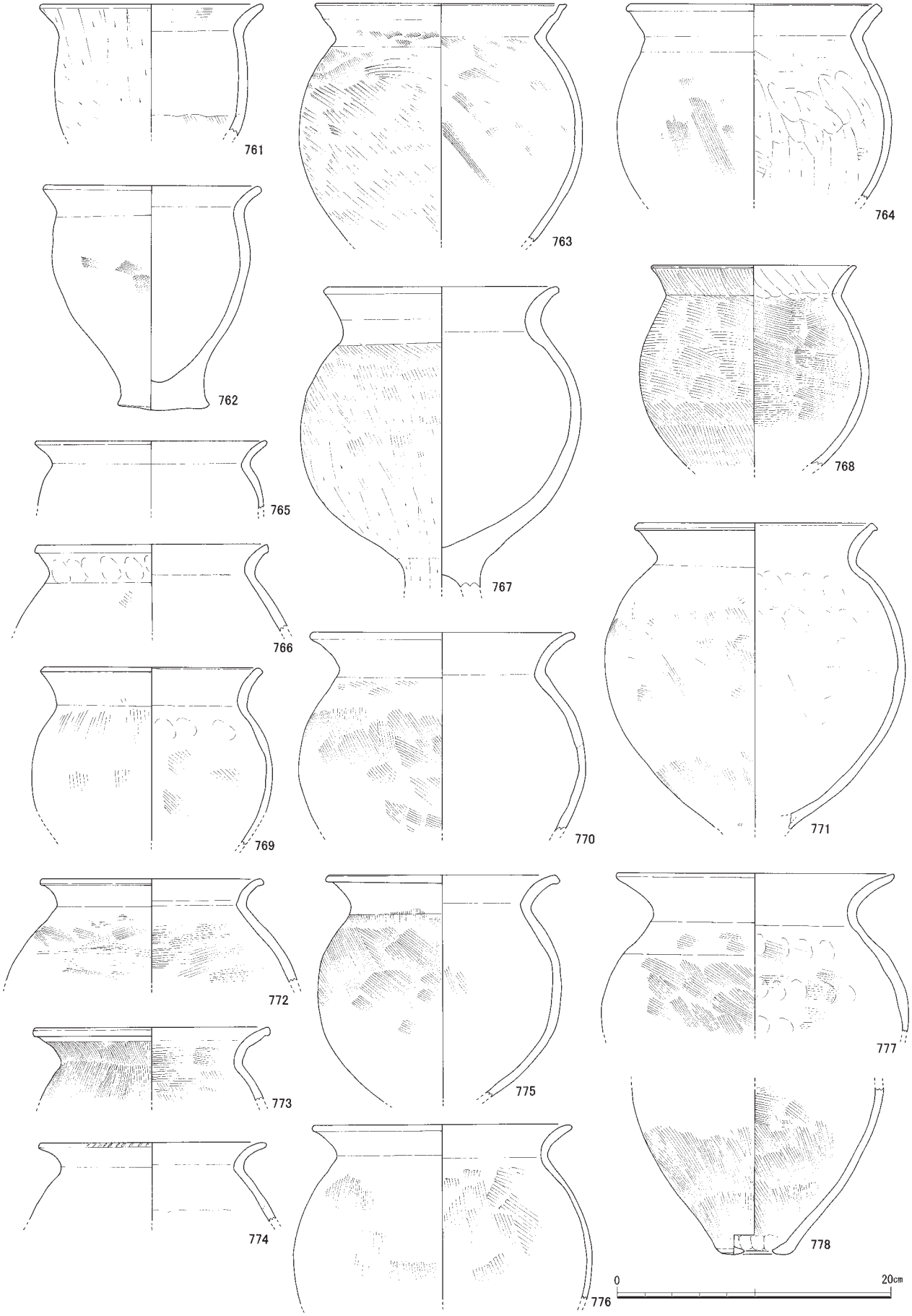
第116図　SD301中層出土遺物実測図（5）（1:4）



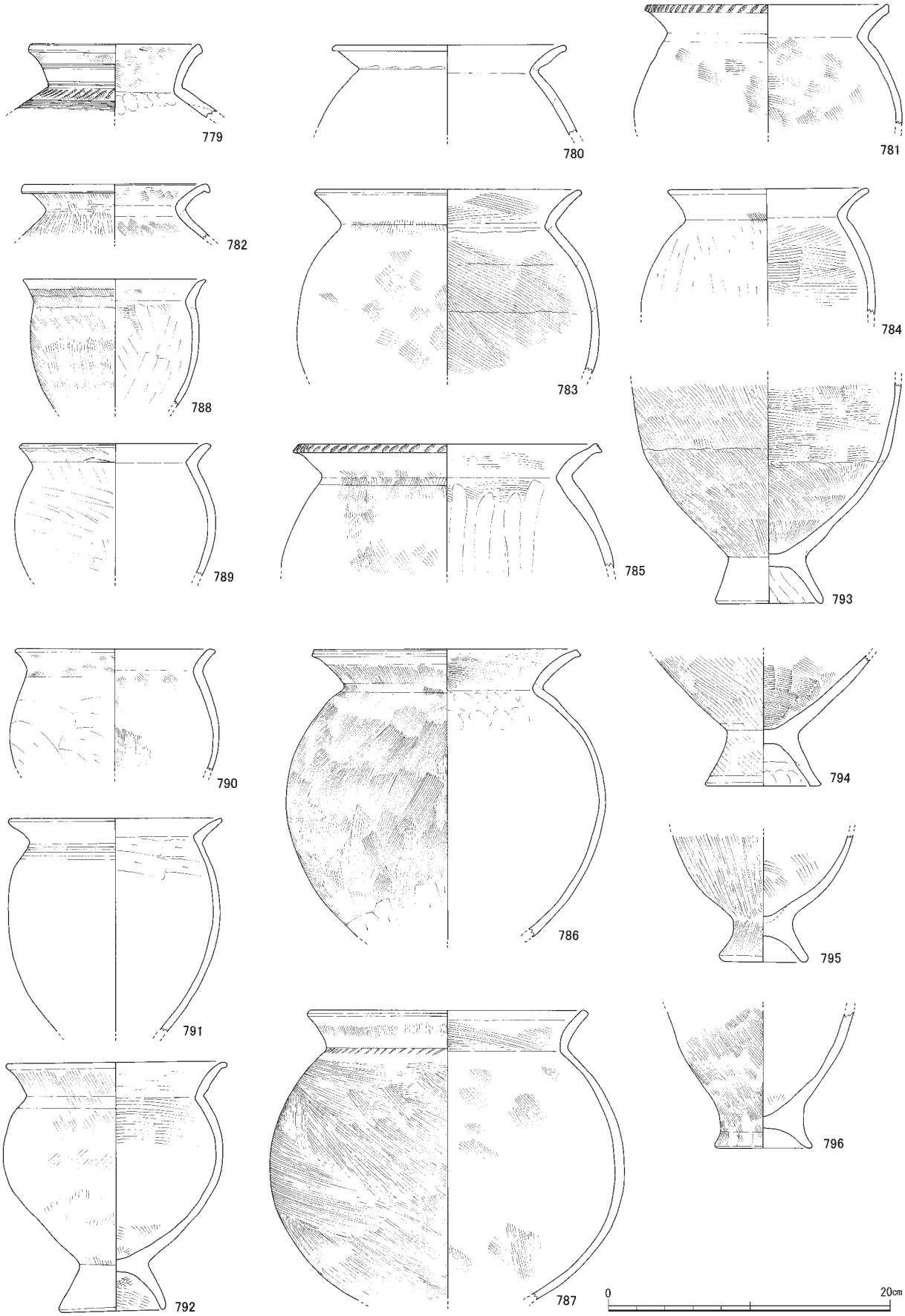
第117図　SD301中層出土遺物実測図（6）（1:4）



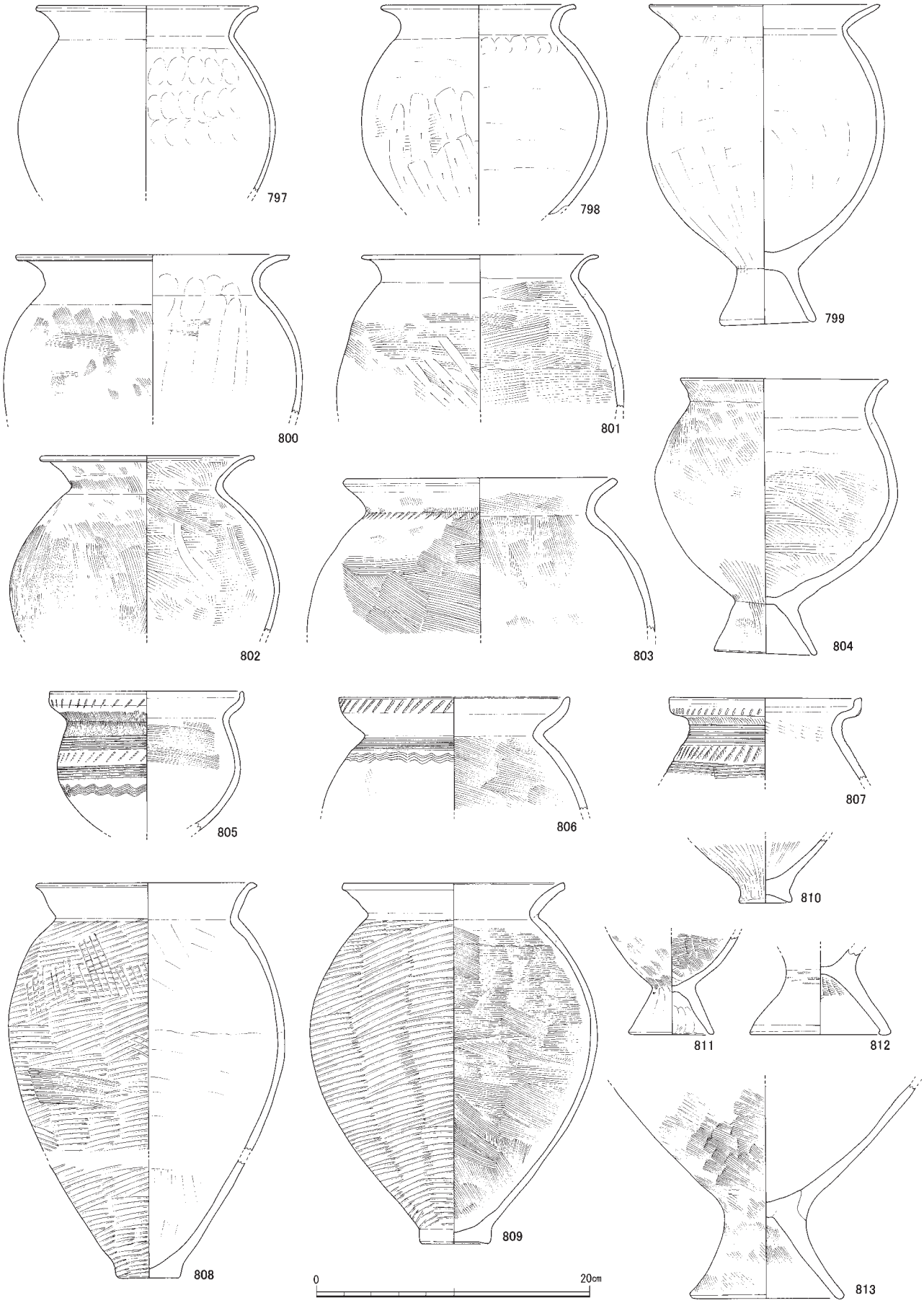
第118図　SD301中層出土遺物実測図（7）（1:4）



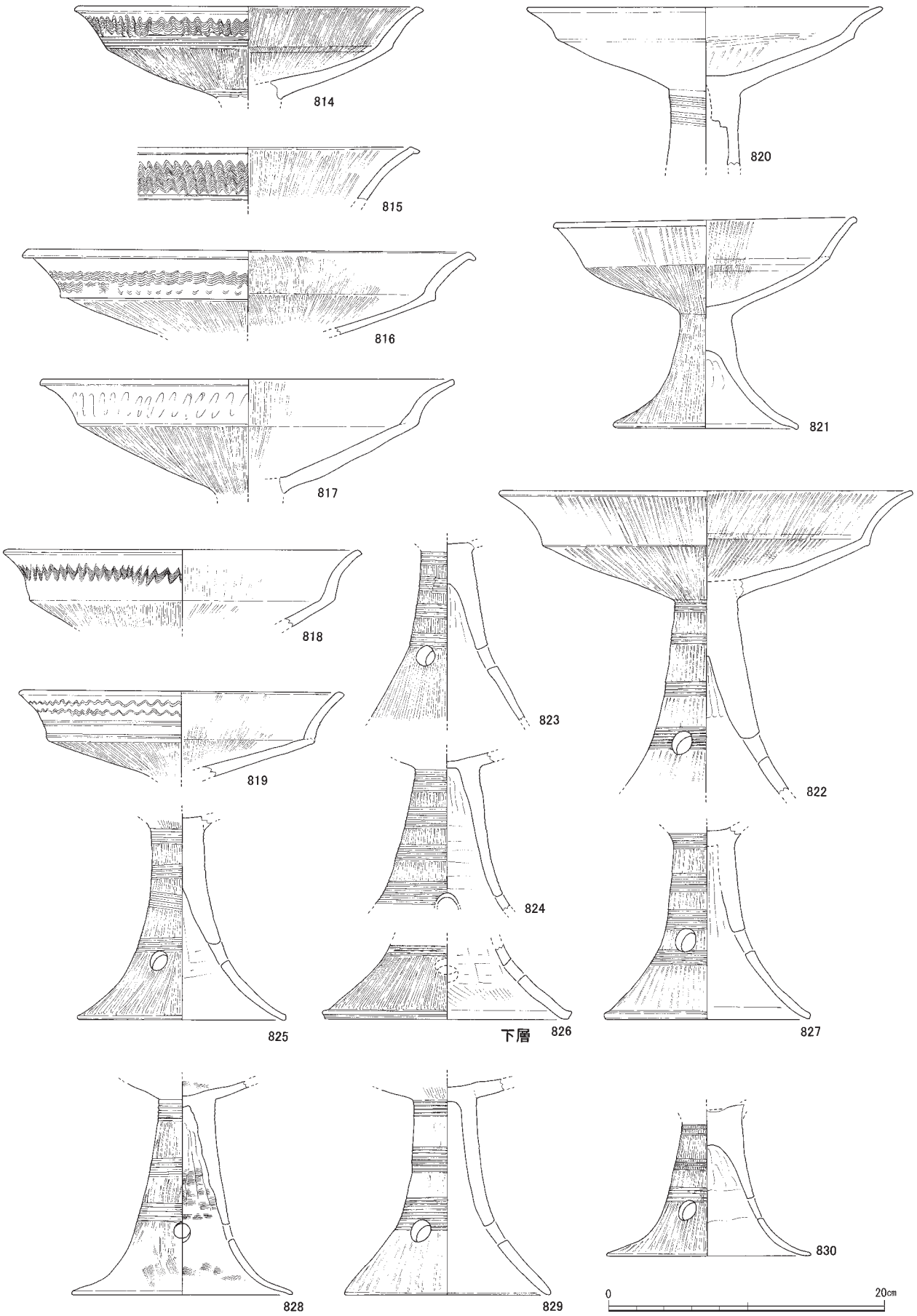
第119図　SD301中層出土遺物実測図（8）（1:4）



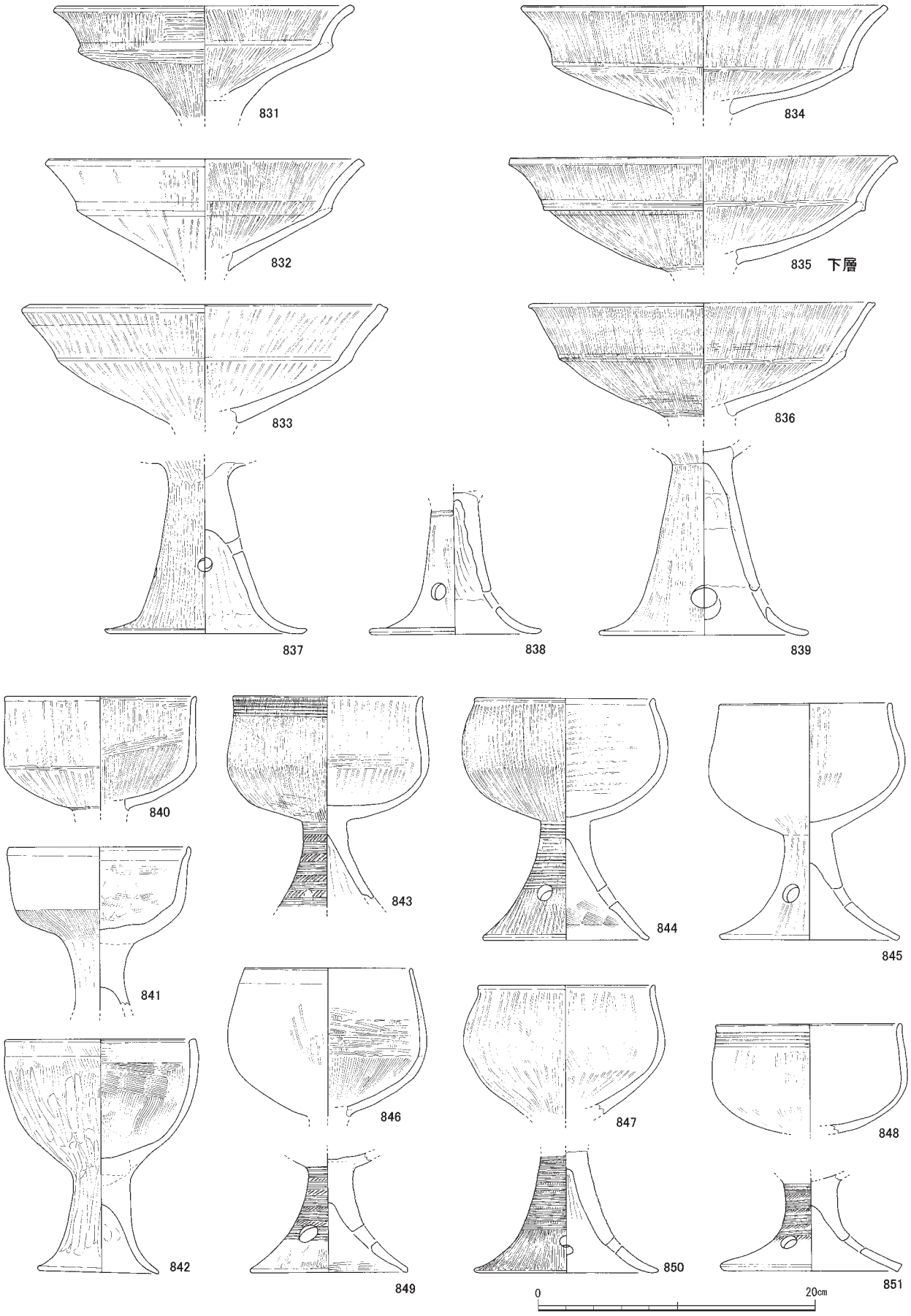
第120図　SD301中層出土遺物実測図（9）（1:4）



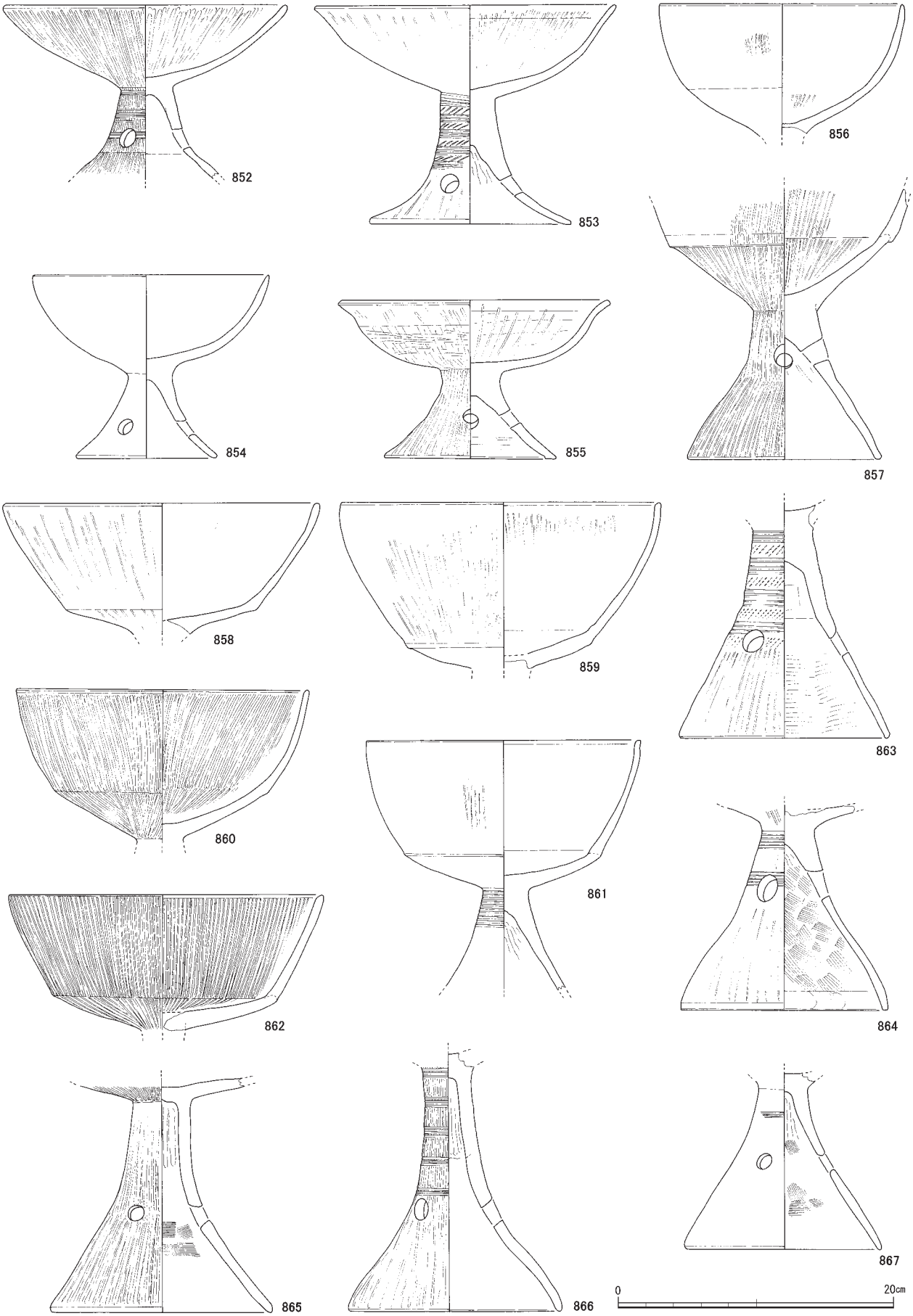
第121図　SD301中層出土遺物実測図（10）（1:4）



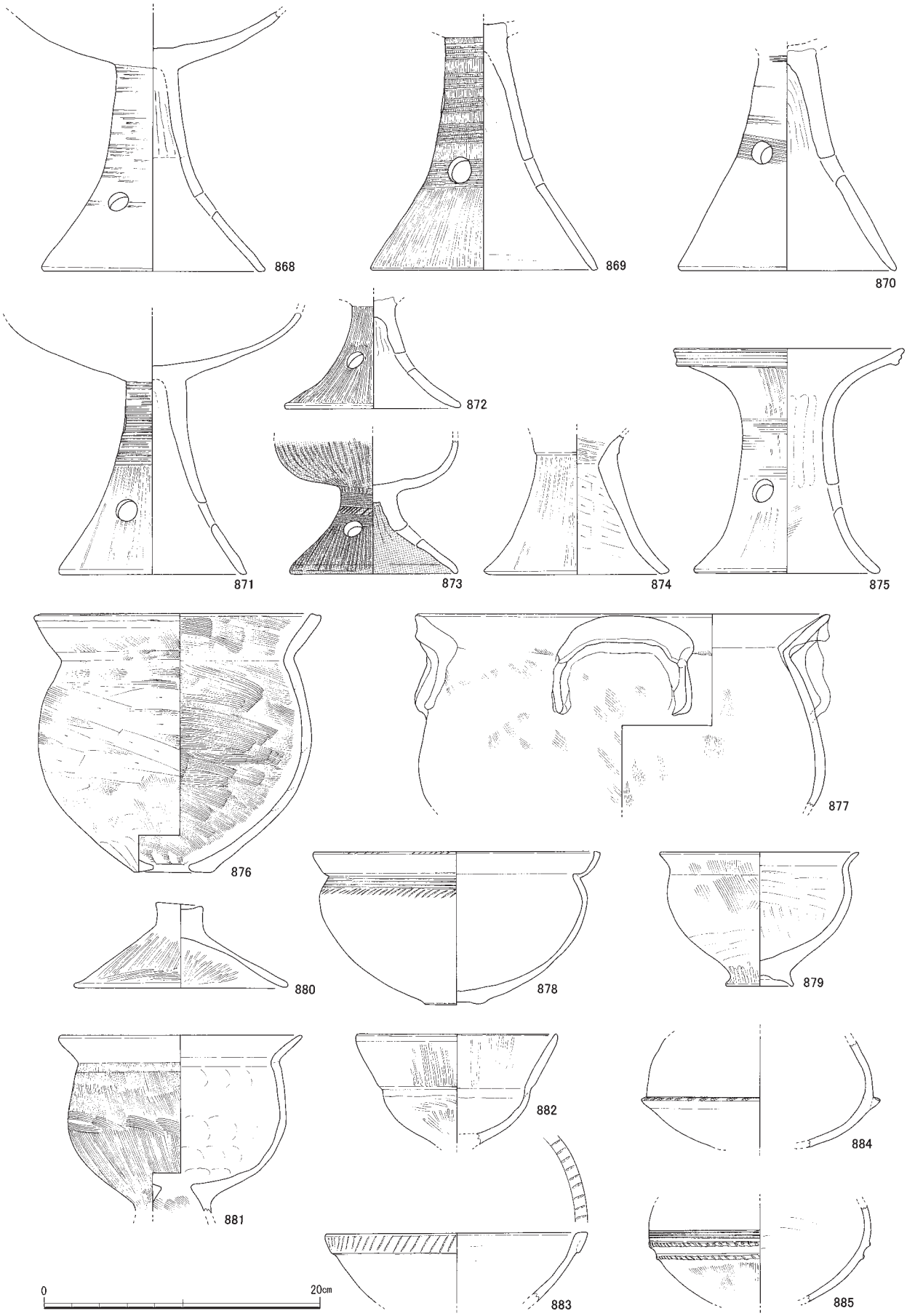
第122図　SD301中層（11）・下層（18）出土遺物実測図（1:4）



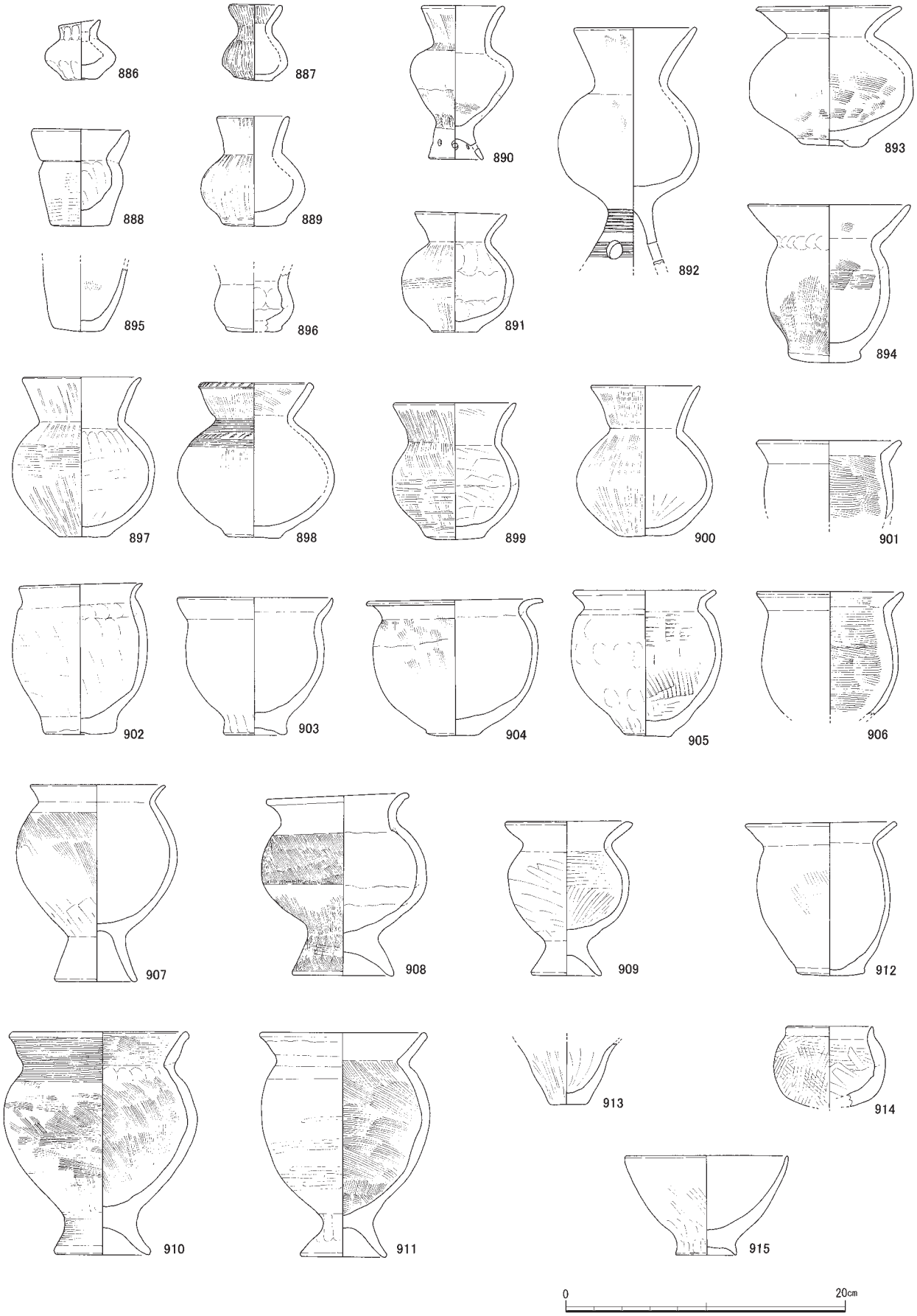
第123図　SD301中層（12）・下層（19）出土遺物実測図（1:4）



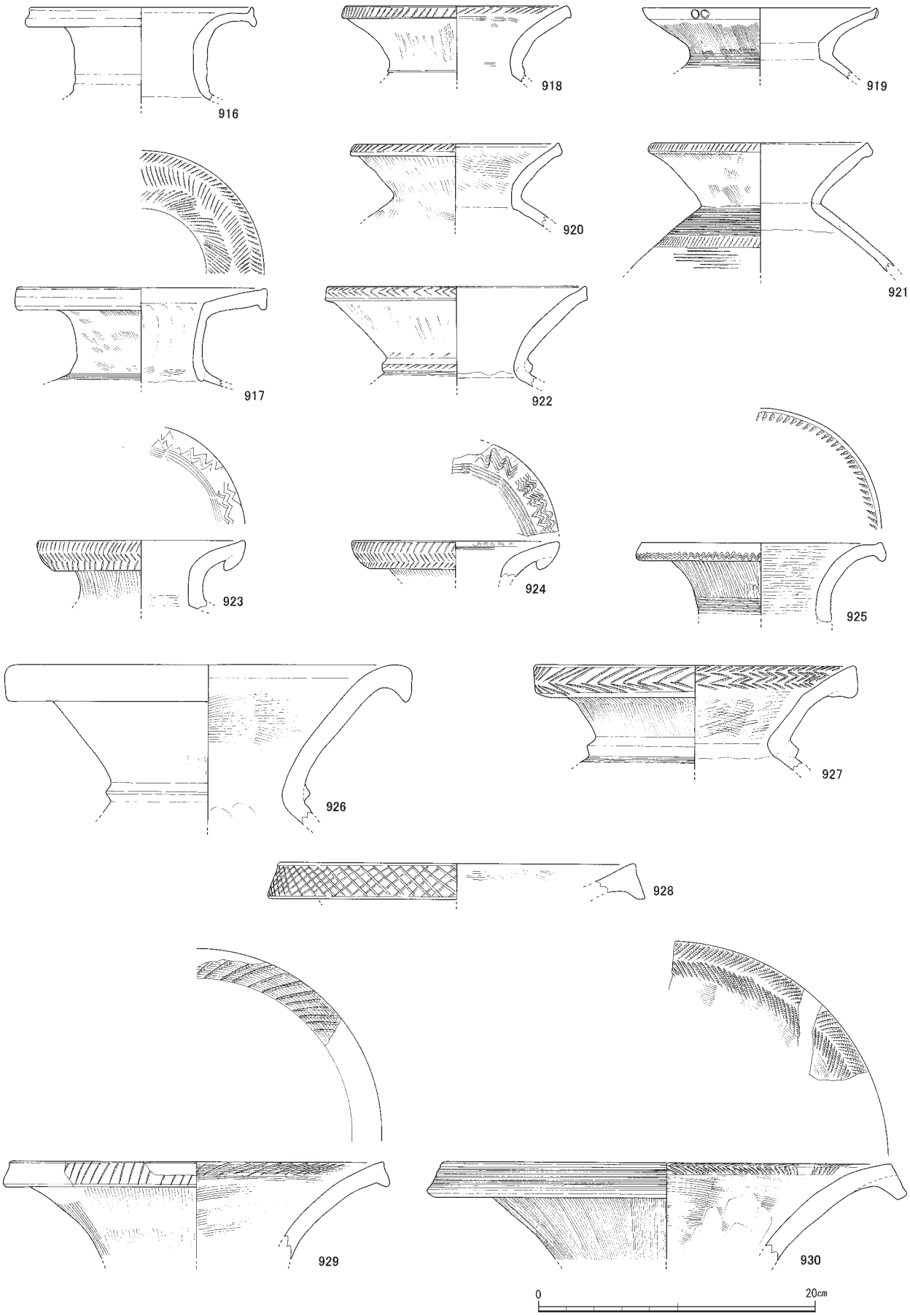
第124図　SD301中層出土遺物実測図（13）（1:4）



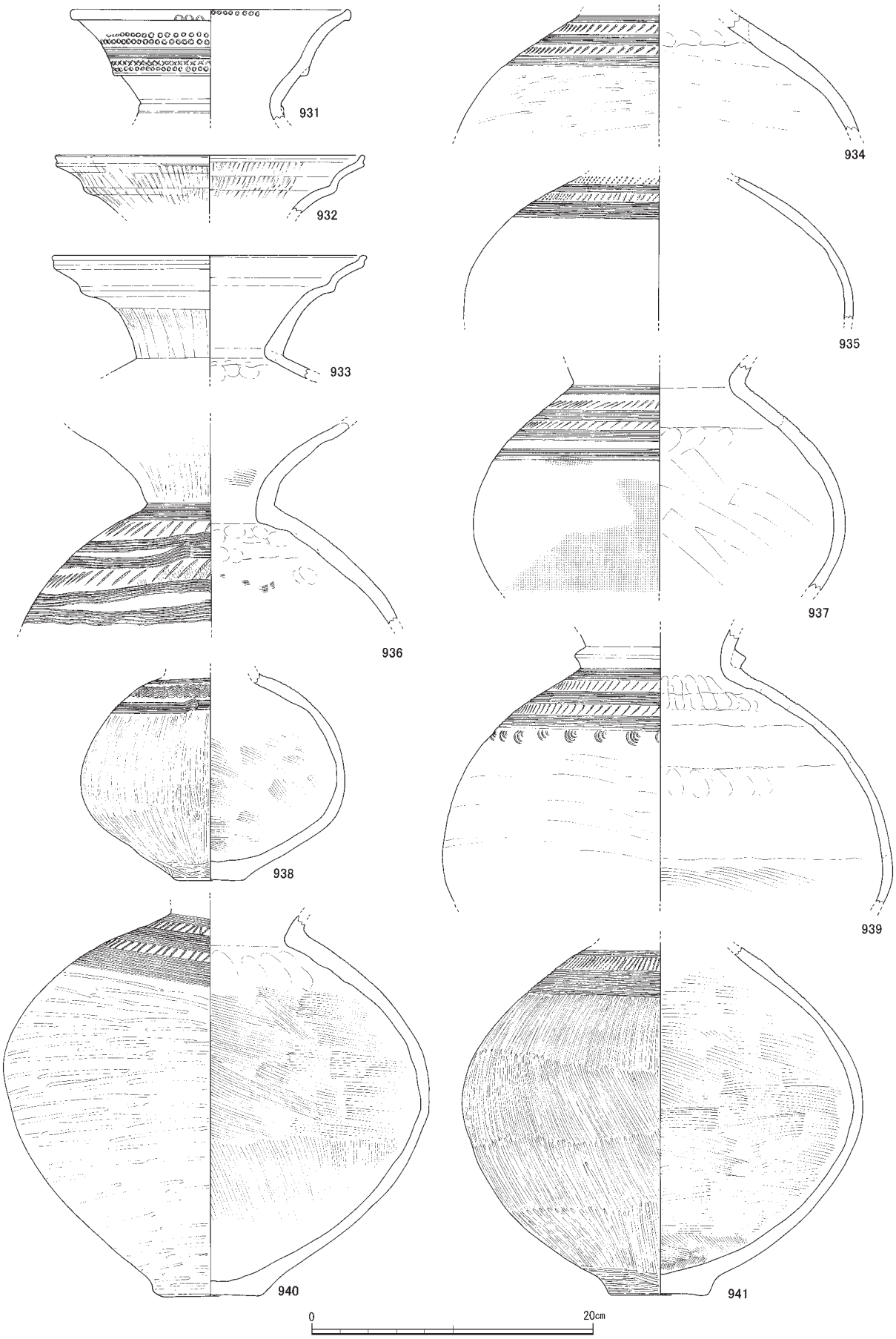
第125図　SD301中層出土遺物実測図（14）（1:4）　※アミがけは赤色顔料



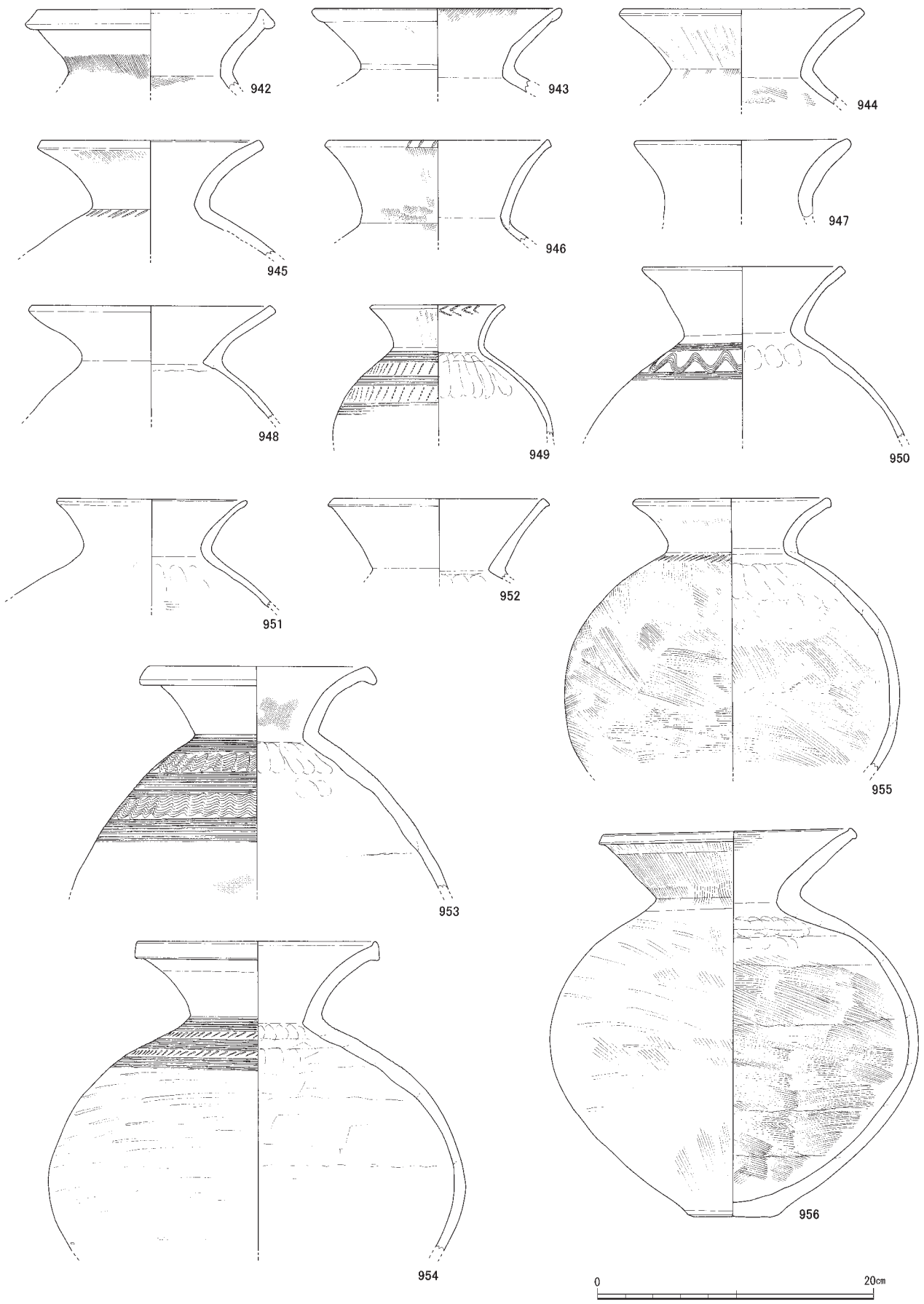
第126図　SD301中層出土遺物実測図（15）（1:4）



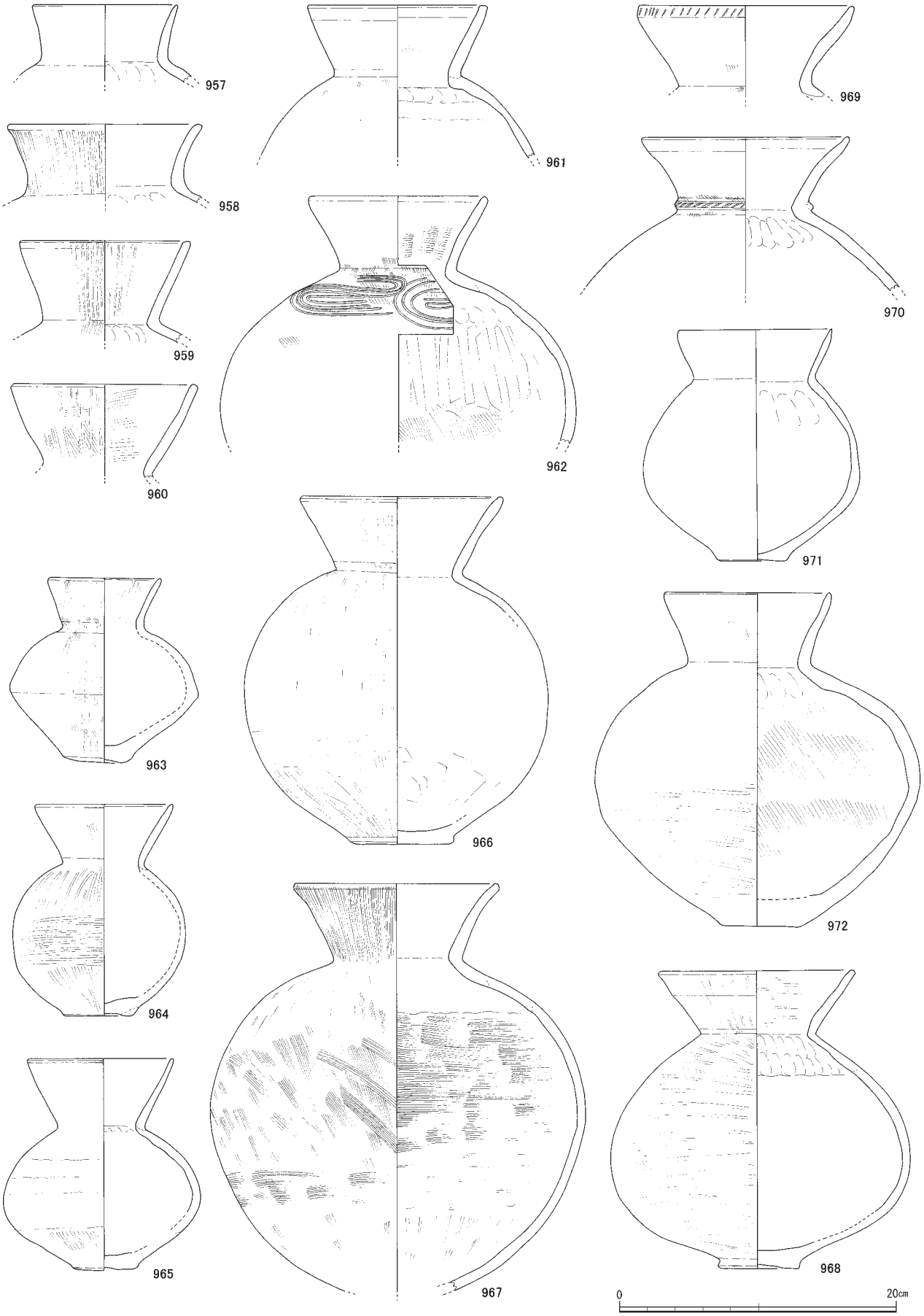
第127図　SD301上層出土遺物実測図（2）（1:4）



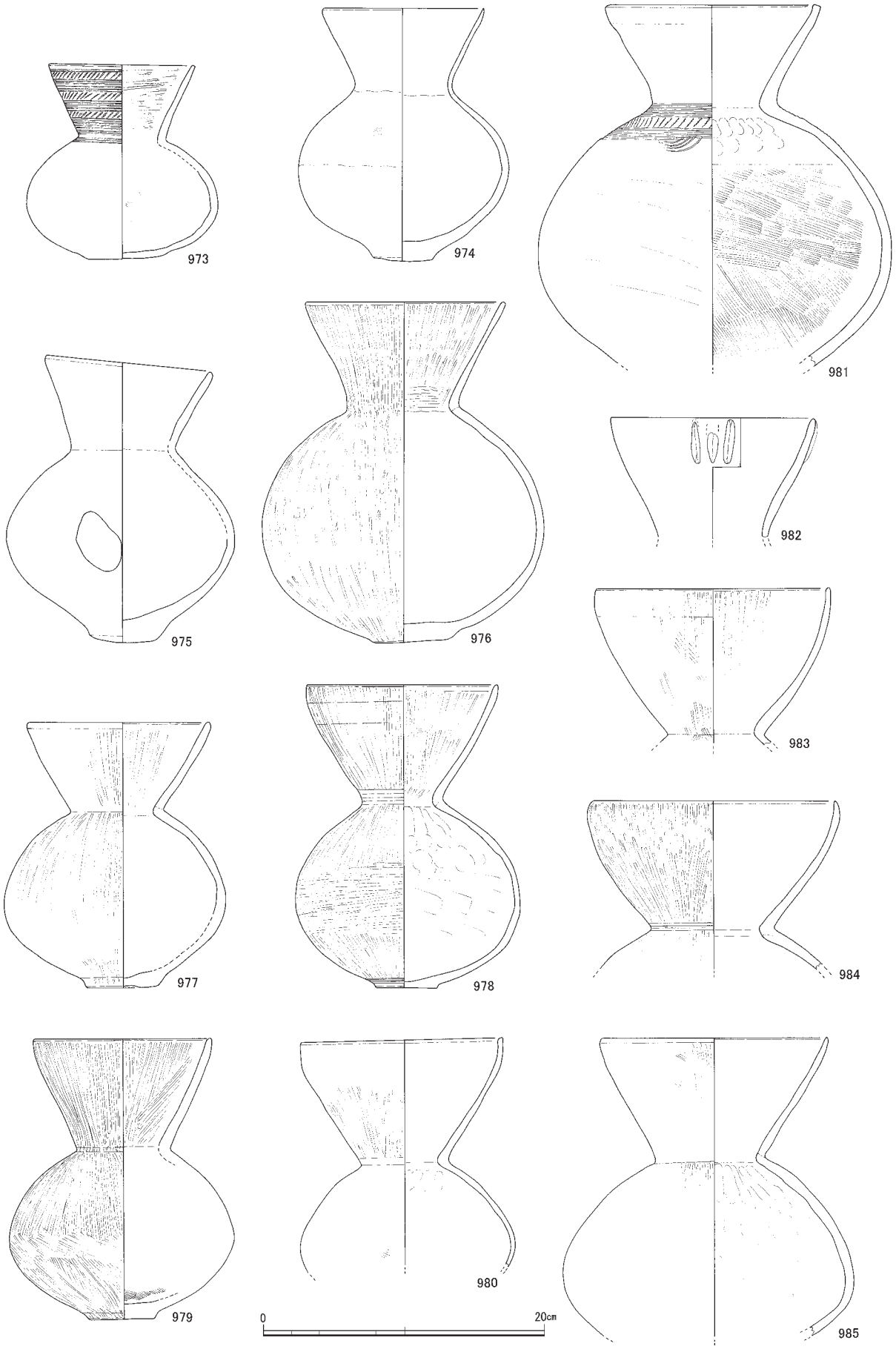
第128図　SD301上層出土遺物実測図（3）（1:4）　※アミがけは赤色顔料



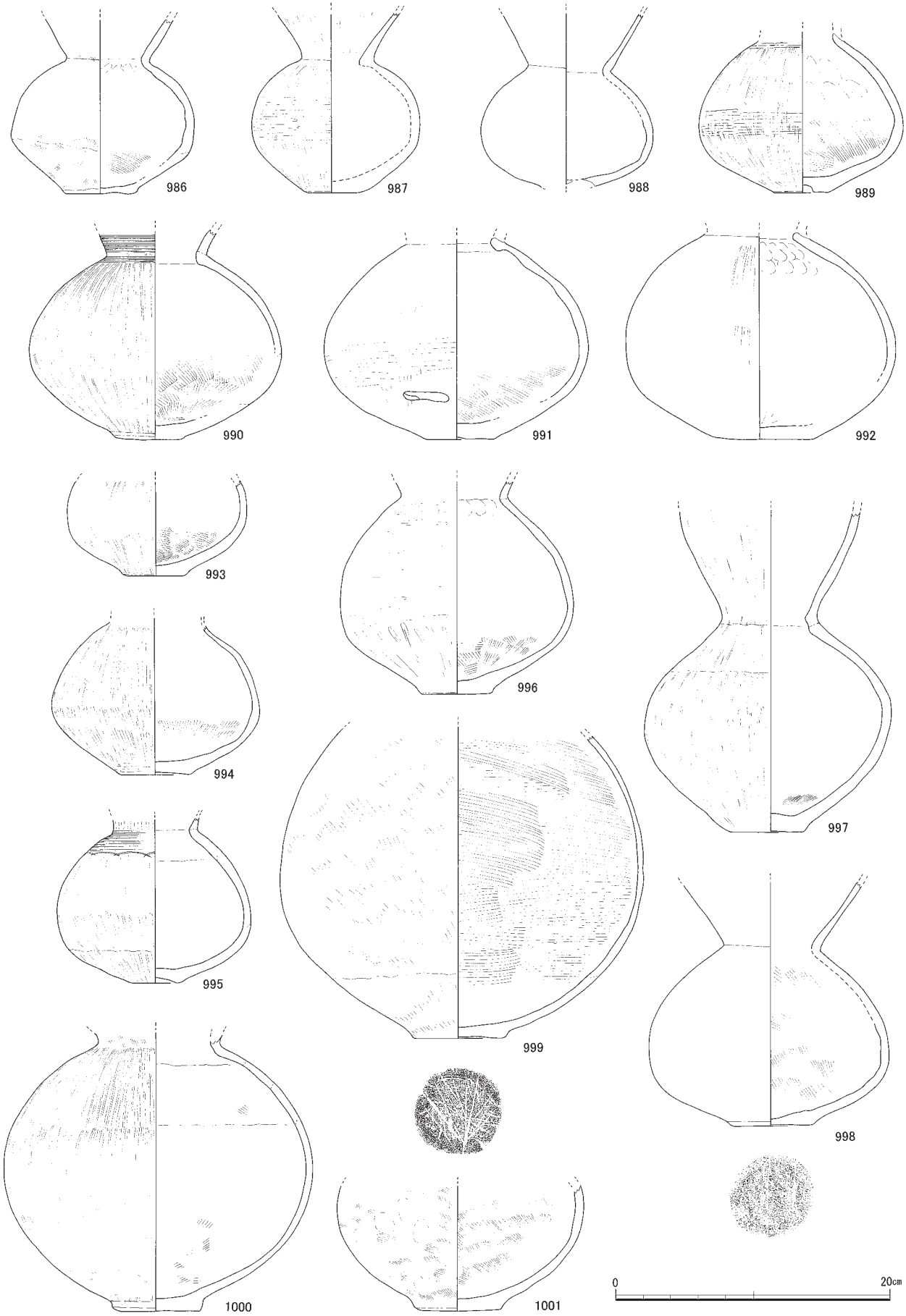
第129図　SD301上層出土遺物実測図（4）（1:4）　※アミがけは赤色顔料



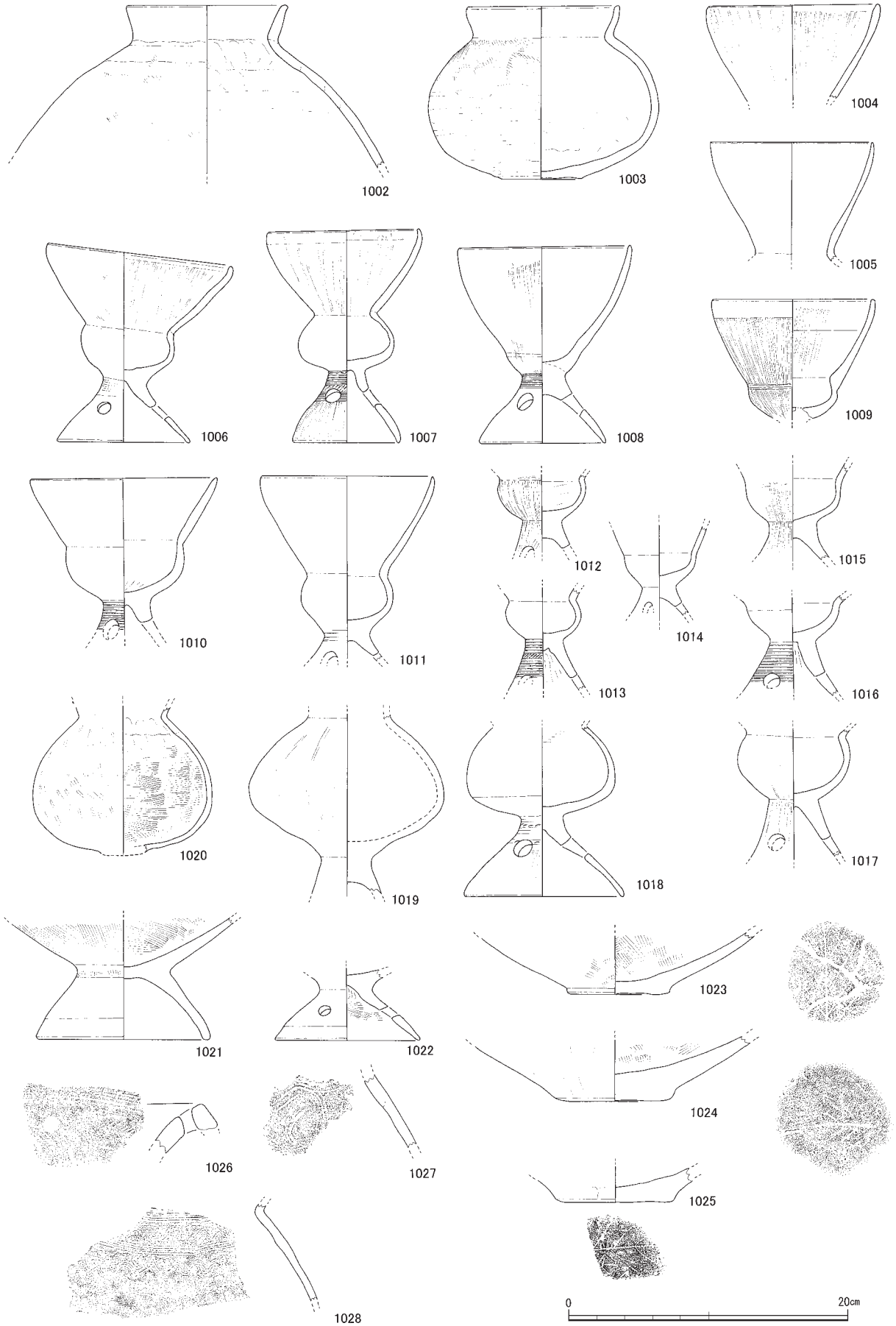
第130図　SD301上層出土遺物実測図（5）（1:4）



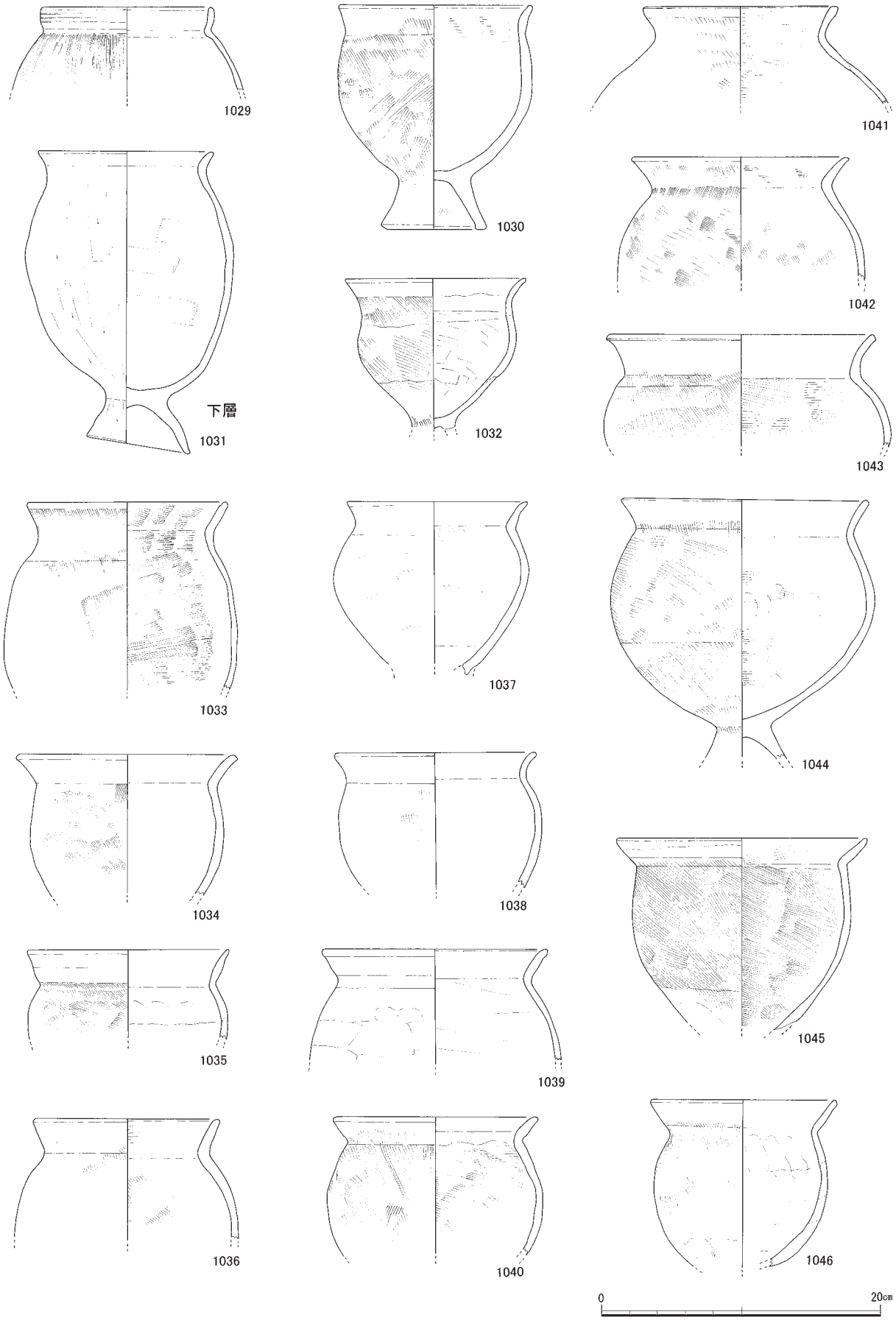
第131図　SD301上層出土遺物実測図（6）（1:4）



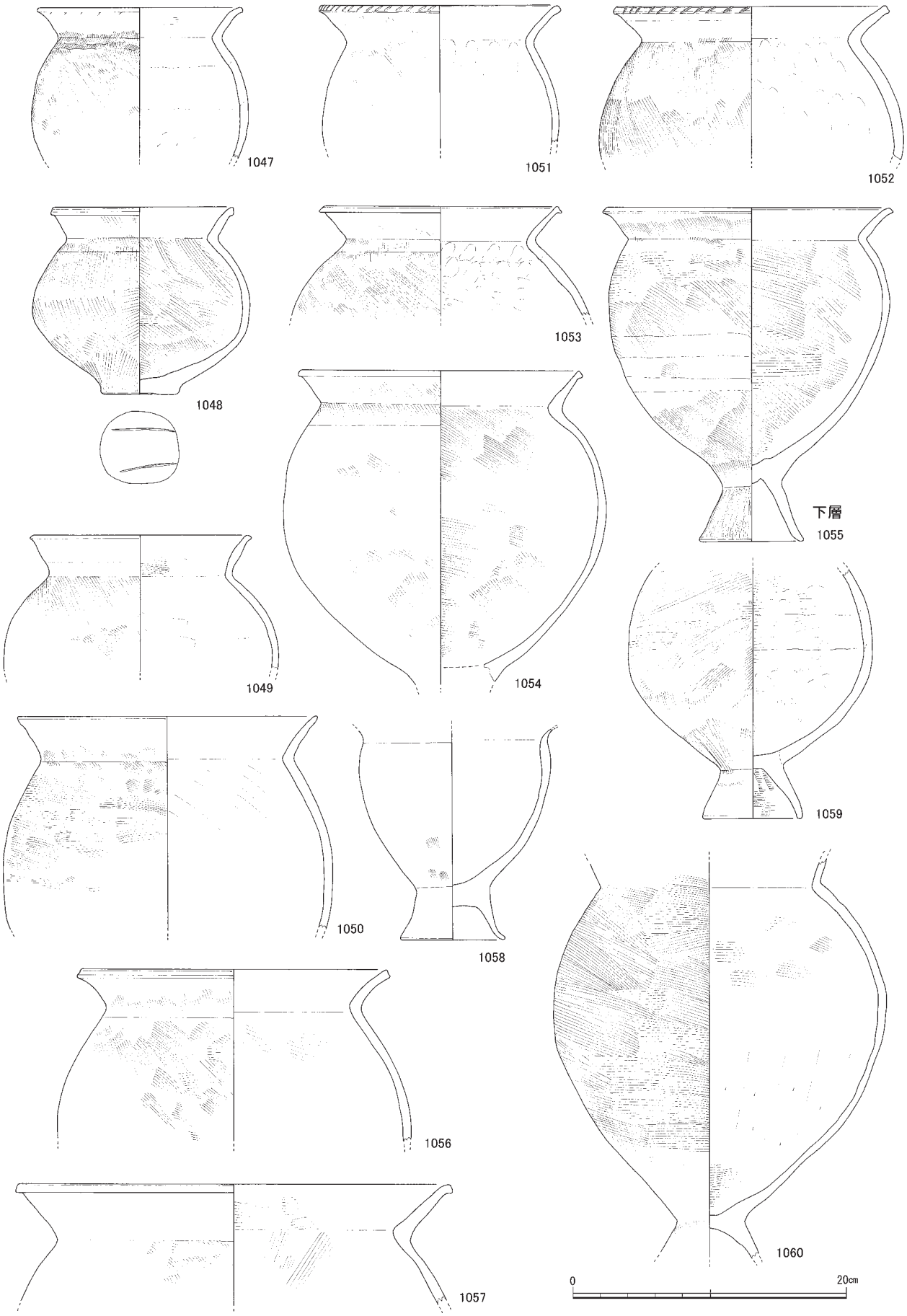
第132図　SD301上層出土遺物実測図（7）（1:4）



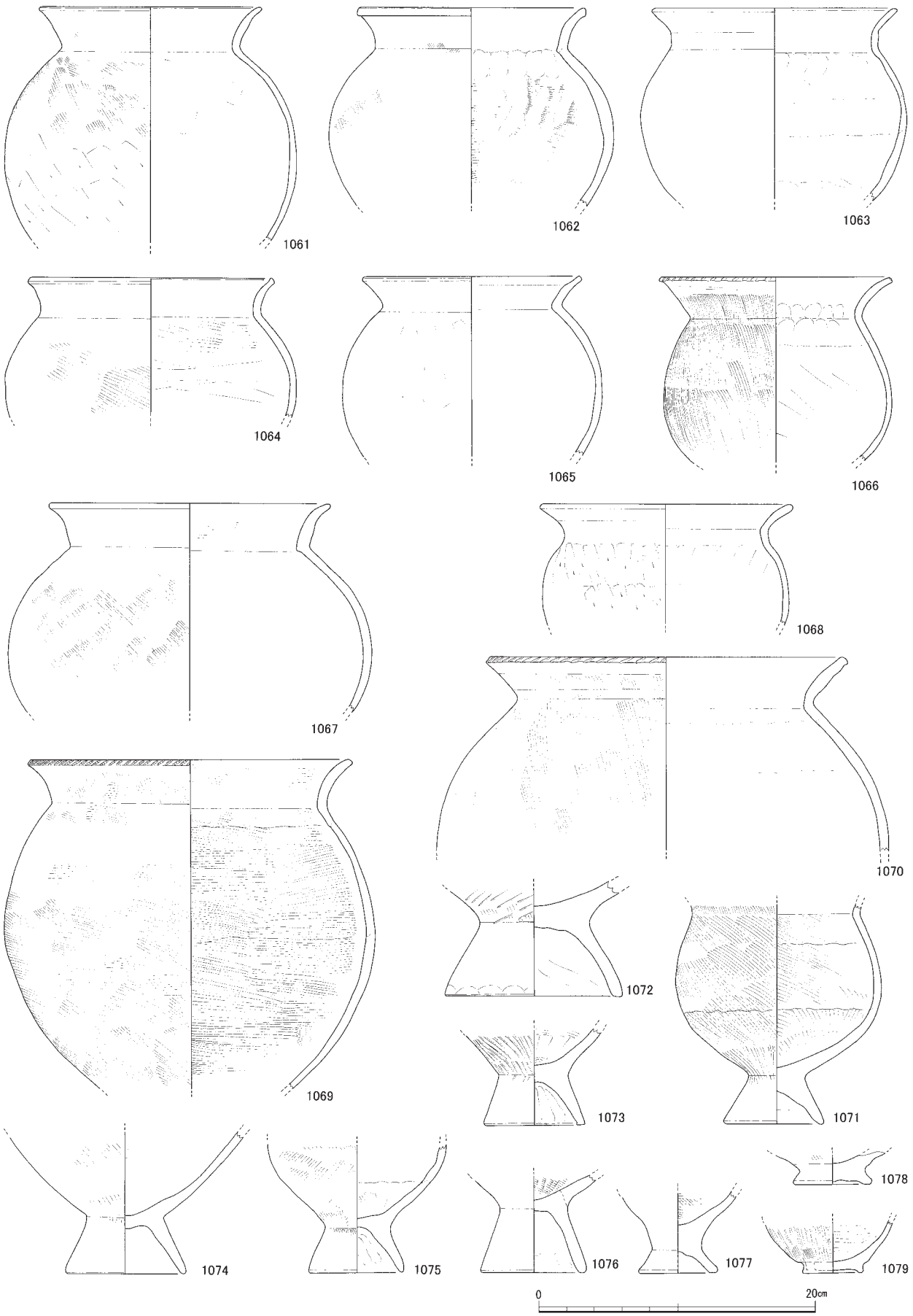
第133図　SD301上層出土遺物実測図（8）（1:4）



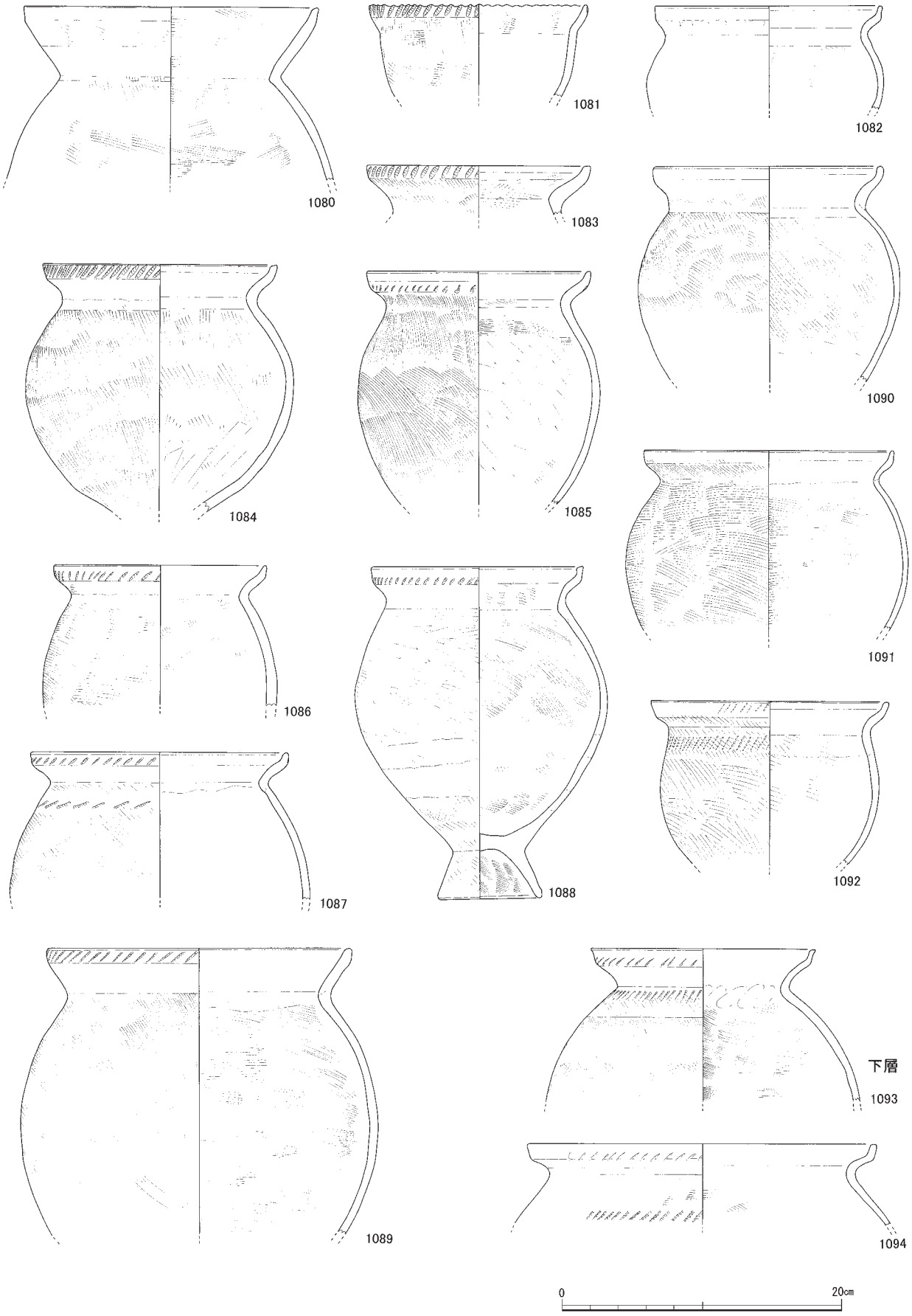
第134図　SD301上層（9）・下層（20）出土遺物実測図（1:4）



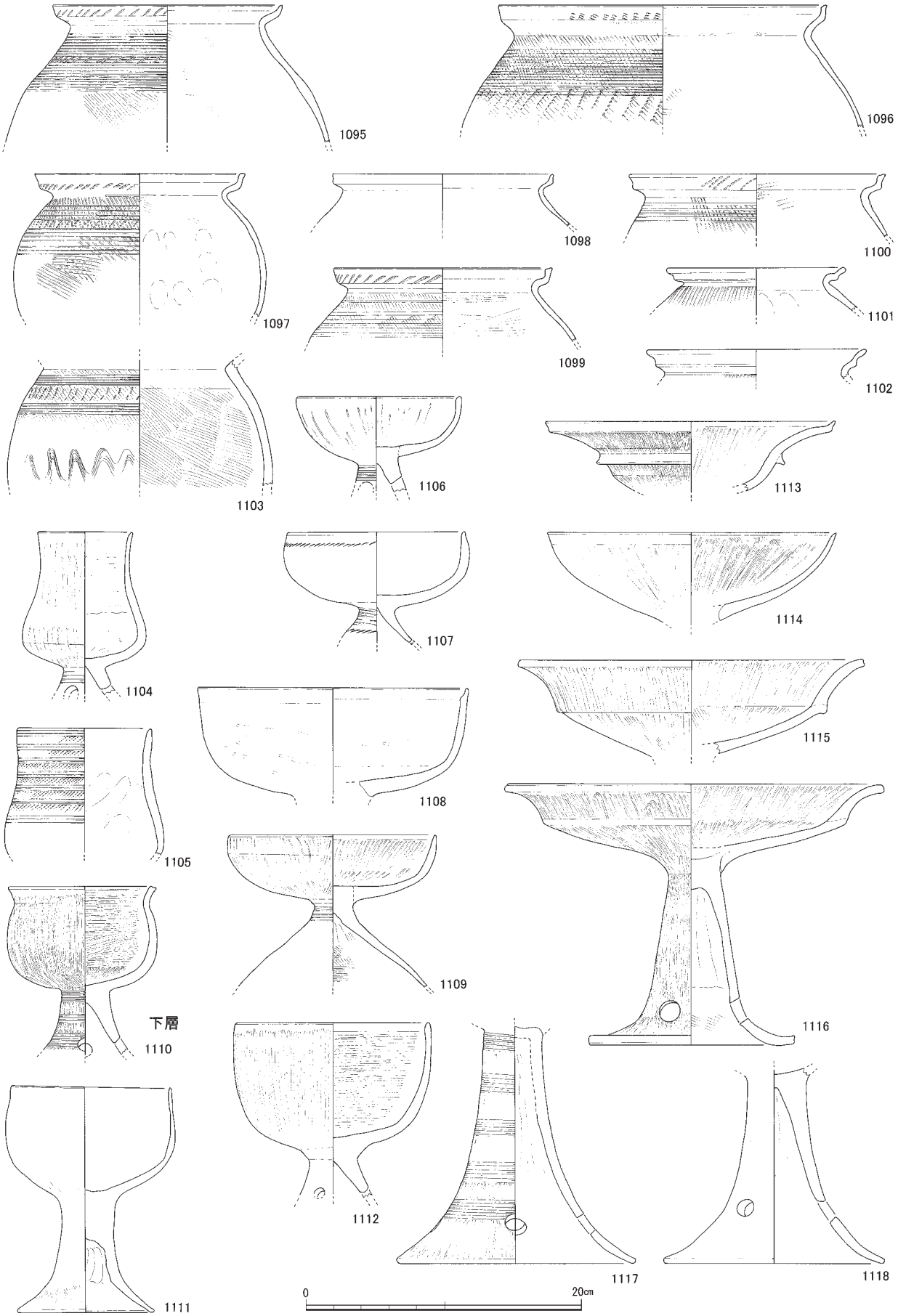
第135図　SD301上層（10）・下層（21）出土遺物実測図（1:4）



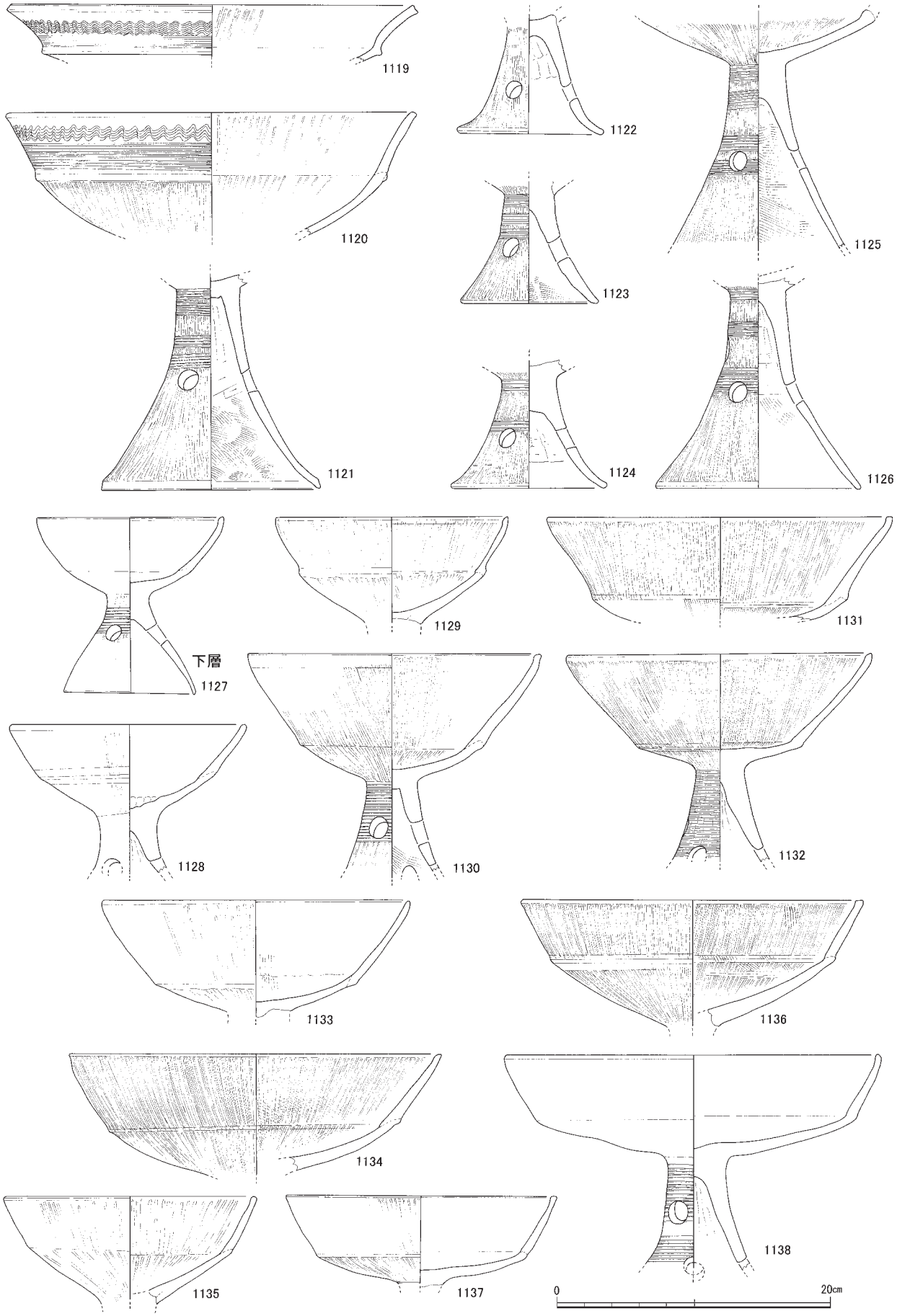
第136図　SD301上層出土遺物実測図（11）（1:4）



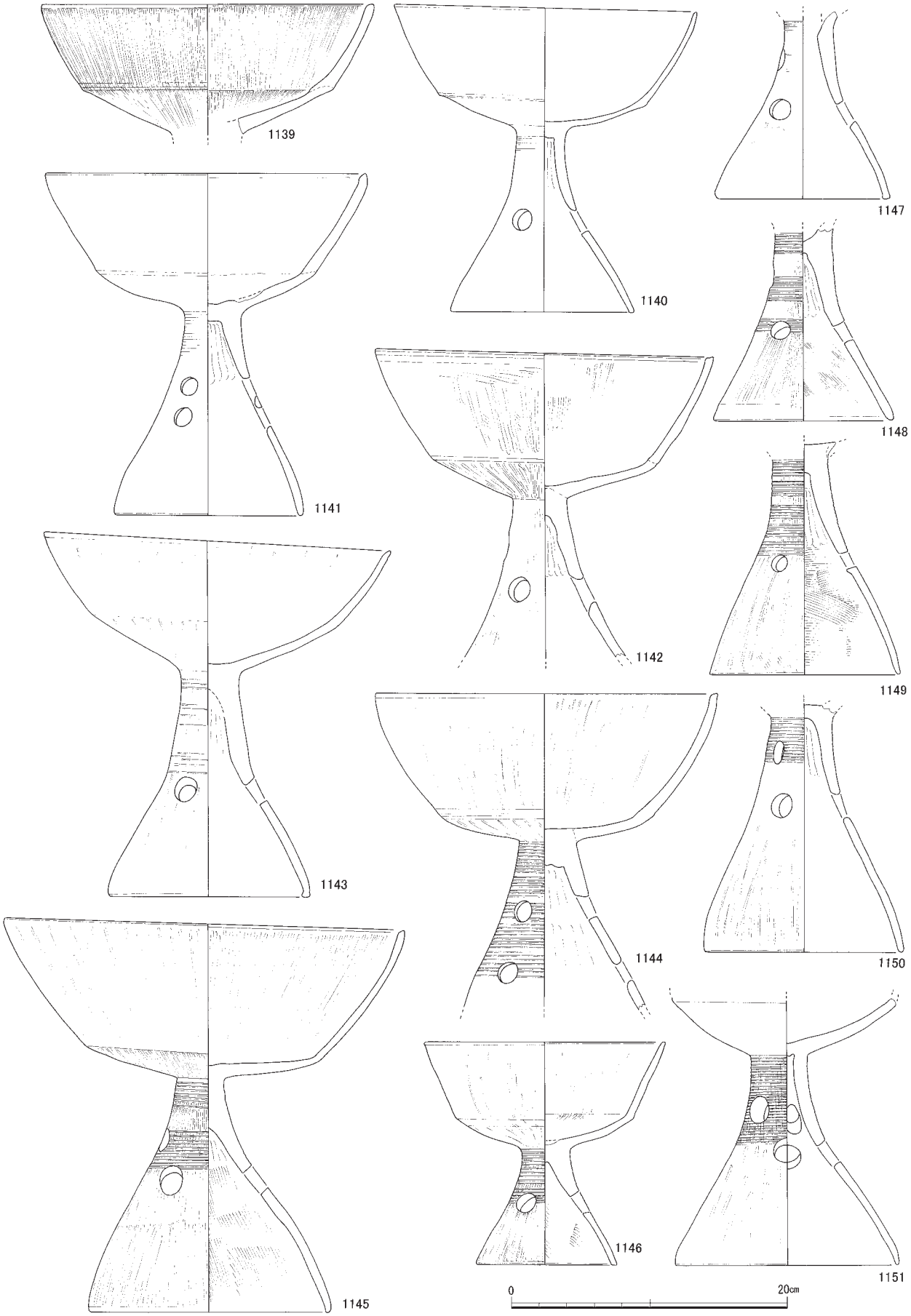
第137図　SD301上層（12）・下層（22）出土遺物実測図（1:4）



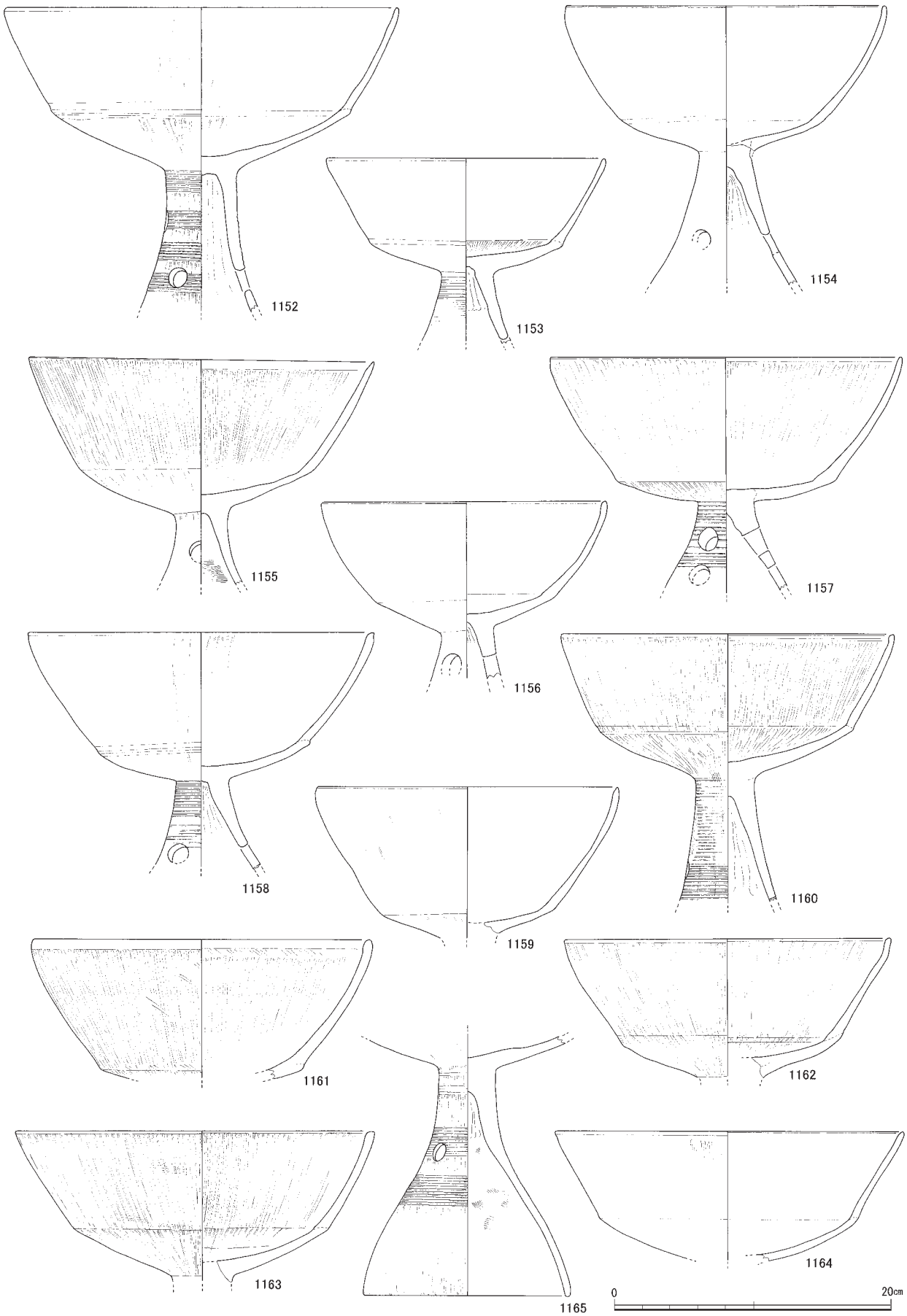
第138図　SD301上層（13）・下層（23）出土遺物実測図（1:4）



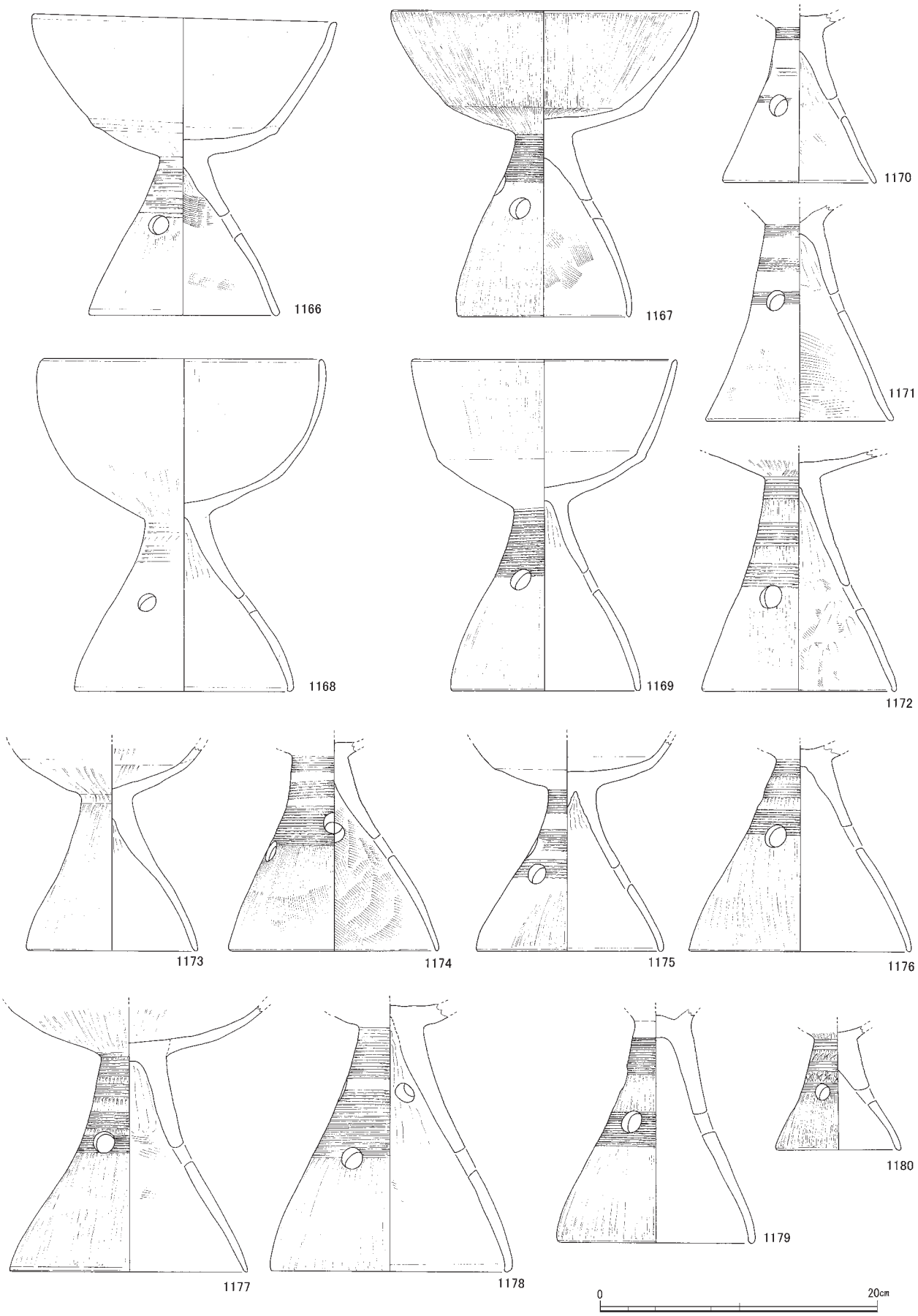
第139図　SD301上層（14）・下層（24）出土遺物実測図（1:4）



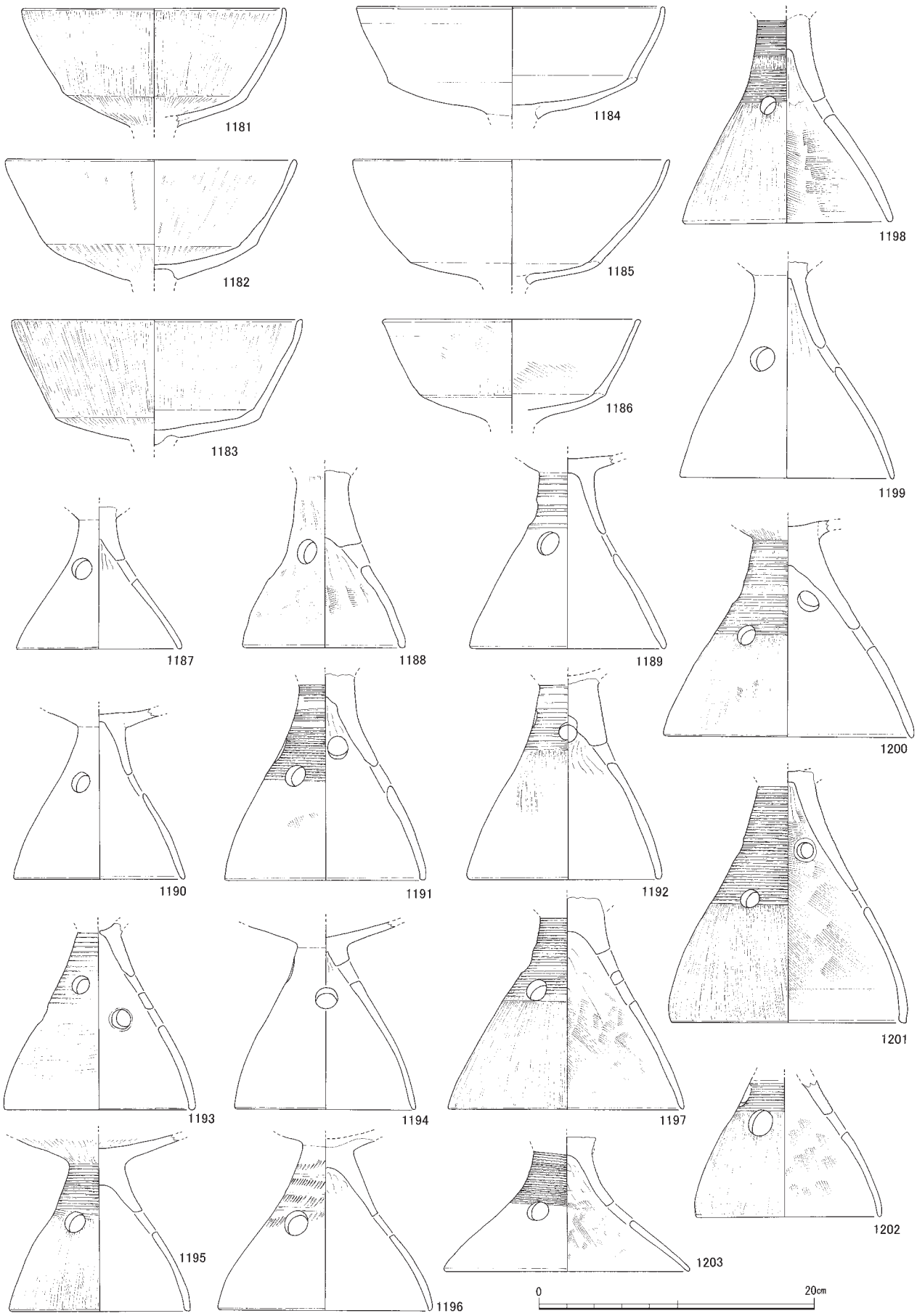
第140図　SD301上層出土遺物実測図（15）（1:4）



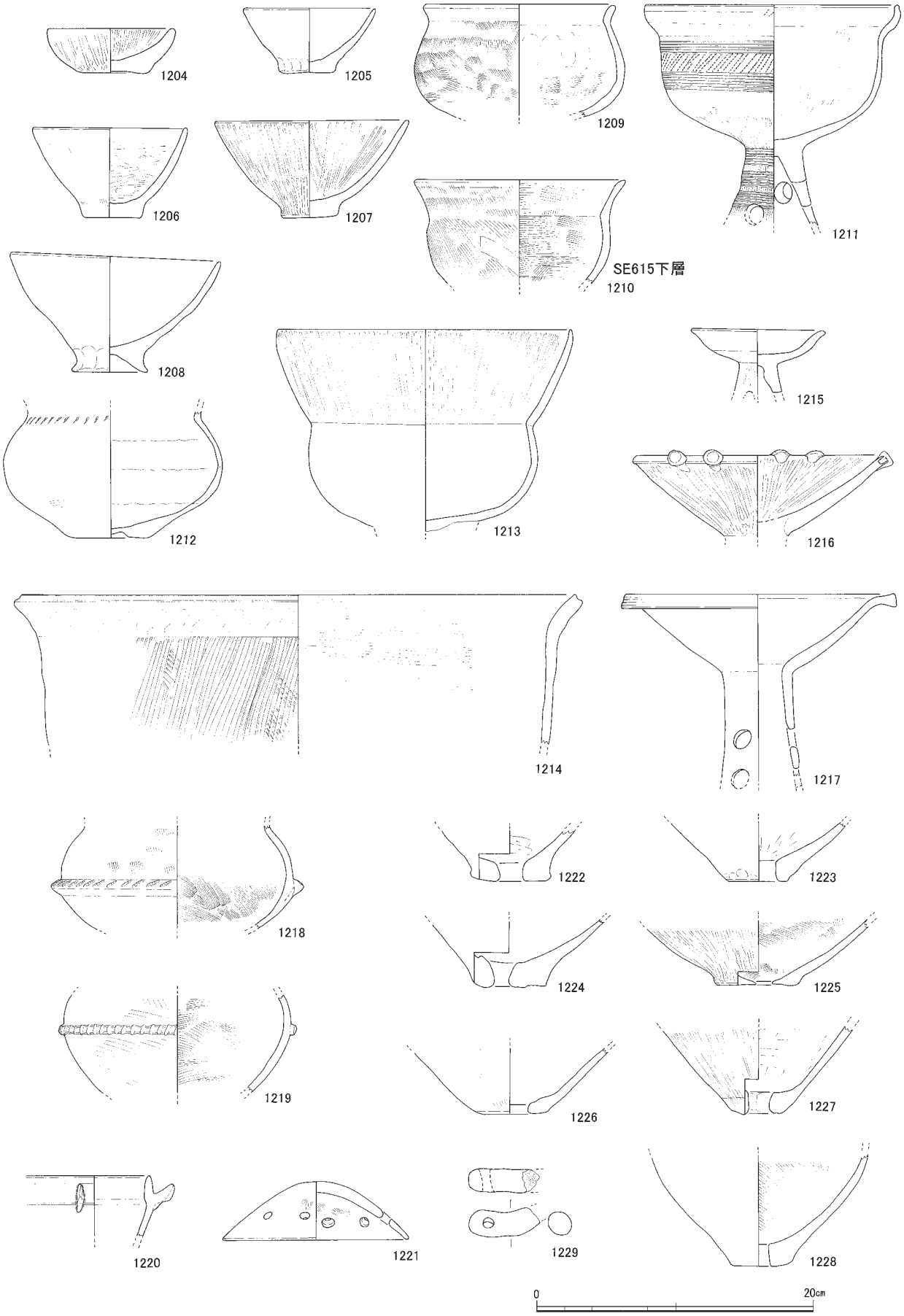
第141図　SD301上層出土遺物実測図（16）（1:4）



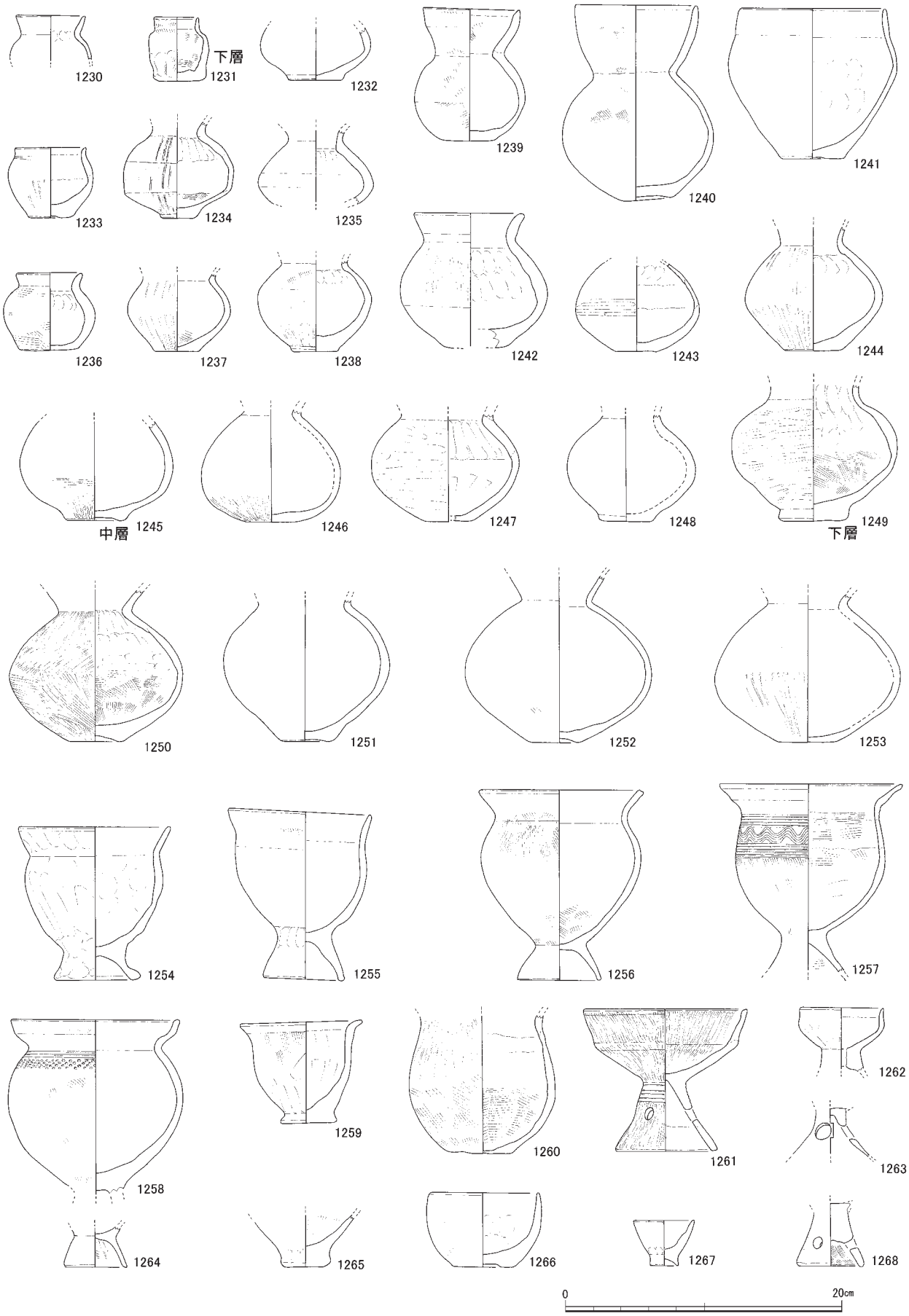
第142図　SD301上層出土遺物実測図（17）（1:4）



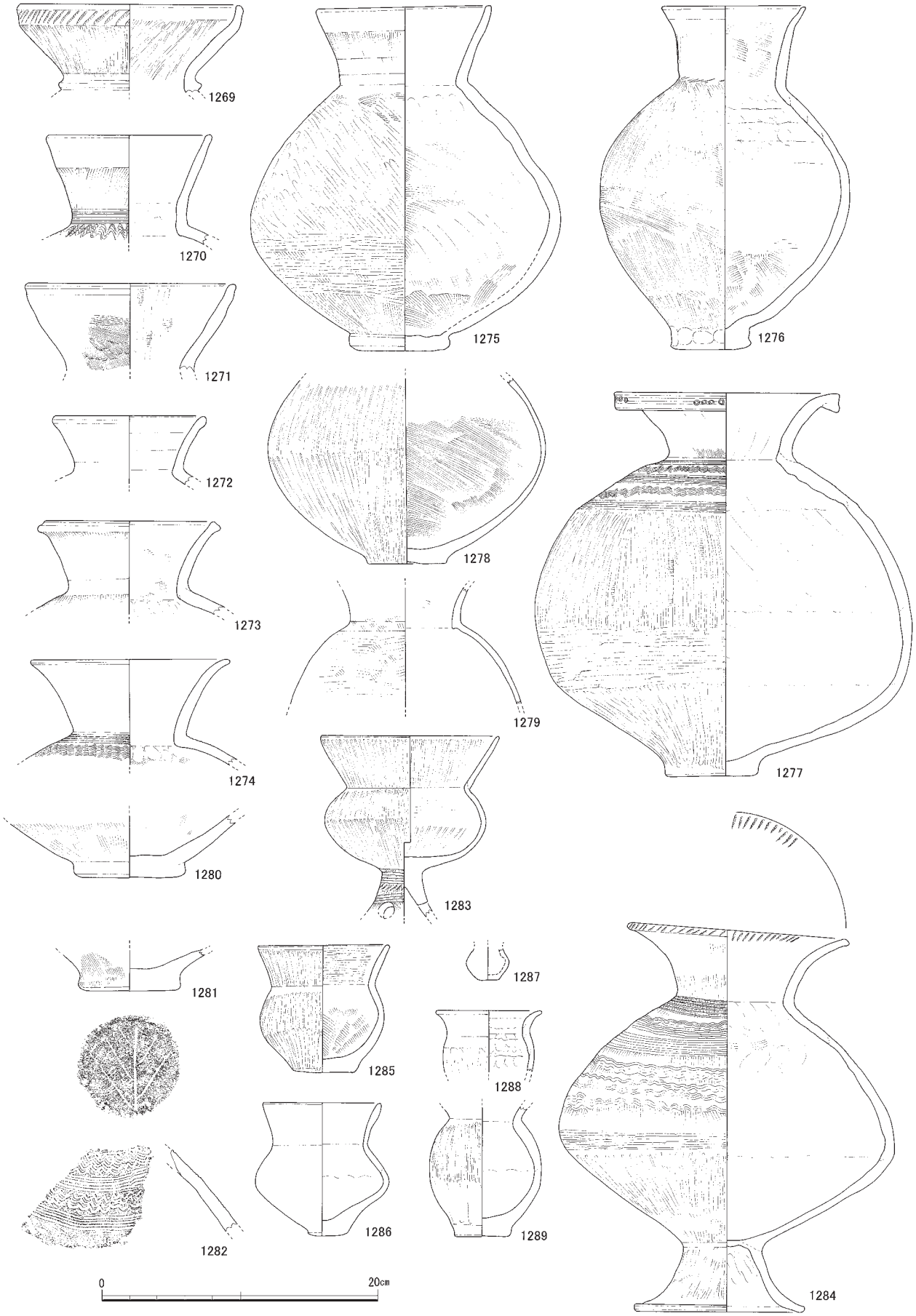
第143図　SD301上層出土遺物実測図（18）（1:4）



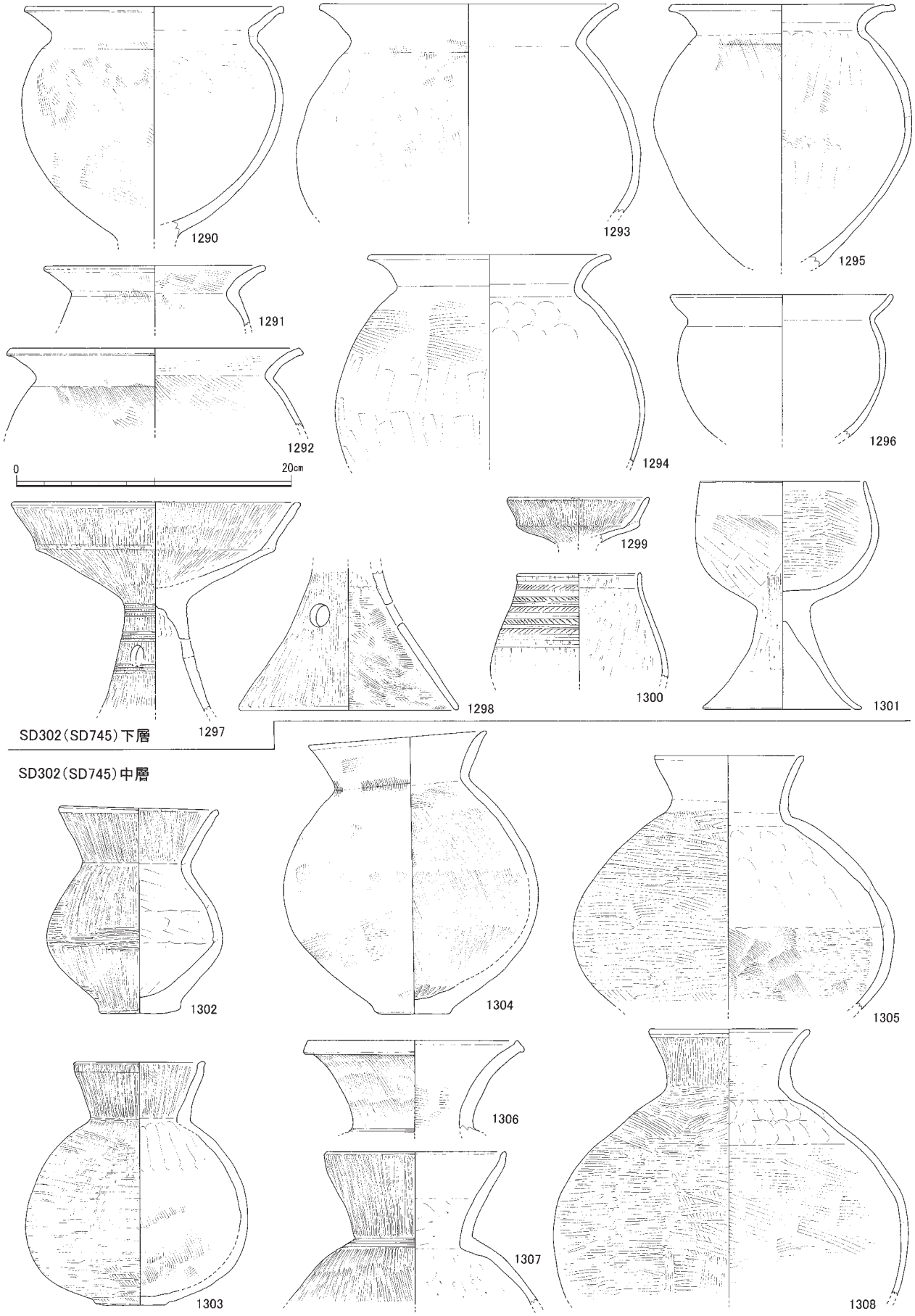
第144図　SD301上層（19）・SE615下層（2）出土遺物実測図（1:4）



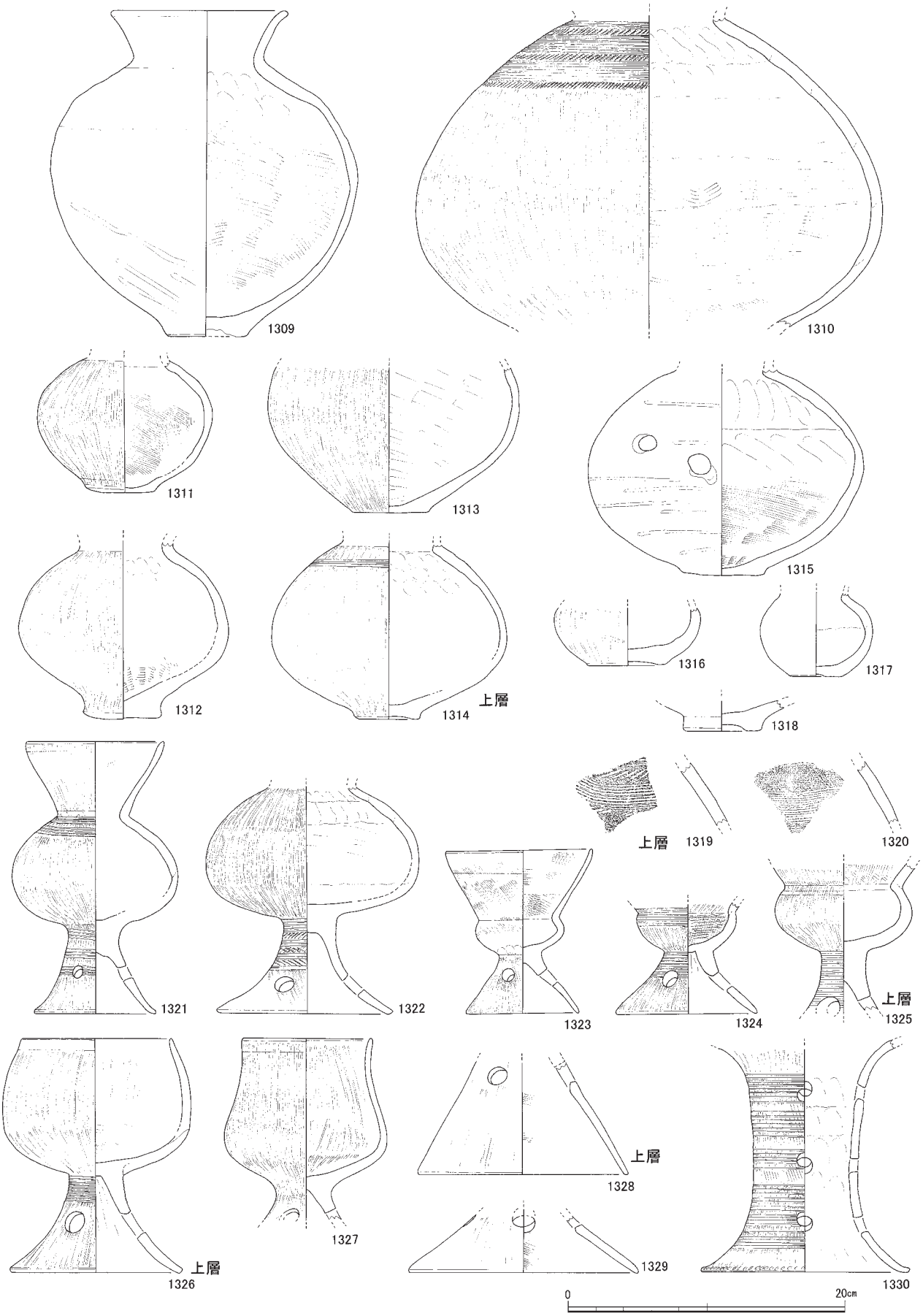
第145図　SD301上層（20）・中層（16）・下層（25）出土遺物実測図（1:4）　※アミがけは赤色顔料



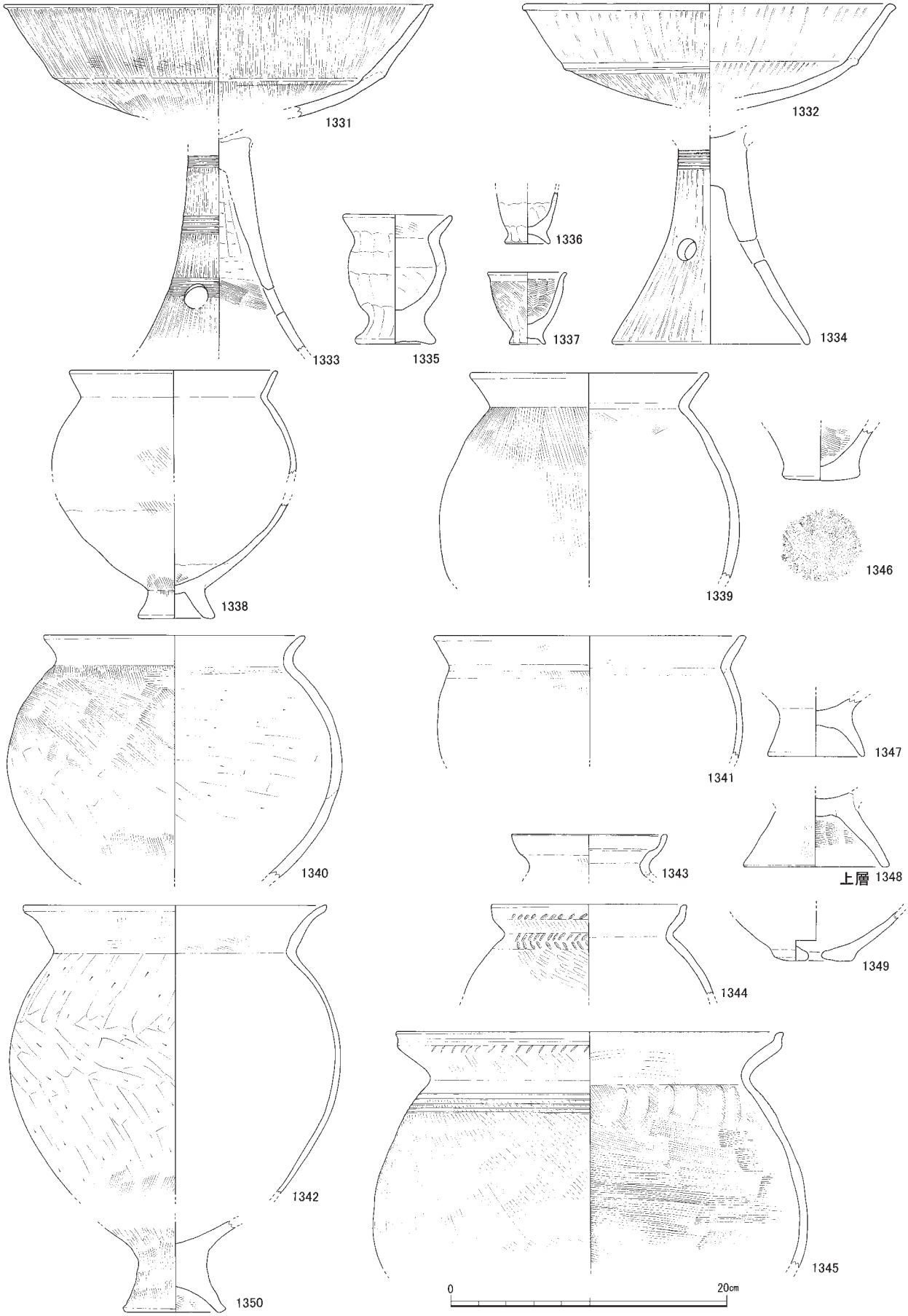
第146図　SD302（SD745）下層出土遺物実測図（1）（1:4）



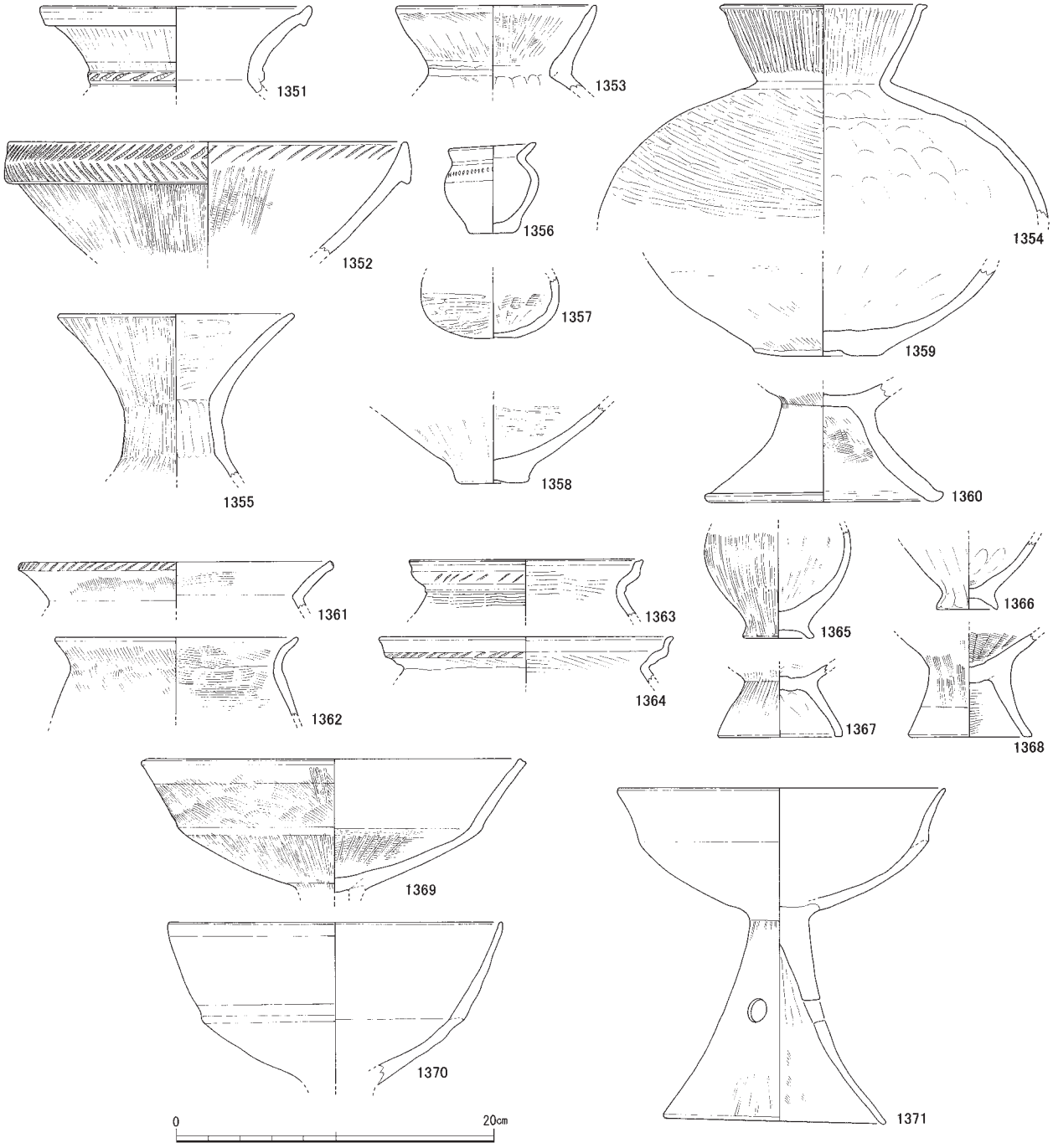
第147図　SD302（SD745）下層（2）・中層（1）出土遺物実測図（1:4）



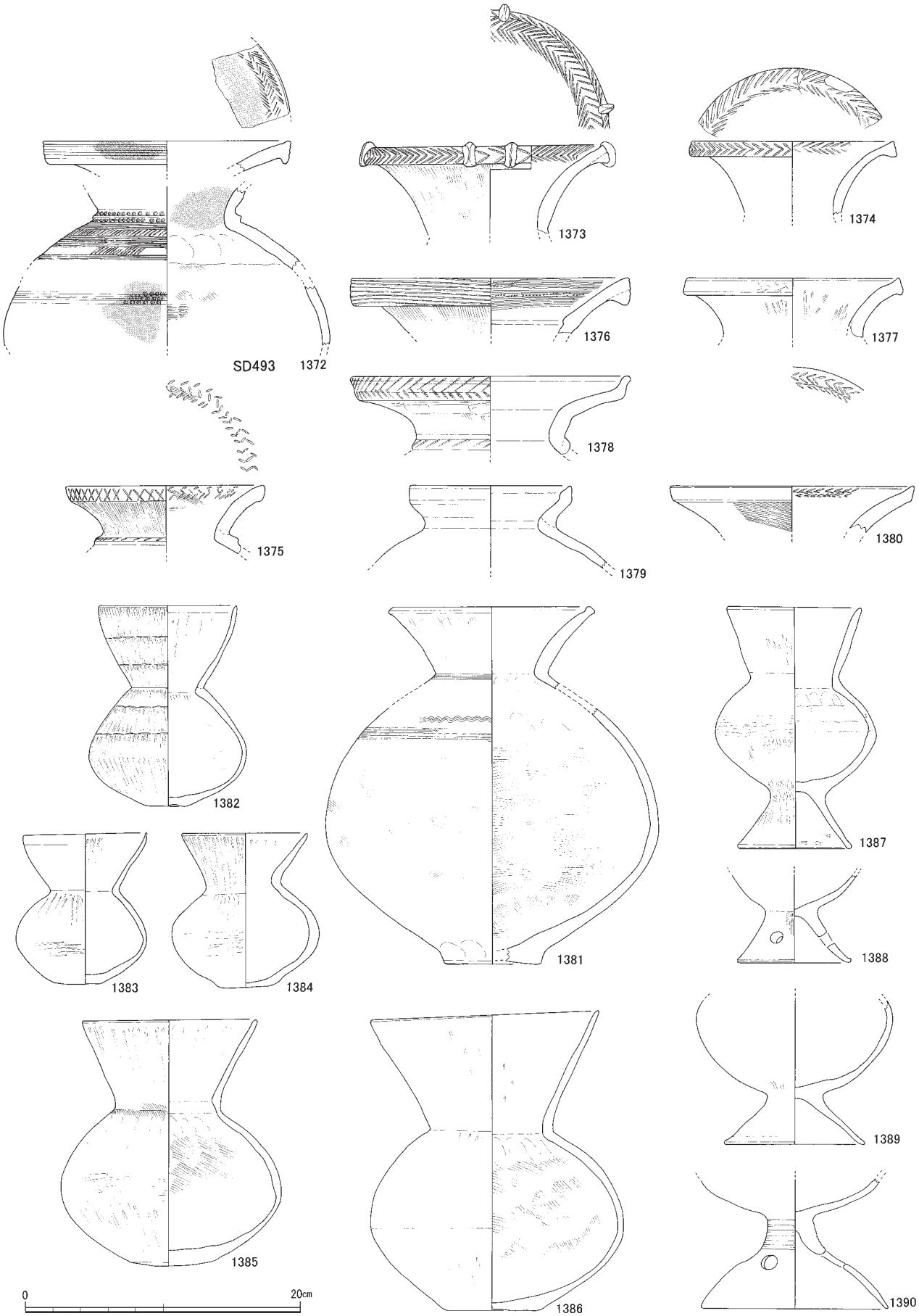
第148図　SD302（SD745）中層（2）・上層（1）出土遺物実測図（1:4）　※アミがけは赤色顔料



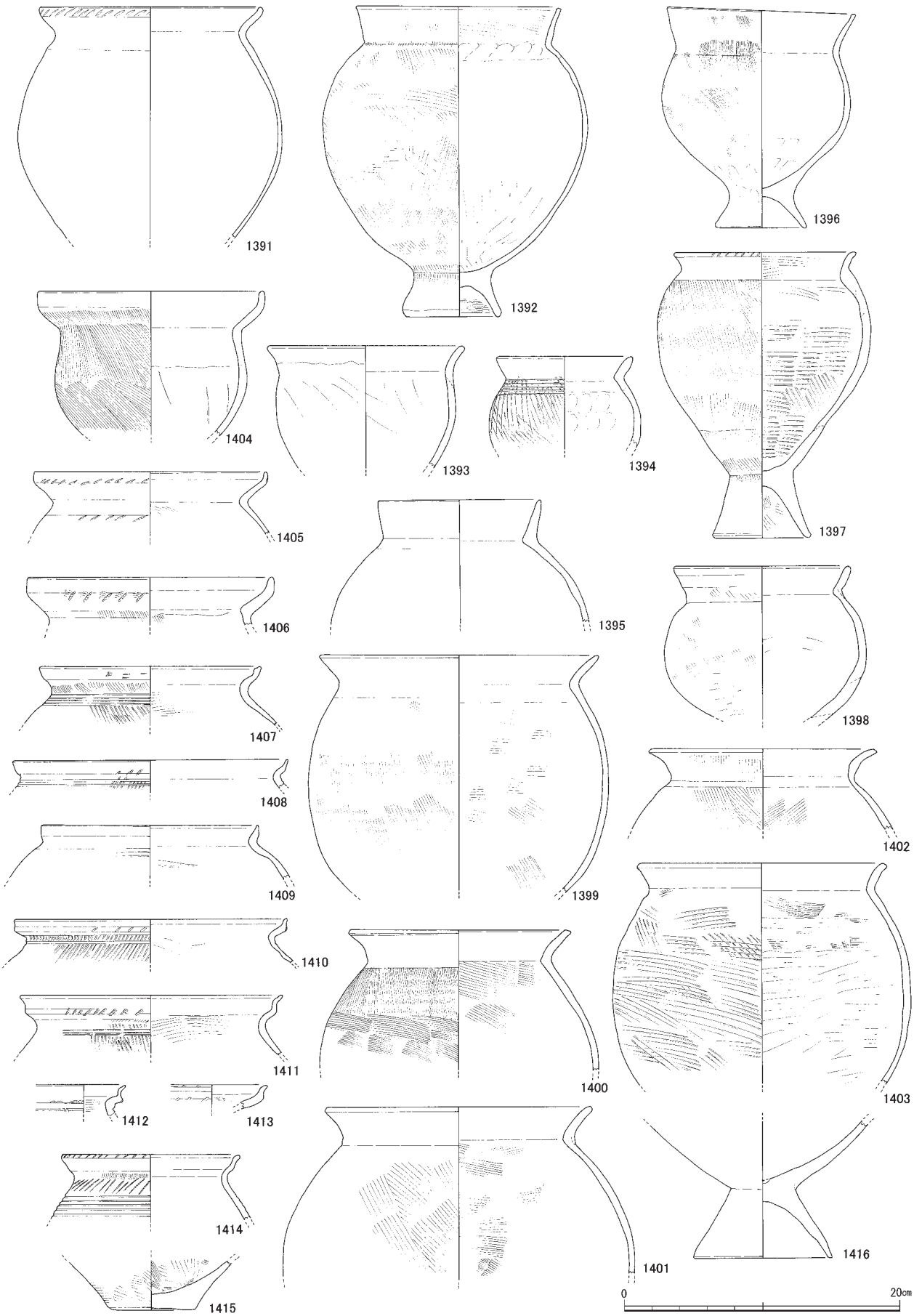
第149図　SD302（SD745）中層（3）・上層（2）出土遺物実測図（1:4）



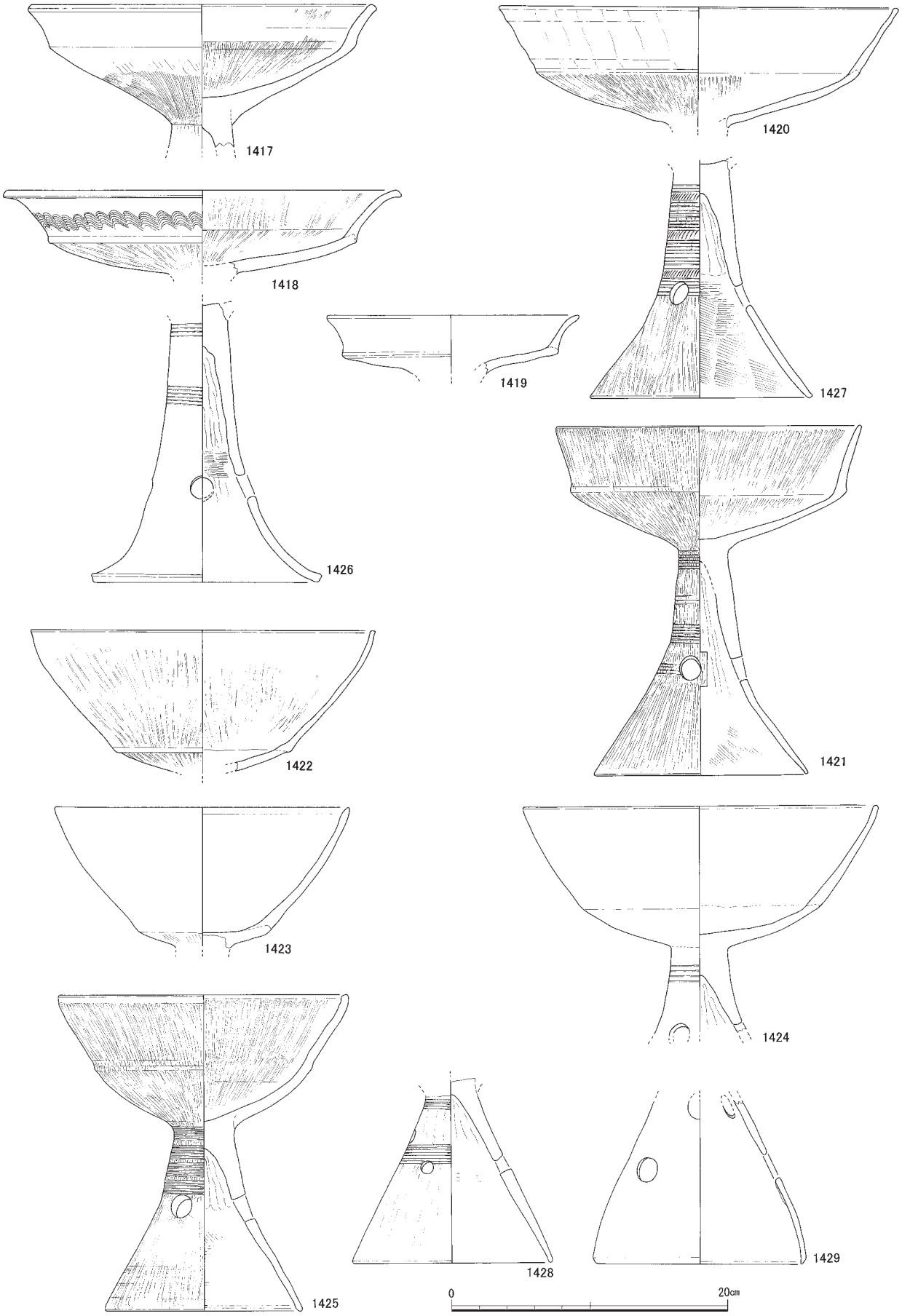
第150図　SD302（SD745）上層出土遺物実測図（3）（1:4）



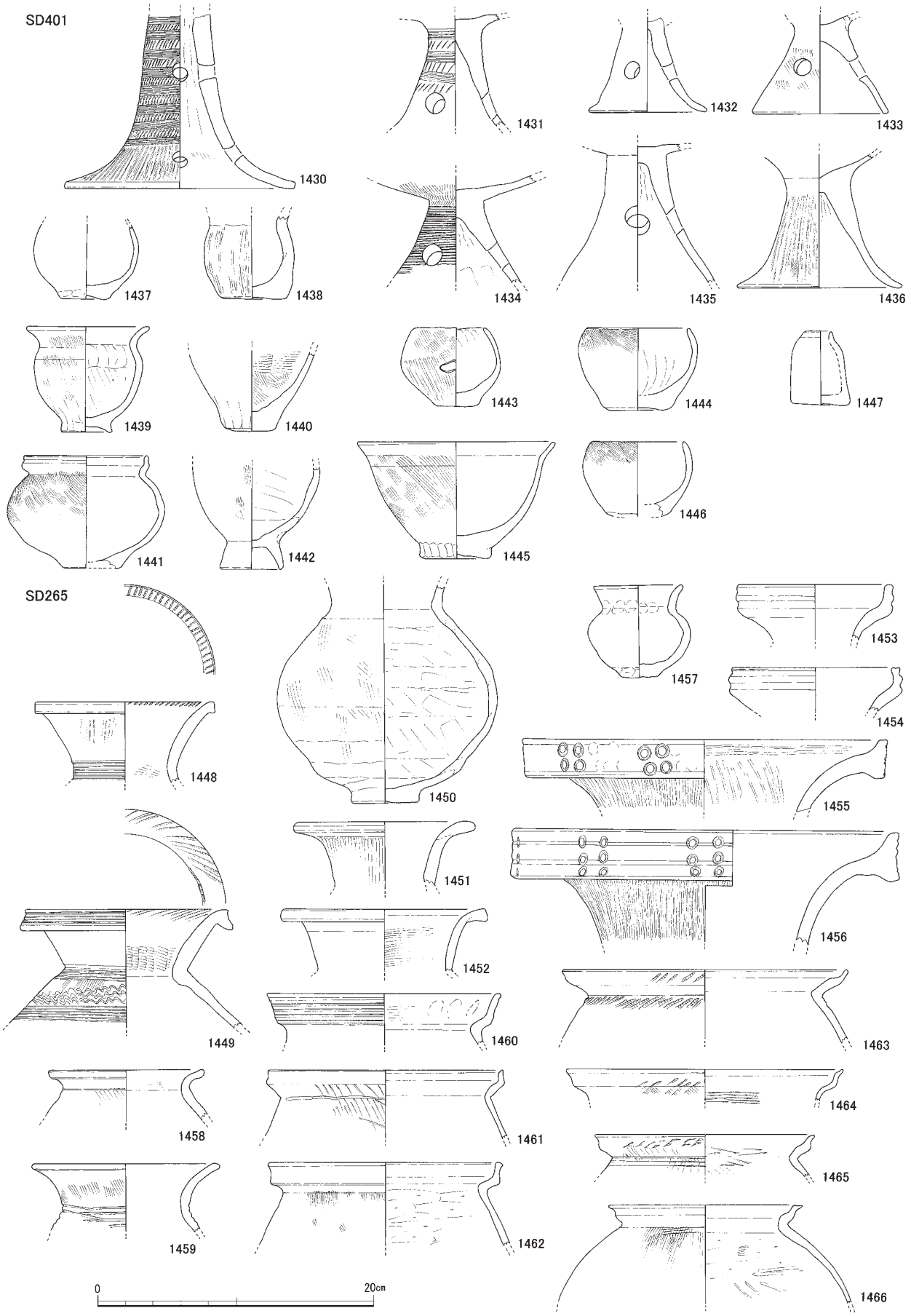
第151図　SD401（1）・493（1）出土遺物実測図（1:4）　※アミがけは赤色顔料



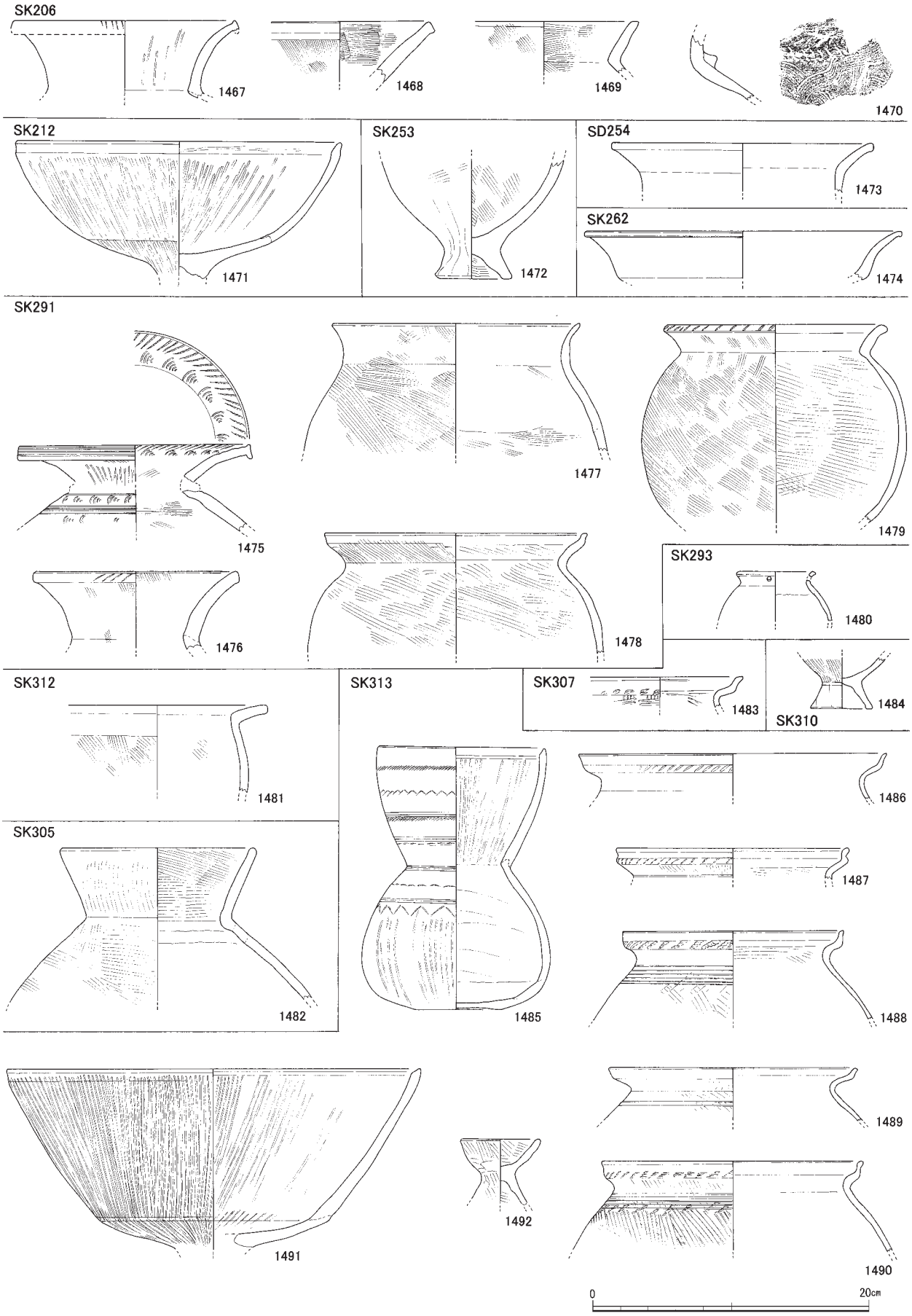
第152図　SD401出土遺物実測図（2）（1:4）



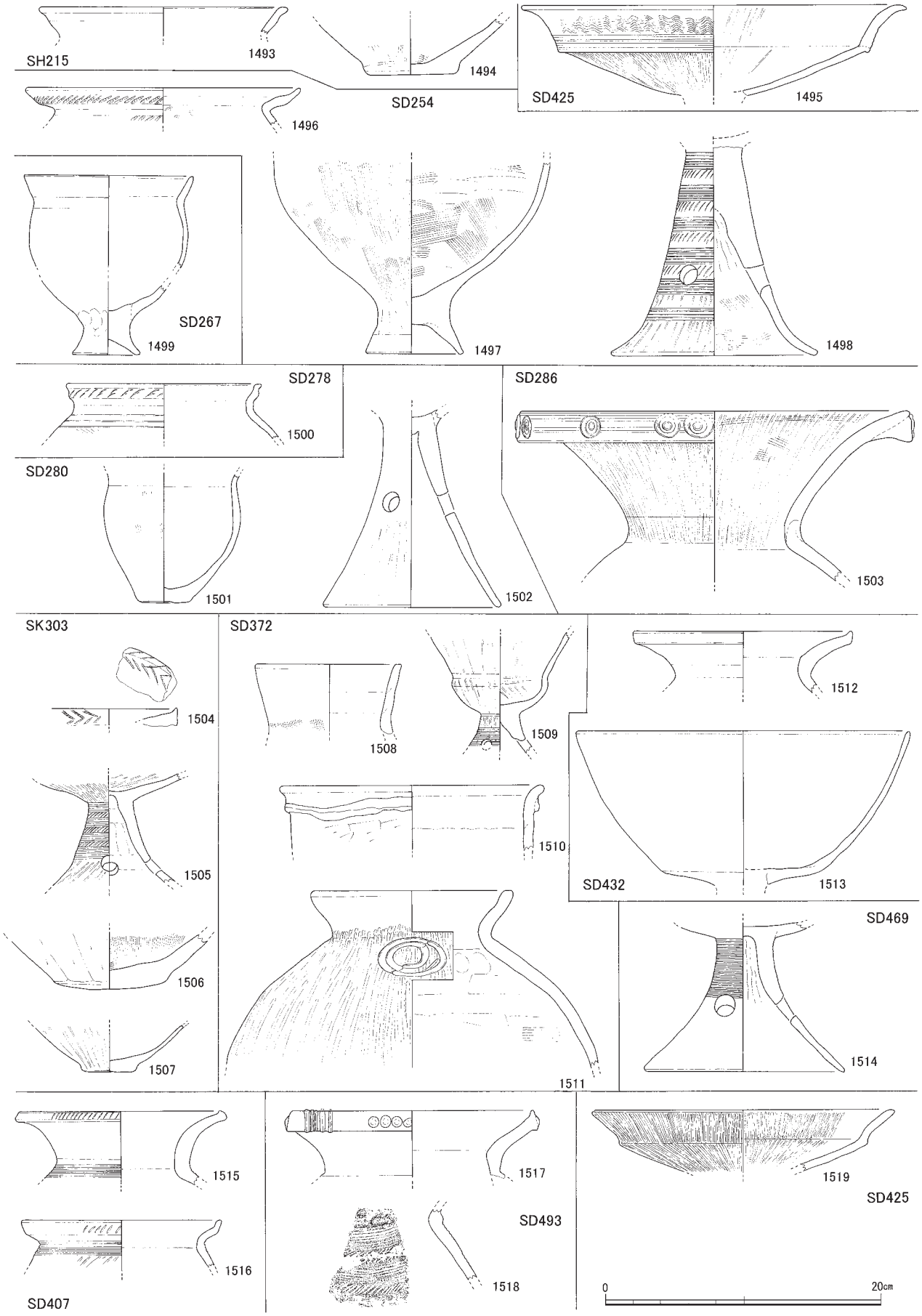
第153図　SD401出土遺物実測図（3）（1:4）



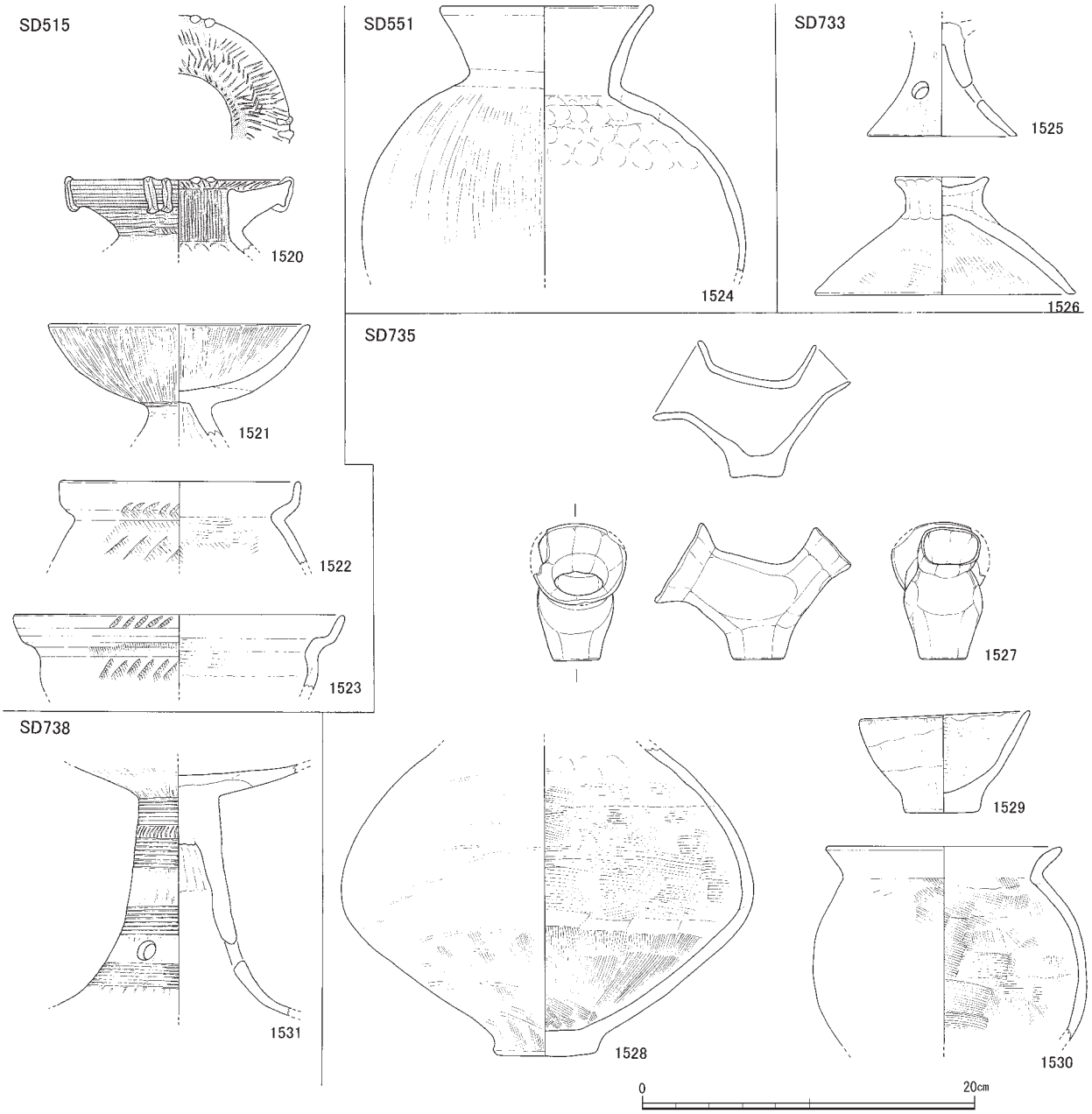
第154図　SD401（4）・265出土遺物実測図（1:4）



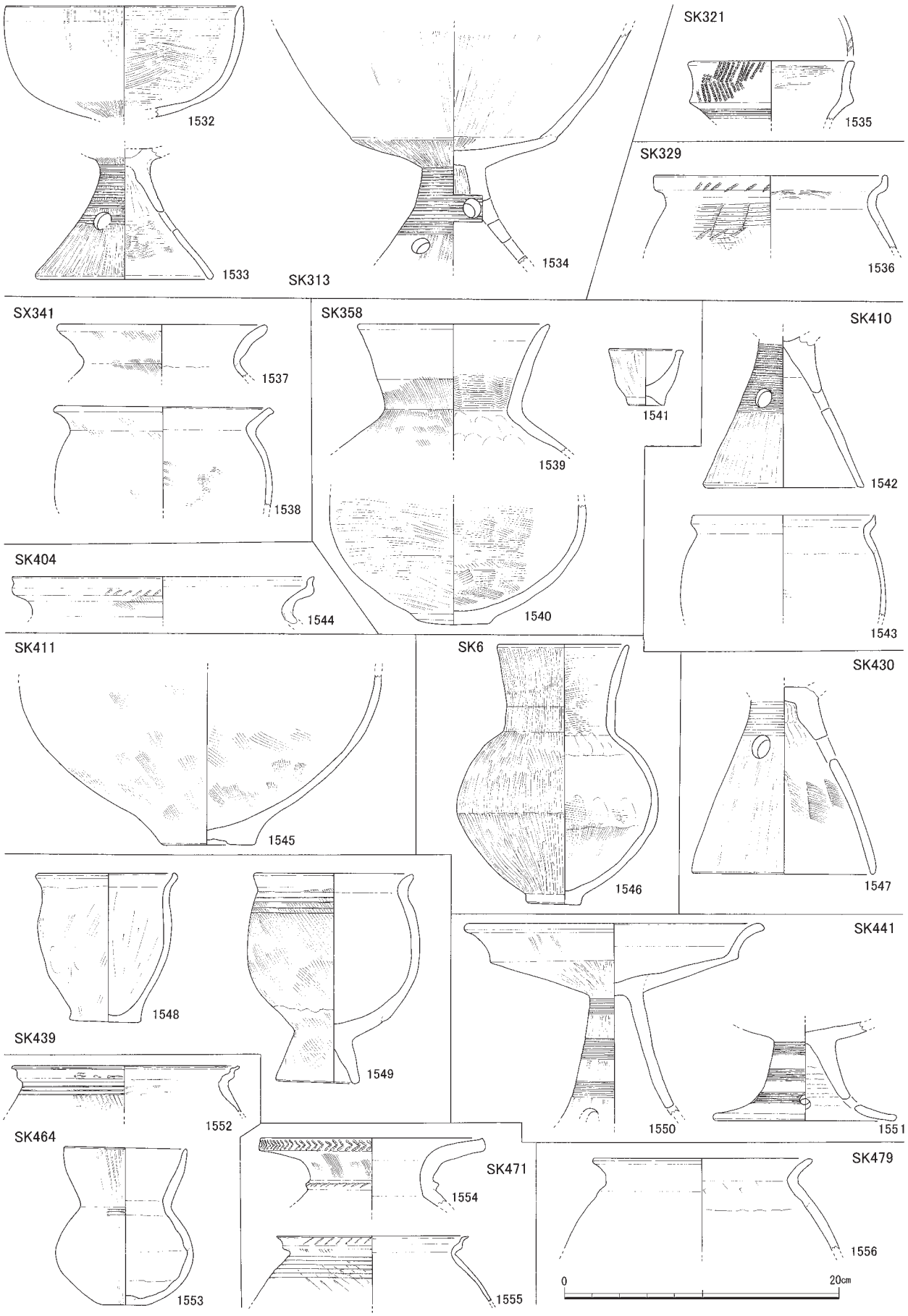
第155図　SK206・212・253・262・291・293・305・307・310・312・313（1）・SD254（1）出土遺物実測図（1:4）



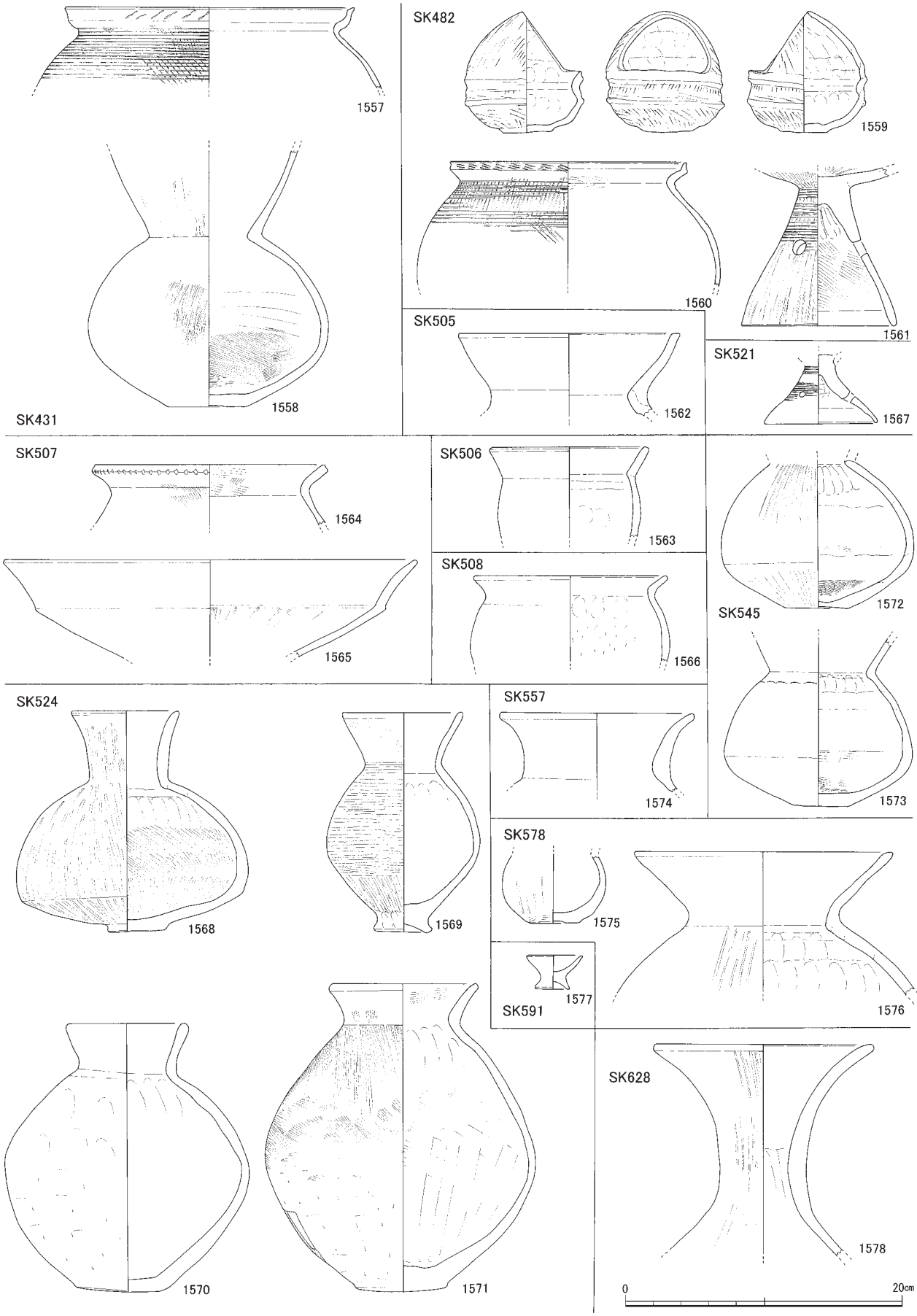
第156図　SH215・SK303・SD254（2）・267・278・280・286・372・407（1）・425・432・469・493（2）出土遺物実測図（1:4）



第157図　SD515・551・733・735・738出土遺物実測図（1:4）　※アミがけは赤色顔料



第158図　SX341・SK6・313（2）・321・329・358・404・410・411・430・439・441・464・471・479出土遺物実測図（1:4）



第159図　SK431・482・505・506・507・508・521・524・545・557・578・591・628出土遺物実測図（1:4）